

# 県内遺跡発掘調査報告書 I

## 山 元 遺 跡

2 0 0 9

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 県内遺跡発掘調査報告書 I

やま もと  
山 元 遺 跡

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市を起点とし日本海に沿って北上し、青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成14年度に胎内市の中条インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しく、平成15年度末の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、日本海沿岸東北自動車道の中条ー朝日I.C間は、日本道路公団が有料道路として建設を進めることとなりました。その後、公団の民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川ー朝日I.C間は国土交通省が新直轄道路として建設することとなりました。日本海沿岸東北自動車道は、この地域内外の経済的な交流・連携を促進するだけではなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等「命の高速道」としての役割を期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この高速自動車道建設に先立って試掘確認調査を実施した「山元遺跡」の調査報告書です。調査の結果、弥生時代後期を主体とする「高地性環濠集落」であることが判明しました。この形態の集落は、記紀にある「倭國大乱」を反映しているという解釈があります。日本海側では旧新津市の国指定史跡古津八幡山遺跡が最北でしたが、山元遺跡の発見によって阿賀野川以北の越後平野最北部まで北上することが明らかになりました。出土土器は器面に縄文施文された東北系土器が主体です。東北系土器文化圏では、高地性環濠集落が確認されていませんでしたので、山元遺跡が初例となります。1つの墓から出土した70個余りのガラス小玉は、東日本でも有数の出土量であり、西方地域との交流が予想されます。山元遺跡の発見によって、従来の解釈を再検討しなければならない項目も少なくありません。

県教育委員会では学術上価値が高い遺跡であることから、有識者からの助言を踏まえて調査を行うと共に、国土交通省と協議を重ね、現状保存要望書を提出しました。これを受けた国土交通省は工事計画をトンネル工法に変更し、遺跡を現状保存することが決定しています。

今回の報告が県内ののみならず、全国的視野で古代史を解明する研究資料として活用され、埋蔵文化財の理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大な御協力と御援助をいただきました、旧神林村教育委員会・村上市教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮をいただいた有識者の先生方、文化庁文化財保護記念物課、国土交通省北陸地方整備局及び、同新潟国道事務所、東日本高速道路株式会社北陸支社及び、同村上工事事務所に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

## 例　　言

1. この報告書は、村上市（旧岩船郡神林村）大字下助瀬字山元に所在する山元遺跡の試掘確認調査記録である。
2. 試掘確認調査は、日本海沿岸東北自動車建設に先立ち東日本高速道路株式会社・国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から依頼を受け、新潟県が実施したものである。
3. この調査は国庫補助事業（県内遺跡発掘調査等）を受けて、平成17・18・20年度に新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が受託して実施した。
4. 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含む観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。
5. 遺物の注記は「山元」とし、出土地点・層位を併記した。
6. 本書の図中で示す方位は全て真北である。基準杭の打設は（株）帆井組が行った。
7. 報告書掲載遺物の番号は土器・土製品と石器・石製品があるが、通し番号とした。本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は全て一致している。
8. 本文中の註は脚註とし、貞ごとに番号を付した。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に[]で示し、自然科学分析を除いて卷末に一括して掲載した。
9. 「第VI章 自然科学分析」は独立行政法人奈良国立文化財研究所肥塙隆保氏・田村朋美氏、東京大学吉田邦夫氏に委託した。なお、本書には収集したものを掲載した。
10. 本書の編集は滝沢規朗が担当した。執筆は、第I章2・第IV章2Bを澤田 敏、第V章4A・B・C(1)～(7)を齊藤 準が行った以外は、滝沢である。
11. 調査の内容については以下の刊行物に概要を報告したが、本書の記述をもって正式な報告とする。また、以下の刊行物と本書に齟齬がある点は、本書の記述をとるものとする。  
滝沢規朗 2006 「荒川I.C～朝日I.C間 推定地5（村上I.C）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成17年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団  
滝沢規朗 2007 a 「埋文新潟」第58号（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団  
滝沢規朗 2007 b 「新潟県山元遺跡」「考古学研究」第54巻第1号 考古学研究会  
滝沢規朗 2007 c 「山元遺跡」「発掘された日本列島2007 新発見考古速報」朝日新聞社  
滝沢規朗 2007 d 「新潟県神林村山元遺跡」『月刊考古学ジャーナル』565 ニューサイエンス社  
滝沢規朗 2007 e 「荒川I.C～朝日I.C間 村上I.C（山元遺跡）確認調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成18年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
12. 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示とご協力をいただいた。厚くお礼申し上げる  
(五十音順 敬称略)  
相澤清利、相田康臣、赤澤徳明、阿部明彦、阿部泰之、甘粕 健、石川日出志、磯部保衛、伊藤秀和、植松暁彦、  
潮田憲之、岡田康弘、岡村道雄、大木鉢一郎、小野隆志、加藤由美子、金子拓男、小林圭一、小林 徳、小林正史、  
小林 克、齊藤 力、酒井亜紀、坂井秀弥、佐藤 慎、柴田昌二、篠沢正史、須藤 隆、関 雅之、高瀬克範、  
高濱信行、田嶋明人、田中耕作、田辺早苗、立木宏明、富樫雅彦、橋本英道、鈴田剛志、西川修一、櫛宜田佳男、  
野田豊文、野村忠司、野水晃子、橋本博文、浜崎悟司、濱田竜彦、久田正弘、古沢妥史、守屋豊人、宮尾 亨、  
水澤幸一、安 英樹、吉井雅勇、渡邊朋和、村上市教育委員会、文化庁、独立行政法人奈良国立文化財研究所、  
財團法人山形県文化財調査事業団

# 目 次

## 第Ⅰ章 序 章

1 平成17・18年度の調査に至る経緯と経過 .....	1
A 調査に至る経緯.....	1
B 調査経過.....	1
2 平成20年度の調査に至る経緯と経過 .....	5
3 整理作業と調査体制.....	5
A 整理作業.....	5
B 調査体制.....	5

## 第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

1 地理的環境 .....	7
2 歴史的環境 .....	8
A 弥生時代.....	8
B 古墳時代.....	10

## 第Ⅲ章 調査の概要

1 トレンチと小グリッドの設定 .....	11
2 層序 .....	12

## 第Ⅳ章 遺構

1 概要 .....	13
A 概略.....	13
B 各地点の概要.....	13
2 各説 .....	14
A 平成17・18年度.....	14
B 平成20年度.....	17
3 小結 .....	18

## 第Ⅴ章 遺物

1 概要 .....	19
2 土器 .....	19
A 分類.....	19
D 土器組成.....	21
B 観察表.....	20
E 各説.....	22
C 実測図の表現と文様帶の呼称.....	21
3 土製品 .....	29
4 石器・石製品 .....	29
A 資料の提示方法.....	29
C 石器の分類と分析.....	30
B 石器の出土位置.....	30
5 ガラス製品 .....	39

## 第VI章 化学分析

1 山元遺跡出土のガラス小玉について .....	41
A はじめに.....	41
B 調査方法.....	41
2 山元遺跡の放射性炭素年代 .....	45
A 年代測定資料.....	45
B 放射性炭素年代測定.....	45

## 第VII章 まとめ

1 出土遺物について .....	51
A 石器について.....	51
B ガラス小玉について.....	53
2 遺跡の動向について .....	60
A 山元遺跡で確認された遺構について.....	60
B 県内における高地性集落・環濠集落.....	62
《要 約》 .....	68
《引用・参考文献》 .....	69
《観 察 表》 .....	74

## 挿図目次

第1図 瀬波郡絵図と山元遺跡位置推定図.....	7
第2図 山元遺跡の位置と周辺の弥生～古墳時代等の遺跡 .....	9
第3図 小グリッドの設定.....	11
第4図 基本層序.....	12
第5図 文様帶の呼称.....	21
第6図 刃片類の計測基準と名称.....	31
第7図 主な器種の部位名称と計測基準等.....	31
第8図 石器の分類別長幅図.....	32
第9図 石器の分類別厚さ.....	32
第10図 石器の分類別重量.....	32
第11図 不定形石器の分類別長幅図.....	34
第12図 塙石類分類別長幅図.....	37
第13図 塙石類凹痕分類模式図.....	37
第14図 顕微鏡写真.....	42
第15図 ガラス小玉のC R画像からの画像強調処理.....	42
第16図 ガラス小玉のA R画像.....	43
第17図 資料15(30T濠5の続縄文土器) .....	47
第18図 №15弥生土器付着炭化物.....	47
第19図 分析資料の年代.....	48
第20図 測定資料の採取地点.....	49
第21図 弥生時代中後期の石器組成検討遺跡 .....	52
第22図 県内における弥生時代のガラス小玉出土遺跡 .....	54
第23図 砂山遺跡・滝ノ前遺跡の土器 .....	56
第24図 山元遺跡出土土器の時期区分 .....	57
第25図 山元遺跡出土の後期北陸系土器と類似資料 .....	58
第26図 時期別の集落立地(周辺との比高) .....	62
第27図 県内の防護的集落 .....	63
第28図 県内における弥生時代後期後半の主体的土器 .....	63
第29図 県内の環濠集落(1) .....	64
第30図 県内の環濠集落(2) .....	65

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡と動向	9	第15表 磨石類の分類別石材	37
第2表 時期・系統・器種別の口縁部残存率	22	第16表 ガラス小玉の長さと厚さ	40
第3表 時期・系統・器種別の口縁部破片数	22	第17表 ガラス小玉の長さと孔径	40
第4表 トレンチ・時期別出土状況(口縁部残存率)	22	第18表 ガラス小玉の長さと重量	40
第5表 トレンチ・時期別出土状況(口縁部破片数)	22	第19表 蛍光X線分析結果	44
第6表 石器の器種別出土数と固有化・縮尺率	29	第20表 資料の化学処理	48
第7表 種別出土地点	31	第21表 年代測定値と較正歴年代	48
第8表 石錐の分類別石材	32	第22表 遺跡別石器・石製品出土数	52
第9表 石錐の分類別破損状況	32	第23表 機能別出土点数と比率	52
第10表 不定形石器分類別厚さ	35	第24表 本遺跡の時期区分と併行関係	59
第11表 不定形石器分類別重量	35	第25表 県内の防護的集落	63
第12表 不定形石器分類別石材	35	第26表 地域毎・時期別の環濠集落・高地性集落	63
第13表 剥片類の石材	36	第27表 新潟県における後期環濠集落の存続期間	67
第14表 磨石類の分類別重量	37		

## 図 版 目 次

### 【図面】

図版1 遺跡全体図	図版18 B地点30T(1)
図版2 A地点全体図	図版19 B地点30T(2)
図版3 B地点全体図	図版20 B地点27T・69T
図版4 A地点1T・2T・9T	図版21 土器(1)
図版5 A地点3T・52T・17T、C地点37T・38T	図版22 土器(2)
図版6 B地点18T・33T・28T	図版23 土器(3)
図版7 B地点19T・20T	図版24 土器(4)
図版8 B地点68T・34T	図版25 土器(5)
図版9 B地点21T・22T	図版26 土器(6)
図版10 B地点62T・64T・67T・68T	図版27 土器(7)
図版11 B地点35T	図版28 土器(8)・土製品
図版12 B地点36T(1)	図版29 石器・石製品(1)
図版13 B地点36T(2)・26T	図版30 石器・石製品(2)
図版14 B地点25T	図版31 石器・石製品(3)
図版15 B地点61T	図版32 石器・石製品(4)・ガラス小玉
図版16 B地点31T・32T	図版33 平成20年度調査(1)
図版17 B地点29T・47T	図版34 平成20年度調査(2)

### 【写真】

図版35 カラー写真(1)	遺跡遠景、B地点西側全景
図版36 カラー写真(2)	B地点北西斜面、B地点20T縦堀2
図版37 カラー写真(3)	B地点36T濠1西側断面、B地点最西端から越後平野を望む、遺跡遠景、B地点61T縦堀2ほか
図版38 カラー写真(4)	B地点21T縦堀1東西断面、B地点61T縦堀2・濠2、B地点61T縦堀2・濠3、B地点30T濠4西側断面、B地点30T濠5西側断面、B地点30T濠5遺物(236~238)出土状況、B地点36T濠1西側断面、B地点36T濠1遺物(101など)出土状況
図版39 カラー写真(5)	A地点全景、A地点1T土坑墓全景

- 図版40 A地点（1） 遠景、西側遠景、1TSK1南北断面、1TSK1覆土上層石縄出土状況、1T土坑墓、2T、3T、3T埋甕
- 図版41 A地点（2） 3T埋甕断面、3T埋甕断面2、5T、9T、10T、10T土層断面、11T、12T
- 図版42 A地点（3） 13T、13T土層断面、14T、15T、16T、49T、17T、17T土層断面
- 図版43 A地点（4）、B地点（1） A地点（51T、52T、53T土層断面、56T、56T土層断面、57T土層断面、B地点（43T、59T）
- 図版44 B地点（2） 18T、18T北側、18TSK2遺物出土状況1、18TSK2遺物出土状況2、33T、19T、20T縦堀2検出状況、20T縦堀2土層断面
- 図版45 B地点（3） 20T縦堀2遺物出土状況、20T縦堀2上層遺物出土状況、20T東側、20T東側P1遺物出土状況、66T、65T、21T縦堀1土層断面、縦堀1
- 図版46 B地点（4） 68T西側、68T西側土層断面、68T中央、34T、22T、22T土層断面、22TSB1、22TSB1
- 図版47 B地点（5） 62T、62T、62T土層断面、62T土層断面、63T、23T、35T南側、35T北側
- 図版48 B地点（6） 26T、26T濠1付近、26T濠1土層断面、26T、36T全景、36T濠1東側土層断面、36T濠1遺物出土状況1、36T濠1西側土層断面
- 図版49 B地点（7） 25T、25T濠2東側土層断面、25T濠2内遺物出土状況、25T斜面、61T縦堀2土層断面、61T縦堀2土層断面と遺物（131）出土状況、61T縦堀2上層の遺物（119）出土状況、61T縦堀2の上層遺物（159等）出土状況
- 図版50 B地点（8） 61T中央の土層断面、61T南側の土層断面、61T濠2土層断面、61T・20T間の表土現況、南側斜面、31T斜面、31T土層断面、31T濠3土層断面
- 図版51 B地点（9） 32T、32T濠3西側土層断面、47T、47T土層断面、29T、29T東側土層断面、29T濠4西側土層断面、29T濠3II層土器（228）出土状況
- 図版52 B地点（10） 北側斜面遠景、北側斜面遠景2、30T（1）、30T（2）、30T（3）、30T（4）、30T濠4土層断面、30T濠4遺物出土状況
- 図版53 B地点（11） 30T濠5東側土層断面、30T濠5西側土層断面、30T濠5遺物（236～238）出土状況1、30T濠5遺物出土状況2、30T濠5遺物出土状況3、30T濠5遺物出土状況4、27T、27T濠5東側土層断面
- 図版54 B地点（12） 67T、69T、69T南側土層断面、69T北側縦堀2土層断面、69T北側縦堀2土層断面2、北側斜面縦堀2遠景1、北側斜面縦堀2遠景2、北側斜面縦堀2遠景3
- 図版55 C地点・平成20年度調査 C地点（37T、38T）、H20（70T完掘、70T北東壁土層断面、74T完掘、74Tテラス1・2土層断面、74T遺物出土状況、73T西壁）
- 図版56 出土遺物（1）
- 図版57 出土遺物（2） 文様アップ（1）
- 図版58 出土遺物（3） 文様アップ（2）
- 図版59 出土遺物（4） 土器（1）
- 図版60 出土遺物（5） 土器（2）
- 図版61 出土遺物（6） 土器（3）
- 図版62 出土遺物（7） 土器（4）
- 図版63 出土遺物（8） 土器（5）
- 図版64 出土遺物（9） 土器（6）、土製品、石器・石製品（1）
- 図版65 出土遺物（10） 石器・石製品（2）
- 図版66 出土遺物（11） 石器・石製品（3）、ガラス小玉、H20年度調査分

# 第一章 序 章

## 1 平成17・18年度の調査に至る経緯と経過

### A 調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車（以下、日沿道とする）は、新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、青森県に至る高規格幹線道路である。新潟県側は新潟空港・中条I.C間が平成14年度に開通した。中条I.C以北は平成元年及び平成3年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する荒川・村上I.C間は、平成10年12月に施工命令が出された。これを受け、東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」とする）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いについての協議が本格化した。

**分布調査：**調査は県教委から委託を受けた財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）が、平成14年度に村上I.C事業予定地内として168,500m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査対象範囲内に周知の遺跡は存在しない。調査の結果、現地は草木に覆われているため遺物は採集できなかったが、尾根上に平坦地が認められること、近年、狭い尾根上の平坦地で確認される縄文時代の遺跡例が散見されることから、計9地点（合計90,050m<sup>2</sup>、山元遺跡は①地点）について試掘調査が必要である旨を県教委に報告した。

**試掘確認調査：**分布調査の結果を受け、平成16年3月25日に東日本高速道路から県教委へ試掘調査の要望がだされた。県教委から受託した埋文事業団は、平成16年8月30日～9月30日の21日間で、9地点のうち、②・④・⑤地点と③・⑨地点の一部について試掘調査を実施した【滝沢2006】。

平成17年3月28日には、残りの地点についての試掘調査要望が出された。埋文事業団は、平成17年10月3日から試掘調査を行った。山元遺跡が確認された①地点は、周辺に支障があることから②～⑨地点の調査が終了した後に、11月9日から着手した。

### B 調査経過

試掘確認調査は、平成17年11月9日～12月12日（実質16日間）、平成18年4月11日～6月15日（実質45日間）に行った。以下では年度毎に調査経過を記す。

#### （1）平成17年度

調査対象の地点①は3か所の平坦地と、谷部とからなる。便宜的に調査区北側をA地点、南側をB地点、東側をC地点とした。現地は山林で、保安林区域があることや事業予定の関連から樹木は未伐採であり、平坦地では高さ1m程、斜面部では高さ2m程のササも茂っていた。重機進入路の確保や、地形観察のため、必要最小限の樹木伐採と刈払いを先行した。当初の調査終了予定は11月22日であった。

##### a) 11月9日～11月18日の現地調査

**A地点の調査：**平坦部にトレーンチ（以下、必要に応じて「T」とする）を設定して、重機で掘削を行った結果、地表下約20cmの暗緑灰色土層で遺物を検出した。基盤層（地山）の認定に苦慮したが、地表下約50cmの黄褐色土層で柱穴を検出したことから、この層を遺構確認面とした。出土土器は縄文施文されたもので、弥生時代後期の可能性があったが、細片のため確定できない。遺構・遺物が検出され、遺跡の存在が確実と

なった。広がりを捉えるため斜面にトレンチを設定して人力で掘削したが、遺構・遺物は検出されなかつた。A地点のトレンチは合計17か所である。

**B地点の調査**：11月14日から着手した。平坦地にトレンチを設定して、重機で掘削を行った。A地点に比して遺物の出土量も多く、柱穴と思われる遺構も数多く検出され、集落を思わせる遺構・遺物の検出状況であった。出土土器のうち、比較的大きな破片は弥生時代後期のものであった。越後平野を一望できる立地であること、周辺との比高36~37mの高所に立地することから、環濠と土器捨て場の有無を確認するため斜面部にトレンチを設定した。

11月15日に、調査区南側（越後平野側）の斜面部に26Tを設定して人力で掘削した。遺物は希薄であったが、11月16日には、標高34~35m付近で2か所の落ち込みを確認した。平坦部側の落ち込みは幅約2m、深さ約70cmであり、環濠の可能性が想定された。ただし、26Tの南西側斜面は地滑りの痕跡が認められたため、落ち込みは自然災害により地割れの可能性も残る。評価が定まらなかったが、重要性を考慮して文化行政課に報告した。斜面部の環濠の有無を確認するため、重機で掘削可能な地点に30Tを設定して調査を行った。その結果、標高38m付近と、標高35m付近で環濠の可能性がある溝を検出した。

11月18日には県教委が現地を訪れ、B地点における環濠の有無、調査対象範囲内での遺構・遺物の広がりを確認するよう指示があり、調査期間を12月中旬まで延長することとなつた。なお、本地点以外にも試掘調査要望か所があつたため、11月18日~22日までは他地区の調査を行い、11月24日から再開した。

#### b) 11月24日~12月12日の現地調査

**B地点斜面部の調査**：30T付近以外、地盤が急傾斜であることに加え、降雨時期も重なり重機による調査が不可能となった。このため11月28日からは作業員を増員して人力で掘削を行つた。当初、重機掘削した25・27・29Tは斜面部に向かって拡張した。また、新たに31・32・35・36Tを設定して調査を行つた。その結果、南東斜面では標高35m付近で、北西斜面では30T両脇のトレンチで環濠の可能性がある痕跡を確認した。いずれも斜面の傾斜変換点にあたり、現地表面からでも比較的容易にその存在を推定することができた。それぞれ半裁をし、層序と遺物の出土状況を確認しながら掘り進めた。各トレンチで検出された落ち込みは規模が小さく、断面形も逆台形・L字形が多い。出土遺物には弥生時代後期の土器が多く、2条検出した30Tの溝では、谷側のものから残存率の高い土器が出土した。

**C地点の調査**：調査を再開した11月24日以降、平坦面に4か所のトレンチを設定して、B地点と併行して調査した。その結果、若干の遺物と、柱穴の可能性がある落ち込みを確認した。出土土器は弥生時代後期が主体であり、A・B地点と共通する。

**12月8日文化庁の現地指導**：遺跡の重要性から12月8日には文化庁記念物課埋蔵文化財部門の岡田調査官から現地指導を受けた。その結果、①溝の規模が小さいものの環濠の範疇で理解されるため、環濠集落としては日本海側最北端であること、②出土土器は東北系が主体であり、環濠集落としては後期東北系土器分布圏の初例となること、③遺跡の保存状態が非常に良いとの評価を得た。今後の課題として、⑦調査途中であり、集落の様相を把握できる段階ではないので、継続して調査を行う必要があること、④現状保存できる方策があるなら、協議を第1に考える必要があるとの指導を受けた。

**現地調査の終了と遺跡の周知化**：岡田調査官の指導の受け、調査を継続する予定であったが、12月12日に大量の降雪に見舞われた。その後も雪が降り続いたため年内の雪解けは不可能と判断し、12月後半に撤収した。平成17年度の実質調査面積は607m<sup>2</sup>で、調査対象範囲(23,100m<sup>2</sup>)の2.6%にあたる。現地調査終了後に新発見の遺跡として、字名から山元遺跡として周知化した。

### c) 現地調査終了後の動向（開発側との協議と現地指導）

**開発側との協議：**現地調査終了後の1月18日に、東日本高速道路村上工事事務所、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に現地調査の結果を報告した。県教委は遺跡の重要性から文化庁の指導等を踏まえて平成18年度も範囲内容確認調査を実施して遺跡の評価を定めた後、取り扱いについて判断することを伝えた。山元遺跡付近の当初事業計画では工事工法は開削であり、掘削土を盛土等に利用する。現状保存を行うには、トンネル工法など工法変更が必要となるため、これが可能か否か検討して欲しい旨を伝えた。

**18年3月29日の現地指導：**新潟県文化財審議委員の明治大学石川日出志氏から現地で指導を受けた。遺跡の評価は以下のとおりである。①弥生時代中期後葉から集落が形成されている。②規模は小さいが、斜面の溝は環濠と考えるべきで、掘削時期は後期後半か。③出土土器から東北系の集団が環濠を掘削している希少な遺跡である。また、次年度の調査については、⑦環濠の途切れ具合の確認、⑧平坦面における住居の有無を中心に行うように指導を得た。

### （2）平成18年度

前年度の現地指導内容を踏まえてトレンチ設定か所の検討を行い、調査を再開した。当初の現地調査予定は4月11日～5月19日（24日間）である。地形観察・記録写真撮影のため樹木の伐採等をしたのち、平坦部は重機と人力で、斜面は人力で掘削した。調査体制は調査員2名、作業員15人である。

#### a) 5月12日までの現地調査

**環濠の調査：**平成17年度にはB地点で環濠が確認されたが、A・C地点でも再度斜面にトレンチを設定し、環濠の有無を確認することとした。調査の結果、環濠の可能性がある痕跡を確認できず、環濠はB地点にのみ存在することが明らかとなった。B地点では新たに46・47Tを設定して環濠の有無を確認した。いずれのトレンチでも環濠が確認されなかったことから、環濠が部分的に途切れることが明らかとなった。また、昨年度設定したトレンチで確認した環濠覆土の掘削を併行して行った。25Tでは環濠の末端が検出された。濠は全周せずに最低でも4か所で途切れることが明らかとなった。

**平坦面の調査：**A・C地点では遺構の内容を確認するため、理土を除去して遺構を半裁した。B地点では竪穴建物を確認するため、昨年度の調査トレンチを拡張した。B地点で新たに設定したトレンチは、地表面から凹みが確認できるか所である。斜面の環濠は地表面で存在が推定でき、土砂の堆積が薄い平坦部では、妙高市斐太遺跡群のように竪穴建物が半埋没の可能性がある。昨年度調査した20Tではこの傾向が顕著であり、竪穴建物の存在が予想された。調査の結果、多くのトレンチで柱穴と推定される土坑を検出したが、竪穴建物は確認できなかった。また、20T周辺の凹みは、溝の痕跡であることが判明した。

上記の結果から、B地点平坦部では竪穴建物の有無を確認するため、平坦部から斜面への変換点付近で新たにトレンチを設定すると共に（62～67T）、20Tで確認された溝の広がりを確認するため、61Tを設定した。作業量が増加したことにより、調査期間の延長を検討した。

#### b) 5月12日の文化庁現地指導

昨年度に引き続き、文化庁記念物課埋蔵文化財部門の瀬宜田調査官から現地指導を受けた。指導内容は多岐に及ぶが、現地調査では以下の指摘があった。①遺跡範囲の広がりを確認するため、A・C地点の再精査、②B地点では建物の典型的な類型が竪穴か平地式か示す必要がある、③61Tを拡張して環濠と縫堀の関連を明らかにすること等である。このため、調査期間の見直しの必要性を指摘された。検討課題を解消するため、調査期間を延長して6月上旬を目指すこととした。

### c) 5月15日～6月中旬

**現地指導：**遺跡の評価を固めるため、有識者の方々から現地で指導をいただいた。現地で指導をいただいた方、日程は以下のとおりである。

5月15日・6月15日 甘粕 健	5月16日 関 雅之	5月24日 橋本 博文
6月9日 石川日出志	6月12日 金子 拓男	

指導内容は多岐に及ぶため、ここでは割愛する。ただし、各氏共通の指摘としてB地点で建物が明確でない点が挙げられる。この点を最も重視し、すでに設定したトレンチを拡大して検出に努めた。

**現地調査：**B地点の平坦部ではトレンチ範囲を拡張すると共に、新たに68Tを設けて建物の検出に努めた。これまでの状況と同様に、柱穴と思われる遺構は確認されるものの、竪穴建物は検出されない。また、22Tでは柱穴の配列が確認できたことから、平地式住居が存在する可能性が想定できた。

一方、A地点では再精査の結果、墓の可能性がある土坑を検出した。半裁や十字にベルトを残して掘削した結果、1～3Tで計7基の土坑墓が確認でき、1TSK1からガラス小玉が出土した。A地点は土坑墓以外の遺構が明瞭でないことから、墓域として使用されていたことが分かる。B地点を居住域、A地点を墓域とする集落形態で、事業予定地内の遺跡の広がりは約2万m<sup>2</sup>であることが明らかとなった。

**文化庁の現地指導：**現地調査最終日の6月15日には、文化庁記念物課埋蔵文化財部門の坂井主任調査官が来訪した。新潟県は南北（東西）文化の流れの接点にあたり、日本列島全体の中でも重要な地域である。これまで実態がよく分からなかった後期東北土器文化圏の集落が、この遺跡で解明できる可能性がある。きちんと保護を図るべき遺跡であり、国の文化財審議委員に現地を観察してもらうように指導を受けた。

現地調査は6月15日で終了した。平成18年度の調査面積は793m<sup>2</sup>で、平成17年度と合わせて1,400m<sup>2</sup>（調査対象面積23,100m<sup>2</sup>の6.0%）である。なお、トレンチ内で検出された遺構は、環濠・埋甕のみ全面掘削、柱穴は半裁を原則とした。土坑墓は半裁・十字ベルトを残して掘削した。

### d) 6月16日～9月

**現地指導：**7月5日・6日には国文化財審議委員の須藤 隆氏、7月22日には県文化財審議委員の岡村道雄氏から現地で指導を受けた。現地調査が終了していたため、調査方針など有益な指導を反映できなかつたが、記録としてとどめ、今後の調査に活かすこととした。

**国土交通省との協議：**調査終了後、山元遺跡の概要説明と共に学術的価値について報告を行った。国土交通省は文化財保護法にのっとり、6月30日に94条に基づく通知を県教育委員会教育長に行った。これを受けて県教育委員会では、文化財保護法第94条により山元遺跡の現状保存勧告を行い、国土交通省に受理された。国土交通省は、山元遺跡の保存に関する工法の見直しを検討し、7月30日にトンネル工法に変更して、遺跡の現状保存を行うことを決定した。

**普及活動：**8月12日に現地を一般に公開するため説明会を実施した。8月12日は午前中が悪天候であったにもかかわらず、175名もの参加者があった。悪天候のため、現地説明会の参加をあきらめた方のため8月19日にも現地を公開した。2回にわたる現地説明会の参加者は220名であった。

**埋め戻し：**8月後半から実施した。掘削した遺構を保護するため、環濠・縦堀・土坑墓などは川砂の入った土養袋を詰めた。柱穴は直接川砂で埋め戻した後、遺構確認面にシートを敷き、掘削土で上面を覆った。

## 2 平成20年度の調査に至る経緯と経過

平成19年度に国土交通省によるトンネルの設計が終了した。県教委と国土交通省は協議して、トンネル坑口予定地における遺構・遺物の有無を確認する発掘調査を実施することとした。平成20年4月17日～5月8日、6月30日～7月14日の2回にわたって発掘調査を実施した。1回目は新潟側・村上側のトンネル坑口を調査し、2回目は1回目の調査で遺物の出土した村上側の74Tを拡張して調査した。

### a) 4月17日～5月8日

**新潟側坑口の調査：**4月17日に調査に着手し、斜面方向のトレンチを3か所設定した。調査前の地表面観察から当該地は地滑り地形と推定されたが、調査によって地滑りに伴う亀裂跡（図版33・55）や液状化の痕跡を検出した。これらは地震を要因とする可能性があるという（高濱信行新潟大学教授のご教示）。遺構は検出されず、出土遺物は時期不明の土器片1点のみであり、当該地まで遺跡は及ばないと判断した。

**村上側坑口の調査：**4月28日に着手した。斜面にトレンチを設定して調査した結果、平坦部側〔南西〕の黒褐色土から土器片数点が出土し、谷側（北東）からも土器片が1点出土した。平坦部側出土の土器は最大約7cmで弥生時代後期のものと思われた。土器片は風倒木痕の上層出土であることが判明し、周辺に遺構が存在する可能性も想定されたため、周辺を拡張したが、遺構・遺物は確認できなかった。このほか、水場遺構の有無を確認するため、沢部に4か所のトレンチを設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

### b) 6月30日～7月14日

1回目調査の結果、村上側坑口には遺構・遺物が存在する可能性が想定されたため、調査区を拡張して調査を実施した。その結果、調査区中央から東側にかけて土器片や剥片が出土したが遺構は確認できなかった。また、調査区の東西側には新しい段切りや地滑り地形が存在し、弥生時代の遺構・遺物は失われていることが判明した。したがって、村上側坑口範囲に遺跡が伸びないことが判明したため調査を終了した。調査面積は2回合計で305m<sup>2</sup>である。

## 3 整理作業と調査体制

### A 整理作業

出土遺物量は、浅箱で約30箱である。平成17・18年度調査分は、年度内に洗い・注記と簡単な接合作業を行った。本格的な整理作業は現地調査終了後の平成18年9月からで、石器の選別・計測・実測を行った。そのほかは、試掘確認調査が終了した平成19年1月から行った。また、原稿の作成等は平成18年度から行い、平成20年度の調査と合わせ、20年度11月から編集を行った。

### B 調査・整理体制

各調査の整理体制は、以下のとおりである。

## (1) 現地調査

期 間 平成17年度（11月9日～12月12日）、平成18年度（4月11日～6月15日）、  
平成20年度（4月17日～5月8日、6月30日～7月14日）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成17・18年度  
木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成20年度

管理 長谷川二三夫（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長総務課長）平成17年度  
斎藤 栄（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長総務課長）平成18・20年度

庶務 長谷川 靖（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課長）

指導 寺崎 裕助（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課試掘確認担当課長代理）平成17年度  
田海 義正（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課試掘確認担当課長代理）平成18・20年度  
鈴木 俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課日沿道担当課長代理）平成20年度

調査担当 滝沢 規朗（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課班長）平成17・18年度  
澤田 敦（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係主任調査員）平成20年度

調査員 斎藤 準（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課嘱託員）平成17・18年度

## (2) 整理作業

期 間 平成18年度（18年9月1日～12月31日、19年2月1日～3月31日）、  
平成20年度（20年11月4日～20年12月26日）

主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

整理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成18年度  
木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成20年度

管理 斎藤 栄（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団総務課長）

庶務 長谷川 靖（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課長）

指導 田海 義正（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課試掘確認担当課長代理）平成18・20年度  
鈴木 俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課日沿道担当課長代理）平成20年度

調査担当 滝沢 規朗（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課班長）

調査員 澤田 敦（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係主任調査員）平成20年度  
斎藤 準（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課嘱託員）（平成18年9月1日～12月31日）

## 第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

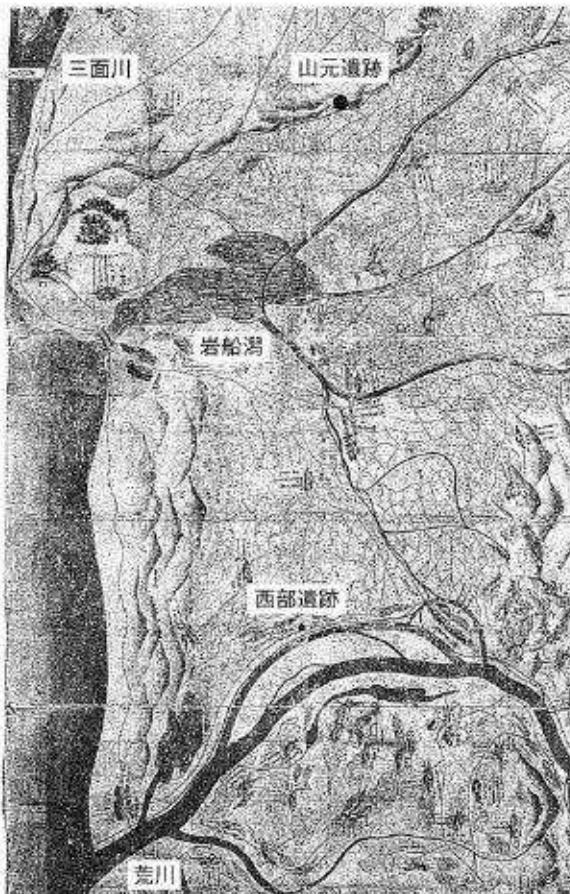
### 1 地理的環境

山元遺跡が位置する村上市（旧岩船郡神林村）は県北部に所在しており、日本海側最大の穀倉地帯である越後平野の最北端にある。旧神林村は西で日本海に面し、北側・東側は丘陵で旧村上市・関川村とそれぞれ境を、南側では荒川挟んで旧荒川町と接している。村内にはJR羽越本線と国道7号線が南北に走っており、山形県や村上市と新潟市を結ぶ重要な交通網の一端を担っている。

周辺の地形を概観すると、北・東側には山地から伸びる丘陵と水田の広がる沖積地、南北方向に延びる海岸線に沿った砂丘列に分かれる。本遺跡は標高約40mの村上丘陵の最も平野側の平坦地に位置する。眺望が良く、約80km南の角田・弥彦山が見える日もある（図版37）。村上丘陵は国道7号付近を境に西側を浦田山丘陵、東側を岩船丘陵と区分されることもある。比較的低位な丘陵で、最高所は村上城がある臥牛山の標高135mで、それ以外は標高90m弱と低く、傾斜も比較的緩やかとなっている〔新潟県農地部1989〕。

遺跡の南側には沖積地が広がるが、江戸後期に干拓された岩船潟が丘陵付近まで及んでいたことが予想される。江戸期の干拓後、明治後期・昭和20年代の耕地区画整理事業によって、河川改修や用・排水路の建設等が行われ、岩船潟の復元が困難など改変された。ただし、遺跡の分布等からその範囲はおおむね推定可能で、現在の石川を通じて日本海に流れ込んでいたという点ではおおむね意見の一一致を見る。一方で、山形県に水源を発する荒川河口との関連について、重要な指摘が行われている。

金子拓男氏は、岩船潟に流れ込んでいた荒川が大化4（648）年の磐舟橋造営に伴う古代の砂丘開墾工事で、現在の河口に変更されたとする〔金子1996〕。根拠として以下の①～④を挙げている。  
①現河口部周辺の砂丘の規模が幅約1,500m、最高点30mで、自然の力だけでは荒川の河口形成が不可能。荒川より遙かに水量が多い阿賀野川も砂丘を断ち切っていない。  
②慶長2（1597）年作成の「瀬波郡絵図」（第1図）から、荒川は既に現河口へ続く直線的な流れになっている一方、分流が「田中村」「九日市村」付近を流れて岩船潟に流れ込み、更に現在の石川を通じて日本海に流れ込んでいる。  
③現在の荒川の河口幅は約700～800m。現在の石川の河口幅は約40mであるが、長さ約750mの岩船砂洲そのものを河口幅とすれば、おおむ



第1図 瀬波郡絵図と山元遺跡位置推定図  
(東京大学史料編纂所1985『越後国郡絵図二瀬波郡』  
東京大学出版会に加筆)

ね一致する。④現在の荒川の氾濫原内に古代遺跡の発見がなく、鎌倉遺跡を上限とする中世遺跡が確認されている。従って、少なくとも鎌倉初期には砂丘を切断している現在の河口が存在していた。

一方で小林貴郎氏は、西部遺跡の調査成果から7世紀前半には現在の荒川河口付近への流れを想定する【小林2006】。7世紀前半に比定される文化層が確認された西部遺跡は、現海岸線から約2km内陸の自然堤防上に位置する。この自然堤防は河川起源の土砂であり、「たとえ本流ではないにせよ、現在の荒川と方向を同じくする流れの存在が想定できる」とした。ただし小林氏は、金子氏の「荒川放水路」<sup>11</sup>説を否定はしておらず、「瀬波郡絵図」からも岩船湯に注ぐ流路があったことは想定できる。問題となる荒川-岩船湯間の流路の大きさは、ボーリングデータの解析も含め周辺地域の資料蓄積を待たざるをえない。

## 2 歴史的環境

ここでは岩船湯周辺の遺跡状況について概観したい。周辺の遺跡分布図を第2図に示した。旧神林村における大規模圃場整備や日沿道に伴う発掘調査により、岩船郡域の様相が把握されつつある。以下では弥生時代、古墳時代を中心に当地域の様相を概観する。

### A 弥生時代

#### (1) 前期～中期

前期の遺跡は明瞭ではなく、桜林遺跡(21)【石川・継ほか2008】で当該期の可能性がある遺構が1基確認されているにすぎない。SX203は出土土器を欠くが、木製品を使う材を採取した残りとされる木材の放射性炭素の年代測定から弥生時代前期頃に位置付けられている。

県内の他地域と同様に(主に海岸平野部)、中期では中葉以降に遺跡数は増加する。荒川右岸では砂山遺跡【小片・上原1972、石丸ほか2003】(12)・長松遺跡【田辺1991】(13)、左岸で道端遺跡【前川ほか2006】(24)でまとまって遺物が出土している。このうち道端遺跡では当該期の集落様相を垣間見ることができる。竪穴建物2棟のほか、狭小な周溝が巡る建物が確認されている。また、石包丁が出土していることからも、集落の周辺で稲作農耕が行われていたことが暗示される。

土器は文様構成等が崩れているものの、北陸の小松式の要素を色濃く残すものと、東北の宇津ノ台式の範疇で理解されるものが主体となる。道端遺跡では仙台平野の中在家南式(又は高田B式)土器が検出されており、東西の土器がクロスする地域と評価できる。また、荒川右岸の沖積地では遺跡が増加しており、城田遺跡(17)【田辺ほか2001】・六百地遺跡(7)【田辺・大賀2001】・金曲遺跡(16)【田辺・松田2002】が挙げられる。中期中葉では北陸の小松式の範疇で理解できる土器が目立つものの、後葉では宇津ノ台式が増加する。また、低地における遺跡数の増加、道端遺跡における石包丁の存在などから、農耕集落が一定量増加する大きな画期と考えたい。北陸地方の影響が大きいと考えるが、当該期に北陸で検出例が多い「広溝式平地式建物」【岡本2003】は確認されていない。土器様相は類似しながらも、広溝式平地式建物を受容していない点は阿賀北の地域性を示す可能性があり、重要と考える。

#### (2) 後期

弥生時代後期では、丘陵上で滝ノ前遺跡【関1972、石丸ほか2003】(6)、沖積地では中曾根遺跡【青木

<sup>11</sup> 金子氏の説【金子1996】を小林氏の表現【2006】に従い、「荒川放水路」説とする。



第2図 山元遺跡の位置と周辺の弥生～古墳時代等の遺跡

国土地理院 平成15年9月1日発行5万分の1地形図「中条」、平成10年2月1日発行「村上」、平成15年10月1日発行5万分の1地形図「塙野町」、平成15年9月1日発行「小国」を合成、縮尺を10万分の1に変更の上、加筆

第1表 周辺の遺跡と動向

No.	遺跡名	調査	時代・時期						備考	
			弥生時代		古墳時代		古代			
			前期	中期	後期	前期	中期	後期		
1	山元	試掘	○	○					本遺跡	
2	下新保高田	本掘			○				遺物多數	
3	堂の前	本掘		○					遺物多發	
4	桂木田	本掘	△?						弥生中期中緊?	
5	大館	本掘	△	△						
6	瀬ノ前	本掘		○	△				竪穴建物3棟	
7	六百塚	本掘	○		○	○				
8	鶴脛山田山	本掘			○				古墳群	
9	三ヶ点下	本掘				○			7世紀後半	
10	宮の上	本掘			○					
11	大野塚		△?							
12	砂山		△多	△多	△				弥生中後期主体	
13	長松	本掘	○	○?						
						○				
調査で「本掘」は本発掘調査。時代・時期で、○は遺物有り、○裏側は有り、△は遺物のみ										
時代・時期										
弥生時代		古墳時代		古代		7世紀				
前期		中期		後期		前	中	後	7世紀	
14	麦田	本掘			△	△	△	△		緑色磁灰岩製管瓦
15	八幡山				△	△				
16	金曲	本掘			△	△	○	○		
17	城田	本掘			△			△		
18	大慈寺					△				アメリカ式石燈
19	千作り	本掘			△?			○		
20	高田	本掘	○?		△			○		
21	桜林	本掘				○				木材の年代
22	中曾根	本掘				○				竪穴? 2棟
23	古谷塚	本掘				○				
24	道端	本掘		○		○	○	○	△	
25	坂町宮ノ様	本掘		○						鉄路・石器點中角点

・鈴木ほか2006】(22) や堂の前遺跡【(財) 墓文事業団ほか2008】(3) で建物が検出された。土器様相は中期中葉～後葉とやや異なり東北系が主体となる点や、丘陵上の遺跡が明確になるなどの相違がある。滝ノ前遺跡は道路建設に伴う緊急調査で、後期の堅穴建物3棟が確認されている。土器は東北系を主体に北陸系が認められる。調査区内で環濠は検出されていないが、周辺との比高約40mの河岸段丘上に位置することから高地性集落と捉えられる場合もある【昔沼1993など】。堅穴建物の平面プランは円形を呈しており、北陸系土器分布圏が隅丸方形であるのと様相を異にする。

中曾根遺跡・堂の前遺跡は沖積地の遺跡として特筆される。中曾根遺跡では明確な掘り込みが検出されていないものの、炭化物の集中範囲から建物の範囲が推定されており、平面形はSI40が(楕)円形、SI41が隅丸長方形を呈する。確認された土器は後期前葉を主体として、一部は中期末葉まで遡る可能性が指摘されている。堂の前遺跡は平成20年度の調査であり、詳細は正式報告を待つこととなるが、自然流路沿いに堅穴建物が検出されている。中曾根遺跡・堂の前遺跡の存在から、東北系土器分布圏の集団が沖積地にも集落を構えることが把握できた点は大きい。

建物が確認されていないものの、注目される遺跡はいくつか存在する。山元遺跡の約800m東側の丘陵上に位置する八幡山遺跡(15)では、アメリカ式石鎚4点、緑色凝灰岩製管玉(細型1・大型4)、天王山系の土器片が採集されている【磯部1996】。丘陵上の大聖寺遺跡【磯部1996】(18)ではアメリカ式石鎚が採集されており、沖積地の衣田遺跡【鶴巻・磯部1990、田辺・土生2001】(14)や高田遺跡【田辺ほか2003】(20)では弥生時代後期の土器が出土している。また、東北系天王山式併行期の日本海側型式とされる「砂山式」【石川2004】の標識遺跡である砂山遺跡(12)は中期から継続している。

数量は限定されるものの、弥生時代中期後葉～後期では土器様相の変化も大きく、中期中葉で顕在化したと予想される北陸系は後期に入ると数量を減じ、東北系土器が主体となる。後期前葉の段階では中曾根遺跡例のように北陸系土器が確認できないが、後葉に入ると北陸系の量比が若干ではあるが増加しているようである。末葉の様相は、滝ノ前遺跡・衣田遺跡例から東北系と北陸系が拮抗する可能性がある。

## B 古墳時代

荒川以南では沖積地で集落数が飛躍的に増加している。岩船潟周辺では、荒川左岸の道端遺跡(24)【前川ほか2005】が象徴的な存在である。荒川以北では金曲遺跡などで若干の生活の痕跡が確認されたに過ぎず、浦田山丘陵上の村上市宮ノ前遺跡【椎名1962】(3)などの存在から、沖積地への進行がやや遅い可能性を想定していたが、平成20年度に調査を行った下新保高田遺跡【(財) 墓文事業団ほか2008】(2)では堅穴建物20棟程が確認されており、荒川以南とは同じ時期に集落が営まれていたことが確実となった。越後平野と山形・庄内平野間の集落として特に注目される。

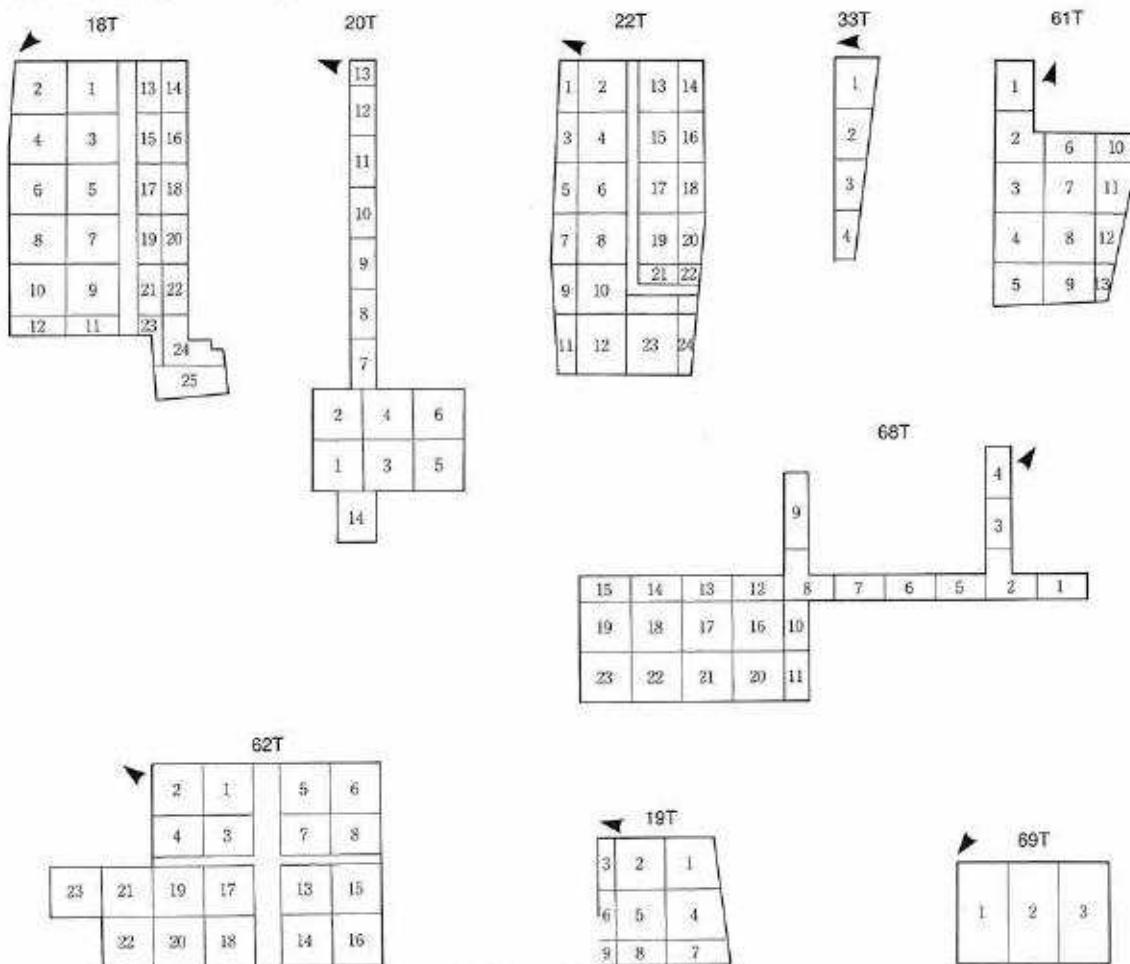
一方で、中期後半～後期前半では、前期から継続する遺跡は途絶え、弥生時代中・後期に活用されたか所で再び遺跡の築造が顕著になる。特に後期に入ると遺跡数は増加している。発掘調査では明確な建物に恵まれないものの、遺物は一定量出土しており、須恵器も含まれる。高田遺跡【鈴木ほか1990】(20)では発掘調査面積は少ないものの、6世紀前半代の須恵器杯・杯蓋が8個体出土している。金曲遺跡では5世紀後半代の須恵器高杯が確認されており、TK47～MT15型式期に集落の増加が見込まれる。浦田山丘陵では6世紀代に磐舟浦田山古墳群【甘粕ほか1996】が築造されており、古墳時代中期後半～後期前半に入り、沖積地等の開発がより積極的に行われた可能性が想定できる。このような傾向と、後に築造されたとされる「磐舟橋」との関連が不明であるが、ひとつの傾向として指摘しておきたい。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 トレンチと小グリッドの設定

トレンチの位置・設定数・大きさの基本方針は、遺跡の重要性が認識された平成17年12月以降、文化庁や有識者の指導・助言を基に内部で検討を行い、遺跡内容を把握できるように設定し、実質調査面積を必要最小限にとどめた。平坦面は堅穴建物を検出するため、遺構の分布状況等を加味して、何度か拡張したものが多いため、斜面は、遺構・遺物の広がりを把握すると共に、基盤層の傾斜角度を把握するため、可能な限り事業予定地内境界付近まで伸ばした。なお、平成20年度に行ったトンネル坑口付近の調査は、上記の基本方針と異なる。2か所の坑口のうち、村上側については遺物が若干出土したため、ほぼ工事が及ぶ範囲を面的に調査している。

トレンチ調査のため、通常の本発掘調査で行うようなグリッドは設定していない。1か所当たりの面積が大きく、遺物が比較的多く出土したトレンチのみ小グリッドを設定した（基本は $2 \times 2$ m）。小グリッド番号は、トレンチ毎として算用数字を用い「1T1」「18T25」などと呼称している（第3図）。北東隅を基点として番号を付したが、度々拡張したトレンチの番号は、その都度付したためこの限りではない。



第3図 小グリッドの設定

## 2 層序

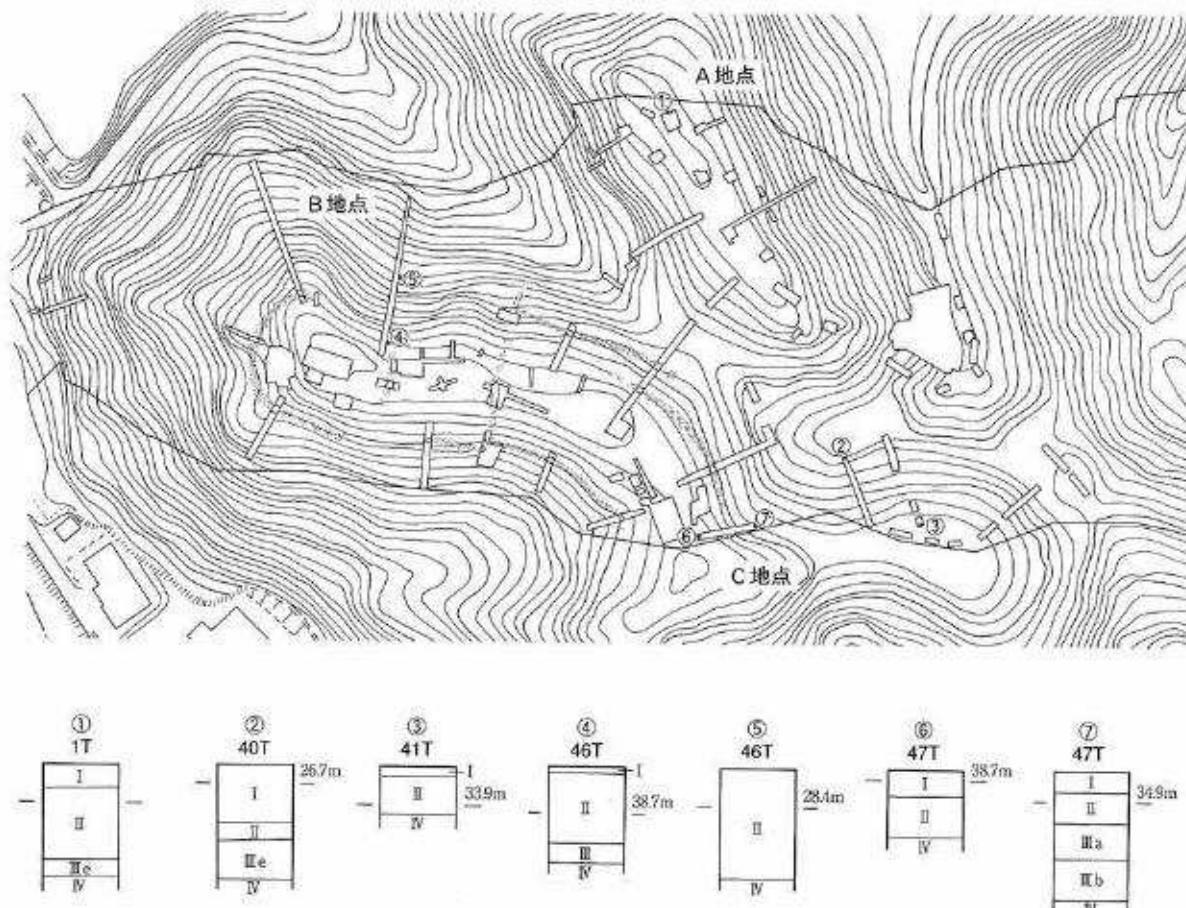
各トレンチで土層の堆積状況を確認した。丘陵上の平坦面はA～C地点ではほぼ一致するが、斜面部や谷部では各トレンチで土層の堆積状況が若干異なる。平坦面は土層の侵食が、斜面・谷部は平坦面で侵食された土層の堆積が予想される。暗褐色の表土、暗緑灰色となる遺物包含層、基盤層となる黄褐色土層～赤褐色土層は各トレンチで確認できることから、以下のようにI～IV層に区分した。

I層は表土で、全面にわたり堆積する暗褐色土層である。丘陵平坦部では薄く、斜面部・谷部では若干厚く5～10cm堆積する。II層は暗緑灰色土層で、遺物包含層である。平坦面～斜面にかけて堆積する。丘陵平坦部と斜面部では堆積の厚さに大きな変化はなく、20cm前後である。

III層は斜面部～谷部にかけてのみ分布する。色調が明確なものは以下のように区分したが、各トレンチとの整合性に課題を残す。IIIa層は暗褐色土層で遺物を多く包含する。IIIb層は褐色土層で、遺物を包含する地点もある。IIIc層は黒褐色土層で、遺物を包含する地点もある。IIIe層は暗黄褐色土層でIV層との漸移層にあたる。遺物はほとんど包含しない。

IIIa層出土の木炭で放射性炭素を測定した結果、36Tのものは、 $3,125 \pm 40$ という年代測定地が得られた（第VI章2参照）。斜面部に堆積した黒色土系の土層は、遺跡形成時以前に堆積していた可能性もある。

丘陵平坦部～斜面、谷部に認められる黄褐色～赤褐色土層（谷部は青灰色粘土層）をIV層とした。遺構確認面である。疊混じり、小砂利混じり、ローム質と各地点で若干様相は異なるが、基盤層と捉えた。



第4図 基本層序 (位図図1:2,000, 土層柱状図1:40)

## 第IV章 遺構

### 1 概要

#### A 概略

今回の調査は77か所のトレンチを設定して行った。年度別では平成17・18年度が69か所(1~69T)、平成20年度が8か所(70~77T)である。遺構を検出したトレンチは、平成17・18年度調査分の32か所である。種別はピット495基、土坑15基、土坑墓7基、埋甕1基、溝2条、縦堀2条、環濠、掘立柱建物1棟である。以下では必要に応じ、ピットはP、土坑・土坑墓はSK、溝はSD、掘立柱建物はSBの略号でしめす。ピットに比して大型で浅いものを土坑とし、このうち平面形が小判形で、坑底が比較的平坦なもの、覆土が基盤層(Ⅳ層)に近いものを土坑墓とした。この区分では課題を残すものもある(ITSK4、18TSK2等)。縦堀は丘陵平坦面を直行するもの、環濠は斜面に平行するもので共に幅1mを越すが、これらに比して規模の小さいものをSDとした。建物は現地で認定したもので、整理作業段階で可能性を確認したものは文中での記述にとどめ、図版に示していない。具体的には18T・62Tのピットの組み合わせである。

遺構は複数のトレンチにまたがる環濠や縦堀を除き、トレンチ毎に番号を付した。平成18年度からは現状保存を念頭においていた調査であることから、遺構は全面掘削していない。半裁を基本に、平面形を確認したにとどめたものもあるため、評価が難しいものも含まれる。遺構の時期は、出土土器から弥生時代後期後半のものが多いと考えるが、中期後葉のものも確実に存在する(B地点18TSK2)。

トレンチの位置は、トータルステーションで記録を行い、国土交通省作成の地形測量図に合体した。現地で認識した微地形と国土交通作成の地形測量図が一致しない地点もある。

#### B 各地点の概要

A地点は標高38m以上が比較的平坦な地形となり、東西約75m、南北は西側が約15m、東側が約10mである。平坦地は西側で10~20m程、事業予定外に伸びている。北~東側の斜面は、植林のためのテラス状の平坦面が造成されている以外、おむね旧地形を保っていると考える。検出した遺構は土坑墓7基、埋甕1基、ピット23基、土坑2基である。柱穴が明確でないこと、土坑墓が多いことから墓域と考える。1Tで多くの土坑墓を検出したことから、墓域は更に事業予定地外に伸びる可能性が高い。調査面積が限定されることから、各土坑墓を区画する施設の有無は不明である。

C地点は標高33m以上に平坦面があり、東西が約60m、南北は西側が約25mと東西方向に長い。標高・平坦面の面積共に、A・B地点よりも劣る。平坦面の約2/3が事業予定地外に伸びる。ピット4基が検出したにとどまり、遺物量も少ない。若干、生活の痕跡を残す地点と考える。

B地点は標高38m以上が比較的平坦な地形となる。東西が約180m、南北は西側が約30m、東側の最も狭い地点で約10m、広い地点で約50mである。東西に長く、最東端が広い「長靴状」の平坦面である。おむね旧地形をとどめているが、南西側斜面の26T~36T間は地滑りのため等高線が乱れる。検出した遺構は斜面で環濠が、平坦面では縦堀2条、掘立柱建物1棟、土坑13基、ピット468基である。ピットは数量が多く、掘り方が深いものがあることから居住域と考える。環濠は途切れる部分があり、それぞれを単

位として若干形態も異なるため、南西側から濠1、濠2と名称を付し、濠1～5を総称して環濠とする。

以下では、調査年度、地点、トレンチ毎に遺構の状況を記す。検出数の多いピットは、径・深さ共に20cm前後のものが多く、この傾向に当てはまらないものを中心に記す。

## 2 各 説

### A 平成17・18年度

#### (1) A 地点

1T(図版2・4・39・40) 土坑墓4基(SK1～3・5)と土坑1基(SK4)、ピット3基を検出した。SK4は平面形が不整形で、底が平坦でないため土坑墓と認定していないが、覆土は土坑墓とはほぼ同じである。

土坑墓はSK1がトレンチ外に伸びる以外は、いずれも全形が把握できる。主軸はSK3が北東～南西である以外、おむね丘陵平坦面の主軸と一致しており、北西～南東である。大きさは長軸100cm前後・短軸50～70cmの小型、長軸150cm前後・短軸100cm前後の中型、長軸200cm弱・短軸90cmの大型に区分が可能である。覆土は淡灰褐色土を呈するものが多く、色調は遺構確認面であるⅣ層との区分が困難であった。おむね単層であるが、SK1のみ複数層が存在し、土層断面でピット状の落ち込みを確認した。

副葬品と思われる遺物が検出されたのはSK1とSK2である。いずれも覆土のふるいで検出したもので、調査か所内での分布状況は明らかでない。SK1は南側のみの調査であったが、ガラス小玉の完形品68点、半損品4点を検出した(図版32～353～424)。ガラス小玉の出土か所は、未掘削の北西部に比べて幅広くなっていること、出土数から頸ないし頭に装着されたと推定できることから、頭位は南東方向と考える。また、SK1の未掘削部分からは石鎌1点が出土した(図版29～284)。SK3の覆土からは、二枚貝の一部が出土している(図版66)。先端は磨耗しており、使用された可能性がある。

2T(図版2・4・39・40) 土坑墓1基(SK1)とピット4基を検出した。土坑墓であるSK1は長軸112cm、短軸64cmと小型である。深さは10cm程で、覆土は1Tのものと同様に淡灰褐色を呈し、主軸もA地点平坦面と平行する北西～南東方向である。副葬品と思われる遺物は出土していない。

3T(図版2・5・39～41) 土坑墓2基(SK1・2)、埋甕1基、ピット6基を確認した。土坑墓のうちSK1は全体のほぼ半分が調査区外に伸びる。SK2はトレンチを拡張して全体のプランを確認した。長軸155cm・短軸72cmと中型の規模である。主軸はSK2が丘陵平坦面の長軸方向とはほぼ一致するが、SK1は丘陵平坦面とは直行する。埋甕は直径15cm・深さ23cmの土坑内に、土器が直立して出土したものを指す。土器の設置面よりも土坑の掘り方が深い。6基検出したピットは、P1・P2が40cm弱と深い。

52T(図版2・5・43) 平坦面際でピット2基を検出した。直径30～35cmとやや大きい。

9T(図版2・4・41) ピット4基を検出した。遺構確認まで行い、半裁は行っていない。

17T(図版2・5・42) 土坑1基、ピット4基を検出した。土坑は稍円形で、長軸56cm・短軸40cmである。ピットは直径40cm弱・深さ35cmのもの(P1)と、直径・深さ共に20cm前後のもの(P3～5)に分かれる。

#### (2) C 地点

37・38T(図版5・55) 37Tで3基、38Tで1基のピットを検出した。直径・深さ共に20cmに満たない。

#### (3) B 地点

18T(図版3・6・44) 土坑3基、溝1条、ピット130基を検出した。遺構密度はB地点平坦面で最も高い。土坑の平面形は円形(SK1・SK116)と、小判形(SK2・SK3)に分かれる。円形のSK1は直径168cm

と大型である。確認面で弥生時代後期の土器が出土している（図版21-13・14）。半裁していないことから、断面形態等は不明である。平面形が小判形の土坑のうちSK2は長軸96cm・短軸46cm・深さ17cmである。覆土上面から弥生時代中期後葉の土器が出土しており、当該期の遺構と判断した。SK3は深さが22cmであるが、長軸192cm・短軸92cmとSK2のはば倍である。一部を半裁したが、遺物は出土していない。

ピットは径15~30cmのものが多い。深さは30cmを超えるものも少なくない。現地調査時点では、明確な配列は確認しえなかった。整理作業段階で東側中央と北西端で深さ25cm以上のものが、略円形に配置された状況を確認した。東側のものは東西3.6m、南北3.2mである。深さ25cm以上のものは、東側から時計回りで、P5・114・115・42・27・28・19、推定ライン上には深さ25cmに満たないP1がある。北西端では深さ20cm以上のものが径3.6m程の円形にめぐる。東側から時計まわりで、P74・73・84・85・94・101・102・103、推定ライン上には深さ20cmに満たないP73・84・105がある。この他に、両者の間に半径4mのピット列がある。深さ30cm以上のものが、東側から時計回りで、P37・39・47・45・66・68で、ライン上ないしは延長上にP40・48・75がある。いずれも壁立ち式の円形建物の可能性がある。

**33T**（図版3・6・44） ピット15基を検出した。33Tは平坦面と緩やかに傾斜する南側の2か所に分かれると、遺構は平坦面で多い。半裁を行った2基以外は、平面プランを確認したにとどめた。直径20cm前後のものが多いが、P13のみ46cmと大きい。半裁したもの深さは25~29cmである。

**19T**（図版3・7・44） 土坑1基、ピット31基を検出した。SK1は平面形が小判形を呈し、長軸99cm・短軸60cm、深さ12cmである。当初、土坑墓の可能性を考えたが、覆土が黒色であること、浅いことから土坑とした。ピットは直径20~30cm前後が多いが、中には40cmを超えるものもある（P7）。深さは10cm前後のもの、20cm前後のものほか、40cmを超えるものもある（P15・P20）。遺構確認当時はP17~21・27~29・24の組み合わせを想定したが、それぞれの深さが異なることから、1棟の建物として認定していない。

**20T**（図版3・7・36・44・45） 地表面で緩やかな凹みを確認でき、遺構の存在が想定された。調査の結果、縦堀1条、ピット25基を検出した。地表面の凹みは、縦堀2が半埋没のため認識できたことを確認した。縦堀2は幅約184~200cmで、北側が若干広い。掘削した南側の断面形は箱形で、深さ70cmである。遺構確認面上のもの（図版22-42）や覆土中・下層出土土器（図版22-43~47）から後期中葉に埋没したと考える。ピットは深さ20cm前後である。P1から弥生時代後期の土器が出土した（図版22-40・41）。

**68T**（図版3・8・35・46） 土坑4基、ピット88基、縦堀1を検出した。トレンチは東西に細長く、西側のみ南北を広く設定した。遺構分布密度は西側が高い傾向にある。半裁したのは8基にとどまる。縦堀1は隣接する21Tから南北に伸びたものと思われ、トレンチ内では東側のラインのみ検出した。土坑は平面形が円形のものが多く、径50cm程のもの（SK85）、径80~90cmのもの（SK55・SK69）、径120cm程のもの（SK80）に分かれる。柱穴は他のトレンチと同様に径・深さ共に20cm前後のものが多い。

**34T**（図版3・8・46） 現地表面において緩やかに凹むことから、遺構の存在が想定された。調査の結果、ピット2基を検出したにとどまる。径約20~30cm前後で、深さも20cmに満たない。

**21T**（図版3・9・35・38・45） 縦堀1、ピット6基を検出した。縦堀1は幅172cm、深さ24cmである。覆土から若干土器が出土しており（図版22-67・68）、後期後半に埋没したものと考える。

**22T**（図版3・9・35・46・47） 土坑1基、ピット87基、掘立柱建物1棟を検出した。遺構の分布密度は高い。SK1はトレンチ内の西端に位置し、長軸124cm・短軸94cm・深さ33cmである。覆土はレンズ状に堆積する。自然堆積の可能性が高いため土坑墓とはしていない。復元したSB1は長軸3.6m、短軸は東側が3.0mであるのに対し、西側は3.36mとやや歪な形態を呈する。柱穴は径26~38cm、深さ29~46cmである。

これ以外のピット径・深さが20~30cm前後のものが多い。比較的深いものが西側に多い。

**62T** (図版3・10・47) 土坑2基、ピット54基、溝1基を検出した。遺構はトレンチ内の北西側に多い。土坑はいずれも長径80cm弱、短径50~66cmで、深さは22~24cmである。ピットは他のトレンチに比して大きく、深いものが多く、直径は40cmを超えるものが7基(13.0%)、深さ50cm以上のものは13基(24.1%)である。深さ50cmを超えるものがトレンチ内の北側に集中する。南側からP37・38・43・45・49はほぼ直線的に位置しており、何らかの構築物が予想されるが、現地調査の時点で建物等を復元できなかった。

**64T** (図版3・10) 平坦面から斜面に位置するか所に設定したトレンチで、地表面が凹むことから堅穴建物等の存在が予想されたが、土坑1基、ピット2基を検出したにとどまる。

**67T** (図版3・10・45) 平坦面から斜面に位置するか所に設定したトレンチで、地表面が凹むことから堅穴建物等の存在が予想されたが、7基のピットを検出したにとどまる。P7のみ30cmと深い。

**66T** (図版3・10・45) 平坦面から斜面に位置するか所に設定したトレンチで、地表面が凹む凸ことから堅穴建物等の存在が予想されたが、14基のピットが検出されたにとどまる。

**35T** (図版3・11・47) 濠1を検出した。標高37.5m付近で掘り込まれている。幅約144cm、深さは丘陵平坦面側で64cmである。このトレンチで確認したIV層は比較的緩やかな傾斜で、傾斜角度は約15~20度である。濠が掘削された地点の傾斜角は15度程度である。濠の覆土は10層に区分されるが、遺物は出土していない。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

**26T** (図版3・13・47) 濠1を検出した。標高約35~36m地点に掘り込まれている。幅256cm、深さは丘陵平坦面側で96cmである。このトレンチで確認したIV層は標高35m付近で傾斜角が変換し、35m以下が約25度、35m以上が約35度である。この傾斜変換点に濠が掘削されている。濠の覆土は12層に区分されるが、遺物は出土していない。覆土の西側が乱れること、東側でテラス状の平坦面があることから、再掘削された可能性もある。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

**36T** (図版3・12・13・37・38・48) 濠1を検出した。標高36m地点で掘り込まれている。幅192cm、深さは丘陵平坦面側で62cmである。このトレンチで確認したIV層は標高36m付近で傾斜角が変換しており、36m以下が約28~30度、36m以上が約35度である。この傾斜変換点に濠が掘削されている。濠の覆土は8層に区分される、上~下層にかけて多くの土器が出土した(図版23-92~101)。略完形の土器もあり、環濠の埋没年代は後期後半と考える。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

**25T** (図版3・14・49) 濠2を検出した。標高36m付近で掘り込まれている。幅136cm、深さは丘陵平坦面側で88cmである。濠2はトレンチの西側で幅・深さ共に減じており、トレンチ外の西側で途切れると判断した。このトレンチで確認したIV層は比較的傾斜が一定しており、約25度である。濠の覆土は9層に区分され、上層~下層にかけて土器が出土した(図版24-102~104)。環濠の埋没年代は後期後葉と考える。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

**61T** (図版3・15・37・38・48~50) 縦堀2、濠2、濠3を検出した。縦堀は標高33m付近で、濠2・3もトレンチ内で途切れる事を確認した。縦堀2と濠3は重複関係が認められ、縦堀2は濠3埋没後に構築されている。縦堀2は幅約260cm、深さは最大で120cmと平坦面に比して深い。出土遺物は多く(図版24-119~131)、後期中葉頃に埋没したと考える。濠2は幅約176cm、深さ112cmで覆土は12層に区分される。このトレンチで確認したIIIc層は比較的傾斜が一定しており、約25度である。出土遺物は少ないが(図版24-132~135)、後期後葉に埋没したと考える。濠3は南端を確認したのみで、掘り方は明確でない。

**31T** (図版3・16・50) 濠3を検出した。標高約35m地点で掘り込まれている。幅160cm、深さは丘陵平

平坦面側で50cmと浅く、断面形はL字状を呈する。このトレンチで確認したIV層は標高35m付近で傾斜角変換しており、35m以下が約20度、35m以上が約30度である。この傾斜変換点に濠が掘削されている。濠の覆土は5層に区分される、上層～下層にかけて土器が出土した（図版26-173・174）。環濠の埋没年代は後期後半頃と考える。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

**32T**（図版3・16・51） 濠3とピット11基を検出した。濠3は標高約35m地点で掘り込まれている。幅152cm、深さは丘陵平坦面側で40cm程である。断面形はL字状を呈する。このトレンチで確認したIV層は比較的傾斜角が一定であり、約20度である。濠の覆土は単層で、遺物は出土しなかった。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。濠3は、現地での土層断面観察結果から、埋没後にⅢc層とした暗褐色に近い黒色土が堆積したと推測した。ただし、Ⅲc層と濠3の覆土の区分は困難であり、他トレンチとの土層堆積状況との整合性から、今後、検討が必要と考える。ピットは平坦面際で9基、濠3よりも標高が低い地点では2基を検出した。

**47T**（図版3・17・51） 平坦面際で3基のピットを検出した。深さ20cm未満のものに限られる。

**29T**（図版3・17・51） 濠4とピット9基を検出した。濠4は標高35m付近で掘り込まれている。幅184cm、深さは丘陵平坦面側で92cmである。谷側で掘り込みが急角度で深いのに対し、平坦面側は緩やかで、断面形はL字状に近い。このトレンチで確認したIV層は比較的傾斜角が一定で、約20度である。濠の覆土は5層に区分されるが、遺物はわずかに出土したにとどまる。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。ピットは環濠よりも標高の高い地点に限られ、径20cm以下のものが多い。

**30T**（図版3・18・19・36・38・52・53） 濠4と濠5を検出した。濠4は標高37.5m付近で掘り込まれ、幅128～160cmと若干西側が狭い。深さは丘陵平坦面側で80cm前後、断面形は逆台形である。このトレンチで確認したIV層は約20度と比較的緩やかな傾斜となっている。覆土はトレンチの東側と西側で対応しない。西側では12層に区分したが、IV層を基本とする黄褐色土ブロックが多く含まれ、他トレンチの濠覆土とは異なる。自然堆積ではなく、意図的に埋め戻された可能性がある。

濠5は標高35.5m付近で掘り込まれている。幅172～200cmと若干西側が狭い。深さは丘陵平坦面側で80cm前後、断面形は逆台形である。覆土は8層に区分した。中～下層の4・5層で残存率の高い土器が出土した（図版19・27-236～241）。出土土器から弥生時代後期後葉に埋没したと考える。

**27T**（図版3・20・52・53） 濠5とピット3基を検出した。濠は標高35m付近で掘り込まれている。幅132cm、深さは丘陵平坦面側で56cmである。断面形は逆台形である。このトレンチで確認したIV層は標高35mライン以下が約25度、36m以上が約20度で、傾斜変換点付近に環濠が掘削されている。濠の覆土は7層に区分されるが、遺物は出土しなかった。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。検出したピットは環濠よりも標高の高い地点に限られる。

**69T**（図版3・20・54） 縦堀2・濠5の有無を確認するため設定したが、縦堀2は確認できず、斜面途中で途切れることを確認した。トレンチの北東で濠5の可能性がある落ち込みを部分的に検出した。

**69T北側の重機進入路**（図版3・20・54） B地点平坦面に重機が進入するために掘削した部分で縦堀2を検出した。幅136cm、深さ56cmである。縦堀2は平坦面から斜面に伸び、谷付近まで続くものと考える。

## B 平成20年度

A地点で5か所、B地点で3か所のトレンチを設定した。いずれも明確な遺構は検出されていない。ここでは比較的調査面積が大きい74T（A地点）の概要を記す。

74T(図版2・34・55) 風倒木痕1基を検出した。平面プランは長軸径約2.5mの楕円形である。埋土は持ち上げられた地山と流入土からなる。II層が上部に堆積していることから、確認面はIII層上面であり、弥生時代の遺構と同じと推定する。土器はII層もしくは流入土の上部から出土した。

### 3 小 結

以下では複数のトレンチにまたがって検出した環濠、縦堀について概要を記す。

**環濠**: 濠1～5からなる。各トレンチでの検出状況から、それぞれで途切れていることが明らかである。

南側斜面の濠1は標高34～37mの地点にあり、北側では標高が高い地点に築かれている。北側斜面の46Tで確認できなかったこと、25Tの標高34m付近で検出できないことから、B地点最西端を取り囲むように築造されたと考える。26T～36T地点の斜面は途中で傾斜が急角度になる地点に掘削されている。深さは1m未満であるが、幅は26T・36Tで幅2m前後と濠のなかでは最も規模が大きい。北側斜面で濠1が途切れる地点は、46Tの状況から傾斜角度が更に大きくなる地点である。一方、南側斜面では途切れる地点が明確でないが、平坦面から続く縦堀1付近と考える。濠2は25T～61T間で両端の立ち上がりを検出した。標高34～36mに位置しており、長さ約15mと濠の中で最も短い。断面形は台形で、幅・深さ共に濠1より小さい。濠3は61T～32Tで確認したが、東側は事業予定地外に伸びる可能性がある一方で、32Tでの掘り込みの浅さやⅢ層との前後関係などで課題を残す。標高34～35mの地点に位置しており、31T地点では傾斜の変換点で掘削されている。掘削幅・深さ共に濠1・2よりも更に浅く、断面L字状を呈する。

北側斜面の濠4は標高35～37m地点に位置する。東側では47Tで、西側では27Tで確認できないことから、延長30m程と考える。30Tで環濠5と重複しており、内環濠との呼称も可能と考える。断面形は30Tが逆台形、29TはL字形に近い。濠5は標高34～35m付近で掘削されたもので、総延長40m強である。東側は29Tで、西側は46Tで確認できないことから、両端が途切れる形態と考える。27T・30Tのものは、いずれも断面形が逆台形を呈するものの、幅約120cm、深さ50cmと極めて浅い。

濠はそれぞれ途切れる部分が存在するが、30Tでは現状で唯一重複している。30T付近はA地点との関連において、最も谷部が浅くなる地点である。濠の掘削に伴う発生土を利用した土壘の存在は、トレンチ内では確認できなかった。濠を再掘削した可能性は26Tであるものの、明瞭ではない。覆土は、堆積状況から人為的に埋められた可能性を示すものは30Tの濠4のみで、それ例外は自然堆積の可能性が高い。

**縦堀**: 縦堀1は21T～68T間の長さ7.5mで検出した。21Tの南東側平坦面及び68T北でも地表面が若干凹んでいることから、更に南北方向に延びる可能性が高い。

縦堀2は61T～20T～69Tと谷側の重機進入路で検出した。南側斜面は61Tで途切れることを確認した。20T～61T間は地表面が凹むことから、つながっていると考える。北側斜面では69Tで検出されていないが、20Tから69T付近までは地表面の凹みが確認できることから続いている可能性がある。一方、69T北側の重機進入路では平面・断面を検出したことから、部分的に途切れていても谷部まで続いている可能性もある。南側斜面でも61Tで断絶後、更に南側へ掘削されている可能性も考慮する必要がある。

縦堀1・2の掘削に伴う発生土を利用した土壘の存在は、いずれのトレンチ内でも確認できなかった。再掘削した痕跡も明瞭ではない。覆土の堆積状況から、自然堆積の可能性が高い。

# 第V章 遺物

## 1 概要

山元遺跡の調査で出土した遺物には、弥生土器、土製品、石器・石製品、ガラス製品がある。出土量は整理箱(54×35cm、深さ10cm)で約30箱に及ぶ。出土土器は弥生時代中期後葉～後期に限られ、他の時代は含まれない。土器以外の遺物は、特徴から他時期・時代のものとする根拠がなく、出土土器の時期幅内に収まる所産と考える。地点別ではB地点が最も出土量が多く、A地点がこれに次ぐ。C地点ではごくわずかであった。以下では、種別毎に概要を記す。

## 2 土器 (図面図版21～28・34-1～273・426、写真図版56～64)

弥生時代中期後葉～後期のものがある。環濠覆土出土の中には残存率が高いものも存在するが、細片が主体である。報告にあたり残存率が低いものでも、情報が多い口縁部は可能な限り図化した。また、胴部破片であっても文様が残存するものは、系統・時期の推定が行ないやすいため図化を行った。

### A 分類

時期・系統で大別した後、器種で細別をし、文様・器形で更に細別した。なお、文様・器形での細別は、出土量が多いものに限る。

#### (1) 中期後葉

東北日本海側の宇津ノ台式〔須藤1970〕、山草荷式〔大木・中村1970〕、北陸系の小松式〔増山1990ほか〕がある。従来の山草荷式は、宇津ノ台式様式圏内の地域様式で、新潟県内の地域性を示すとの見解があり〔石川2004〕、旧加治川村山草荷遺跡出土土器から、一時期を構成するものと考えられている〔高橋1979・石川2000〕。以下、様式毎にその特徴を記す。

1群 在地の山草荷式〔石川2004〕に比定されるもの。これまで、壺は宇津ノ台式〔須藤1970〕、壺は川原町口式ないしは山草荷式〔大木・中村1970〕とされたものを一括した。壺のみ区分した。

A類：頸・胴部文様帶に重菱形文を持つもの(12など)。

B類：頸・胴部文様帶に鋸歯文と平行沈線文を組み合わせた文様を持つもの(271など)。

また、口縁部内面に文様を持つものをa類、文様を持たないものをb類とした。

2群 北陸の小松式土器系統に属するもの。壺(186)と壺(86・163など)がある。なお、底部輪台法ではない底部で、底面近くまで縦ハケ調整されたものも本類として捉えた。

#### (2) 後期

東北系の土器を主体に、北陸系、北海道の続縄文式土器がある。

3群 縄文施文されたものを中心に、東北系の範疇で理解できるものである。本遺跡では主体となる。器形が東北系であっても、全面ハケ調整されたものは別に分類した。器種は壺を主体に、壺・蓋がある。出土数が多い壺のみ、器形・文様で分類をおこなった。

### a) 口縁部・頸部

文様を加味せず、頸部の作出で大別し、口縁部形態で細別した。

頸部が不明瞭なもの（I類）、直立した頸部をもつもの（II類）、II類に比して頸部の直立具合が明瞭でないもの（III類）である。口縁部は、肥厚せず、短く、わずかに内湾して立ち上がるるもの（1類）、肥厚せず、長く、内湾して立ち上がるもの（2類）、肥厚せず、長く、外傾・外反して立ち上がるもの（3類）、肥厚して、短いもの（4類）、肥厚して、長いもの（5類）に区分した。

頸部と口縁部の関連では、I類には1類（167）と2類（168など）、3類（29）、II類は2類（11）と4類（264）、III類は2類（238）、5類（101・119など）がある。

### b) 文 様（図版57・58）

区画文には平行沈線間の刺突列（a類）、交互刺突文（b類）、上下の沈線を欠き、一方向からの刺突文が施されたもの（c類）、沈線のみ（d類）、欠くもの（e類）がある。頸部・胴部文様は、重菱形文、流水文、連弧文、梢円形文などがある。文様の組み合わせから以下に区分した。

A類（167） 頸部・胴部に連弧文が施され、区画文がa類のもの。器形はI 1類である。

B類（42・47・119） 胴部に重菱形文が施されたもの。口縁部と頸部界に交互刺突文が施されたもの（42）と、これを欠くもの（47・119）がある。区画文はb・d類である。

C類（243・264） 頸部に横長の梢円形文が施されたもの。区画文はd類である。

D類（4） 胴部に流水文が施されたもの。区画文はd類か。

E類（101・237） 頸部が無文ないしは、全体に文様を欠き、粗製的なもの。

4群 北陸北東部系とされるものである。器種には壺、壺、高杯（器台の可能性を持つものを含む）がある。

5群 東北系の器形で、ほぼ全面がハケ調整された折衷タイプ。八幡山式〔渡邊2001〕と呼称されるものと考える。なお、ハケ調整されていても、沈線で文様が施されたものは3群に含めた。ハケメは北陸北東部系（4群）に比べて粗く、口縁部内外面が横方向、胴部外面は縦方向のものが多い。

6群 続縄文式土器ないしは、その影響を色濃く受けたものである。2点出土している（117・236）。微隆起線文を欠くなど細部は異なるものもあるが、後北C<sub>i</sub>式に類似する特徴を示す。

## B 観 察 表

### (1) 胎 土

胎土は生地と混和材とからなるが、主に混和材と思われる鉱物を主体に以下のように区分した。

I類：大きめの白色粒子（花崗岩？）を主体に、石英・雲母を含むもの。わずかに海面骨針を含むものもある。出土土器中、最も多い。

II類：I類に比して精製された生地に、細かな白色小粒子（花崗岩？）を多く含み、雲母・長石を若干含むものである。

III類：精製された生地に白色小粒子（花崗岩？と石英を含む）を含むもの。焼き上がりは白っぽい色調を呈する。出土例はごくわずかである。

IV類：I類に類似するが、粘土粒を特に多く含むものを本類とした。

V類：白色小粒子（花崗岩？）を多く含み、赤～黄褐色を呈する砂っぽい生地のものを一括した。

VI類：角閃石・長石・雲母などキラキラした鉱物を含み、色調が黒色～黄褐色を呈するもの。

VII類：精製された胎土で、特に海面骨針を多く含むものである。

## (2) 土器の焼成方法・色調・残存状況・使用痕跡

野焼き方法は、小林正史氏らにより開放型野焼き・覆い型野焼きの復元が行われている[小林2005など]。県内の弥生時代後期は、北陸系は覆い型、東北系は開放型野焼きである[滝沢2007a]。野焼き方法の推定には残存率の高い土器での観察が必要で、この条件を満たすものの観察を行って結果を記した。

色調は焼成時の黒斑や、土器焼成後の使用痕跡であるスス・コゲ付着部位以外の部位の色調について記した。ただし、残存率が低いものでは、黒斑付着部位・使用痕跡部位を観察したものも含まれる。

焼成が「良好」「不良」は、焼成完了時の状況のみならず、廃棄後の状況にも大きく左右されると思われることから、観察表では現状の残存状況を○・△・×で示した。○は文様・調整・付着物の観察が十分に行えるもの、△は摩耗・剥落が進んでいるが、内外面いずれか一方で上記の観察が行えるもの、×は摩耗・剥落が進み、内外面共に上記の観察が十分に行えないものである。

土器焼成後の使用痕跡について、煮沸具のみ観察した。詳細については観察表に記すが、内面の黒色付着物をコゲ、外面の黒色付着物はスス等を観察した。

## C 実測図の表現方法と文様帯の呼称

残存率が低い土器は、断面実測図と外面の拓影図を作成した。また、内面に文様がある場合や特徴的な調整が施されたものも拓影図を作成した。表現方法は、右から断面図・内面の拓影図、外面の拓影図である。文様帶は第5図のように呼称する。

## D 土器組成



第5図 文様帶の呼称  
(鈴木1976より)

土器組成を口縁部破片数（以下、口縁数と略す）と32分割で計測した口縁部残存率（以下、残存率と略す）で示した（第2～5表）。器面の摩耗等で、区分が明確でないものは「時期・系統不明」とした。また、残存率が高くても、時期比定が難しいものも少なくない。特に東北系土器は中期と後期の区分が難しい。東北系土器については、全体の中から明らかに中期と判断できるものを除き、そのほかを後期とした。計測個体数は口縁数269、残存率は615である。

### (1) 全体の土器組成

第2・3表で傾向をみると、時期・系統不明は口縁数で8(3.0%)、残存率で11(1.8%)と低い比率であるため、これを除く数値（口縁数261、残存率604）で傾向を抽出する。全体の時期別では、中期が口縁数37(14.2%)・残存率108(17.9%)と20%弱、後期が口縁数224(85.8%)、残存率496(82.1%)と多く、おおむね中期と後期の比率は1:4程度である。

時期・系統別の様相では、中期の口縁数37、残存率108中、1群が90%以上を占める（口縁数34で91.9%、残存率101で93.5%）。後期では口縁数224、残存率496中、3群が90%以上を占める（口縁数212で94.6%、残存率470で94.8%）。このことから、本遺跡の主体的土器は中期が1群（山草荷式）、後期が3群（東北系）となる。器種別では壺が最も多い。中期で85%程（口縁数32/37で86.5%、残存率92/108で85.2%）、後期では90%前後（口縁数208/224で92.9%、残存率438/496で88.3%）である。

第2表 時期・系統・器種別の口縁部残存率

時期	系統	臺	壺	蓋	合計
中	山草荷(1群)	85	16	0	101
周	北陸系(2群)	7	0	0	7
中	中壇合計	92	16	0	108
東	東北系(3群)	421	38	11	470
後	北陸系(4群)	5	9	0	14
別	八幡山式(5類)	5	0	0	5
別	綱織文(6類)	7	0	0	7
後	後壇合計	438	47	11	495
時期・系統不明	9	2	0	11	
遺跡統計	539	63	11	615	

第4表 トレンチ・時期別出土状況  
(口縁部残存率)

ト レ ン チ No	中期			後期			不明・ 系統 不明	合 計		
	山草 荷式	北 陸 系		東 北 系	八 幡 山					
		壺	蓋		壺	蓋				
A 3	2							2		
A 13		1						1		
C 41	3							3		
B 18	35	46	7		3	2	2	95		
B 19		4						4		
B 20	2	31	9		1			43		
B 22		3	2		1			6		
B 24	4							4		
B 25		17	4					21		
B 26					2	2		4		
B 27	2	8						10		
B 29	2	15			4	2		23		
B 30		45	7					52		
B 31		29						29		
B 32	3	2	7		1	1		14		
B 33		1						1		
B 36		35						35		
B 43	4							4		
B 45	4	16						20		
B 47	5	3	3	18	1	2	1	33		
B 50		5						5		
B 53		3						3		
B 61	16	3	102	3	11	1	3	141		
B 62		2						2		
B 64		2	6					8		
B 67	1		2					3		
B 68	3		10	6				19		
B 69	3	6	15	6				30		
合計	85	16	7	421	38	11	7	615		

第5表 トレンチ・時期別出土状況  
(口縁部破片数)

ト レ ン チ No	中期			後期			不明・ 系統 不明	合 計		
	山草 荷式	北 陸 系		東 北 系	八 幡 山					
		壺	蓋		壺	蓋				
A 3	1							1		
A 13					1			1		
C 41	1							1		
B 18	8			20	2		1	21		
B 19				2				2		
B 20	1			17	2		1	21		
B 22		2	1			1		4		
B 24	1							1		
B 25				8	2			10		
B 26							1	1		
B 27	1			4				5		
B 29	1			7			2	11		
B 30				16	1			17		
B 31				14				14		
B 32	2	1	5		1	1		10		
B 33				1				1		
B 36				11				11		
B 43	1							1		
B 46	1			6				7		
B 47	2	1	12	1		1	1	19		
B 50				2				2		
B 53				1				1		
B 61	6	1	49	1	1	1	1	62		
B 62			2					2		
B 64		1	5					6		
B 67	1			2				3		
B 68	2			5	1			8		
B 69	2	1	8	1				12		
合計	29	5	3	200	11	1	4	269		

## (2) トレンチ別の出土傾向

第4・5表で、時期・系統不明を含む口縁数269・残存率615で傾向をみる。これまでの記述とおり、B地点が圧倒的に多く（口縁数266で98.9%、残存率612で99.5%）、A・C地点は少ない。トレンチ別では南側斜面の61Tが最も多い。このほかに斜面では30T・36T・47Tが多く、口縁数に比して残存率の数値が大きい個体が出土している。平坦面では18T・20Tなど調査区の東側で多い傾向にある。

中期の出土数が多いのは18T・61Tである。18Tでは口縁数34・残存率95のうち中、30%前後（口縁数8で23.5%、残存率35で36.8%）、61Tでは口縁数62・残存率141のうち、10%強（口縁数7で11.3%、残存率19で13.5%）である。

## E 各 説

### (1) A 地点 (1~11)

3T (1~4) : SK 1から2点、P 6から1点、埋甕から1点が出土したにとどまる。SK 1は覆土中からの出土である。共に後期東北系（3群）甕で、胴部片の2にはヘラ描きの連弧文が残る。P 6出土の底部片3は外面の文様を欠くが、底部輪台法で製作されていないことから東北系と考える。埋甕の4は小型で、口縁部を欠くが胴部上位以下が残存する。II・III文様帯の区画は1条の沈線のみで、II文様帯には流水文系の文様が施され、磨消される。III文様帯は条が縱走するR L縄文が施されている。

9T (5) : 5は3群の甕胴部片である。II・III文様帯の区画は1条の沈線のみで、II文様帯には柳描きによる鋸齒文が、III文様帯は条が縱走するR L縄文が施されている。

13T (6・7) : 6は3群の甕、7は北陸系（4群）と考える甕である。6は口縁部が肥厚せず、内湾して立ち上がる2類である。口縁部は長く、縦文施文された水平な端面を有する。7は口縁部から胴部の破片

で、胴部内面にはハケが施されている。

50T (8) : 3群の壺で、口縁部形態は3類である。丸い口縁端部には間隔の開いた刻みが施されている。6と同様に区画文ではなく、条が縱走するR L繩文が施されている。

52T (9) : 中期山草荷式(1類)壺の頸部片である。残存率が低いため明確ではないが、文様は鋸歯文と思われる。鋭利な工具で施文されており、器面深くにまで達している。

53T (10・11) : 同一小グリットから後期北陸系(4群)と考える壺(10)と、3群の壺(11)が出土した。10は長頸壺の口縁部片で、上端で大きく屈曲して幅広で垂直な端面にいたる。外部端面には1列の円形刺突が、口縁部上位には2条の円形刺突が残る。同様の施文は口縁上端部内面にも認められ、円形刺突に加え、ハケ工具による刺突文が施されている。系統は北陸以西の可能性がある。11は比較的大型の破片で、口縁部・胴部・胸部の境界が内面では比較的明瞭である。口縁部形態はII 1類で、II文様帶は無文、I・III文様帶にはR L繩文が施されている。

## (2) B地点 (12~271)

18T (12~34) : SK 2 (12)、SK 1 (13・14)、P 1 (15)、II層 (16~34) から出土している。12は1群の壺である。口縁部は端面に繩文が施文されるにとどまる。頸部には重菱形文を上下3条の沈線が区画するA類である。内面の施文も認められ(a類)、口縁部には上下で対向する弧線が巡る。SK 1出土の13は器形が東北系で、全面にハケ調整された折衷タイプ(5群)である。口縁部はく字に外傾し、口縁部外面及び内面には横ハケが、胴部外面には縦ハケが施されている。14は北陸系(4群)の高杯ないしは器台脚部片である。棒状脚で、脚部の上下には3条の沈線が巡る。P 1出土の15は3群の壺口縁部片と思われる。器面は内外面共に磨耗が進み、文様・調整は判別できない。

II層では1群の壺(16~19)、壺(20)、3群の壺(21~27・29)・壺(34)、4群の壺(31・33)、5群の壺(28)、時期不明の底部(30・32)がある。1群の壺はすべて口縁部片である。口縁部界は沈線で区画され、I文様帶にL R繩文が施されている。口縁端面の繩文施文は17にのみ認められる。内面の文様は沈線区画されたもの(16・19)と区画を欠くもの(17・18)に分かれる。文様は18がR L繩文、19は上向きの弧線文である。ハケ調整されたものも多い(17・19)。壺(20)は胴部片で、2本同時施文の渦巻き文が施されている。

3群の壺はすべて口縁部片で、2類(21・23~25)、3類(22・29)、4類(26・27)がある。文様は粗製のE類は1点のみである(29)。I文様帶は下向きの弧線(21)、複数の平行沈線(23・24)、2条1単位の上向きの連弧文(25)に分かれる。端面の装飾は乏しく、純文施文(23)と沈線(25)に分かれる。口縁部は緩やかな波状を呈するものもある(24)。区画文が残るものは少なく、24では下方向からの刺突が認められる。I文様帶が狭いこともあり、26は1条の上向きの弧線文、27は繩文押圧に限られる。時期不明の壺底部片(30)は外面にハケが、底部外面には木葉痕が残る。地文はR L繩文に限られる。

壺には北陸系の長頸壺(31・33)と東北系(34)のほか、壺又は鉢の底部片(32)がある。このうち33は頸部との境界にあたる胴部上位に3条の沈線が巡る。剥落が激しいため明確にできないが、沈線下の胴部には繩文が施文されている可能性がある。34の壺は胴部上位の破片で、R L繩文施文後に下向きの連弧文が巡る。外面には赤彩が施されている。

33T (35・36) : 3群の壺(35)、2群の壺(36)がある。35は内湾して立ち上がる口縁部片で、I文様帶には上向きの連弧文が施されている。36は胴部片で、外面には縦ハケが残る。

19T (37~39) : 1群の壺胴部片(37)、3群の壺口縁部片(38・39)がある。37は胴部上位破片で、上下3

条の沈線で区画されて文様帶に鋸歯文が施されている。38は口縁部が肥厚して短い4類である。I文様帶はR L繩文が施文されるのみである。39の口縁部形態は2類で、頸部との境界には1条の沈線が巡り、I文様帶内には上向きの弧線が施されるのみである。

20T (40~63) : P1 (40・41)、縦堀2 (42~47)、II層 (48~63) から出土している。P1の40・41は3群の広口壺で、同一個体の可能性がある。I・III文様帶にR L繩文が施文される。縦堀は3群に限られ、壺(42~44・46)と広口壺(45)がある。42は口径約30cmで、頸部が直立し、長い口縁部が内湾して立ち上がり、肥厚しないII 2類である。幅広い口縁部は上位に上向きの連弧文が、下位には鋸歯文が巡り、条が縦走するR L繩文が施されている。頸部との境界には交互刺突文がめぐり、直下には重菱形文が巡る(B類)。口縁部片の43はR L繩文、44は無文である。底部片の46は下位までR L繩文が施されている。45の広口壺は口縁部が若干肥厚するが、幅は狭い。II文様帶は無文で、I・III文様帶に繩文施文のみされる点も40と共通する。47は口頸部がIII 5類で、口縁部には縦長の刻みを伴う瘤が貼り付けられ、瘤の間を2条の上向きの弧線が巡る。区画文を欠くが、頸部には崩れた重菱形文が巡る(B類)。

II層出土には3群の甕(48~60・62)と壺(61)、4群の壺(63)がある。3群の壺口縁部片は、肥厚しないものが多く、肥厚するのは短い4類の1点(53)のみである。前者は内湾して長い2類(51・52・55)、外傾・外反して長い3類(48~50・54)に分かれる。I文様帶の地文はR L繩文に限られ、上向きの連弧文が加わるもののが1点のみ認められる(50)。区画文を欠くものが多いが、沈線のみ(50)のほか、円形刺突が施されたものがある(52・53)。胴部文様を観察できるものでは、波状文(58)、鋸歯文？(59)、連弧文？(60)がある。区画文は59で交互刺突、58の円形刺突も区画文の可能性がある。東北系の壺は無文である。北陸系の壺は長頸壺で、上端で大きく外反して、端部上端が大きくつまみ上げられている。

66T (64・65) : いずれも3群の甕である。地文は条が縦走するR L繩文である。文様は、64は区画沈線下に対向する連弧文が、65は上向きの連弧文が施されている。

65T (66) : 3群の壺胴部片である。条が縦走するR L繩文施文後に、下向きの弧線が施されている。

21T (67~69) : 縦堀1 (67・68)とII層(69)から出土している。いずれも胴部細片のため、時期・系統明確にし難いが、3群の甕と考える。67は沈線で区画されているが、上位の文様は不明である。下位は鋸歯文と考える。68は細片のため更に明確でないが、鋸歯文と思われる沈線が残る。69は対向する横円形文内に平行沈線が加わるものである可能性が高い。

68T (70~73) : 3群の甕(70・72)と壺(73)、5群の壺(71)がある。3群の甕口縁部は、肥厚が認められない。口縁部文様帶にはR L繩文のほか、上向きの弧線が加わる(70・72)。区画文は72にのみ認められ、沈線に下方向から刺突が加わる。壺は口径7.4cmの小型品で、口縁部・胴部には条が縦走するR L繩文が施されたのみである。5群の甕(71)は口縁上端部がわずかに肥厚する。

22T (74~79) : P12 (74)、P24 (75)、P77 (76)、II層 (77~79) から出土している。P12出土の74は胴部片で、条が縦走するR L繩文のみ残る。P24の75も胴部付近の小破片で、重菱形文が残る。II層出土は3群(77~79)と5群(78)がある。77の口縁部は短く、肥厚する4類である。文様は繩文のみで、口縁部は条が縦走するR L繩文、口縁部下には繩文押圧が加わる。78はハケのみが残存するもので、内面は横ハケ、外面は縦ハケである。胴部片の79には頭部との境界付近に繩文押圧が加わる。

62T (80~84) : 1群の壺(80)と、3群の甕(81~84)がある。80は2本1組による渦巻き文が施されている。81~83は、口縁部の肥厚が顕著ではない。81の口縁突起部には縦方向の刻みが残る。82は繩文施文のみであるが、83は沈線区画された口縁部上位には弧線状の沈線が、下位には側縁の一方から施された円

形刺突文が残る。底部片の84を含め、地文は条が縦走するRL繩文である。

63T (85) : 3群の甕胴部片である。胴部上位は沈線で区画され、その下位には横ハケが残る。調整から折衷式の5群とすべきものかもしれないが、沈線が残ることから本群とした。

64T (86~89) : 2群の壺 (86)、3群の甕 (87・88)・壺 (89) がある。86は口縁上端が大きく屈曲して外傾しており、端部には鋸歯状の刺突が施されている。口縁部内面は横ハケ、外面には縦ハケが施されている。頸部付近の破片87は円形刺突が残るもの、口縁部片の88はRL繩文のみが、壺胴部の89は胴部上位に横走するRL繩文が残るのみである。

36T (90~101) : II層 (90・91) と漆1 (92~101) から出土している。2群の壺 (90) と、3群の甕 (91~101) がある。90は胴部上位の破片で、2条の沈線下には短沈線がハの字状に施されている。

3群のうち、91は頸部・胴部界に交互刺突文が施されている。口縁部を欠くが、胴部には2条の沈線による下向きの連弧文が、上位には同じく2条の沈線による流水文が施されている。口縁部が残存するものでは、2類 (92・99)、3類 (93・96)、4類 (94・100)、5類 (101) に分かれる。口縁部の文様は無文 (92・101)、繩文施文のみ (93・94)、繩文+沈線 (99)、中位の沈線を挟んで対向する連弧文が施されたもの (96) に分かれる。これらのうち101は残存率が高く、口径27.0cm、器高35.5cm、底径10.0cmである。頸部はⅢ類、文様からE類に属する。胴部片 (95・97・98) は、無文 (95)、U字状文 (97)、沈線区画された上位が梢円形文、下位が下向きの連弧文 (98) に分かれる。

25T (102~118) : 漆2 (102~104)、II層 (105~118) から出土している。3群の甕 (102・103・106~110・112~114)・壺 (115・116・118) を主体に、2群の甕底部 (104)、1群の甕 (105)、5群の甕 (111)、6群の甕 (117) がある。2群の104は厚い底面を有し、外面には縦ハケが施されている。1群である105の頸部には沈線区画内に上下で対向する鋸歯文が施されている。

3群の甕口縁部には、2類 (106~114)、3類 (108~110)、4類 (107・112) がある。文様は繩文施文のみ (107~110・112~114) が多く、同一個体で繩文とハケが確認できるものもある (109)。I文様帯に沈線が伴うのは1点のみ (106) である。地文は胴部片を含めてRL繩文が多いが、LR繩文 (109) も認められる。口縁端面への繩文施文も多い (106・107・114)。壺のうち口縁部片の115は、口縁部がわずかに肥厚する。内外面で施文は認められない。このほか、続繩文式土器の可能性がある6群の117は胴部片で、残存部には鋸歯状の沈線が施され、繩文が磨消されている。

61T (119~172) : 縱堀2 (119~131)、漆2 (132~135)、II層 (136~160)、III層 (161~172) から出土している。幅広い時期の遺物を含むが、縱堀2・漆2・II層は3群が圧倒的に多く、III層では1群 (161~162・165)・2群 (163) が目立つ。

2群の163は、2本1組の沈線区画内に鋸歯文が施された壺の頸部片である。1群では口縁部が繩文施文された点で共通するが、頸部文様は鋸歯文 (161) と重菱形文? (162・165) がある。内面の施文は口縁部上端に集中し、鋸歯文 (161) と沈線のみ (162) に分かれる。いずれも内外面にハケ調整が残る。

3群の甕では、交互刺突文が認められるものが5点あり、口縁部は2類 (124)、3類 (139)、4類 (141)、5類 (119)、口縁部不明 (158) に分かれる。交互刺突文の施文部位は、頸胴部界 (119・158)、口頸部界 (124・139・141) がある。このうち残存率が高い119はI・II・IIIの文様構成を取り、I文様帯はわずかに突出し、縦刻みの施された突起間を2条1組で施された上向きの連弧文が、下位には下向きで小刻みな連弧文が施されている。II文様帯にはやや崩れた重菱形文が、胴部には下向きの小刻みな連弧文が巡る。頸部文様からB類、頸部形態はⅢ類に属する。このほかのものは、I文様帯は沈線のみ (124・139) が多い。交互刺

突文が確認できないものの口縁部形態は、肥厚せず、短く、内湾する1類(126・137・147・148・167)、肥厚せず、長く、内湾する2類(120・121・123・140・143・144・149~152)、肥厚せず、長く、外傾・外反する3類(125・134・138・153・154・166)、肥厚して、短い4類(122・145・146)、肥厚して長い5類(142)がそろう。口縁部下端の刺突はいくつかの個体で認められ、細長い刺突(121)、円形刺突(122・140)がある。I文様帶は縄文施文のみのものが多いが(134など)、上向きの弧線文(142)、上向き弧線・連弧文+鋸歯文(120・144)、沈線のみ(138・143・145・148)、沈線+縦位沈線(136・140)、沈線+弧線・連弧文(147)、上下で対向する連弧文(167)など多様である。このうち残存率が高い167は口縁部と胴部界、胴部中位に異なる種類の刺突が施され(頭胴部界は台形刺突列)、I文様帶と同様に上下で対向する連弧文が施されている。口縁部形態I類、文様はA類に属する。このほかは口縁上端部及び・端面の装飾は多く、縄文施文(120・121・142・145・146・148・149)のほか、刺突がある(139)。胴部文様は流水文?(129)、下向きの連弧文+円形刺突(130)、2本1組とした縦位沈線(169)、地文はRL縄文が多いが(120・121・123など)、装飾効果を持つと考えるハケ(147)もある。内面にハケ調整が残存するものは、145・147がある。

壺は3群(128・155・159)と4群(171)がある。前者はすべて胴部片である。条が縱走するRL縄文に、鋸歯文(155)、対向する連弧文(159)、連弧文(128)が観察できる。このうち159は外面に赤彩が施され、胎土も精錬されている。4群の171は直口短頸で、端部は先細りとなる。口縁部には粗いナデが施されている。蓋は1点のみ確認できる(172)。頂部を欠くが、残存率は高く、口径10.6cmである。口縁部にはLR縄文が施され、端部内外面には炭化物が厚く付着する。

31T(173~184)：濠3(173・174)と、II層(175~185)から出土している。3群に限定され、甕(174~184)を主体に、壺(185)と高杯の可能性があるもの(173)がある。甕は、交互刺突文が施されたもの(176)と、交互刺突文を確認できないもの(175・177~182・184)に分かれる。前者の176は、わずかに張り出した縦刻みのある頂部を起点に、上向きの連弧文が巡る。交互刺突文を確認できないものは、口縁部形態2類(180・184)、3類(175・179・181)、4類(182)、5類(178)がある。縄文施文されたのみのものが多く、縦刻みを持つ波頂部を起点に上向きの弧線が施されたものが1点確認されるに過ぎない(178)。波頂部が認められるもの(181・184)、端面に縄文施文されたものが目立つ(175・180・184)。

壺は胴部上位に1条の沈線が施されており、外面には赤彩が残る。高杯の可能性がある173は、縦刻みの貼瘤を起点に横位沈線による文様が施文されているが、その構成は明瞭でない。

32T(186~196)：2群の甕(186)・壺(193)、1群の壺(187~189)、3群の甕(190・192・195)、4群の甕(194・196)、5群の甕(191)がある。2群の甕口縁部片(186)と壺胴部片(193)は、共に細かなハケ調整が施される。186の口縁端部には刺突が巡る。1群の甕口縁部片の187は、残存率が低いため外面文様は明確でないが、重菱形文の可能性がある。頭部片の188には複数段にわたり鋸歯文が施されている。3群の甕は、いずれも口縁部下端がわずかに肥厚するもので、短い4類(195)と、長い5類(190)に分かれる。口縁部の文様はRL縄文(190)、LR縄文(195)で、190の口縁部下端には円形刺突が巡る。底部片(194)は器形が後期北陸系で、縄文施文された折衷土器である。後期北陸系土器と同様に、底部輪台技法で製作されており、底部外面中央がドーナツ形に凹む。胴部下位内外面にはハケとLR縄文が施されている。196是有段口縁無文甕である。有段部は短い。5群の甕である191の口縁部形態は2類で、内外面には粗いハケが残る。

47T(197~219)：II層(197~212)と、III層(213~219)から出土している。II・III層共に中期の土器を多く含む。1群の甕(197・199、213~216)・壺(198・201~203)、2群の甕(200)、後期は3群の甕(204~210・

217~219)、時期・系統不明の底部片(211・212)がある。このうち207は形態から、鉢の可能性を残す。1群の甕は、口縁部及び内面にハケを残すものが多い(213・215・216)。頸部文様は重菱形文(197・215)である。また、内面への施文も多く、口縁部上端に連弧文が施されたものがある(197・213)。甕のうち口縁部片は、平行沈線により施文され、198の内外面には4条の平行沈線が残る。胴部片は2本一組による渦巻文が施されたもの(202)と、平行沈線の上下に波状文が残るもの(203)に分かれる。2群の甕口縁部(200)は内外面とも端部には刺突文が残る。

3群の甕は、口縁部下端がわずかに肥厚して、短い4類(205)と、肥厚せず、長く、内湾する2類(206・208)と、肥厚せず、長く、外反する3類(204・217~219)がある。口縁部文様帶には連弧文と思われる沈線が残るもの(206・208)は少なく、縄文施文のみ(204・205・217・218)、無文(219)など装飾性に乏しいものが多い。胴部片は平行沈線系の文様が確認できるが、崩れた流水文?(209)、上向き連弧文が残るものがある(210)。

系統不明な底部片の底径は211が4.0cm、212が3.4cmと小型なこと、スス・コゲが付着していないことから、供獻具の底部片と考える。

**29T(220~230)**：濠4(220~223)とII層(224~230)から出土している。中期は2群の甕(220)、1群の甕(224)、後期は甕に限られ、3群(221・225~228)・4群(229・230)・5群(222)に分かれる。2群の220は底部から外反して立ち上がる。胴部外面には縦ハケが残る。1群の224は口縁部と胴部の境界に2条の平行沈線が施され、内外面ともにハケが残る。3群の甕口縁部は、4類(225)と、2類(228)、3類(226・227)に分かれる。装飾性に乏しく、縄文施文されたのみのものが多い。228は残存率が高く、口径19.0cm、胴部最大径19.0cmである。胴部との境界付近は無文であるが、基本的にI・II文様帶の構成となる。胴部片の223は2条の平行沈線で区画され胴部には上向きの連弧文が、上位には2条の沈線で、入組文が施されている。

4群の甕は、いずれも口縁部がく字甕である。口縁部と胴部の境界が不明瞭で、大きく外反して上方に摘み上げられた端部を持つもの(229)と、口縁部と胴部の境界が明瞭で、肥厚する口縁部が外傾して幅広い端面を有するもの(230)に分かれる。5群(222)は口縁部形態3類で、口縁部内外面が横ハケ、胴部外面が縦ハケである。

**30T(231~243)**：濠4(231~235)、濠5(236~241)、II層(242・243)から出土している。このうち濠5は残存率が高い土器(236~238)が重なり合って出土している(図版19・38)。時期はいずれも後期で、統縄文式(6群)土器の可能性があるもの(236)や5群(231・239)を除き3群である。3群のうち残存する口縁部は、2類(238)、3類(237・243)、4類(242)、5類(240)に分かれる。口縁部文様は縄文施文のみのもの(233・234・237・238・242・243)が多く、上向きの弧線文が施されたものは1点のみ(240)である。このうち、237・238は残存率が高い。238は口径約22.0cm、胴部最大径約19.2cm、237は口径約30.0cm、胴部最大径約24.8cmである。頸部が作出された238は無文、く字口縁で頸部が不鮮明な237は、口縁部と胴部の境界付近が無文である。238は条が縦走するR L縄文が、237はR L縄文が施されたのみである。241の胴部は沈線下に上向きの弧線文が、243は上下が平行沈線で区画され、梢円形文が施されている。5群は口縁部形態が4類(231)と3類(239)に分かれる。いずれも口縁部内外面には横ハケが残る。

6群の可能性がある236は摩耗が著しい。観察可能は部分では口縁部端面に連続刺突が施され、上端部には微隆起線文と横走する帶縄文(R L縄文)が残る。胴部上位も横走する帶縄文と上向きの弧線内に円形の刺突が施されている。

27T (244~251) : 1群の壺 (244)、3群の甕 (245~250)・壺 (251) がある。1群の壺口縁部片は、短い口縁部が外傾して立ち上がり、口縁部外面には4条の平行沈線が巡る。3群の甕口縁部はいずれも口縁部が肥厚しない。口縁部が短いもの (245) と長いもの (246) に分かれ、後者は内湾して立ち上がる2類である。いずれも口縁部は縄文施文されたのみである。胴部片 (248・250) と底部片 (249) は縄文施文されているが、250はU字状の文様が加わる。3群の壺は直立する無文の頸部と、LR縄文が施文された口縁部とからなる。

69T (252~262) : I層 (252~254) と、II・III層 (255~262) から出土している。1群の壺 (255~257)、3群の甕 (252~254、258~260)・壺 (261)、4群の高杯 (262) がある。255は口径約18.0cmである。内湾して立ち上がる口縁部の外面には、上下沈線で区画された文様帶内に対向する連弧文が施されている。内面も同様に上端は沈線が施され、直下に連弧文が施される。頸部片の256は胴部から屈曲して立ち上がる。頸胴部界には沈線が施され、上位の文様は明瞭でないが、下位には上向きの連弧文が施される。胴部片の257は2本1単位の渦巻文が残る。

3群の甕は、口縁部が肥厚せず、内湾して長い2類 (260)、外反する3類 (259)、肥厚して長い4類 (258) に分かれる。口縁部文様は、258は条が縱走するRL縄文に上部に1条の沈線が加わるが、その他は無文である。胴部片の261は、外面に赤彩が残ることから壺とした。外面には条が縱走するRL縄文が施されている。後期北陸系の高杯は脚部片である。棒状脚を呈し、口縁部との接合は充填法である。内外面の磨耗が進み、調整は明瞭でない。

46T (263~270) : 1群の甕 (263)、3群の甕 (264~268)・壺 (269)、4群の甕底部 (270) がある。1群の甕頸部片 (263) は、胴部との境界付近が2条の沈線で区画され、上位に鋸歯状の文様が施文される。3群の甕は、交互刺突文が施されたもの (265) と、交互刺突文が確認できないもの (264・266・267) に分かれる。265は口縁部形態2類で、胴部との境界の上下沈線内に交互刺突文が、口縁部には条が縱走するRL縄文が施されている。口縁部文様は簡素で、条が縱走するRL縄文が施される以外、2条の沈線が巡るもののが確認されるにすぎない (266)。頸部文様が確認できる264は、上下を1条の沈線で区画され、連続する長楕円内に横位沈線が1条施されている。頸部形態は数少ないII類である。底部片の270は、底部輪台法で製作されていることから後期北陸系とした。底径6.0cmである。

43T (271) : 1群の甕である。口縁部は外反して立ち上がり、頸部との境界は不明瞭である。口縁部は無文、頸部には2本1単位とする鋸歯文が上下2段に巡る。口縁部内面上端には2本1単位とする上向きの連弧文が巡る。胴部はLR縄文で、底部との境界には横位のハケが、底面には平行葉脈が残る。

### (3) C地点 (272・273)

41T (272) : 1群の壺である。口縁部は無文で、頸部には横位沈線により文様が施されており、重菱形と思われるが、残存率が低いことから文様構成は明確でない。

42T (273) : 底部片が1点あるが、時期・系統は明確でない。底部が厚く、底部輪台法で製作されていないことから、後期北陸系ではないと考える。

### (4) 平成20年度調査A地点 (425)

74T (425) : 1群の甕が1点出土している。頸部付近の破片で、口縁部には横位沈線を主体に1条の縦位沈線が残る。

### 3 土製品 (図面図版28-274~279、写真図版64)

被熱又は、被熱したと思われる塊状の粘土を焼成粘土塊とした。6点出土しており、全点を図化した。不定形で、表面に調整の痕跡が明瞭でないものに限られる。田中耕作氏 [田中1991]・八木勝枝氏 [八木2002] の分類ではC類に相当するものと考える。

出土地点は比較的限定され、25Tで3点(274~276)、22T(277)、36T(278)、20T(279)と、B地点でも南半部に集中する傾向にある。6点中4点が遺構から出土しており、25T漆2(275・276)、36T漆1(278)、20T縦堀2(279)で検出した。

長さ・幅共に5cm未満、重量も7.5~20.0g程度と小型のものが多い。石英などの混和材と思われる鉱物が確認できるもの(274・278)と、含まないもの(275~277・279)がある。また、器面は凹凸が激しいものが多いが、278は裏面が若干滑らかであり、279の裏面の一部には纖維状の圧痕が認められる。

### 4 石器・石製品 (図面図版29~32・34~280~352・426、写真図版64~66)

本遺跡から出土した石器・石製品は518点で、その内訳は剥片・剥片石器が488点、礫石器が28点、玉類2点である。伴出する土器から弥生時代中期後葉~後期後葉に伴うものと推定する。出土している土器の量から、多くは後期に伴う可能性が高い。

弥生時代の単独遺跡が少ないとから、本遺跡の石器群は弥生時代中期後葉~後期の石器様相を知るものとして貴重である。このような遺跡の特性を少しでも活かせるよう、整理作業を行った。

#### A 資料の提示方法

各器種における個々の資料の提示は、その器種の典型例を抽出し、実測図・写真・観察表・記述を基本に、それぞれ器種ごとに提示した。さらに、器種ごとの分析には表・グラフ・挿図を作成し、事実報告を中心記述した。

##### (1) 実測図の表示方法

個々の石器の諸特徴を図化したもので、各器種の出土数・掲載数・図化率は第6表のとおりである。出土点数は完形品・略完形・破損品・破片を問わず1個を1点とした。実測図は展開図法により作成し、展開面数を器種ごとに統一した。ただし、個々の石器で重要な面を加えたり、省いたりもしている。

**縮尺率** 器種毎に統一した。各器種の縮尺率は第6表の通りである。図面ごとにスケールを示した。

**正(表)面と裏面** 剥片石器と剥片のうち、主要剥離面(腹面)が認められる場合は、それを裏面にした。

第6表 石器の器種別出土数と図化・縮尺率

器種名	出土点数	掲載点数	図化率(%)	縮尺
石錐	29	16	55.1	2/3
石錐	5	4	80.0	1/2
両極剥離痕のある石器	3	1	33.0	1/2
不定形石器	172	22	12.8	1/2
その他	1	1	100.0	1/2
石核	3	1	33.3	1/2
剥片類	275	0	0.0	—
剥片・剥片石器合計	488	45	9.3	
磨石類	15	12	80.0	1/3
砥石	5	4	80.0	1/3
石錐	1	1	100.0	1/3
環状石斧	1	1	100.0	1/3
小型特殊(敲打痕)	1	1	100.0	1/3
小型特殊(磨痕・擦痕)	3	3	100.0	1/3
小型特殊(抉入り)	1	1	100.0	1/3
小型特殊(剥離痕)	1	1	100.0	1/3
礫石器類合計	28	24	85.7	
管玉	2	2	100.0	2/3
総計	518	71	—	
自然礫	—	2	—	1/3

**上下の基準** 器種毎にそれぞれ異なる。南魚沼市(旧塙沢町)五丁歩遺跡の報告書[高橋雄1992]等を参考に定めた。

**実際の表現** 線描や点描のほか記号・文字・スクリーントーンを使用した。スクリーントーンの表現は、第7図のようになる。

## (2) 観察表の記載

石器の諸特徴などを記入し、報告No順に掲載した。実測図を示していない石器の観察は報告書に掲載していないが、データは県教育委員会に保管してある。観察表の主な項目は下記のとおりである。

**報告No.** 実測図番号・観察表報告No.・写真図版の遺物番号は一致する。

**出土地点** 出土したトレーナーとグリットを記入した。

**遺構・層位** 基本的に遺構に伴う遺物は遺構名・層位順に、遺構外出土の遺物は層位を記入した。微細図を作成したものとドット処理したものは、取り上げ番号を括弧付けて記入した。

**分類** 器種ごとの分類記号を記入した。器種分類は、朝日村元屋敷遺跡[滝沢・高橋雄ほか2002]、南魚沼市(旧塙沢町)五丁歩遺跡[高橋雄1992]、新潟市(旧新津市)八幡山遺跡[立木2001a]を参考に行つた。分類基準は器種ごとに異なり、「石器類の分類と分析」で示す。

**計測値** 長さ・厚さ・幅・重さを計測した。主な器種の計測基準は、第6・7図のとおりである。

**遺存(残存)状態** 定形石器や疊石器のように、完形品が一定の形を示すものについて、石鎌・石錐のように破損部位・遺存部位を記入した。遺存状態は五丁歩遺跡[高橋雄1992]を参考にし、以下のように区分した。完形品は完全な形で計測できるもの。略完形はわずかに欠損しているが、完形品の形が変わらず、計測値もほとんど変わらないもの。破損品は大きく欠損し、完形品の形を想定できるが、計測値は完形品と大きく異なるものとした。

**石材** 使用された石材を記載した。頁岩が圧倒的に多い。縄文時代以来、県北部の遺跡において使用石材の主体となる頁岩については、その特徴から細分案が提示されている[阿部1997b・酒井2002ほか]。ここでは、いわゆる「半透明の頁岩」[阿部1997a・秦2001など]を頁岩B類、珪質化が進んでいないものを頁岩C類、珪質化が進んだもののうち「半透明の頁岩」以外を頁岩A類として区分した。なお、頁岩以外の石材については、その一部をフォッサマグマミュージアムの竹之内耕氏から鑑定いただいた。

**備考** 観察項目以外の特記事項を記入した。

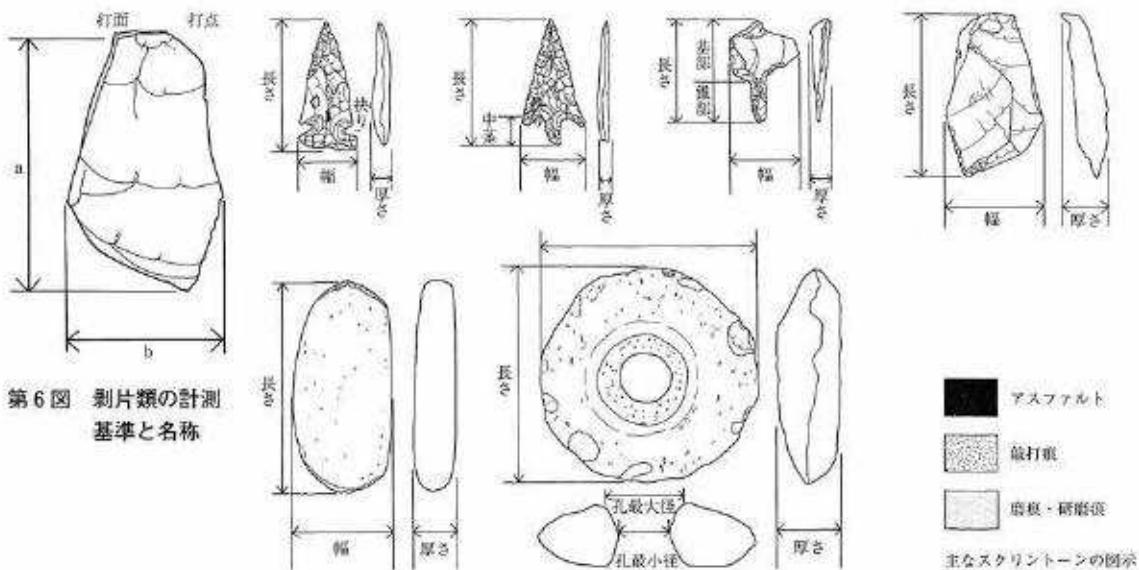
## B 石器の出土位置

遺跡全体の石器出土状況を示したのが第7表である。剥片・剥片石器は488点出土しているが、地点別ではA地点で8点(1.0%)、B地点で479点(98.8%)、C地点で1点(0.2%)であり、ほとんどがB地点からの出土である。同様に疊石器もB地点出土が圧倒的に多い。ただし、出土数量の少ない石錐がC地点、環状石斧がA地点で各1点出土している。

## C 石器の分類と分析

### (1) 石鎌(280~295)

扁平で先端を尖らせたものを石鎌とした。総数29点出土した。



第6図 剥片類の計測基準と名称

第7図 主な器種の部位名称と計測基準、主なスクリントーンの図示

第7表 種別出土地点

地 点 番 号	石器				石器		両 側 剥 離	不定形石器									その 他の 種 類	石 核	剥片 類	磨石類					砥 石	環 状 石 器	小型器種				管 玉	特 異 自 然	合 計			
	A	A1	A2	B1	B2	B3	B4	A	B	A	B	C	E	F	G	I	K	不 可	B	C	E	F	G	磨 打 石	研 磨 石	擦 り 石	刮 削 石									
A-1				1																										3						
A-3																														1						
A-5																														1						
A-11																														1						
A-52																														1						
A-74																														1						
A-81																														4						
B-18								1		1	3	1	3	1							30	1	2	2	2						47					
B-19				1						1	2										9										13					
B-20		4	3	1	1	3				3	5	2	5		1					1	39										50					
B-21										1											3										4					
B-22																					8		1								14					
B-24																					7										1					
B-25										1											1										11					
B-26											1										1										1					
B-27																					1										1					
B-28																					1										2					
B-29				2							1										11		1								16					
B-30												1		2							5										8					
B-31												1	1	1							4	1									10					
B-32				1							1	2	2							6		1		1						15						
B-33											1		1	1							4	1									9					
B-34		1										1									1										2					
B-35											2	2		2							9										16					
B-45										1	1									10										12						
B-47		1									1	1		1							13										20					
B-54											2	1	1	3							4			1							10					
B-61	1	1	1			1	2	1		3	10	2	3	12	1	1	10				47										26					
B-62								1		3	4	2	2	2	1	3				16										33						
B-64				2						1		2			2	1				15										21						
B-65			1							1	2		1							4										9						
B-66																				5										9						
B-67			1										4		4					4											13					
B-68								1		2	2	1	1	2	1	1	1			21	1		2							37						
B-69											1	1	5							4										11						
B-74										1		1	1							8										11						
C-60																																1				
C-68																																1				
C-65																				1											1					
合計	1	1	2	7	7	1	3	7	4	1	3	22	42	11	7	50	7	4	27	2	1	3	275	1	1	5	1	7	5	1	1	3	1	2	2	520

分類 八幡山遺跡の分類 [立木2001a] を参考にした。側縁部の剥離の仕方により大きく2分類し、さらに有茎錐の基部形態で細分した。

A類 基部に両側から剥離により抉りを成すもの(280~282)。いわゆるアメリカ式石器で、「三角形の両辺の底辺にちかいところを、両側から深く欠きとて、あたかも凸字形の柄をつけたような形につくる」

[水野・小林1959] ものである。総数4点出土した。280は基部下が欠損して、中茎をもつようにも観察できる。異形石器の可能性もある。

B類 有茎鐵。基部に中茎をもつもの (283~292)。

1類 凹基有茎鐵 (283) 基部に抉りをもち、凹状になるもの。

2類 平基有茎鐵 (284~288) 基部が平らになるもの。側縁部の下端が括れる284も本類に含めた。

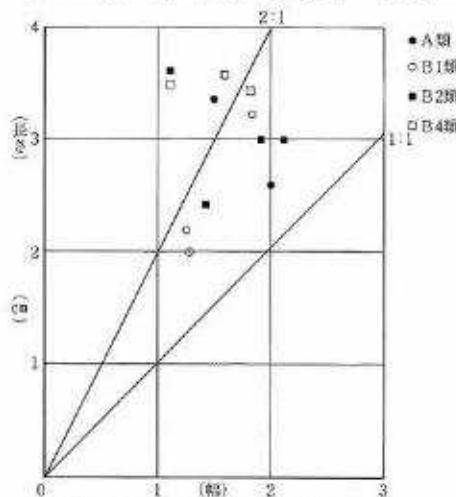
3類 凸基有茎鐵 (289) 基部が突出するもの。

4類 凸基有茎片袖 (290~292) 基部の片方のみが突出するもの。

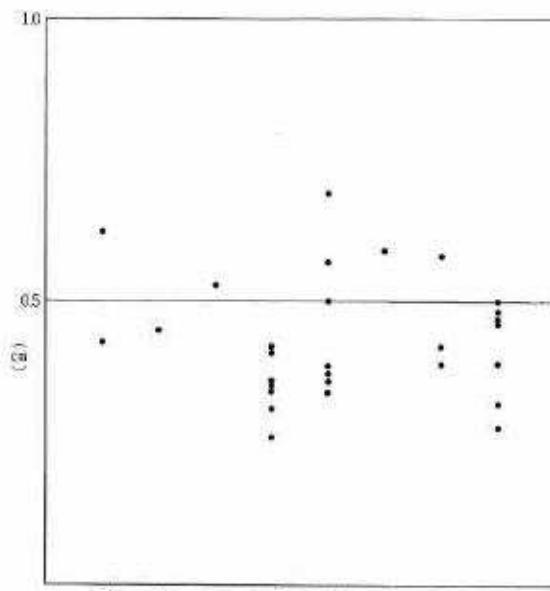
その他 (293~295) 破損品のため、A・B類のいずれか判断できないものを、その他とした。293・294は中茎のない無茎鐵の可能性もある。

**分類別出土数と出土分布状況** 出土分布状況は総数29点を対象にする。遺構内から6点、遺構外から23点出土している。遺構内出土の内訳はA地点の1TSK1からB2類が1点、B地点の20T縦堀2からB2類が2点、B4類が1点、その他が1点出土した。分類別出土数はA類が4点、B1類は7点、B2類は7点、B3類は1点、B4類は3点、その他は7点である。トレンチ別ではB地点の20Tから9点、61Tから6点が多い。

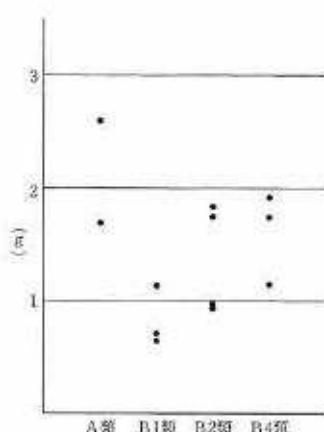
**長さと幅** 第8図参照。完形・略完形の計12点を対象とした。長さ1.9~3.7cm、幅1.1~2.2cmに分布し



第8図 石鐵の分類別長幅図



第9図 石鐵の分類別厚さ



第10図 石鐵の分類別重量

第8表 石鐵の分類別石材

	頁岩 A	頁岩 B	頁岩 C	泥岩 (中生 代)	流紋 岩	合計
A1類	1	1				2
A2類	1					1
A類	1					1
B1類	5	2				7
B2類	6	1				7
B3類				1		1
B4類		1	1		1	3
その他	5	1	1			7
合計	19	6	2	1	1	29

第9表 石鐵の分類別破損状況

分類	完形	破損	合計
A類	2	2	4
B1類	3	4	7
B2類	4	3	7
B3類		1	1
B4類	3		3
その他		7	7
合計	12	17	29

ており、A類は281が長さ3.4cm、幅1.5cmで細長いが、282は長さ2.6cm、幅2.0cmの幅広である。

B類は長さ1.7~3.7cm、幅1.8~1.6cmに分布する。細別ではB1類が長さ2.0~2.5cm、幅1.0~2.5cm、B2類が長さ約3.0cm、幅1.5~2.5cm、B4類は長さ約3.5cm、幅1~1.5cmに分布している。B1類は小型、B2類は幅広、B4類は幅に比して長い傾向にある。

**厚さ** 第9図参照。破損品も完形時の厚さと推定できるため、29点全点を対象とする。0.2~0.7cmに分布しており、0.3~0.6cmに集中する。B1類より、A・B2・B4類がやや厚い傾向にある。

**重さ** 第10図参照。完形・略完形の12点を対象とする。0.6~2.6gに分布する。分類別では、小型品の多いB1類が軽い傾向がある。

**石材** 第8表参照。頁岩A類が最も多く19点(65.5%)、頁岩B類は6点(31.6%)、頁岩C類が2点(10.5%)、泥岩(中生代)と流紋岩が各1点(5.3%)で、他器種と同様に頁岩A類が最も多いが、頁岩B類の比率が高い点で異なる。細別器種毎ではB4類は、頁岩A類を1点も含まないのが特徴である。

**遺存状態** 第9表参照。完形・略完形品が12点、破損品が17点である。破損品の内訳は、基部及び中茎が欠損したもの11点、尖頭部が欠損したもの3点、尖頭部と中茎の欠損したもの3点である。

**付着物** 281の1点でのみ黒色付着物を確認した。正面の基部付近に付着しており、石錐と矢柄の装着に係わるものと思われる。分析を行っていないため確定できないが、アスファルトの可能性が高いと考える。

### (2) 石錐(296~299)

意識的に尖頭部を形成している石器の中で石錐を除いたもの、および尖頭状の端部が磨耗している石器を石錐とした[酒井2002]。総数5点出土した。

**分類** 基部をもつものともたないものに分類した。

A類 基部をもたないもの。棒状ないし柳葉形になるもの(296~298)。

B類 基部をもつもの(299)。1点のみの出土で、二次加工は基部下端までにとどまる。

**出土分布状況** A類は20Tで2点、61Tで1点、B類は25Tに1点出土している。

**長さと幅** A類の幅は1cm程でまとまるが、長さは2.8~6.4cmに及び、縦長のもの(296)、幅広なもの(298)に分かれる。B類の299は、基部が明瞭なことからA類に比して幅広であるが、錐部の幅はA類とほぼ同様である。長さ3.7cm、幅2.5cmで、錐部は先端を欠損している。

**厚さ・重さ** 厚さはA・B類共に0.5~0.6cmに収まる。重さはA類の298が0.3gと軽いものの、それ以外は3~4g程度である。

**石材** 298が泥岩(中生代)である以外は、頁岩A類である。

**遺存状態** 296・298の2点が完形品であるが、298・299は錐部の先端を欠く。

### (3) 両極石器(300)

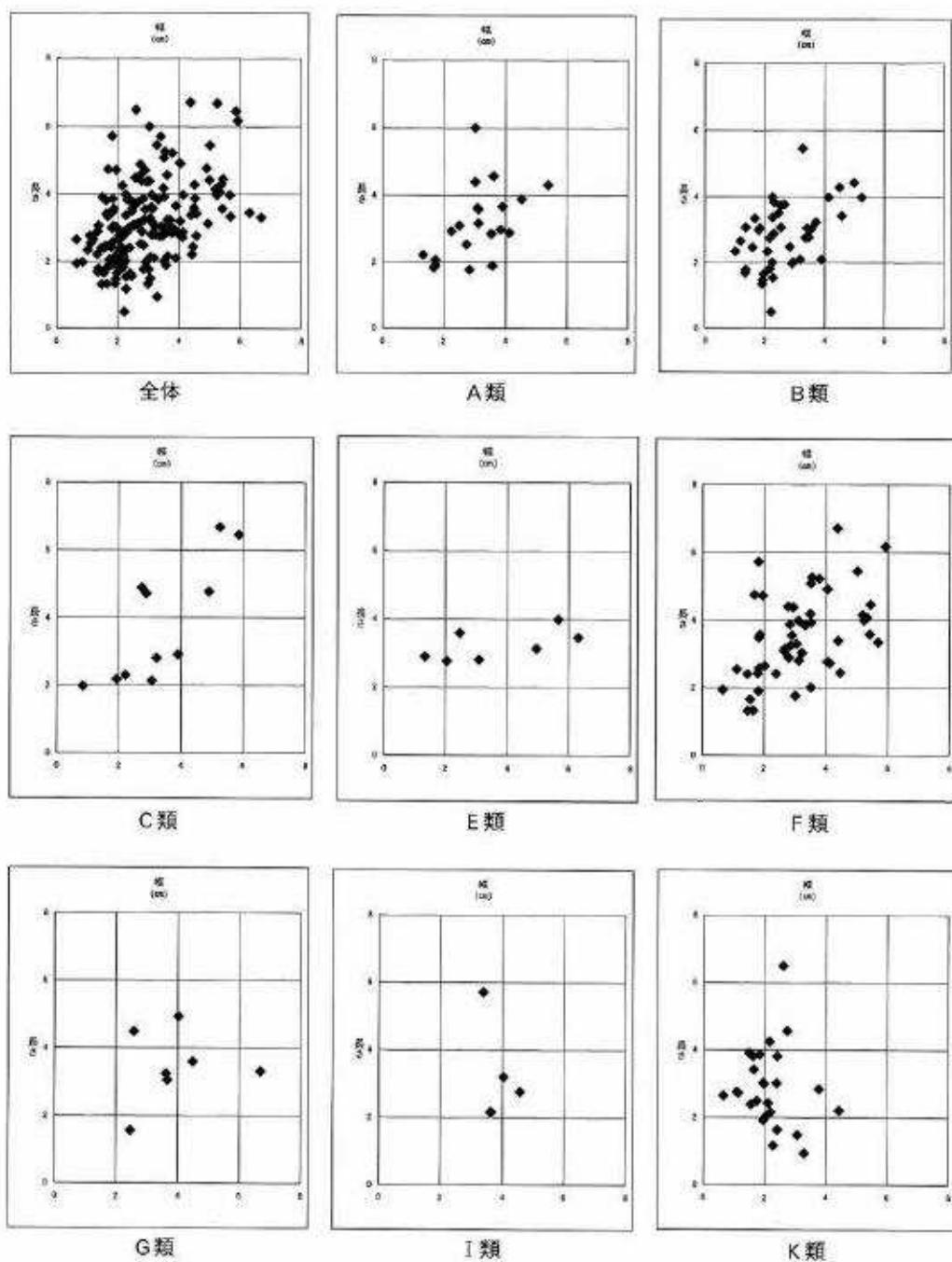
両極剥離痕のある石器で両極石器・楔形石器・ビエス・エスキューなどと呼称されるものである。総数3点出土した。いずれも2極1対の刃部に両極剥離痕をもつ。長さ1.9~2.4cm、幅1.8~2.5cmで四角形に近い形状を呈する。厚さは0.7~1.0cm、重量は3~5gに分布し、石材はすべて頁岩Bである。

### (4) 不定形石器(301~322)

「剥片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でない石器」を不定形石器とした[高橋雄1992]。総数172点で、全石器中で1/3を占める。

**分類** 五丁歩遺跡の分類[高橋雄1992]に従い、以下のようにした。なお、剥離の大きさはおよその目安として、3mm以上を中~大型、3mm未満を小型とした。

- A類 刃部の二次加工は中～大型で急角度・浅角度の剥離が連続的に施されたもの（301・303）。スクレイバー・削器と呼称されるものに相当する。
- B類 刃部の二次加工は小型で急角度・浅角度の剥離が連続的に施されたもの（302・304～306）。スクレイバー・削器と呼称されるものに相当する。
- C類 刃部の二次加工に鋸歯状剥離が施されたもの（307）。鋸歯縁石器・鋸歯状石器と呼称されるもの。
- D類 鋭利な先端部とそれに続く側縁に二次加工が施されたもの。本遺跡では確認出来なかった。
- E類 縁部の一辺にノッチ状の抉りをもつもの（308・309）。刃部を内灣させ、ノッチ・抉入石器と呼称されるものである。



第11図 不定形石器の分類別長幅図

F類 縁部の一辺に小～中型の剥離が不連続に施されたもの(310～315・317)。他の石器に比べ素材確保時の形状を変えていない。刃部ライン・素材・二次加工が多様である。

G類 刃部二次加工は、中～大型の剥離が不連続に浅角度で施されたもの(316・318)。刃部ラインは直線状や外埠状を呈し、大型で厚手の素材を使用するものが多い。

H類 背面に極めて広い自然面を残す素材を用い、中型・小型で浅角度の不連続剥離が施されたもの。本遺跡では確認出来なかった。

I類 素材の端部に小型の剥離が連続的に施されたもの(319)。

J類 刀部の二次加工はないが、使用痕と推定される痕跡が認められるもの。本遺跡では確認出来なかった。

K類 両面から連続剥離または連続剥離状の加工が施されたもの。刃部平面形は波状、側面から見る(側面観)とジグザグ状を呈する(320～323)。両面加工(調整)石器と呼称されるものに相当する。石鎚の未製品もしくは失敗品の可能性があるものも含まれる(323)。

分類不可 二次加工があると推定されるが、人工的なものなのか判断しかねるもの。

**分類別出土数と出土分布状況** 総数172点出土した。分類別ではB類が42点、F類が50点と多い。地点別ではA地点で1点出した以外は、B地点からの出土である。トレンチ別では61Tが42点と最も多く、20Tが16点、62Tが15点と続く。遺構内から20点、遺構外から151点出土しており、遺構別では土坑から1点、ピットから6点、環濠から7点、縫掘2から6点出土した。

**長さと幅** 第11図参照。完形品と破損品の区別が困難なため、全点を対象とした。長さ幅共に0.3～7.0cm程度に分布するが、1.0～5.0cm程度に集中する。分類別では顕著な傾向を見出しおくが、C類は大型のものが多いこと、E類は幅広なものが多いこと、F類は分布にバラツキが認められる。厚さ 第10表参照。計測点数は長さと幅に同じ。0.3～2.4cmに分布するが、0.4～1.1cmに集中する。分類別では、B類・K類が0.8cm未満に集中すること、F類が1.3cm以上のものが多い点が特徴である。

第10表 不定形石器分類別厚さ

(cm)	A類	B類	C類	E類	F類	G類	I類	K類	不可	総計
0.4以下	4	11	3	1	3		1	?		30
0.41～0.5	3	8	1		5	1	1	4		23
0.51～0.6	1	4			9		1	2	1	18
0.61～0.7	3	4	1	1	3	1		3		16
0.71～0.8	2	6	2		7			7		24
0.81～0.9	3	1	2	2	5	2		1		16
0.9～1.0		3	1		4	1	1			10
1.01～1.10	2	3			1	3		1		10
1.11～1.20	2		1	1	2			1	1	8
1.21～1.3	1						1			2
1.31～1.4	1	1			3					5
1.41～1.5					1			1		2
1.61～1.7		1			1					2
1.71～1.8							1			1
1.91～2.0					2					2
2.01～2.10					2					2
2.31～2.40					1					1
総計	22	42	11	7	50	7	4	27	2	172

第11表 不定形石器分類別重量

(g)	A類	B類	C類	E類	F類	G類	I類	K類	不可	総計
2.0以下	5	14	3	2	9			10	1	44
2.01～4.0	2	9	1		7	1	1	8		29
4.01～6.0	3	7	1		10			2	1	24
6.01～8.0	3	4	1	1	3	2	2	5		21
8.01～10.0	4	3	2	1	4			1		15
10.01～12.0					2	2		1		5
12.01～14.0		1		1	4					6
14.01～16.0		2			3	1				6
16.01～18.0	3	1			2		1			7
18.01～20		1	1							2
20.01～22.0				1	1					2
24.01～26.0	1			1		1				3
26.01～28.0	1		2		3					6
34.01～36.0					1					1
36.01～38.0					1					1
総計	22	42	11	7	50	7	4	27	2	172

第12表 不定形石器分類別石材

	頁岩 A	頁岩 B	頁岩 C	泥岩 (中生代)	流紋 岩	泥岩	黒曜 石	合計
A類	20		1		1			22
B類	35	4	2		1			42
C類	8		1		2			11
E類	5	1	1					7
F類	35	5	3		1	6		50
G類	5	1				1		7
I類	4							4
K類	16	6	1	1		2	1	27
不可		2						2
合計	128	19	9	1	5	9	1	172

**重さ** 第11表参照。計測点数は長さと幅に同じ。重量は0.5~37gに分布し、2.0~10.0g程度のものが多い。長さと幅、厚さと同様にB・K類は軽い傾向にあるが、F類は12.0g以上のものが多い。

**石材** 第12表参照。他器種と同様に頁岩A類が最も多く、128点(74.2%)を占める。その他では頁岩B類が19点(11.1%)、頁岩C類・泥岩が各9点(5.3%)、流紋岩が5点(2.9%)、泥岩(中生代)・黒曜石は各1点(0.6%)検出されたにすぎない。

細別毎でも頁岩A類が圧倒的に多い点は変わりないが、K類では59.3%と若干、低い比率を示す。また、泥岩がF類で12.0%、頁岩B類がK類で22.2%、分類不可では100%を占める点が特徴となる。

#### (5) その他 (324)

平板な素材の側縁に調整が施され、円盤状を呈するものが1点出土した。適切な名称は見当たらないため、その他の剥片石器とした。片側縁に急角度の剥離が施されている。長さは3.5cm、幅3.4cmで、長さ幅がほぼ等しく、円形に近い。厚さ1.5cm、重さは25.2gで、石材は頁岩B類である。

#### (6) 石核 (325)

剥片剥離作業を行うための素材、剥片剥離作業中の残核、剥片剥離の残核である。総数3点出土した。325の上面は同一作業面に別々の打面から剥離が行われている。表裏面は上から剥離し、一部に下に押し付けられ、剥離したと考えられるか所がある。石材はいずれも頁岩A類である。

#### (7) 剥片類

石核から剥離された目的剥片及びその副産物として生じた剥片(肩片)、目的剥片や礫から石器を製作する際に生じた剥片(チップや屑片)である[高橋雄1992]。

**出土数と分布状況** 総数275点出土しており、全石器中の50%以上を占める。遺構内から34点、遺構外からは240点出土した。遺構別内訳は土坑から8点、ピットから5点、環濠から15点、縦掘から6点出土している。

**石材** 第13表参照。頁岩A類が161点(58.5%)と最も多い。頁岩A類が主体の点は剥片石器と同様であるが、頁岩B類が24.2%を占めている点、メノウや鉄石英(赤)など剥片石器の石材では確認できないものが数点含まれているのが特徴である。

#### (8) 磨石類 (326~336)

礫の表面に磨痕・凹痕・敲打痕の残るものを磨石類とした。総数15点出土した。

**分類** 五丁歩遺跡[高橋雄1992]に準拠し、使用痕の組み合わせにより細分した。出土点数が少ないためか、五丁歩分類のB・C類・E~G類に限られる。

A類 磨痕のみ認められるもの。

B類 磨痕・凹痕が認められるもので、1点のみ出土した。326は磨痕が端部に認められることからB2類に相当する。

C類 磨痕・敲打痕が認められるもので、1点のみ出土した。328は磨痕が正裏両面に、敲打痕が端部と側面に認められることから、Clc類に相当する。

D類 磨痕・凹痕・敲打痕が認められるもの。

E類 凹痕のみ認められるもの。5点出土した(327~329~331)。

F類 凹痕・敲打痕が認められるもの。1点のみ出土した332は敲打痕が端部に認められることから、Fa

第13表 剥片類の石材

頁岩 A	頁岩 B	頁岩 C	流紋 岩	泥岩	メノ ウ	鉄石 英	合計
161	66	16	7	19	4	2	275

類に相当する。

G類 敵打痕のみ認められるもの。5点出土している(333~336)。敵打痕が端部に位置するGa類(333~335)と、敵打痕が端部と側縁に位置するGc類(336, 337)がある。

**分類別出土数と出土分布状況** 出土分布状況は総数15点を対象にする。分類別ではG類が7点と最も多く、E類が5点で次ぐ。B・C・F類は各1点出土したにとどまる。使用痕跡が単一のG・E類が12点と全体の80%を占め、使用痕跡が複合的に組み合わさるものが少ない傾向にある。

地点別ではB地点からの出土に限られ、18Tで5点(33.3%)、68Tで3点(20.0%)とややまとまる。遺構に伴うものは18TSK2出土の330のみで、遺構外出土が圧倒的に多い。

**長さと幅・厚さ** 第12図参照。破損しているものもあるが、全15点を対象とした。長さ9.2~20.1cm、幅4.0~10.0cmに分布する。出土数が少ないB・C・F類は顕著な傾向は見出しがたいが、E類とG類では長さと幅の比率で大きな違いがみられる。E類は1点(331)を除き、長幅比が2:1~1:1に分布するが、G類は1点(337)を除き4:1~2:1に集中しており、E類に比して縦長の傾向にある。これは端部で敵打を行うため、

細長い形態の跡が

選択されたものと  
考える。

厚さもほぼ同様  
な傾向が認められ  
る。正裏面に凹痕  
が認められるE類  
は5点中4点が厚  
さ5cm以上である  
のに対し、G類は  
2.5~4.5cmに分布  
が集中し、5cmを  
超えるものは1点  
にとどまる。

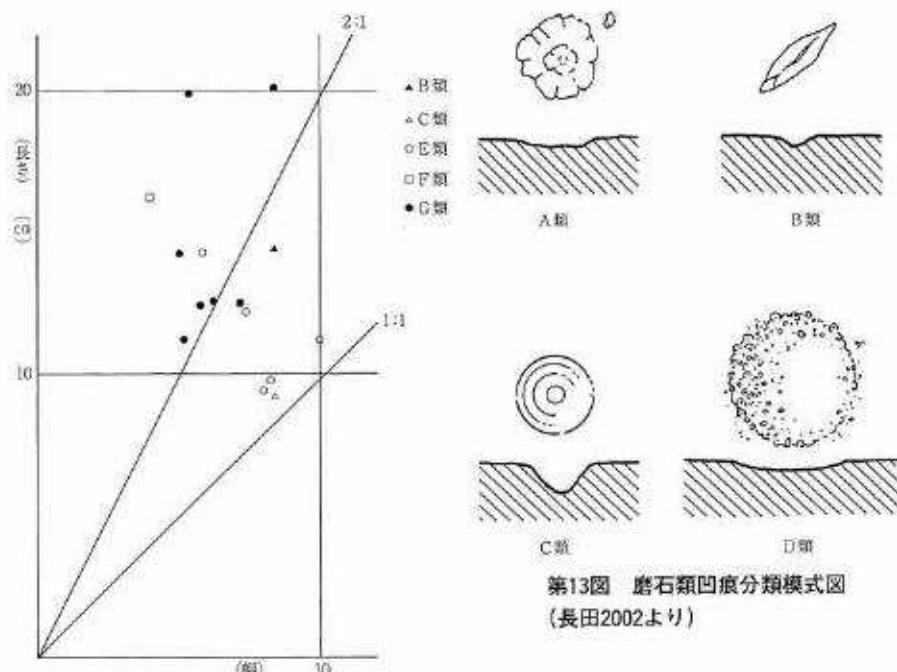
**重さ** 第14表参照。

全点を対象とした。

211~1,000gに分  
布する。分類別で

はE類が500g前

後に集中するもの  
の、G類は200g  
程度と軽量なもの  
から1,000gを超  
えるものまで幅広  
い分布を示す。



第13図 磨石類凹痕分類模式図

(長田2002より)

第12図 磨石類分類別長幅図

第14表 磨石類の分類別重量

	200~ 300 g	301~ 500 g	501~ 700 g	701~ 900 g	900 g~	
B2類					1	
C1c類	1					
E類		3	2			
Fa類	1					
Ga類	1	2	1		1	
Gc類	2					
合計	5	5	3		2	

第15表 磨石類の分類別石材

	ハシレ イ岩	フォル フェ ルス	御経岩	花崗岩	砂岩	庄鉢岩	砂岩 (中生 代)	ヒン岩
B2類	1							
C1c類				1				
E類			1	1	2	1		
Fa類				1				
Ga類	1			3			1	
Gc類							1	
合計	2	1	6	2	1	1	1	1

**石材** 第15表参照。輝緑岩が6点(40.0%)と最も多く、ハンレイ岩・花崗岩が2点(各13.3%)で続くが、それ以外は各1点の出土である。分類別でも顕著な傾向は見出し難く、まとまりに欠ける。

**E類の細別** 長田友也氏の細分【長田2002】に準拠して凹痕を概観する(第13図)。凹痕A類～C類が確認できる。一つの個体に複数類の凹痕が認められるものは1点(332)で、その他は1種類の凹痕に限られる。凹痕A類のみが最も多く、3点(326・329・331など)、凹痕B類のみ(330)・凹痕C類のみが(327)が各1点確認できる。一つの個体に複数類の凹痕が認められる332はA類とB類が複合する。

#### (9) 砥石(338～341)

大型の扁平碟を素材とし、研磨痕・磨耗痕が認められるものを砥石とした。5点出土した。小型の341は法量から磨石類との区分に課題を残すが、石材が砂岩であること、幅広い側縁にも磨面が認められるところから砥石とした。

**分類** 使用痕を基に、以下のように分類した。

A類 面状・帯状に砥面が広がるもの(338・339・341)。

B類 溝状に砥面が広がるもの(340)。

**分類別出土数と出土分布状況** 第2表参照。分類別ではA類が3点、B類が1点である。地点別ではB地点からの出土に限られるが、18Tで2点、20T・54Tで各1点出土した。出土点数は少ないものの、B地点最東の18・54Tに4点中3点が出土しており、磨石類と類似した分布傾向を示している。

**長さと幅・厚さ** 長さと幅は破損が著しいものを除く3点を対象とする。長さ17cm以上のもの(338・340)と、長さ13.0cm弱のもの(341)がある。前者は更に、幅が10cmに満たず、縦長の338と、幅13.4cmと幅広の340に分れる。厚さは全4点を対象とした。5.0～5.4cmに4点中3点がまとまる。角柱状に近い338は厚さ7.0cmと他に比して厚手である。

**重さ** 長さと幅と同様に3点を対象とした。大型品は1,149g(340)、1,965g(338)に対し、小型の341は755gであった。

**石材** 全5点を対象とした。砂岩が5点中3点と多い。おおむね他遺跡の石材と同様の傾向を示す。

#### (10) 石錘(342)

扁平な小円碟の両端に、縄掛け部と思われる抉りが設けられたものを石錘とした。C地点40Tから1点出土した。長さ10.5cm、幅7.5cm、厚さ2.4cm、重さ265gで、石材はヒン岩である。縄掛け部は剥離により作出されている。表面は磨耗しており、縄掛け部と思われる抉り部分の剥離もやや鋭利さを欠く。

#### (11) 環状石斧(343)

中心の貫通孔を持ち、円盤状を呈する碟素材のうち、周縁に刃部が付く磨製石斧を環状石斧とした。1点出土した。A地点5Tからの出土である。径約11.4～11.6cm、厚さ3.4cmで、重さ517g、石材はヒン岩である。

正面の貫通孔周辺にのみ隆起をもつものである。刃部の作り出しは明瞭とは言い難いが、断面から両刃と判断した。日下部善己氏の分類【日下部1982】では、B1 II a類に近い。研磨が十分ではないためか、表面の凹凸が目立つ。磨耗していることから研磨の方向は判別できなかった。

#### (12) 小型特殊品(338～341)

ここまで報告した碟石器とは異なり、著しく小型のものを使用痕跡に係わらず、小型特殊品として一括した。使用痕跡を重視した区分では、磨石類に分類すべきものも含まれる。

**分類** 使用と思われる痕跡等から以下に区分した。総数5点出土しており、全て風化した。

A類 上下両端に敲打痕が残るもの (344)。

B類 擦痕・研磨痕が認められるもの (345~347)。

B 1類 下端部に擦痕・研磨痕が認められるもの (345・346)。346は磨製石斧の可能性がある。

B 2類 擦痕・研磨痕が認められるもの (347)。

C類 素材の一端に抉りが認められるもの (348)。

D類 剥離痕が認められるもの (426)。

**分類別出土数と出土分布状況** A・C・D類は各1点、B類はB 1類が2点、B 2類が1点出土した。B地点からの出土が多いが、A地点からはD類が1点(426)、C地点からもC類が1点(348)出土している。B地点では32Tで2点(344・345)とまとまるが、それ以外は22T(346)、36T(347)からの出土である。包含層からの出土が多いが、346のみピットから出土した。

**長さと幅・厚さ・重さ** 全5点を対象とする。長さは5.1~9.4cm、幅は347の除き4.0cmに満たない。厚さは0.8~1.4cmと他器種に比して小型である。重さも、13.6~52.5gと軽量である。

**石材** A類の344は黒色の安山岩、B 1類(345・346)は泥岩、B 2類(350)・D類(426)は粘板岩、C類(348)は輝緑岩である。C類の348を除き、その他の砾石器では使用されていない石材である。

**備考** それぞれの個体に残る痕跡等について、若干の観察結果を記す。344は上下両端に敲打痕が残る。正裏面の中央付近に装着時の痕跡が認められる可能性を想定したが、肉眼では判断しえなかった。345・346の磨痕・擦痕は下端の両面に及ぶ。346の磨痕・擦痕に比して345のものは粗く、明瞭な凹凸として観察できる。347の磨痕・擦痕も345に近く、比較的明瞭に筋状の痕跡が観察できる。

#### (13) 自然礫 (349・350)

加工・使用痕跡は確認できなかつたが、形態が特異なものを2点図化した。自然礫の報告例は少ないが、同じく県北部の元屋敷遺跡(縄文時代後・晚期)では特徴的な自然礫が報告されている【潮田2002】。時代は異なるが、元屋敷遺跡例と同様に何らかの意図をもつて持ち込まれたものと考える。349は平面形がT字形を呈し、円球状突起と扁平な裾部とからなる。男根に類似した形状を呈する。長さ11.4cm、重さ189gで、石材は泥岩である。350は平面形が長靴形を呈する扁平な礫である。長さ6.5cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm、重さ14gで、石材は粘板岩である。いずれもB地点からの出土である。

#### (14) 管玉 (351・352)

2点出土した。いずれもB地点からの出土で、比較的隣接した20T(351)と31T(351)で検出している。351は縦方向に半割しているが、長さ2.2cm、幅0.9cmで、厚さは約1.8cmである。352は横方向に破損しており、現存長1.5cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmである。弥生時代中期のものに比して太い。石材はいずれも緑色凝灰岩である。穿孔方向は判断しがたいが、片側穿孔の可能性がある。

### 5 ガラス製品(図面図版32-353~424、写真図版56・66)

ガラス小玉の完形品68点、破損(半損品)4点が出土した。全点を図化した。破損品は接合しないことから、72個体の可能性がある。いずれもA地点1TSK1から検出されている。色調はスカイブルーを基調とし、緑色味を帯びたものが数点ある。なお、ガラス成分・製作技法については、独立行政法人奈良国立文化財研究所の肥塚・田村両氏から分析していただいた(第VI章1参照)。ここでは形態や大きさの特徴を記す。

**直径と厚さ** 完形品68点を対象とする。0.5mm単位で計測した。形状は正円を呈するものは少なく、椭円形のものが多い。ここでは長径を直径とした。68点中、3.5~6.0mmに分布しており、主体は長径4.0mmで32点(47.1%)、4.5mmが15点(22.1%)、5.0mmが13点(19.1%)、5.5mm・6.0mmが各3点(各4.4%)、3.5mmが2点(2.9%)と最も少ない。

厚さは1.5mm~4.0mmに分布するが、3.0mmが主体であり35点(51.4%)、2.0mmが16点(23.5%)で次ぐ。直径との関係では大きなものが厚い傾向にあるが、直径5.5mmと大きなものでも、厚さ2.0~2.5mmと薄いもの(357・358)や、逆に直径4.0mmと小さいものでも厚さ4.0mmと厚いもの(387~389)がある。最も数量が多いのは直径4.0mm、厚さ3.0mmのもので18点と全体の26.4%を占める。

**孔径** 完形品68点を対象とする。孔最大径を孔径とし、0.5mm単位まで計測した。1.0~2.0mmに分布しており、2.0mmが最も多く33点(48.5%)、1.0mmが20点(29.4%)で次ぎ、1.5mmが15点(22.1%)であった。大きさとの関連において、特に顕著な傾向は認められなかった。

**重さ** 完形品68点を対象とする。gを単位として小数点以下第2位まで計測した。0.04~0.15gまで分布しており、0.08gが最も多く20点(29.4%)で、0.06~0.10gに58点(85.3%)が集中する。おおむね大きさと重さは比例する。

**形態の特徴** 断面形から小口面が平坦でないものが多い。また外側縁が丸みを帯びるのに対し、孔側は直角に近いものが多い傾向にある。孔径は上下でおおむね等しいが、358のように異なるものが若干認められる。

第17表 ガラス小玉の長さと厚さ

第16表 ガラス小玉の長さと厚さ

厚さ 直径 (mm)	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	合計
3.5			1	1			2
4.0	1	4	3	18	3	3	32
4.5			8		6	1	15
5.0		3	1	7	1	1	13
5.5		1	1		1		3
6.0				2		1	3
合計	1	16	6	34	6	5	68

第18表 ガラス小玉の長さと重量

孔径 直径 (mm)	1.0	1.5	2.0	合計	重さ 重 (g)	0.04	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.11	0.12	0.13	0.14	0.15	合計
3.5	1		1	2													2
4.0	9	9	14	32													32
4.5	4	3	8	15													15
5.0	5	1	7	13													13
5.5		1	2	3													3
6.0	1	1	1	3													3
合計	20	15	33	68													68

# 第VI章 化学分析

## 1 山元遺跡出土のガラス小玉について

肥塚 隆保・田村 朋美

(奈良文化財研究所 保存修復科学研究室)

### A はじめに

古代におけるガラス小玉の材質および製作技法に関する情報は、ガラス小玉の考古学的研究を進めるうえで非常に重要である。山元遺跡出土のガラス小玉は、弥生時代後期後半の資料と推定されており、当時の新潟県におけるガラス小玉の出土例は少なく、西日本との交流を示す重要な資料として注目されている。本調査では、山元遺跡出土ガラス小玉69点について材質および製作技法を明らかにすることを目的として調査をおこなった。以下その調査結果について報告する。

### B 調査の方法

#### (1) 顕微鏡観察

山元遺跡出土のガラス小玉について、製作技法や表面の風化の状態を調査するため、落射光および透過光による実体顕微鏡下で観察をおこなった。本調査では、とくにガラス小玉に含まれる気泡の配置や形状、ガラス玉表面および孔壁面の状態および形状など、製作技法を示す痕跡に着目して観察をおこなった。

#### (2) CR法

山元遺跡出土ガラス小玉の孔の形状や気泡の状態などの内部構造を調査するとともに、鉛ケイ酸塩ガラスとアルカリケイ酸塩ガラスを識別するため、CR (Computed Radiography) 法による調査をおこなった。鉛ケイ酸塩ガラスはX線吸収の度合いがアルカリケイ酸塩ガラスに比べてきわめて大きいため、透過画像の濃淡から両者を識別することができる。なお、CR法は、従来のフィルムにかわりイメージングプレート (IP) を検出系に利用する方法である。使用した装置はマイクロフォーカスX線拡大撮像システム (富士フィルム社製μFX-1000)、イメージングアナライザー (富士フィルム社製BAS-5000)、IPはSR2025である。撮影条件は電圧45kV、電流45μA、露出時間45秒、実効焦点8μmである。

#### (3) AR法

山元遺跡出土ガラス小玉について、アルカリケイ酸塩ガラスであるカリガラスとソーダ石灰ガラスを識別するため、AR (Auto Radiography) 法による調査をおこなった。ここで適用したAR法とは、従来のフィルムに比べて非常に感度の良いイメージングプレート (IP) を用いて、遺物自身から放射される微弱な放射線を検出する方法である。カリガラスは一般に酸化カリウムを十数%含有しており、ソーダ石灰ガラスに比べて非常に強い放射線 ( $^{40}\text{K}$  由来) を放出しているため、AR法によって得られた画像の濃淡、つまり放射線量から両者を識別する方法である。測定の方法は、直接IP上にガラス小玉を置いて、外部

からの放射線を遮蔽するため鉛ボックス内に設置する。さらに鉛からの放射線を遮断するため、LPの周辺を銅版で囲った。この状態で1週間暴露した後、読み取り装置でデータ処理し、画像化した。比較試料としてBCR-123A（カリウム鉛ガラス）、JG-1a（標準岩石資料花崗岩）、JB-1b（標準岩石資料玄武岩）を用いた。なお、LPはSR2025を使用した。

#### （4）蛍光X線分析

山元遺跡から出土したガラス小玉の化学組成を調査するため、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定をおこなった。今回は、予備調査としてテクノス社製の蛍光X線分析装置をもちいて69点中61点を測定したのち、本調査として、全資料中10点（No.1～No.10）を堀場製作所製顕微鏡蛍光X線分析装置をもちいて測定した。なお、本調査では、資料表面の風化層を取り除いて測定をおこなった。測定方法は、資料と検出器の間を真空状態とし、空気による二次X線の吸収ができるだけ少なくする方法によった。X線管球はロジウム（Rh）、管電圧は30kV、電流は1.0mA、X線照射径100μm、計数時間は600秒である。測定の結果は、検出された元素（酸化物）の総和が100%となるように規格化し、酸化物重量百分率で表示した。非破壊測定法では、風化や形状等が影響して、資料内部の正確な化学組成を知ることはできないが、大まかなガラスの材質を判断することは可能である。

### C 調査結果

#### （1）顕微鏡観察結果

ガラス小玉の表面には著しい風化は認められないが、ガラス光沢はやや失われている。内部は健全な部分が残存している。ガラス内部には多数の気泡が認められ、孔に平行に引き伸ばされている様子が認められた。また、ガラス内部には孔と平行に直線状に配列した気泡が観察された（第14図）。



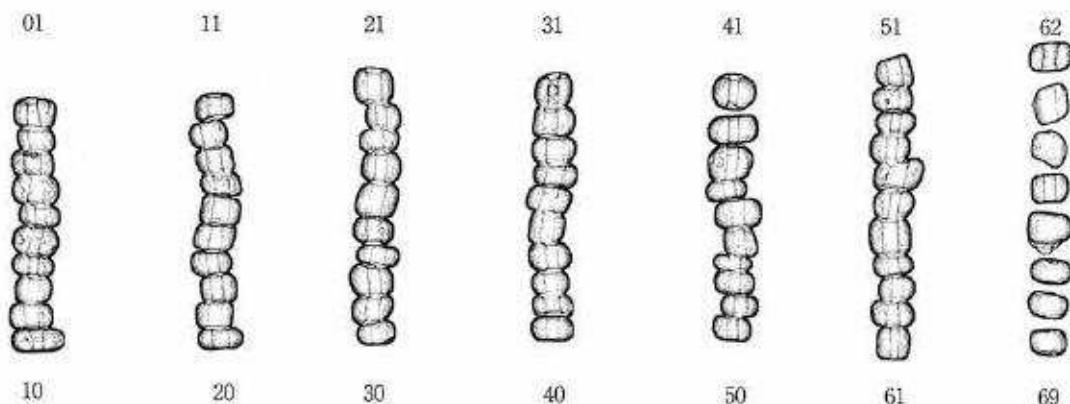
第14図 顕微鏡写真

#### （2）CR法による調査結果

ガラス小玉の内部には顕微鏡観察と同様に、大小の気泡が認められた（第15図）。孔は直線状である。また、鉛ガラスにみられるようなX線の吸収の大きい資料は認められず、いずれもX線の吸収は小さい。

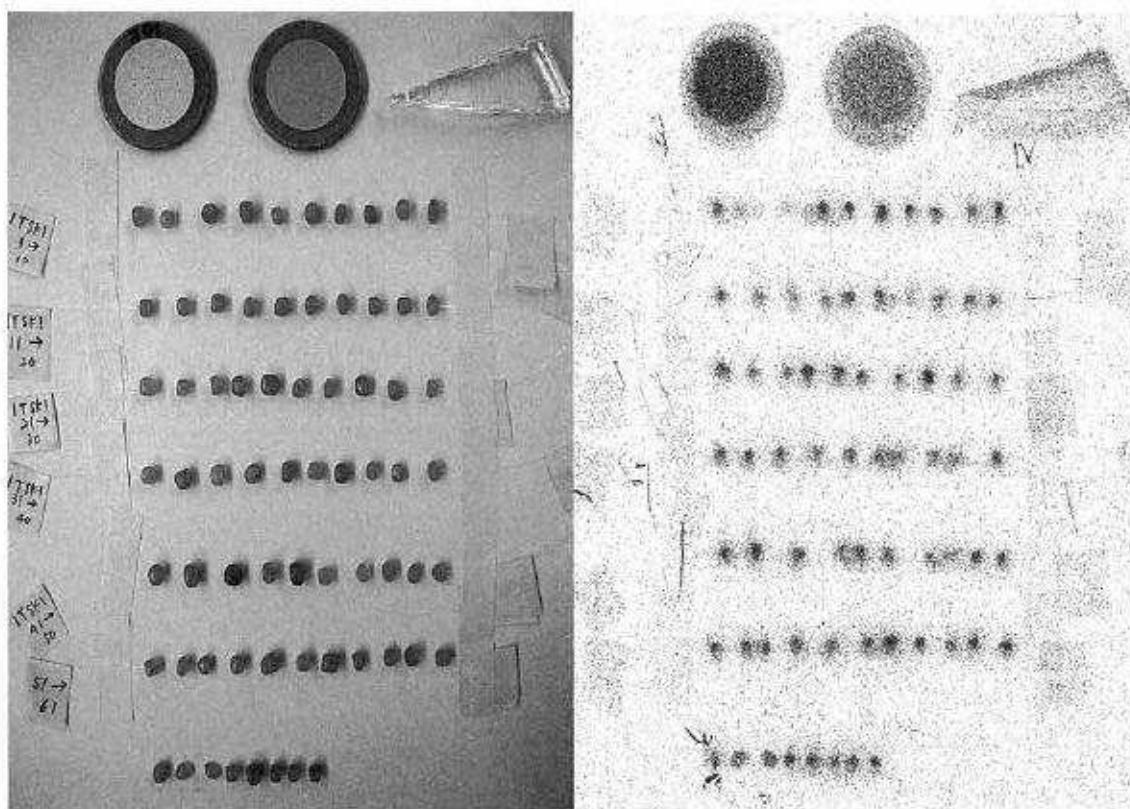
#### （3）AR法による調査結果

山元遺跡出土のガラス小玉を設置した部分は、No.2、No.3の資料を除き、JG-1aと同等の色調を示して



第15図 ガラス小玉のCR画像からの画像強調処理

いる（第16図）。このことは、これらの資料から放出される放射線量が多いことを示しており、カリガラスであると推定された。No.2、No.3については放射線量が少なく、ソーダ石灰ガラスの可能性が考えられたが、測定中に何らかの影響で設置場所がずれた痕跡が認められることから、材質の推定に疑問が残った。



第16図 ガラス小玉のAR画像

#### （4）蛍光X線分析結果

予備調査の結果、山元遺跡出土のガラス小玉からは、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{SiO}_2$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{CaO}$ 、 $\text{TiO}_2$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、 $\text{CuO}$ 、 $\text{PbO}$ などが検出され、主成分はいずれも $\text{SiO}_2$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ であった。 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{MgO}$ などについては検出・定量限界以下であった。従来の研究でもアルカリケイ酸塩ガラスについては、 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{MgO}$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ などのアルカリ金属、アルカリ土類成分が風化により溶脱することが報告されている。本調査の結果は第19表に示した。測定の結果、AR法で材質の推定に疑問の残った資料も含めて、すべてカリガラスであることが明らかとなった。組成に大きな差異は認められないため、ほぼ同じ材質で製造されたものと考えられる。

ガラス小玉の色調に着目すると、山元遺跡出土のガラス小玉の色調は淡青色である。古代のガラスの多くは金属イオンによって着色がなされたといわれている。今回測定した資料は、 $\text{CuO}$ を0.9%～1.6%含有しており、銅イオンが主な着色因子であると考えられる。

第19表 蛍光X線分析結果

No.	重量濃度 (w%)							
	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	PbO
1	5.3	80.0	12.5	0.34	0.13	0.54	1.0	0.26
2	4.7	78.0	15.0	0.43	0.12	0.53	1.0	0.21
3	4.6	79.2	12.5	0.45	0.14	0.56	1.6	0.41
4	5.0	75.5	14.9	1.03	0.13	0.51	1.3	0.34
5	4.4	72.4	14.0	0.59	0.10	0.45	1.1	0.28
6	5.0	77.2	13.6	0.42	0.11	0.49	1.4	0.32
7	4.9	76.0	13.2	0.47	0.12	0.53	1.5	0.30
8	4.7	77.5	13.5	0.40	0.11	0.47	1.4	0.42
9	5.3	78.8	13.6	0.32	0.11	0.54	0.9	0.26
10	4.1	76.9	16.1	0.41	0.10	0.56	1.3	0.23

## D まとめ

以上の調査結果をもとに、山元遺跡出土のガラス小玉の製作技法および材質についてまとめた。

山元遺跡出土のガラス小玉は、引き伸ばし法によって製作されたカリガラスであることがわかった。カリガラスは弥生時代の遺跡から多数出土しており、その化学組成は今回の結果ともほぼ一致している。カリガラスは弥生時代前期末から中期初め頃の北部九州に出現し、弥生後期になると多量に流通する。弥生後期には九州から関東平野にかけて一度に大量のカリガラス製小玉を出土する例が認められる。また、カリガラスは色調から淡青色を呈するものと青紺色を呈すものに大別され、弥生時代においては、青紺色のカリガラスは九州を中心として分布し、淡青色のカリガラスは畿内を中心とする地域に多くみられるという特徴がある。今回、これまでガラス小玉の出土例の少ない新潟県において、69点もの淡青色のカリガラス製小玉がまとめて出土したことは、当地域と畿内を中心とした地域との交流をしめす重要な手掛かりとなるものと考えられる。

## 2 山元遺跡の放射性炭素年代

吉田 邦夫（東京大学総合研究博物館）

### A 年代測定資料

2006年6月2日に現地で測定用資料を採取した。主として環濠および縦堀の埋没時期を特定することを目的として、発掘時にマークされ残置されていた木炭の内から、適切なものを採取して測定資料とした。木炭13点と周辺土壤1点を採取した。

また、30T濠5において外面に炭化物が付着した弥生土器片、および同層でこれに近接した統繩文土器片を採取した。統繩文土器片は断面が黒色を呈していたので、土器焼成時に燃焼せず取り残された炭素を取り出し、年代測定を行う意図のもとに、採取した。

### B 放射性炭素年代測定

採取した資料の内、木炭5点と土器付着炭化物1点、土器片1点の測定を行った（第20図）。

#### （1）測定試料の調製

木炭5点について通常の方法で年代測定用試料を調製した。まず、付着している土壤を取り除き、適量（30~40mg）の木炭をメスで切り出した。次に、埋蔵中、および発掘後に付加した汚染物質を除くために、AAA（酸-アルカリ-酸）処理を行った。資料に付着した炭酸塩、土壤有機物であるフルボ酸を除去するために、1M塩酸を加え80°Cで13時間加熱した（通常は、数時間加熱）。ミリポア水で十分洗浄した後、アルカリ溶液により主として土壤に由来するフミン酸を除去した。今回の資料は、かなりしっかりした木炭だったが、念のため希薄溶液から徐々に濃度を上げて処理を行った。80°Cに加温して、0.001M水酸化ナトリウム水溶液で10分、0.01M水溶液で30分、0.1M水溶液で1時間、最後に1.2M水溶液で1時間アルカリ処理を行った。ミリポア水で洗浄した後、最後に、再び1M塩酸を加え80°Cで1時間加熱し、アルカリ処理中に吸収した二酸化炭素から生成した炭酸塩を除いた。試料は洗浄、乾燥した後、秤量した。化学処理後の回収率は、No04の13%を除いて38~58%であった。

土器付着炭化物は土器片（約75×65mm）の表面が一部剥離した近傍に付着していた（第17図）。炭化物が付着していたのは外面で、内面には全く付着していないかった。土器片は外面を上にしてほぼ水平の状態で出土した。見た目でも炭化物であることは確実と思われたが、念のため、一部を採取して元素分析計（Euro EA3000HT、Euro Vector社）を用いて炭素含有量を測定した結果、約32%であることがわかった。比較的、土壤に覆われていない部分、35×20mm程度をメスではぎ取った。それでも表面の土壤を取り去ることが出来なかつたので、土壤を含めて質量は158mgであった。炭化物の場合



第17図 資料15（30T濠5の統繩文土器）（後北C1式）

は、状態によってアルカリ溶液に対する溶解性が大きいことがあるので、希薄溶液を用いて注意深く処理しないと、試料がすべて失われてしまう。今回は、1M塩酸で80°C、8時間処理した後、0.0005M水酸化ナトリウム水溶液で80°C、10分、0.001M水溶液で10分処理をして終了した。その後の処理は、木炭と同様に行なった。

一方、縄文土器片については、十分乾燥させた後、内部黒色部分が実際に炭素を含んでいるかどうか検討した。還元状態の鉄やマンガン化合物が存在したりすることによって、あたかも炭素が残っているかのような黒色を呈することがあるからである。元素分析計によって炭素含有量を測定したところ、30.4%、22.8%、3.6%の値が得られた。試料採取場所によって大きく値が異なったが、最後の値は、胎土に含まれたやや大きめの鉱物の影響によるものと思われる。両側表面の黄褐色胎土の部分、厚さ約1mmを精密グラインダーで削り取り、黒色部分の適量(10×10mm、厚さ4mm程度)を切断し、メノウ乳鉢ですりつぶし、915mgを採取した。AAA処理は、付着炭化物と同様に行なったが、アルカリ処理は0.001M水酸化ナトリウム水溶液で80°C、1時間、0.005M水溶液で1時間とした。回収率は70.8%であったが、処理後の炭素含有量は3.2%で、大部分の炭素が溶出した。

AAA処理をした試料は石英ガラス管に入れ、酸化銅(II) 1gを加え、真空にしてバーナーで封じきった。またこの時、酸化により同時に発生する硫黄酸化物を除去するための銀箔を入れておく。このガラス管を、電気炉に入れ、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱し、資料中に含まれる炭素をすべて酸化二酸化炭素にした。このようにして得られた二酸化炭素を精製し、鉄触媒の存在下で水素によって還元してグラファイト-鉄混合試料を生成し、AMS測定を行う。資料の酸化、二酸化炭素の精製、還元、測定試料の充填などの操作は、年代測定室の定法に従って行った[吉田 2004]。なお、酸化還元に用いるガラス管は、すべて石英ガラス管に変更している。また、二酸化炭素の不純物を除去する過程で、液体窒素-エタノール混合物(エタノール；融点-114.5°C)を使用した精製の後に、液体窒素-ベンタン混合物(ベンタン；融点-129.7°C)を用いて、主として硫黄酸化物の完全除去を図っている。

## (2) 測定

測定は、東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻のタンデム加速器研究設備に設置されているAMS装置を用いて行った。加速電圧4.5000 MVで、高速逐次入射法(ジャンピング法)により、荷電変換後のC<sup>+</sup>を用いて<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比および<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比を測定した(<sup>14</sup>Cの測定時間の合計は600秒)。この測定を5回行う。各資料についての5回の測定値のばらつきが統計誤差内( $\pm$ 検定：5%有意水準)にあるときは、<sup>14</sup>Cの総計数値に基づく測定値の統計誤差と、<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比変動の標準偏差を合算して求めた値を誤差としている。

標準試料は、米国NISTシュウ酸(SRM4990C; Oxalic Acid II, HOxII)とANUスクロース(IAEA C-6)を併用した。試料調製を含めたAMSシステムのバックグラウンドは、国際原子力機関(IAEA)発行の標準試料C<sub>1</sub>(marble; 大理石)から作成した測定試料を用いて、推定した。通常は、高純度試薬グラファイト粉末(99.9999%、-200mesh, Johnson Matthey社製)を高純度鉄粉末と混合し、バックグラウンド試料として用い測定している。今回の測定では、その値は<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C=4.5×10<sup>-16</sup>で、約61,400BPに相当する。すべての測定試料の測定値から、このバックグラウンド値を差し引いて、年代値を算出した。

## (3) 測定年代

年代測定結果を第21表に示す。半減期はLibbyの値5568年により年代を決定した。BPは1950年を基準として何年前かを示している。年代値に付記した誤差は、標準偏差( $\pm$ :シグマ)に相当する年代で示した。資料3は、古木効果を考慮しても古すぎる値を示している。この資料は、36トレンチの濠1直上層の上

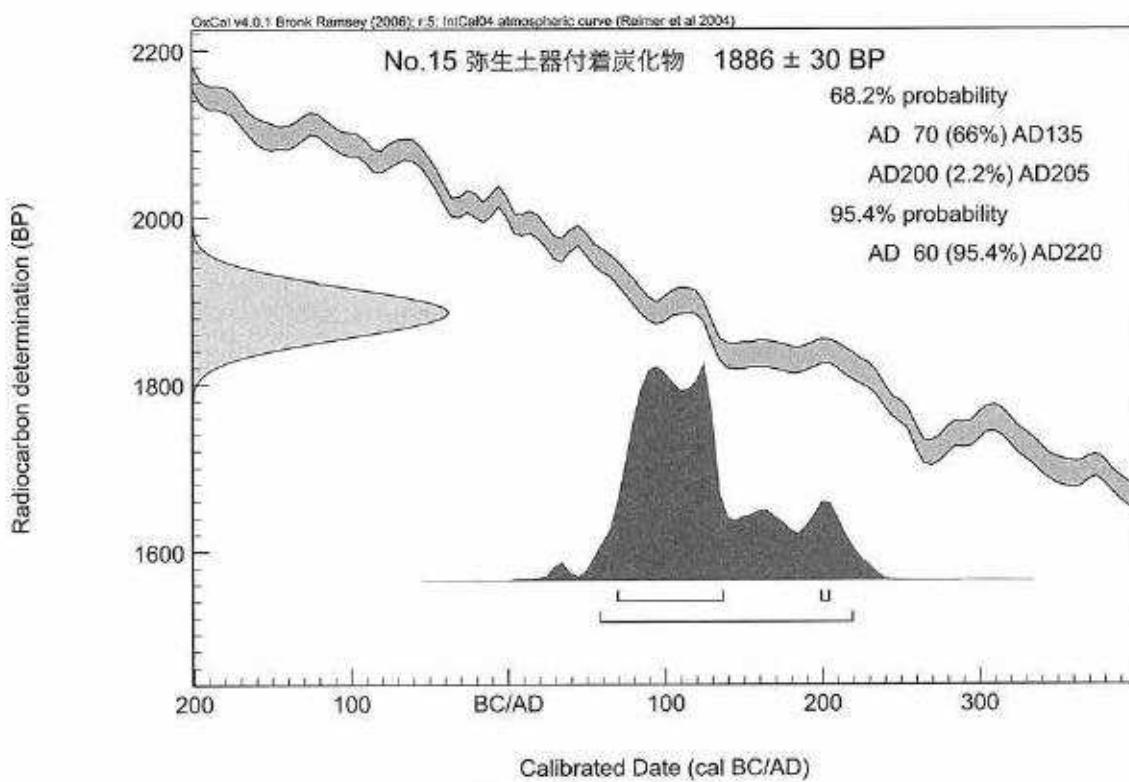
に位置するⅢa層から採取したものである。トレンチを開けるときの層序関係は不明であるが、濠の掘り返しなどによって下層のものが露出した可能性もある。

また、資料16については、繊維土器に含まれる繊維に由来すると考えられる炭素を年代測定する場合に通常使用される水酸化ナトリウム水溶液の濃度 (~0.05M) に比して、十分の一の濃度で炭素含有量が数分の一に減少してしまうことから、当初含まれていた炭素成分は可溶性のもので、雨水または地下水の浸透で上下の土壤から吸収された疑いが強いと考えられる。測定を行ったが、約3700BPの値が得られたので、本報告からは除外した。

#### (4) 历年較正年代

試料16を除いた6点について、較正プログラムOxCAL4.0.1 [Ramsey2006] を用いて历年較正した。

弥生土器付着炭化物、資料15を例に較正方法を確認する(第18図)。左の縦軸に乗っている山が、測定によって得られたC-14年代値とその前後の各年代値についての確率を表している。年代測定値は $1\sigma$ の誤差を付けて報告をするように取り決められており、 $1886 \pm 30$ BPという形式で書き表すが、図のような確率分布を数式で書くときの約束事である。すなわち、中央値1886BPから $\pm 30$ BPの部分で山全体の面積の68%を占め( $1\sigma$ =信頼率68%)、また $2\sigma$ 、つまり2倍の誤差、 $\pm 60$ BPまでの部分で95%を占める。数式だけを見ると誤差の範囲がすべて均等な意味を持っているように思ってしまうが、信頼率は中央ほど高いのである。左上から右下に走るギザギザの二つの線が、誤差( $\pm 1\sigma$ )の範囲を示した較正曲線である。 $+1\sigma$ と $-1\sigma$ の線で示す。C-14年代測定値で、中心値1886BPが確率分布の山の頂点にある。ここから右に水平に線を延ばして、較正曲線と交差した点から垂直に線を下ろして較正年代とするときに、最も確率の高い点になる。このようにして、左側の山の高さに相当する確率の大小を較正曲線と交差した点で垂直に下ろして横軸上に転写しながら、順次、確率を足しあわせていくと、幅が広がった灰色の山が得られる。も



第18図 No.15弥生土器付着炭化物

第20表 資料の化学処理

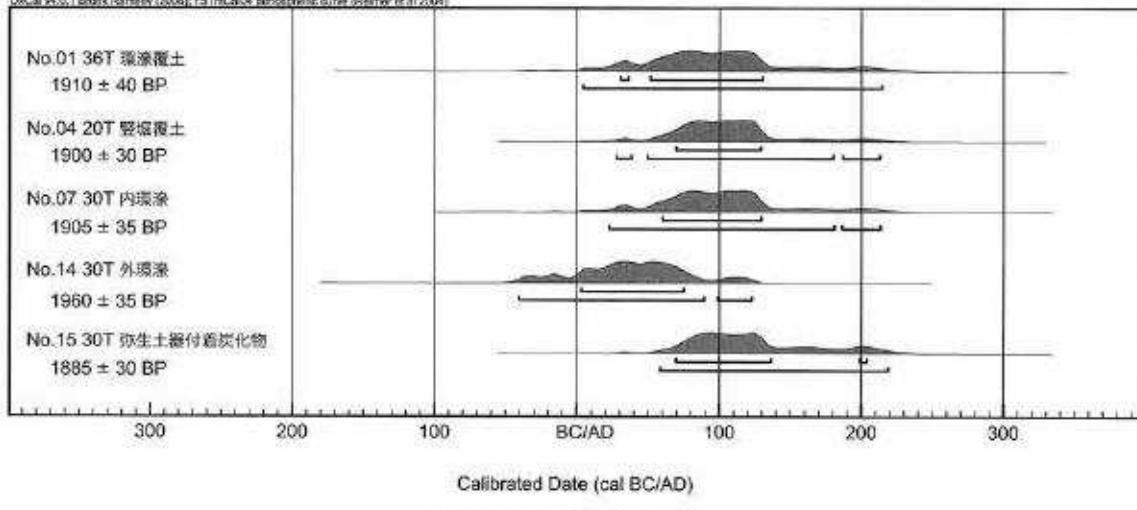
資料名	質量		回収率	酸化使用量	CO <sub>2</sub> 生成量	CO <sub>2</sub> 吸率	
	ピックアップ	AAA処理後				炭素含有量	CO <sub>2</sub> 使用量
(mg)	(mg)	(%)	(%)	(mg)	(Cmg)	(%)	(mg)
炭化物資料 15 土器付着炭化物	158	92	58.4	5.2	2.0	38.39	1.1
炭化物資料 16 縄繩文土器片	915	648	70.8	106	3.3	3.16	1.0

第21表 年代測定値と較正暦年代

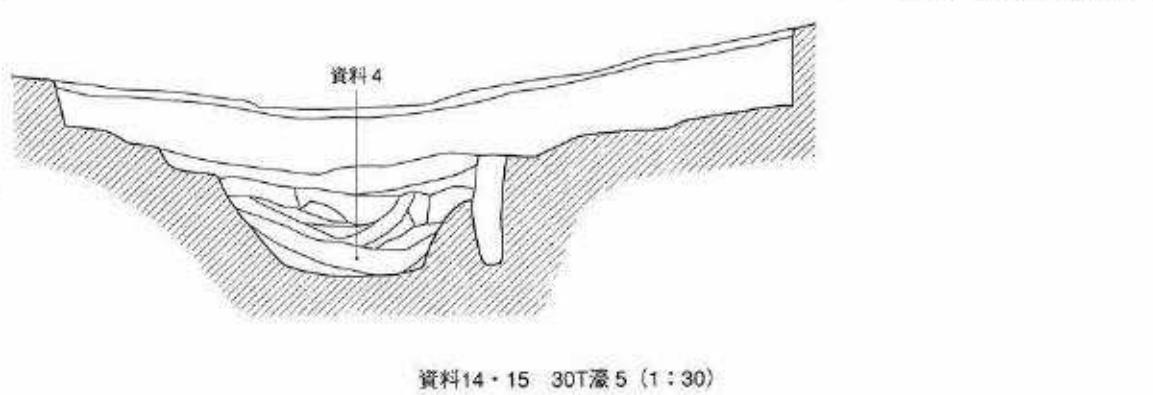
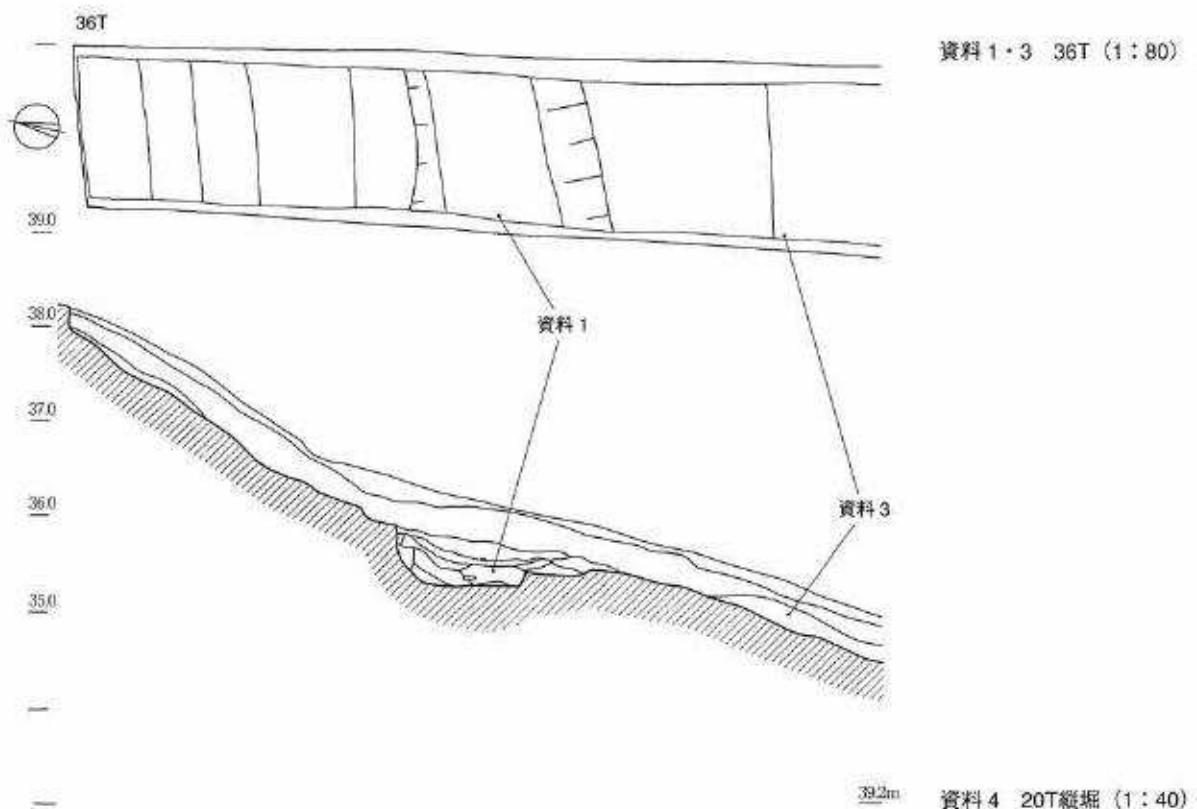
資料番号	測定値 BP $\pm 1\sigma$	$\delta^{13}\text{C}$ ‰	測定番号	較正暦年代		cal BC/AD $\pm 2\sigma$ 範囲 (信頼率)
				TKa-	$\pm 1\sigma$ 範囲 (信頼率)	
資料1 木炭 36T 漆1覆土	1910 $\pm$ 40	-19.9*	13922	AD 30 - AD 35 (2.6%)	AD 5 - AD 215 (95.4%)	-
				AD 50 - AD 140 (65.6%)		-
資料3 木炭 36T IIIa層覆土	3125 $\pm$ 40	-26.2*	13923	1450BC - 1380BC (59.0%)	1495BC - 1305BC (95.4%)	-
				1335BC - 1320BC (9.2%)		-
資料4 木炭 20T堅塗2覆土	1900 $\pm$ 30	-26.4*	13925	AD 70 - AD 130 (68.2%)	AD 30 - AD 40 (1.9%)	-
				AD 50	AD 180 (88.7%)	-
				AD 190	AD 215 (4.8%)	-
資料7 木炭 30T漆4覆土	1905 $\pm$ 35	-24.3*	13926	AD 60 - AD 130 (68.2%)	AD 25 - AD 180 (90.3%)	-
				AD 185	AD 215 (5.1%)	-
資料14 木炭 30T漆5覆土	1960 $\pm$ 35	-26.8*	13927	AD 5 - AD 75 (68.2%)	40BC - AD 90 (88.9%)	-
				AD 100	AD 125 (6.5%)	-
資料15 炭化物 30T漆5 弥生土器付着炭化物	1885 $\pm$ 30	-27.5*	13928	AD 70 - AD 135 (43.2%)	AD 60 - AD 220 (95.4%)	-
				AD 200 - AD 205 (2.2%)		-

\*タンデム加速器による測定値

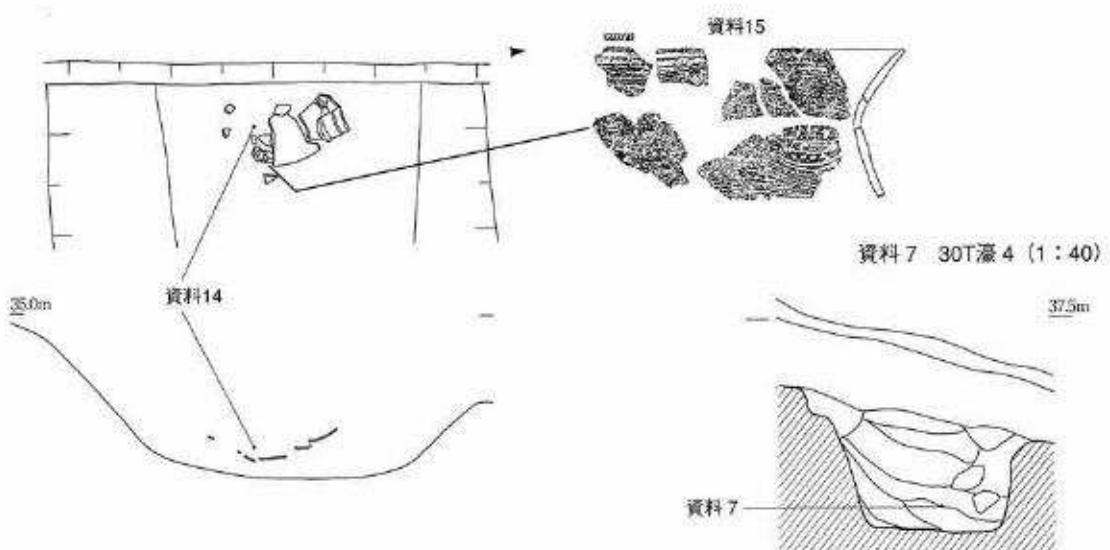
DoCal v4.0, 1.8pm (Bartosz (2008); I3 LR Cal 04, atmosphere curve (Birks et al. 2004))



第19図 分析資料の年代



資料14・15 30T灘 5 (1:30)



第20図 測定資料の採取地点

ちろん、較正曲線にも分布の広がりがあるので、それらの確率の大小も加味されることになる。横軸に横たわる灰色の山が、較正年代値の確率分布曲線である。全体の山の面積（確率1）に対して、山の高いところから順に集めて68%の面積を占める範囲が $1\sigma$ 、つまり信頼率68%の較正年代範囲となる（山の下、上段のカッコ）。95%の部分をとれば、 $2\sigma$ の較正年代範囲となる（下段のカッコ）。それぞれの数値年代範囲は右上に表記してある。なお、ここでは、曆年較正に使用する測定値は丸める前の値とし、較正した年代は誤差が50BP未満の場合、5の位までに丸めるように設定している<sup>1)</sup>。cal AD (calibrated AD)は、このように曆年較正曲線を用いて得られた較正曆年代である。

較正曆年代をみると66%の信頼率で、cal AD70~135となり、95%信頼率で考えるとcal AD60~220と新しい年代へと範囲が拡がる。この1点の測定値だけだと、AD150前後の山とAD200前後の山を捨てるのは難しいが、いくつかの資料の年代値を組み合わせると、おおよその状況が見えてくる。第19図に、資料3を除いた5資料の較正曆年代を示している。資料1、4、7と併せて考えると、AD150~200にかかる可能性は低い。4資料が同時代であるとすれば、cal AD50~130の範囲を考えるのが妥当である。

30トレンチで土器片が出土した近傍の同層から採取した資料14は、これに比べ数十年古い傾向を示している。濠5の埋没時期が古かったという可能性もあるが、土器付着炭化物の年代から見て考えにくい。古木効果の疑いもあるが、濠5で採取した木炭はこの資料のみであるので、残念ながらこれ以上の検討は出来ない。

これらの結果から、濠5の埋没時期の問題は残るが、本遺跡の環濠および豊堀の埋没時期は、ほぼ同じと考えられ、cal AD100を中心としたcal AD50~130の時期である蓋然性が高い。

#### 引用・参考文献

Ramsey, C. B. 2006 OxCal ver. 4.0.1

吉田邦夫 2004 「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」『火炎土器の研究』 同成社

<sup>1)</sup> 放射性炭素年代値 (Conventional Radiocarbon Age ; BP) を報告するとき、誤差が50年以上100年未満の場合、測定値、誤差ともに四捨五入して10の位で丸めることになっている。また、誤差が50年未満の場合は、5を単位として丸めるよう推奨されている。

## 第VII章 ま と め

### 1 出土遺物について

#### A 石器について

本遺跡から出土した石器（剥片類を含む）・石製品は518点に及ぶ。ここでは阿賀北地域を中心に、石器組成について若干の比較を行う。

弥生時代の石器は全国的な集成が進み【国立歴史博物館1997など】、後期には石鎌が残存するものの、剥片石器が減少することから鉄器化が進んだとの解釈が提示されている【松木1995・福宜田1998など】。本県では、石川日出志氏【石川1997b】・立木宏明氏【立木2001b】などが弥生時代の石器の様相を示している。このうち石川氏は、弥生V～VI期の北陸系土器を出土する遺跡で石器が見られないとして、「鉄器化が完了したものと判断できる」とした【石川1997】。一方、同文において石川氏は、弥生V期で天王山系統の土器が出土する新潟市六地山遺跡では石鎌・石錐などが伴うことから、鉄器化の普及度が北陸系土器分布圏と異なることを指摘しているように見える。土器の系統毎で石器組成についても、違いがある可能性もある。東北系土器が主体の本遺跡との比較のため、県内の弥生時代中・後期の遺跡で石器組成の判断が付きやすい遺跡を第21図、第22・23表に示した。第23表の後期の時期区分は、滝沢2005（P.61第24表参照）による。石川氏が指摘するように「石器の認定や報告の方法が一定でない」こと等が大きな問題となる<sup>11</sup>。ここでは立木宏明氏の方法【立木2001b】を基本に、原報告を元に種別を表示し、時期や土器系統別に比較を行う。これに加え、高地性集落と低地集落の石器組成を比較して、武具の強化具合・生業的側面【福宜田2002ほか】を概観する。

##### a) 阿賀川流域及び阿賀北の様相

山元遺跡では石製品を含めて518点出土しているが、剥片類を除く種別では不定形石器が最も多く、石鎌がこれに次ぐ。砾石器では磨石類が最も多い。これは、古津八幡山遺跡【渡邊・立木ほか2001・2004】とほぼ共通した様相である。剥片石器で石鎌が卓越する点は各遺跡で共通しているが、中期で低湿地に位置する道端V遺跡【前川・沢田ほか2006】や、中期主体で砂丘上に位置する長松遺跡【田辺1991】、中～後期で低湿地に位置する中曾根遺跡【青木・鈴木ほか2005】で磨石類が少ない点は重要と考える。不定形石器・磨石類の多さは、集落の存続期間や立地・定住の度合い等にかかわる可能性がある。

##### b) 北陸系中期主体の遺跡との比較

柏崎平野では下谷地遺跡【高橋ほか1979】・小丸山遺跡【品田ほか1985】・箕輪遺跡I【小野塚ほか2002】がある。このうち下谷地遺跡・箕輪I遺跡は管玉生産が行われており、両極石器・砥石などが高い比率を示している。これら玉作り関連資料を除くと、石鎌・磨石の多さが目を引く。

<sup>11</sup> 第22・23表に掲載した遺跡は、弥生時代の遺跡であること、縄文土器が出土していても弥生時代の土器に比して極端に少ないとから、仮に縄文時代の石器が混入していても石器組成に大きな変更を要しない可能性が高いと判断したものである。比較資料は山元遺跡と同様に、弥生時代後期を主体とする遺跡に加え、時期的な変遷を検討するために、道端V遺跡【前川・沢田ほか2006】など中期例も示した。ただし、遺跡毎で調査の状況は異なっており、例えば滝ノ前遺跡は工事中に見つかった緊急の発掘調査【関1972】、砂山遺跡は発掘当時の記録が残っていない。また、六地山遺跡や吹上遺跡は報告分のみをカウントしており、実際の出土数は明確でない等の制約もある。

### c) 後期の北陸系土器主体の遺跡との比較

頸城の裏山遺跡〔小池ほか2000〕、下馬場遺跡〔尾崎2006〕がある。剥片石器が非常に少ない。

山元遺跡・古津八幡山遺跡との差異は明瞭で、特に石器の出土量は大きく異なる。一方で、下馬場遺跡では磨石類の多さが際立つ。中期の北陸系土器分布圏との差異も明瞭で、後期に入り剥片石器の激減が伺える。

### d) 機能別に見た石器組成

試みに国立歴史博物館1997・櫛宜田2002の区分による機能別内訳で概観する。ただし、機能別に見た場合、不定形石器の扱いが問題になる。国立



第21図 弥生時代中後期の石器組成検討遺跡

第22表 遺跡別石器・石製品出土数

No.	遺跡名	調査石器						練石器						石製品												備考					
		石器		石斧	石錐	不規形石器	石核	その他	磨	打	研	鉋	切	石	台	石	石錐	磨	小	石	管	瓦	勾	有	バ	環	塊	切	石	製	
		尖頭器	成																												
1 山元		29	5	3	172	1	1		15	5						1	5	2						1							
2 蓬ノ前		10	4	1	8	30	1																								
3 砂山		42	19	10	1	62	26										2	1													
4 長松		29	4	2	1	24	5										3														
5 中曾根		5		2	2	1		1																							
6 道鏡V		30		3	1	2	3	2	1	9	7																				
7 古津八幡山	1	64	13	7	22	180	25	4	70	34																					
8 高鶴塚		5																													
9 藤ヶ森		8																													
10 六地山		50	7		6																										
11 大沢		5																													
12 山谷下層		11	1	3	1	16	3										3														
13 松ノ森		2	2	1		11		1																							
14 小丸山		11	3			1		2	2	1																					
15 西谷			6	1		3	8	1	2	4	11																				
16 下谷地		215	53	1	155	20		14	27	12	65	8	5	10	6																
17 箕輪		114	15	89	93	25	2		58	20																					
18 裏山		2	3	1	1	3	1	2	3	71	168																				
19 吹上		109	1		7		20	7	43	19							1	1													
20 下馬場		1	2	1	2	7	1	5	1	150	88	5					4	2													
21 平田		47	16	98	72		14	90	90	699	8	6																			

第23表 機能別出土点数と比率

No.	遺跡名	地塊	尖頭器区分	時期	集落区分	研削具・武器	魚標具	除草・穀穀共	土器具	調理具(磨石器)	灰焼・加工具	加工工具	合計	
1 山元	阿賀北	I A	中間後葉～2期	I A		29(12.3%)	1(0.4%)			15(6.4%)			190(80.8%)	235
2 蓬ノ前	阿賀北	II	2～3期	II		14(25.9%)							40(71.1%)	50
3 砂山	阿賀北	III	中間後葉～2期	砂丘上		61(37.2%)	1(0.6%)			2(1.2%)			100(51.0%)	184
4 長松	阿賀北	II	中間後葉～1期	砂丘上		33(52.3%)							3(4.8%)	63
5 中曾根	阿賀北	II	中間後葉～1期	津原微高地		7153.8%)							1(7.7%)	538.4%)
6 道鏡V	阿賀北	II	中間後葉	津原微高地		30(50.8%)		3(5.1%)		9(15.3%)	1(1.7%)		16(37.1%)	59
7 古津八幡山	信濃川右岸	I A	1～4期	高地		78(19.4%)		1(0.2%)		70(17.4%)	4(1.0%)		250(62.0%)	403
8 高鶴塚	信濃川右岸	I A	中間後葉～2期	高地		5(100.0%)								5
9 藤ヶ森	信濃川右岸	II	中間後葉～4期	高地		8(100.0%)								8
10 六地山	信濃川左岸	II	1～2期	高地		6(75.0%)							1(12.5%)	6
11 大沢	信濃川左岸	II	1～2期	高地		12(34.2%)				3(36.0%)			20(57.1%)	35
12 山谷下層	信濃川左岸	II	1～2期	高地		4(21.1%)				1(5.3%)			14(73.7%)	19
13 松ノ森	信濃川左岸	II	中間後葉～1期	高地		11(55.0%)							2(10.0%)	20
14 小丸山	柏崎平野	II	中間中～後葉	高地									16(40.0%)	37.5%)
15 西谷	柏崎平野	II B	2～5期	高地									3(7.5%)	40
16 下谷地	柏崎平野	II	中間中～後葉	高地		215(36.3%)							35(5.9%)	327(55.3%)
17 箕輪I	柏崎平野	II	中間中～後葉	高地		114(28.3%)							58(14.4%)	402
18 裏山	頭城	I A	2期	高地		6(2.4%)							3(1.2%)	281
19 吹上	頭城	II	中期中～後葉	平地		109(48.9%)	1(0.4%)	15(6.7%)			7(3.1%)	20(9.0%)	71(31.8%)	223
20 下馬場	頭城	II	2～3期	高地		4(1.5%)	2(0.7%)		1(0.4%)	150(56.0%)	5(1.9%)	106(39.5%)	268	
21 平田	佐渡	III	中間中～後葉	平地		47(4.3%)		6(0.6%)		90(8.3%)	14(1.3%)	933(85.6%)	1090	

歴史博物館1997・補宜田2002の区分によれば「加工具」となるが、不定形石器にスクレイパーなどの完成品に加え、製作途中の失敗品等を含む可能性がある。また、本稿では磨石・敲石・凹石を一括して磨石類としている。これは「磨面」「敲打痕」「凹痕」のうち複数の使用痕が一つの個体に含まれているためである。「調理具」に区分されているが、異なる種類の凹痕があることから、同一の機能か否かは問題が残る。以上、大きな制約があるものの、試みとして区別の石器組成を見てみたい。本遺跡は、狩猟具・武器12.3%、調理具6.4%、加工具が80.8%となり、圧倒的に加工具が多い。比率は若干異なるものの、加工具が卓越する点は古津八幡山遺跡とほぼ同じである（狩猟具・武器19.4%、調理具17.4%、加工具62.0%）。このような傾向は、補宜田氏のⅡ 3類（武装強化しなかった集落で、収穫具欠落・調理具卓越）となり、石器組成から戦乱や緊張状態を想定できない。

狩猟具・武器が卓越するのは、沖積微高地の道端V遺跡・中曾根遺跡や砂丘上の長松遺跡で、50%以上の比率を有する。また、砂丘上の砂山遺跡も37.2%と高い比率を誇り、高地性環濠集落の本遺跡や古津八幡山遺跡より狩猟具・武器とされたものの比率が高い傾向にある。この要因としては、遺跡の主要時期が中期であること（道端遺跡・長松遺跡）や、不定形石器・磨石類の少なさに起因するためと思われ、緊張状態を反映した結果、低地の遺跡で狩猟具・武器が多いとは考えがたい。

## B ガラス小玉について

本遺跡では墓域と考えるA地点1TのSK1からガラス小玉72点（完形品68点、半成品4点）が出土した。SK1は完掘していないことから、これ以外に副葬品が存在する可能性があると共に、ガラス小玉の数量も更に多くなる可能性がある。検出したガラス小玉は1つの墓の副葬品としては特筆すべき数量であるため、弥生時代における県内の出土例を中心として出土分布状況を概観する。

県内でガラス小玉の出土したのは10遺跡である。このほかに上越市（旧柿崎町）木崎山遺跡〔高橋ほか1992〕で丸玉が検出されているが、古墳時代の可能性が高い。現状において当該期のガラス製品は小玉が圧倒的に多い。ガラス小玉は上越市裏山遺跡〔小池ほか2000〕の6点を筆頭に、長岡市原山遺跡〔小林1992〕で複数点、新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡〔渡邊・立木ほか2001・2004〕で2点、それ以外は上越市吹上遺跡〔筮沢ほか2006〕・長岡市横山遺跡〔広井・小林1992〕・新潟市（旧巻町）大沢遺跡〔甘粕ほか1982〕・村上市堂の前遺跡〔埋文事業団ほか2008〕で各1点が報告されているにすぎない。遺構内出土は裏山遺跡1号竪穴建物（2点）・4号竪穴建物（3点）、大沢遺跡4号竪穴（1点）に限られ、その他は包含層・表土からの出土である。山元遺跡例と同じように、弥生時代の墓からの出土例は現状ではない。特異な例として長岡市（旧寺泊町）諏訪田遺跡で管玉に似た棒状品が確認されているが、孔がない〔寺村1991〕。帰属時期は明確でないが、弥生時代中期の可能性がある<sup>1)</sup>。

ガラス小玉の帰属時期については、遺構出土資料が少ないとから明確にし難いが、各遺跡の盛行年代から推定すると、吹上遺跡が弥生時代中期に通る可能性が残るが、それ以外は弥生時代後期の可能性が高いと考える。県内では後期に入り、出土例が増加する可能性が高い。後期に入り、ガラス玉の分布が拡大する点や、量的に増加することが指摘されており〔富樫2003ほか〕、県内例はこの状況と合致する。ガラス小玉出土遺跡は、大沢遺跡・堂の前遺跡を除いて環濠集落であり、このうち裏山遺跡や古津八幡山遺跡

<sup>1)</sup> 諏訪田遺跡ではこのほかに「淡いコバルト色で一部が風化しているガラス製の小玉（厚さ6.8mm、径8.2×8.0mm、孔径上部1.8mm、下部1.6mm、重さ0.7g）が採集されている」という〔寺村1991〕

は本遺跡と同様に高地性環濠集落である点も重要な要素である。

次に、北陸の出土状況について雑感することにしたい。富山県では久々氏らの集成がある〔久々ほか2003〕。弥生時代の例としては集成されたもののうち、ガラス小玉は8遺跡で出土しており、このうち3遺跡は墳墓である。福野町安居墳墓群7号墳では31点以上、南太閤山I遺跡3号方形周溝墓では6点などがある。なお、このうち安居墳墓群7号墳は拔根の際に出土し、主体部は未完掘のため、実際の数量は更に多くなるという。

このような大量副葬は、旧国では能登にあたる石川県高松町中沼C遺跡2号方形周溝墓においても認められる〔折戸1987〕。2号方形周溝墓は南北9.8m、東西10.3mの規模を有し、2.75×1.3mの主体部からガラス小玉112点もの出土が報告されている。ガラス小玉が多量に副葬された墓は、北陸内でもそれほど規模の大きな墓ではないことが重要となろうか。

山元遺跡出土品については第VI章での記述とおり、素材はカリガラスであり、引き伸ばし法で製作されている。上記の県内例は全点で確認してはいないものの、青灰色の色調を呈するものが多く、肉眼での見解であるがカリガラスの可能性が高いと考えている。東日本全体でこのような傾向が看守できるとの指摘もあり〔肥塚1997・富樫2003など〕、一連のルートにのって搬入された可能性が高い。搬入先については、限定できないものの、日本海側では丹後で多量副葬が著名である。ガラス製品の卓越から「丹後王国」との評価もあり〔富樫2003〕、中沼C遺跡2号方形周溝墓にみる能登での大量副葬、丹後と北陸北東部の土器様相の類似〔田嶋2007など〕、能登での天王山系土器の出土等から、丹後を中心とした日本海側のルートでもたらされた可能性が高いと考える。

## C 土器の年代について

### (1) 東北系

本遺跡で主体的な土器群であり、在地の土器と考える。出土点数は多いものの、残存率が高い土器はそれほど多くないことに加え、廃棄の同時性が確認できるものは限られている。ここでは、これまでの研究成果に照らし合わせ、本遺跡出土の東北系土器について検討を試みる。

東北の後期前半に位置付けられるものに、福島県白河市天王山遺跡出土土器を標識とする天王山式土器がある。1950年代に発掘調査が行われ、伊藤信雄氏〔伊藤1950〕・坪井清足氏〔坪井1953〕・中村五郎氏〔中村1976〕・石川日出志氏〔1990・2000・2003・2004〕らにより、編年的位置付けの大枠が定められた。交互刺突文を一つのメルクマールとするこの土器の編年的位置については、後期説と中期説があり、新潟県内を含めた北陸の研究者は中期説〔田中1989、田中・丸山1999など〕、東北の研究者及び石川日出志氏は後期説を鮮明に打ち出している〔中村1976、石川1990・2000aなど〕。前者の根拠は、県内を中心に北陸の諸遺跡で、中期の小松式や山草荷式・宇津ノ台式と天王山式が出土することであったが、古津八幡山遺跡の状況等からも主体は後期と考える。ここでは、近年、報告例が増加した日本海側の変遷を確認したち、福島県の状況を加味して山元遺跡出土土器の年代を考えたい。



第22図 県内における弥生時代のガラス小玉出土遺跡

天王山式とはほぼ同時期とされる村上市砂山遺跡や、後続する滝ノ前遺跡が本遺跡を中心に半径5km内に分布しており、野田豊文氏により具体的な変遷が提示されている〔野田2003・2005など〕。野田氏は本遺跡周辺に位置する砂山遺跡・滝ノ前遺跡の土器群を整理し、越後・日本海側の様相として中期後葉～後期後葉までを、①砂山1・2群→②砂山3群→③砂山4群→④滝ノ前2・3群(砂山5群)の序列を示した〔野田2003〕。東北の型式との併行関係においては、①が宇津ノ台式、②が(仮称)和井内東式・能登段階、③が天王山式、④が屋敷・明戸段階とした。

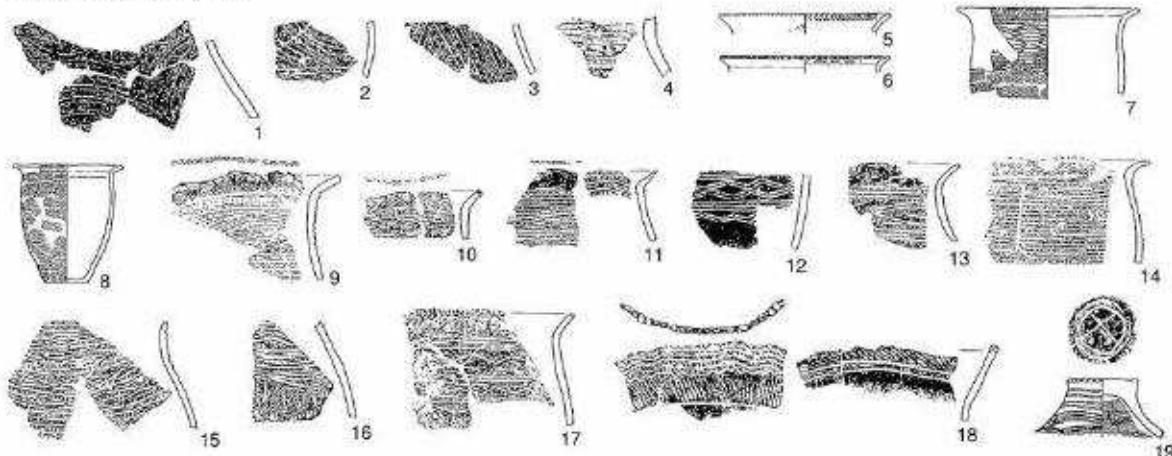
石川氏は福島県の資料に限定し、天王山式を和泉段階(1a期)～能登段階(1b期)～天王山段階(2期)とし、後続する土器群に屋敷段階をあてる〔石川2004〕。使用した資料は若干異なるものの、併行関係については日本海側の野田氏②が福島1a・b期に、③が福島2期、④が屋敷段階であるなど、野田氏の見解とおおむね一致している。両氏により示された変遷感を第23図に示した。石川氏が示した日本海側の特徴を第23図で確認すると、a. 頭部文様帯が発達し、重菱形文が多用される(21～23、25、32、33)、b. 口縁部の内湾・伸びが石川氏の1期から認められる(20・25など)、c. 口縁部内面に幅狭い文様帯(21・27など)、d. 口縁部上端の幅狭い帯に短沈線(27、28～30)、e. R L繩文の多用・条が縱走するような斜め回転施文(32・33など)、の5つが挙げられている。また、野田氏の砂山3・4群を日本海側の天王山併行期として「砂山式」と提唱している。

以下、野田・石川両氏によって示された変遷感を要の文様で示すと、砂山式(砂山3・4群)は石川氏が示した上記の特徴a～eに加え、台形刺突列によるものを含む交互刺突、続く滝ノ前2群では交互刺突文は存在するものの、台形刺突によるものは認められない。また、滝ノ前3群では交互刺突文は明確ではなく、区画文は沈線ないし刺突列に変わっている。一方、口縁部は頭部が直立して口縁部が若干肥厚したものと、口縁部がくの字のもの主体(砂山式)から、口縁部が肥厚せずに頭部の作出が不明瞭なもの(滝ノ前2・3群)や、口縁部が薄手で先端が先細りになるもの、口縁部が長いものが主体(砂山5群)となる。胴部最大径は上位から中位・下位に変化する。これらの特徴を確認のうえ、本遺跡資料を概観する。

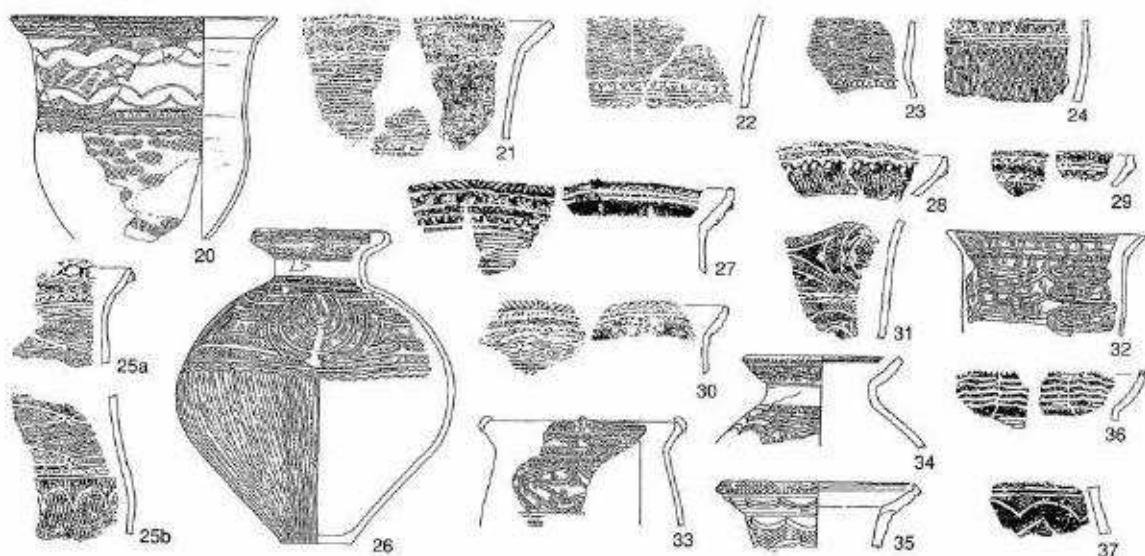
縦堀2：比較的残存率が高い42・47・119の甕をみる。いずれも1層で検出したものである。甕のIIa文様帶には繩文地に重菱形文が施される。交互刺突文は口頭部界に施された42、頸胴部界に施された119、口縁部・頸部には施されず、残存部において確認できない47がある。交互刺突文が施された42・119は比較的長い口縁部上位には上向きの連弧文が、下位には単位の細かな下向きの連弧文が巡る。47は保留部分を残すものの、42・119は野田氏の砂山3・4群、石川氏の砂山式と共に通点は認められるものの、後出的要素が強い。共通点として頸部に重菱形文が挙げられるが、繩文地に施されている点、太い沈線であること、構図がやや崩れること等は、砂山式よりも後出的要素と考える。野田氏の砂山4群にあたる第23図33においても、繩文地にやや崩れた重菱形文が施されているが、本遺跡出土の42・47・119は口縁部が長い点から後出的と考えたい。また、交互刺突文は典型例で、砂山式の特徴である台形刺突列ではないこと、口縁部が拡張していること、口縁部内面の文様を欠く点、口縁上端に沈線区画されたものがないなども根拠となる。

一方で、滝ノ前2・3群(砂山5群)との比較においては、古い要素が多いと考える。滝ノ前2・3(砂山5群)は、出土量が少ないと特徴が明確でないが、重菱形文が確認されていない点や、口縁部先端が先細りとならない点から、滝ノ前2群との相関について保有部分を残すが、滝ノ前3群・砂山5群よりも古相を呈する。砂山式からの系統を追える要素が多いことから、砂山式(砂山3・4群)一本遺跡縦堀2～滝ノ前2・3群という変遷を想定したい。

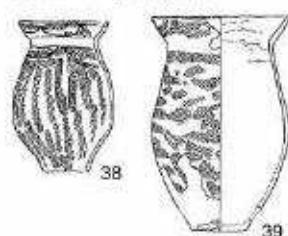
砂山1・2群(中期後葉)



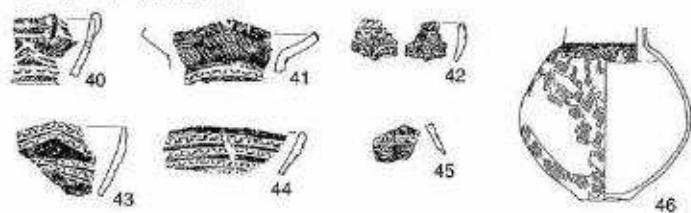
砂山3・4群(後期前葉)



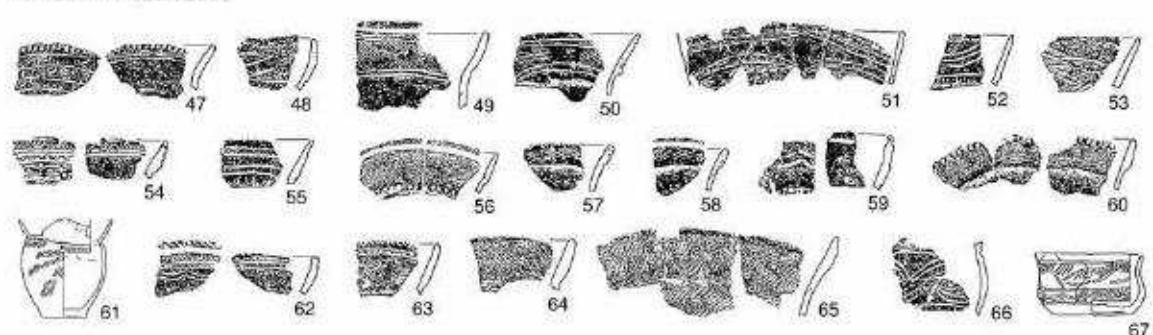
砂山5群(後期後葉)



澗ノ前2群(後期後葉)

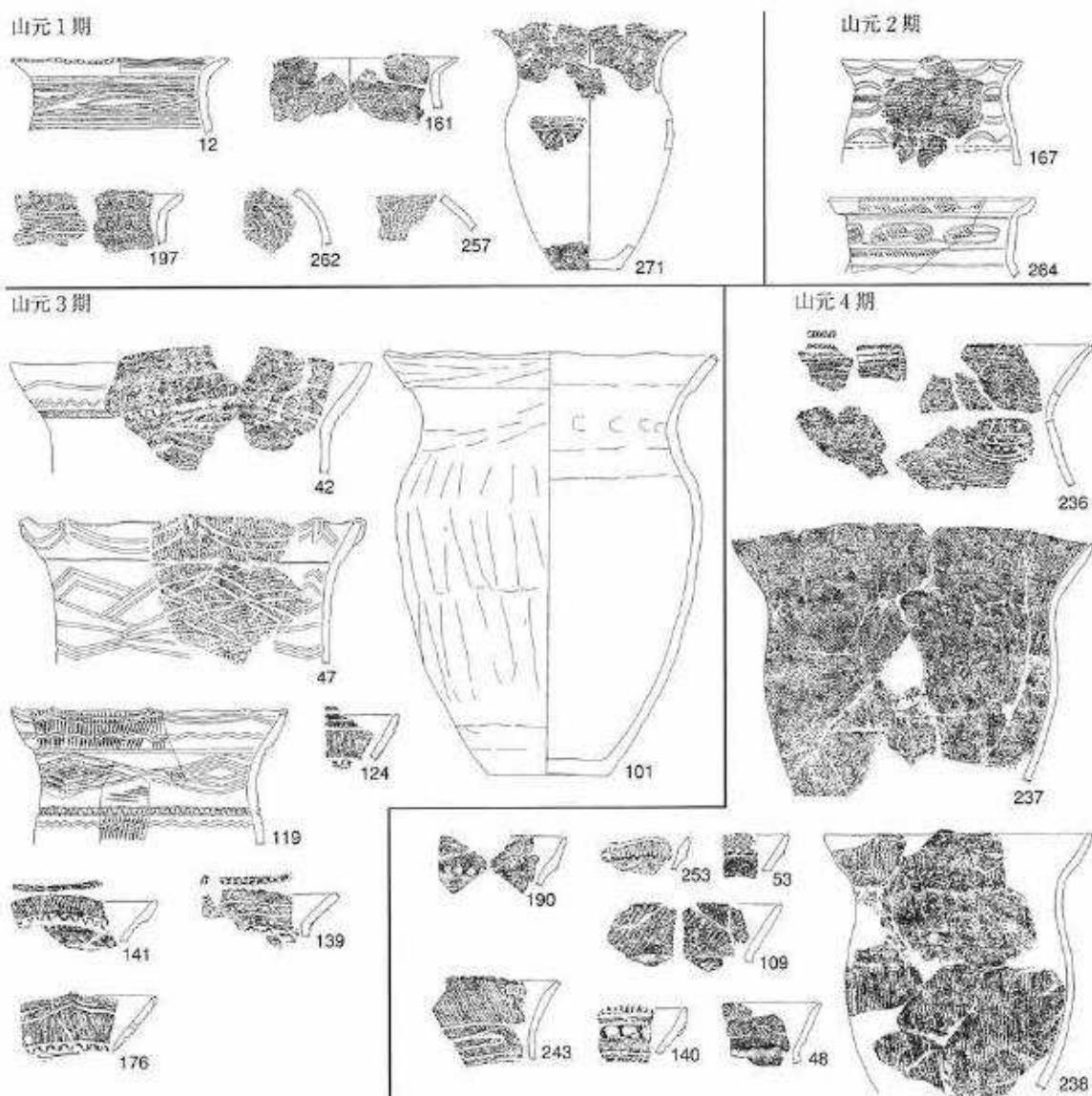


澗ノ前3群(後期後葉)



第23図 砂山・澗ノ前遺跡の土器 (5~8・20~25・32~33・38~39・46~61はS=1:10, その他は1:6)

36T濠1（101）と30T濠5（236～238）：残存率は高いものの文様が乏しい。236が続縄文と考える以外は、東北系である。36Tの101は全形が把握できる資料で、口頸部は頸部の直立が明瞭でなく、口縁部が肥厚して長いⅢ・5類である。ヘラナデが施されたのみで、文様を欠くE類であることから、時期比定は難しい。保留部分を残すが全体の器形から検討する。口頸部の形態は縦堀2の119に類似する。胴部最大径が上位に位置することや肥厚する口縁からも、同じく粗製土器である砂山5群の第23図38・39よりも古いと考える。滝ノ前2群とは比較できないが、滝ノ前3群の第23図49よりも口縁部形態が古い様相を呈する。このことから、縦堀2と同時期か若干後出する要素はあるが、砂山5群・滝ノ前3群よりも古いと考える。一方、30Tの237・238は同じく粗製のE類であり、時期比定は形態から行う。口頸部形態はⅢ・2類（238）と、更に頸部の直立化が退化しているが、Ⅲ・3類（237）に分かれれる。238は前述の101に比して口縁部の肥厚は認められない。胴部最大径も中位にあることから、後出する要素が多い。砂山5群の38・39との比較では、口縁端部は先細りせず、胴部最大径がよりも上位にあることから、古相を呈する。口頸部が滝ノ前3群の49と類似することから、滝ノ前3群より古くなることはあっても新しくなることはないと考える。237



第24図 山元遺跡出土土器の時期区分 ( $S = 1 : 6$ )

は比較する資料がないが、胴部最大径の位置から砂山5群よりも先行するものと考える。

特徴が少ないため明確にできないが、砂山3・4群→縦堀2→36Tの101（滝ノ前2群？）→30T（237・238）→砂山5群（滝ノ前3群）と考える。

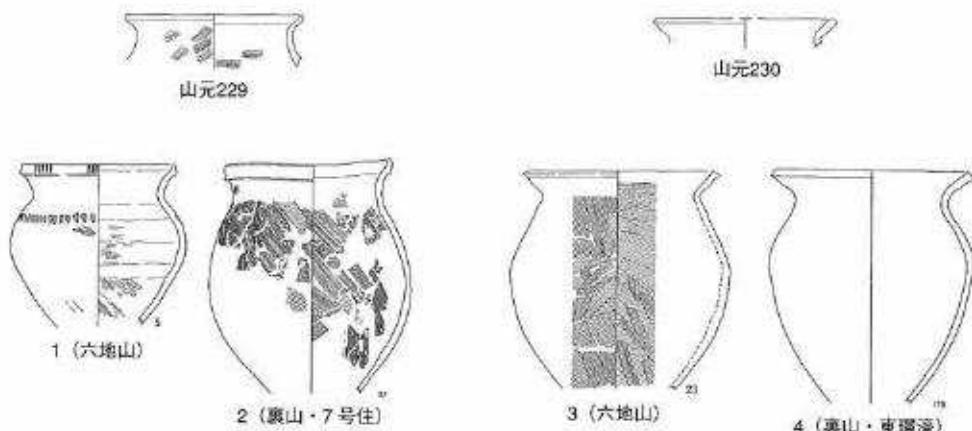
その他：遺構出土資料のうち、比較的残存率が高いものを検討してきたが、おむね砂山式と滝ノ前2・3群の間に位置付けられるものが多い。以下では包含層出土資料も含め、砂山式、滝ノ前2・3群に併行するものを抽出し、縦堀2出土の42・47・119（以下、縦堀2）との比較を行う。

砂山式に比定できるものには167がある。口縁部と胴部界には台形刺突列が巡る。口縁部と胴部には比較的短く、上下には半单位ずらした対向する連弧文が巡る。細かな前後関係には問題を残すものの、砂山式に併行するものと考えたい。なお、167はⅢ層出土であり、Ⅲ層堆積後に築造された縦堀2との関係についても矛盾はない。264は頸部文様等で保留部分を残すが、縦堀2出土土器よりも先行する要素が認められる。頸部が直立し、短い口縁部は肥厚している。器形は砂山式では明確でないが、石川氏の天王山1b期の福島県能登遺跡〔大越ほか1990〕に類例を求める。

一方、滝ノ前2・3群とほぼ同じ特徴を持つものは多い。滝ノ前2群の特徴（口縁部が肥厚せず、交互刺突文を持つもの）を持つものは本稿の文様b類に近い。口縁部形態は2類（124・176）、3類（139）、4類（141）がある。口縁部形態等から、縦堀2と同時期としても、より古くはならない。滝ノ前3群（口縁部が肥厚せず、区画文は退化した交互刺突文か沈線ないし刺突列）の特徴を持つものの口縁部形態は、2類（140）、3類（243）、4類（53・253）、5類（190）があるが、口縁部下端が肥厚するものの先端が先細りとなる傾向がある（53・190・253）。また、砂山5群の特徴である口縁部の薄手化ないしは先細りしたもの（48・109）を含め、文様の簡略化（140・243・253・190・53）などがあることから、これらを縦堀2出土の42・47・119より後出的な要素と考える。

## （2）後期北陸系（4群）土器について

北陸系土器の出土数は限定され、図化したのは高杯1点、高杯及び器台1点、壺3点、甕3点である。以下では以前に示した区分〔滝沢2005b〕を基本に時期比定を行う。高杯は棒状脚を呈することから1～2期の所産で、それ以上の時期の限定は困難である。甕の口縁部形態は有段とくの字である。弥生時代後期～古墳時代前期のく字甕については、かつて検討を試みたことがある〔滝沢2005a〕。229は胴部と口縁部の境が不明瞭であり、口縁部は屈曲して外傾して、端部がつまみ上げられている。滝沢2005aの分類では口縁部I d類の範疇に属するものと考える。口縁部I d類のうち、口縁部と胴部の境界が不明瞭なもの



第25図 山元遺跡出土の後期北陸系土器と類似資料 (S=1:6)

は新潟市六地山遺跡〔新潟市1994〕や、上越市裏山遺跡7号住〔小池ほか2000〕など1～2期に限定される。のことから229は、1～2期の所産と考える。更なる限定はできないであろうか。229は口縁端部のつまみ上げがシャープである点や、いわゆる付加状口縁ではないことから裏山遺跡7号住出土例よりも六地山遺跡出土の1に近い。また、口縁部と胴部の境界付近の特徴は異なるものの、口縁端部のつまみ上げは、六地山遺跡の1にも近い。のことから229は1期の可能性が高い。

230は口縁部が比較的短く、肥厚して外傾する幅広い端面を有するものである。滝沢2005aのIIg類に相当する。県内での出土例は多くないものの、230のように外傾度が高く、幅広な端面を有するものは1～2期を中心に認められる。1～2期の類例としては、前述の六地山遺跡〔新潟市1994〕、裏山遺跡〔小池ほか2000〕に類例がある。前者は口縁部と頸部の境界が明瞭で、胴部最大径が中位にあるものの、後者は、口縁部と胴部の境界が不明瞭であり、胴部最大径が上位に位置する。口縁部片の230は胴部の形態が不明なもの、口縁部と胴部の境界が明瞭なことから六地山遺跡例に近い。以上の検討結果から229・230は1～2期の所産であり、1期に遡る可能性もある。

### (3) 山元遺跡出土土器の編年的位置

以上の検討結果から、本遺跡出土土器は1・2群を山元1期、3群のうち古相を呈するものを山元2期、新しい様相を呈するものを山元3期、より後出的な要素を持つものを山元4期とする(第24図)。野田・石川両氏との比較では山元1期が中期後葉で野田氏の砂山1・2群、山元2期が後期前葉で、野田氏の砂山3・4群、石川氏の砂山式、山元3期が後期後葉で滝ノ前2群ないしはそれに先行するもの、山元4期が後期後葉でも新しい段階で野田氏の滝ノ前2・3群・砂山5群と考えたい。

山元1・2期(中期後葉～後期前葉)は日本海側の特徴が広範囲に認められる段階、山元3期(後期中葉～後葉)は、頸部の重菱形文、RL縦文の多用・条が縦走するような斜め回転施文など、砂山式の要素を残しながらも、頸部文様帶の無文化、口縁部内面に幅狭い文様帶や口縁部上端の幅狭い帯に短沈線を欠くものや、口縁端面に縄文施文されたものが増加するなど、序々に変質する段階である。山元4期(後期後葉～末葉)は、砂山式の諸要素が更に消失する段階と考える。北陸系土器群との併行関係は、滝ノ前遺跡や古津八幡山遺跡を介して提示すべきであるが、前者は破片資料が多いこと、後者とは様相差が大きいため難しい。十分な手続きを省いているが、併行関係案を第24表に示した。渡邊朋和氏が示した古津八幡山遺跡の編年との対比では、山元2期が古津八幡山遺跡の1期古を含みながらも、それ以前、山元3期が古津八幡山遺跡の1期新～2期古、山元4期が同2期古～新頃を想定しているが、北陸系土器群との対比を含め、大きな課題としたい。

第24表 本遺跡の時期区分と併行関係

山元遺跡 時期	野田2003	石川2004		渡邊 2001	滝沢 2005b	田嶋 2007	北陸南西 部型式	畿内
		日本海側	福島					
1期	18TSK2	砂山1・2群	山草荷式	川原町口式	1期	V-1 V-2 V-3	猫橋式	IV様式
2期		砂山3群	砂山1式	天王山1a期(和泉)				
				天王山1b期(能登)				
3期	縦堀2 36T塗1	砂山4群	砂山2式	天王山2期(天王山)	1期古	2期古 2期新	2-1群 2-2群	法仏式
					1期新			
4期	30T塗5	滝ノ前2・3群	滝ノ前2・3群	屋敷段階	2期古 2期新 3期	2期古・ 中・新 3期	2-1群 2-2群 3-1群 3-2群	VI様式 庄内1 月影式
					3期	4期	4群	

## 2 遺跡の動向について

### A 山元遺跡で確認された遺構について

今回の調査で確認した遺構は、斜面では環濠、平坦地部分では縦堀、土坑、掘立柱建物、ピット、土坑墓、埋甕がある。以下では、個々の遺構について山元遺跡の特徴を検討したい。

#### (1) 環濠について

環濠を構成する濠1～5の特徴、掘削された斜面の傾斜角、土壘の有無、最掘削の可能性、覆土状況については第IV章3で触れた。ここでは途切れる濠と、規模について検討を行う。

今回の調査では4か所で途切れ、1か所で重複することを確認した。重複する濠4と濠5は30Tで検出した。重複部分の距離は追及できておらず、今後の課題である。この地点は、A地点（墓域）とB地点（居住域）間の谷が最も浅く往来がしやすい地点であり、大きな意味を持つものと思われる。ただし、ほかの濠間と同様に、意義について推定の手懸りとなる遺構は確認されていない。

環濠が途切れる部分は各地で確認されており、「出入り口」とされている〔佐原2002〕。ただし、環濠の途切れが多い点でやや様相が異なる。重複する環濠、途切れる部分が多い環濠は、新潟市古津八幡山遺跡〔渡邊・立木ほか2001・2004〕があり、本遺跡と酷似する。山元遺跡・古津八幡山遺跡以外にも類例があるか否かは、現状では明確にできていない。ここでは（仮称）古津八幡山タイプの環濠とし、山元遺跡はほぼ同じようなデザインで環濠が掘削されている点を強調したい。

環濠の規模は県内の他遺跡と比しても、幅・深さ共に小さい。越後平野側の濠1は幅2m前後であるが、深さは1mに満たない。ただし、平野側から平坦部にかけて傾斜が急角度に変換する地点に掘削されていることから、深さ以上に平坦部への進入が困難と考える。一方で、南北斜面共に越後平野から視界に入りづらい東側は幅・深さ共に更に小さくなり、平坦部への進入は越後平野側よりも容易である。環濠は規模から越後平野（西）側を意識した構造となっている。

#### (2) 縦堀について

東西に長い丘陵平坦面を南北方向で分断する溝を縦堀とした。2条確認しており、西側を縦堀1、東側を縦堀2とした。機能については、①平坦地を分断する区画、②谷部までの道等の機能を推定しているが、いずれも決め手に欠ける。縦堀2は、南側斜面で環濠を構成する濠3と重複関係が確認され(61T)、濠3の埋没後に掘削されている。このことから、濠3は縦堀2と併存しないことが明らかである。縦堀の類例については、確認していない。平坦面を直交するという点では、妙高市斐太遺跡群上ノ平地区の環濠に類例が求められる〔駒井・吉田1962〕。上ノ平地区的環濠は南北に長い丘陵を「コ」字形に巡る(第30図)。上ノ平地区的環濠は発掘調査が行われておらず、遺構が半埋没になっていることからの推定である。比較資料としては制約が多いが、平坦部を直交するものとして注意を有する。

#### (3) 墓について

A地点の3つのトレンチで墓坑7基を検出した。墓坑周辺に溝等の施設が伴う状況は確認していないため、現状では土坑墓と考える。土坑墓の規模は、長軸100cm前後、150cm前後、200cm程の3つに区分できる。調査区外に伸びる1TSK1が最も大きいと考える。今回の調査区では、最も越後平野側の墓が大きく、更に豊富な副葬品を有している点が注目される。墓域が形成しえる平坦地は今回の調査区外(事業予

定地外）にも伸びることから、更に規模の大きな墓の存在が予想される。土坑墓内の付属施設として1TSK1ではピット状の落ち込みが確認された。平面プランのみの確認であるが径約20cmである。坑内の壁際ではなく、ほぼ中央であることから全国各地で確認されている「墓坑内柱穴」〔石野2001など〕にあたるか否かは明確でないが、一つの可能性として提示する。

本遺跡では明確な墓域が確認された点が注目される。県内の弥生時代後期の遺跡において、居住域と墓域が谷を隔てて明確に分離された例は確認されていない。居住域と墓域の関連については、10m内外と規模の大きなもののみ、居住域と区分された例が斐太遺跡群矢代山B地区〔佐藤2006〕である。また居住域が不明なもの、墓が単独ないしは群在する例として上越市吹上遺跡〔 笹沢ほか2006〕、長岡市(旧寺泊町)屋鋪塚遺跡〔八重樫2004〕などがある。同一平坦地内に居住域と隣接する新潟市(旧新津市)古津八幡山遺跡〔渡邊・立木ほか2001・2004〕とは明確に区分したい。

東北系土器文化圏では居住域と墓域の位置関係は明確でないが、中期後半では福島県平窪諸荷遺跡〔高島1998〕遺跡で、土坑墓群が展開していることから、本遺跡と類似する可能性がある。ただし、後期後葉の福島県では方形周溝墓が受容されており、会津では湯川村桜町遺跡〔安田ほか2005〕、浜通りでは前述の平窪諸荷遺跡などである。今回の調査において本遺跡では方形周溝墓は確認されていない。また、山形県で未確認のことから、東北系土器文化圏においても日本海側は方形周溝墓を受容していない可能性もあるうか。今後の課題と考える。

#### (4) 建物について

本遺跡ではB地点西側の22Tで掘立柱建物が1棟確認されたにとどまる(SB1)。1×1間で、長軸3.6m、短軸3.0~3.4mである。後期の東北系土器分布圏で、掘立柱建物の存在は明確でない。県内の北陸北東部系土器分布圏では上越市吹上遺跡〔 笹沢ほか2006・2007〕で確認されているが(10・12号掘立柱建物)、同遺跡の4号平地式建物を掘立柱建物としても3棟にすぎない。形態は1×1間で片側のみ棟持柱を持つもの(4号平地式建物)、1×1間？(12号掘立柱建物)、2×2間(10号掘立柱建物)があり、柱穴間は4号平地式建物が3.0~3.5m、10号掘立柱建物は1.5m、12号掘立柱建物は2.0~4.0mである。本遺跡例はやや柱穴間が広いものの、吹上遺跡例と大きな差異はないと考える。

竪穴建物は検出していないが、第IV章の記述とおり18Tでその可能性があるものを2~3棟分確認した。いずれも壁柱穴の可能性がある円形の柱穴列である。後期東北系土器分布圏では、平面プランは円形が主体であるが、隅丸方形のものも存在する(福島県明戸遺跡、山形県向河原遺跡など)。本遺跡で竪穴建物が存在するのであれば、円形を主体に隅丸方形も想定すべきである。

#### (5) 環濠・縦堀等の埋没時期について

個々の遺構の年代については保留部分を残すが、比較的土器の出土量が多い環濠を構成する濠1・5の埋没時期は、山元3~4期(滝田2005b・新潟シンボ編年1期新~2期新)、縦堀2は山元3期(滝田2005b・新潟シンボ編年1期新~2期古)と考える。重複関係では縦堀2が、濠3を切る。現状では濠3→縦堀2・濠1→濠5で埋没した可能性がある。縦堀2と濠5では放射性炭素年代でも大きな矛盾もない。環濠を構成する濠1~5や縦堀の掘削・埋没時期が異なる可能性があり、今後の大きな課題と考える。

## B 県内における高地性集落・環濠集落

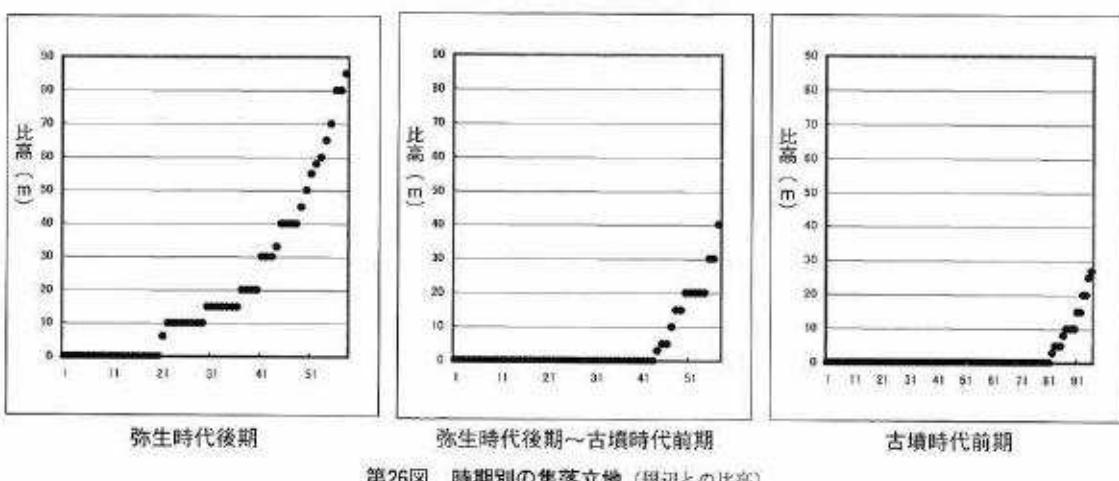
### (1) 高地性集落について

前述のとおり、現状において山元遺跡は日本海側で最北の高地性環濠集落である。新潟県は高地性環濠集落の日本海側最北の地域で、これまで確実な例として7遺跡がある（第27図・第25・26表）。以下では県内例を概観し、本遺跡の評価の助けとしたい。なお、ここでの時期区分は滝沢2005b（第24表）とする。

一般的に高地性集落は「防御」を意図した弥生時代の時代性を示す集落形態【佐原1999など】と周知されてきたが、近年では見直し論も多い。「高地に立地した集落=全てが防御集落」という解釈ではなく、遺構・遺物の検討から、生業に適した「高地に集落を構えた遺跡」もあるとの指摘があり【柴田2004ほか】、防御性の認定には多角的な視点が求められている。今回の調査で得られた情報のみで山元遺跡の「防御性の度合い」を検討することは難しいが、斜面に築かれた環濠から高地に立地した非環濠集落に比して、防御の認識は強かったことと予想する。防御性の認定については、なお検討が難しいが、ここでは県内の弥生時代遺跡の集落立地を基に、集落属性の大枠を捉えることを重視したい。

何をもって「高地」とするかには地域性が重視されるべきである。新潟県を中心とした周辺ではどのような枠組みで考えられてきたのか。周辺との比高25m以上【菅沼1993】、1993年の日本考古学協会新潟大会では、比高40mがおおむねの目安とされてきた【日本考古学協会新潟大会実行委員会1993】。試みに2005年新潟県考古学会主催のシンポジウム資料集で収集した弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡【新潟県考古学会2005】について、現在の地形から判断した比高を折れ線グラフに示したのが第26図である。弥生時代後期～古墳時代前期まで継続する遺跡や古墳時代前期に入り成立する遺跡は、周辺との比高がほとんどない遺跡が圧倒的に多い。これに対して弥生時代後期の遺跡は丘陵上に位置するものの比率が高い傾向にある。古墳時代前期に成立する遺跡は比高30m以上のものは確認できること、弥生時代後期の遺跡においても30m付近で緩やかな分布の断絶が確認できることから、新潟県内では周辺との比高30m以上の集落を広義の高地性集落と考えたい。

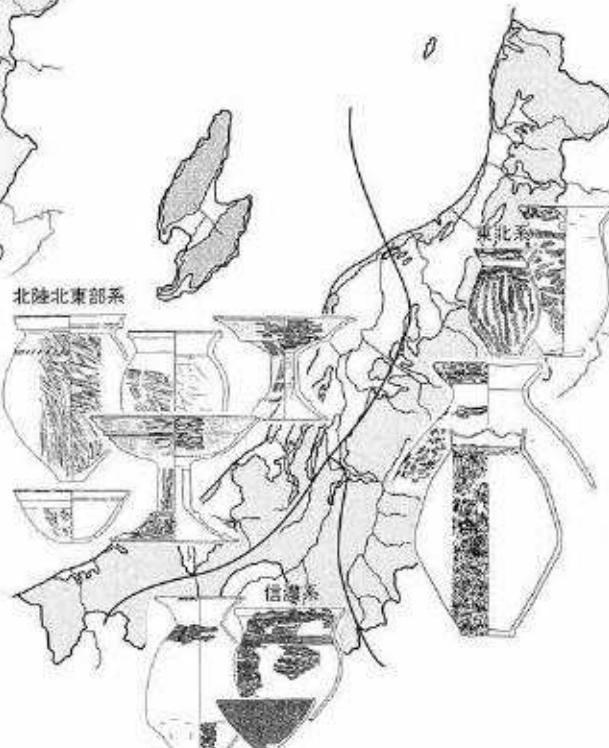
この基準でみた場合、新潟県内には21遺跡が該当する。地域別では信濃川右岸が9例と最も多く、信濃川左岸が6例、頸城が4例、阿賀北が2例である。このうち発掘調査等で環濠が確実に検出されたのは7遺跡である。一方で、21遺跡のうち発掘調査で環濠がないとされたものは、糸魚川市後生山遺跡【大森1986】、



- 高地性環濠集落 (I A)
- 独立丘陵上の環濠集落 (I B)
- △ 低地の環濠集落 (I C)
- 高地性非環濠集落 (II)



第27図 県内の防御的集落



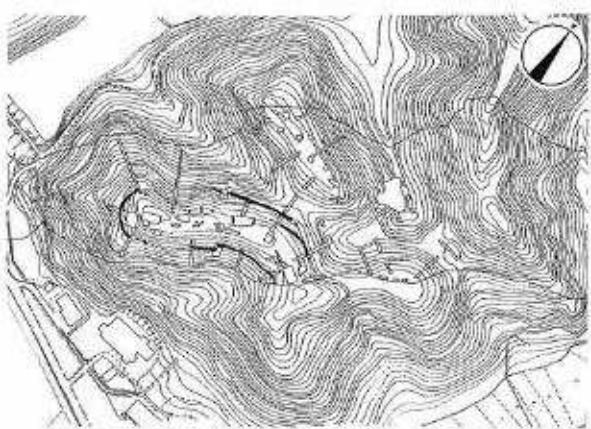
第28図 県内における弥生時代後期後半の主体的土器

第25表 県内の防御的集落 (高地性集落・環濠集落)

No	遺跡名	所在地	越域区分	時期	型式	周辺との 比較	測定	基	主体の土器群
1	山元	村上市(旧持林村)大字下助瀬	阿賀北	中期後期～後期後葉	I A	約37m	築堤	環濠外(土坑墓)	東北系
2	高ノ原	村上市大字岩手崎	阿賀北	後期後葉～古墳前期	II?	約30m	本掘		東北系
3	古津八幡山	新潟市(旧新津市)古津	信濃川右岸	後期後葉～末葉	I A	約50m	築堤	環濠外(方形切妻墓)	北陸系・東北系
4	大舟山	五泉市大字天塩下	信濃川右岸	後期	II?	約60m	築堤		北陸系
5	中店	南蒲原郡田上町大字田上	信濃川右岸	後期	II?	約55m	本掘	墓地内?	東北系
6	二ヶ山山頂	三条市大字上保内	信濃川右岸	後期	I A?	約80m	築堤		北陸系
7	鉢坂山	三条市大字如意谷	信濃川右岸	後期後葉	I A	約60m	本掘		北陸系
8	大平城	見附市鳥羽町西町	信濃川右岸	後期後葉	I A	約80m	本掘	環濠内(方形白狀墓)	北陸系
9	高錆場	見附市田井町	信濃川右岸	後期後葉	I B	15~20m	築堤		北陸系
10	岩沢	見附市名木野瀬	信濃川右岸	後期後葉	II?	約40m	築堤		北陸系
11	横山	長岡市株町	信濃川右岸	後期後葉～古墳前期	I B	約30m	本掘	環濠外(方形容溝墓)	北陸系
12	鷹山	長岡市別所町	信濃川左岸	後期	II?	約20m	築堤		北陸系
13	堅正寺	長岡市御山町	信濃川右岸	後期	II?	約45m	築堤		東北系
14	阿部山	長岡市通谷町	信濃川右岸	後期	II?	約35m	築堤		東北系
15	大沢	新潟市(旧金村町)大字福島潟辺	信濃川左岸	後期後葉～古墳前期	II	約30m	本掘		北陸系
16	山谷古墳下層	新潟市(旧金村町)大字福井	信濃川左岸	後期後葉～後葉	II	約30m	本掘		北陸系
17	桶堀原古墳下層	新潟市(旧桶井村)	信濃川左岸	後期後葉	II?	約40m	築堤		北陸系
18	大平	長岡市(旧和島村)大字北野	信濃川左岸	後期	II	約40m	築堤		北陸系
19	赤坂	長岡市(旧和島村)大字上ノ瀬	信濃川左岸	後期	II	約80m	築堤		北陸系
20	龍ヶ入街	長岡市(旧和島村)大字島崎	信濃川左岸	後期	II	30~40m	本掘	円?方形切妻墓	北陸系
21	西谷	刈谷郡羽村町大字大坂	柏崎平野	後期後葉～古墳前期	I B	8m	本掘		北陸系
22	義山	上越市大字岩本	別城	後期後葉	I A	約70m	本掘		北陸系
23	下馬場	上越市大字下馬場	別城	後期後葉～古墳前期	II	約40m	本掘		北陸系
24	吹上	上越市大字福井	別城	中期中葉～後葉	I C	0m	本掘		北陸系・信濃系
25	深蓋	上越市大字	別城	後期後葉	I C	0m	築堤		北陸系
26	發大遺跡群	妙高市(旧新井市)大字宮内ほか	頸城	後期後葉～古墳前期	I A	約50m	本掘		北陸系
27	後牛山	素魚川市	頸城	後期後葉～後葉	II	約40m	本掘		北陸系
28	平田	佐渡市(旧新井村)	佐渡	中期中葉～後葉	I C	0m	本掘		北陸系
29	葛生	佐渡市(旧新井村)	佐渡	後期?	I C	0m	本掘		北陸系

第26表 地域毎・時期別の環濠集落・高地性集落

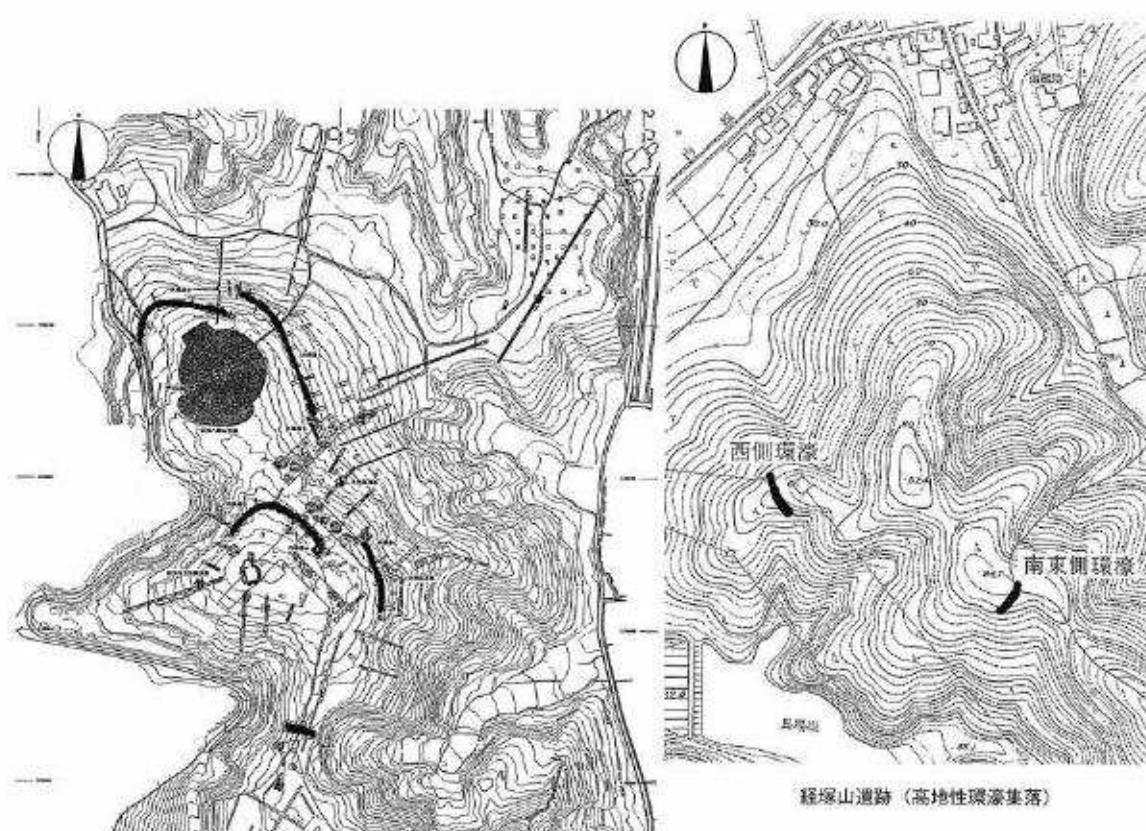
越域	中 期			後 期			合計
	環濠集落		高地性集落 (環濠不明)	環濠集落		高地性集落 (環濠不明)	
	高 地	低丘陵	平 地	高 地	低丘陵	平 地	
阿賀北	0	1	0	1	2	0	2
信濃川右岸	0	4	3	5	12	6	13
信濃川左岸	0	0	0	6	6	0	6
柏崎平野	0	1	0	1	1	0	2
魚沼	0	0	0	0	0	0	0
頭城	1	1	2	1	2	5	5
幕 築	1	1	1	1	1	1	1
合 计	0	0	2	0	2	7	14
							27



山元遺跡（高地性環濠集落）



大平城遺跡（高地性環濠集落）



経塚山遺跡（高地性環濠集落）



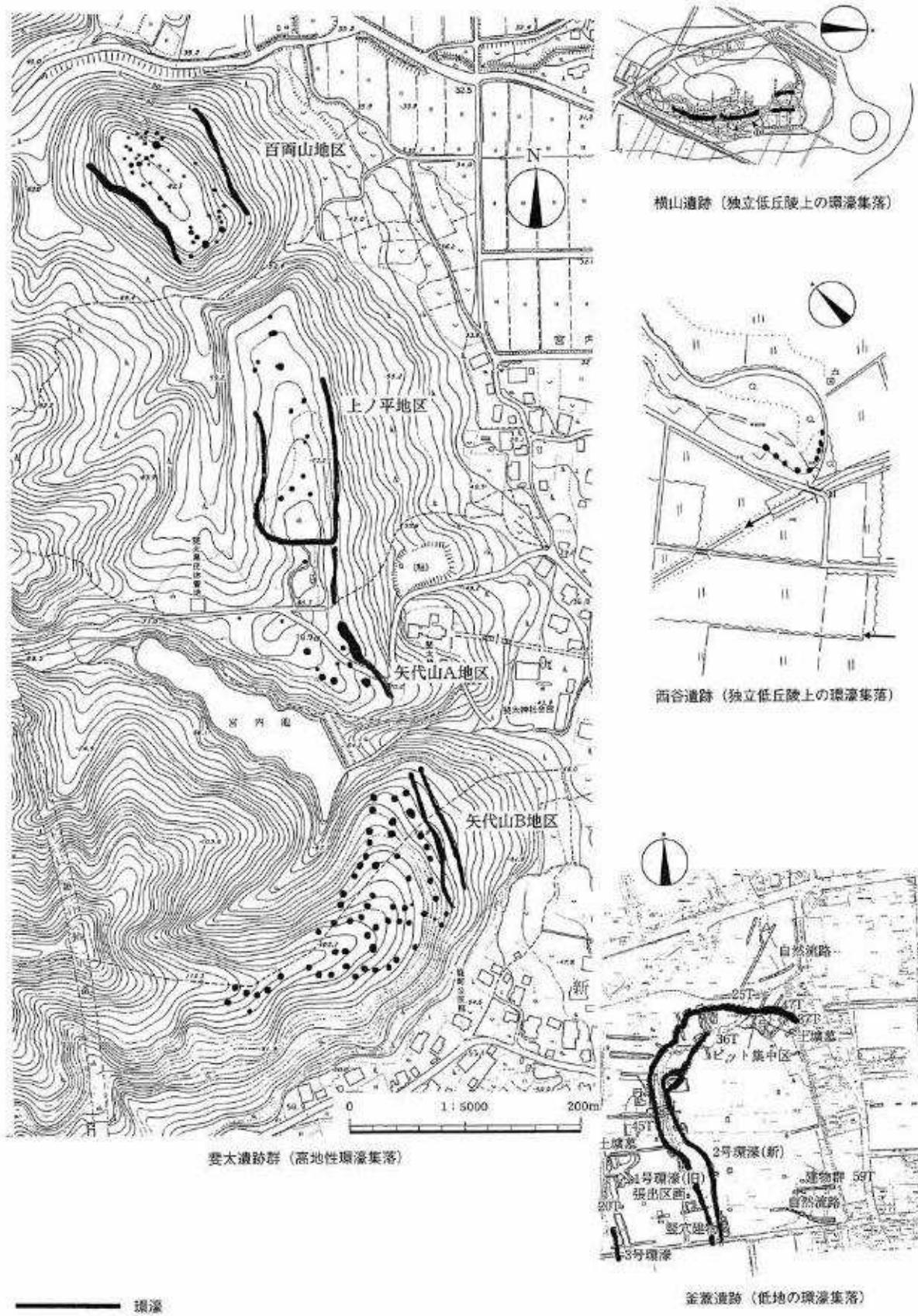
古津八幡山遺跡（高地性環濠集落）



裏山遺跡（高地性環濠集落）

—— 環濠

第29図 県内の環濠集落（1）(S = 1:5,000)



第30図 県内の環濠集落（2）(S=1:5,000)

上越市下馬場遺跡〔尾崎2006〕などわずか数例であり、五泉市大倉山遺跡〔川上1994〕など環濠が存在する可能性を含むものを数多く含んでいる。高地性環濠集落の数量は更に増加する可能性がある。

## （2）環濠集落について

集落の内部を濠で囲った集落の名称であるが、県内では山元遺跡を含めて14例確認されている。立地は、前述のとおり高地が7遺跡、比高8~20mほどの独立低丘陵が4遺跡、周辺との比高が確認できない低地が4遺跡である。環濠の掘削時期についての詳細は明確にできないが、廃絶時期から中期に掘削されていると考えられるものは2遺跡（頸城・吹上遺跡、佐渡・平田遺跡）なのに対し、後期は12遺跡と数量が増加している。地域別では、信濃川右岸が7例と最も多く、頸城が3例、佐渡で2例、阿賀北・柏崎平野で各1例が確認されている。

## （3）高地性集落・環濠集落の分布と盛行時期・廃絶時期

### a) 分布と土器の地域相

県内における弥生時代後期後半を中心とした土器様相を第28図に示した。地域毎では検出された資料に差異があるため、一部で保留部分を残すが、現状における傾向は指摘できる。従来は阿賀野川を挟んで北側で東北系、南側で北陸系と考えられてきたが、状況はより複雑である。東北系は阿賀野川以北を中心に、魚沼地域の魚野川流域まで分布しており〔安立2005〕、一部信濃川右岸の南方にも及ぶ。一方で北陸北東部系土器は、阿賀野川以南の海岸平野部を中心に分布する。信濃系（箱清水式）は魚沼地域の信濃川上流域から頸城の山間部にかけて主体となっている。今回の地域区分では、一地域で比較的単一の土器様式が確認できるのは、阿賀北・柏崎平野・佐渡に加え、信濃川左岸でその可能性が高いほかは、複数の土器様式が確認できる。信濃川右岸でも阿賀野川流域にあたる古津八幡山遺跡では、細別時期での変遷は予想されるが、東北系と北陸北東部系がほぼ同数認められるばかりか、器形が東北系で調整が北陸的とされる「八幡山式」が存在している〔渡邊2001〕。

高地性集落・環濠集落との分布との関連については、北陸北東部系土器と東北系土器の接点となる信濃川右岸で確認例が多く、単一の土器様相の地域では少ない傾向にある点を指摘したい。

### b) 盛行時期と廃絶時期

#### 1) 中期

低地の環濠集落が2例確認されている。頸城・吹上遺跡、佐渡・平田遺跡で、環濠の掘削時期や埋没時期は明確でないが、共に中期中葉~後葉を主体とした集落で、いわゆる小松式系統の北陸系土器分布圏内の遺跡である点、玉作り生産が活発に行われた遺跡で、後期まで存続しない等の共通点がある。

#### 2) 後期

高地性集落、環濠集落の数量が飛躍的に増加している。以下、発掘調査が行われ、廃絶時期等がある程度、把握できる遺跡の状況を概観する。

**高地性環濠集落：**最も早く集落が築造されたのは古津八幡山遺跡〔渡邊ほか2001・2004〕で、1期後半頃である。山元遺跡や二ツ山山頂遺跡も当該期と考えられ、北部で成立が早い点が注目される。第1次の成立時期と考えたい。2期に入ると大平城遺跡〔関・戸根1974〕・経塚山遺跡〔金子1999〕・裏山遺跡〔小池ほか2000〕・斐太遺跡群〔佐藤2005・2006など〕などが成立している。第2次成立時期であり、最大の画期と考える。現状ではこの時期以降、新たに高地性環濠集落の築造例はない。

1~2期に成立した高地性環濠集落のうち、比較的規模が小さな大平城遺跡・経塚山遺跡・裏山遺跡・山元遺跡は短期間に集落が廃絶されており、3期までは継続しない。2期は第2次成立時期もあり、第

1次廃絶時期にもあたる。これに対し規模が大きな古津八幡山遺跡や、斐太遺跡群は3期にも継続する。斐太遺跡群は谷を隔てた4地区で環濠が造営されており、このうち矢代山B地区の外環濠は2期、内環濠は3期で埋没しており、段階的に環濠が廃絶されている。これ以外の地区については明確ではないが、上ノ平地区24号住居は5期である。環濠埋没後も集落が維持された可能性もあるが、現状では明確でない。情報が少ないものの、中小規模の高地性環濠集落の廃絶時期とは一致しない点を強調したい。これは古津八幡山遺跡も同様であり、3期には継続している。環濠出土土器の中には4期のものもあることから、当該期を環濠の廃絶時期と考えたい。

**独立低丘陵環濠集落**：西谷遺跡〔滝沢ほか1992〕は、高地性環濠集落の盛行時期と同様に2期に成立する。横山遺跡は中期後半の資料も多いが、弥生後期の土器は4期頃（一部、3期か）を主体としており、高地性環濠集落の成立時期とは異なる可能性が高い。また、両遺跡の環濠埋没時期は、いずれも5期である点も高地性環濠集落とは異なる。

**低地環濠集落**：釜蓋遺跡〔笠沼ほか2008〕1例のみである。後期前葉の土器も散見するが、主体は4期以降である。2条検出された環濠の廃絶時期は、1号環濠が4期で、2号環濠は5期である。成立時期は独立低丘陵上の横山遺跡に近く、廃絶時期も、高地性環濠集落の主体的な時期とは異なる。

**環濠集落の廃絶時期**：限られた情報での検討であるが、環濠集落は立地毎で成立・廃絶時期で差異がある。高地性環濠集落の成立時期は1・2期が主体であるのに対し、独立低丘陵の環濠集落は2期と4期、低地の環濠集落は4期で、序々に低地化の傾向が見て取れる。一方、環濠の廃絶時期も中小規模の高地性環濠集落（2期）⇒大規模環濠集落（3・4期）・低地の環濠集落（4・5期）⇒低丘陵の環濠集落（5期）と、低丘陵の環濠集落において遅くまで環濠が廃絶されない点を指摘したい。

**高地性非環濠集落**：情報量が少ないため顕著な傾向は見いだし難いが、成立時期は2期が最も多い。比較的広範囲に発掘調査が行われた遺跡は存続期間が長く、下馬場遺跡〔尾崎2006〕・大沢遺跡〔甘粕ほか1982など〕・滝ノ前遺跡〔関1972、石丸ほか2003など〕は5期まで続く。小規模なものも、越後では2期（ないしは1期）に成立して、短期間で終了する遺跡が多く〔滝沢1995・1999〕、3期が大きな断絶時期である。これは中小規模の高地性環濠集落と一致した動きと評価する<sup>1)</sup>。

**(3) 県内の動向からみた山元遺跡**  
土器編年に大きな課題を残すが、山元遺跡の環濠廃絶時期は、県内の小規模な高地性環濠集落と一致すると考える。成立時期は同じく県北部の古津八幡山遺跡とほぼ一致する可能性が高く、途切れる環濠のデザインを含め、一致する点が少なくない点を指摘したい。

第27表 新潟県における後期環濠集落の存続期間

遺跡名	立地	規模	中期	1	2	3	4	5
山元	高地	小規模	…					
古津八幡山	高地	大規模		■		■	…	
大平城	高地	小規模	…					
延深山	高級	小規模						
裏山	高級	小規模						
百両山	高級				…	…		
上ノ平・矢代山A	高級	大規模			…	?	?	…
矢代山B	高級				…	■		
横山	低丘陵	小規模		■		…		
西谷	低丘陵	小規模			…	…	…	
釜蓋	低級	大規模		…	…			■

… 土器・若手の追跡有り。

■ 主体時期

1) 一方、地域的な特徴として、佐渡では遺構が明確でないものの、越後で遺跡数が増加する2期の遺跡は極めて少なく、最後で集落の断絶時期にあたる3期から遺跡数が多くなる。

## 要 約

- 1 山元遺跡は、村上市（旧岩船郡神林村）大字下助瀬字山元に所在する。標高は約40.0mである。
- 2 日本海沿岸東北自動車道建設に先立つ試掘調査で新発見した遺跡である。試掘確認調査の段階で遺跡の重要性が確認できたことから、本発掘調査は実施せず、現状保存が確定した。調査面積は実質で1,705m<sup>2</sup>である。
- 3 国土地理院5万分の1「村上」では、「山元」と記された越後平野の北端の丘陵上に位置する。この地点は旧岩船潟の縁辺にあたる。眺望の良い丘陵で、南西側では越後平野が一望でき、天候により約80km西側の弥彦山・角田山をみることができる。
- 4 調査の結果、弥生時代中期後葉～後期後葉の遺構・遺物を確認した。
- 5 遺構として環濠、縦堀2条、土坑墓7基、埋甕1基、掘立柱建物1棟、土坑15基、溝2条、柱穴約500基等を確認した。周辺との比高が約40mの高地に位置しており、環濠が確認されたことから、高地性環濠集落であることが明らかとなった。
- 6 遺跡は大きくA～C地点に分かれる。それぞれの地点で検出された遺構、出土遺物量で違いが認められる。
- 7 A地点では土坑墓7基、埋甕1基を確認した。包含層からの出土遺物が少ないと、柱穴と思われるピットが少ないとから墓域と考える。B地点では竪穴建物は確認できなかったが、柱穴と考えるピットが多数確認されており、このうち組み合わせから掘立柱建物の可能性があるものが1棟確認された。また、A・C地点に比して包含層からの出土遺物が多いこと、環濠・縦堀も確認されたことから居住域と考える。C地点は遺構・遺物共に希薄であり、生活の痕跡を若干残す地点と考える。
- 8 遺物は弥生時代後期の東北系弥生土器が主体で、中期後葉の東北系・北陸系、後期の北陸系・続縄文土器が確認されている。出土土器から、1～4期に区分が可能性である。山元1期は中期後葉、2期が後期前葉（新潟シンボ羅年1期）、3期が後期前葉～後葉（同1期の新しい段階から2期の古い段階）、4期が後期後葉（同2期）である。時期比定が難しい土器が多いが、判別できるものでは、山元3～4期が最も多い。
- 9 1つの土坑墓からガラス小玉の完形品が68点出土しており注目される。
- 10 これまで、東北系土器分布圏では環濠集落が確認されていなかった。山元遺跡の発見により、東北系土器分布圏においても環濠集落の存在が明らかとなった。
- 11 また、これまで高地性環濠集落の日本海側最北は新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡であったが、山元遺跡は古津八幡山遺跡の更に約60km北側に位置することから、現状では日本海側最北の高地性環濠集落となる。
- 12 環濠（濠1～5）、縦堀の廃絶時期については今後も検討が必要であるが、縦堀2は山元3期、濠1は山元3～4期、濠5は4期を中心とした時期を想定している。

## 引用参考文献（例言で示したものと併記）

- 甘粕 健・小野 昭ほか 1982『大沢遺跡Ⅱ』 新潟大学考古学研究室
- 甘粕 健・小野 昭・川村浩司ほか 1993『越後山谷古墳』 新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 甘粕 健・橋本博文ほか 1996『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』 新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 相澤清利 2002「東北地方における弥生時代後期の土器様相—太平洋側を中心として—」『古代文化』54-10 古代学会
- 相原淳一 2002「天王山成立期に関する層位学的再検討」『宮城考古学』4 宮城県考古学会
- 青木 学・鈴木俊成ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集 中曾根遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安立 聰 2005「魚沼地域における古墳出現期の様相」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」 新潟県考古学会
- 阿部朝衛 1995「新潟県北部地域における石器材料の調査」『帝京史学』第10号 帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 1997 a「新潟県北部地域における縄文時代の石材使用とその背景」『帝京史学』第12号 帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 1997 b「3 遺物（3）石器 新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究—新発田市中野遺跡の共同資料調査—」『北越考古学』第8号 北越考古学研究会
- 阿部友晴・潮田憲之・酒井亞紀・佐野陽子・高橋 優 2001「奥三面遺跡群周辺地域における石材調査結果」『新潟考古学談話会』第23号 新潟考古学談話会
- 猪狩忠雄 2000「福島県における弥生後期の土器編年」「東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 石川智紀・継 実・松井 智・山本友紀 2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書第179集 中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石野博信 2001『邪馬台国の考古学』 吉川弘文館
- 石丸和正・金子優子・酒井亞紀・滝沢規朗・野田豊文・野水晃子・八木勝枝 2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相—村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に—」『三面川流域の考古学』第2号 奥三面を考える会
- 石川日出志 1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第3号 北越考古学会
- 石川日出志 1997「新潟県の石器組成の変遷」「農耕開始期の石器組成 4」 国立歴史博物館
- 石川日出志 2000a「天王山式土器中期説への反論」『新潟県考古学会』第11号 新潟県考古学会
- 石川日出志 2000b「南御山2式土器の成立と小松式土器との接觸」『北越考古学』第11号 北越考古学会
- 石川日出志 2001「弥生後期湯舟沢式の系譜と広がり」『北越考古学』第12号 北越考古学会
- 石川日出志 2003「関東・東北地方の土器」「考古資料大観」第1巻 小学館
- 石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 右田守之・酒井亞紀・滝沢規朗 2006「村上市滝ノ前遺跡の石器と土製品について」『三面川流域の考古学』第5号 奥三面を考える会
- 石原正敏 1996 「アメリカ式石器再考」「考古学と遺跡の保護」 甘粕健先生退官記念論集
- 磯部保衛 1996「新潟県神林村八幡山遺跡採集のアメリカ式石器と菅玉」『北越考古学』第7号 北越考古学研究会
- 伊藤信雄 1950「東北地方の弥生式文化」「文化」第2巻第4号
- 潮田憲之 2002「5石器・石製品 C分類と分析 (36) 自然礫」「元屋敷遺跡Ⅱ (上段)」 新潟県朝日村教育委員会
- 大木直枝・中村五郎 1970「山草荷2式土器について」「信濃」22-9 信濃史学会

- 大越道正ほか 1990『福島県文化財調査報告書第242集 能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群』 福島県教育委員会・福島県文化センター・日本道路公団
- 大森 勉 1986『新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報』 新潟県糸魚川市教育委員会
- 岡本淳一郎 2003「周溝を持つ建物」についての基礎的研究』『富山大学考古学研究室論集蜃氣樓—秋山進牛先生古希記念—』 有限会社六一書房
- 小片 保・上原甲子郎 1972『新潟県村上市砂山遺跡』『日本考古学年報』20 日本考古学協会
- 小川忠明 1998『新穂村藏王古墳集落遺跡』『新潟県考古学会第10回大会 研究発表・調査報告要旨』 新潟県考古学会
- 尾崎高宏 2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 下馬場遺跡・細田遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長田友也 2002『第V章遺構・遺物 6 石器 U磨石類』『アチヤ平遺跡II(上段)』 新潟県朝日村教育委員会
- 小野塚徹夫・会田哲郎・岡本郁栄・高橋 保 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集 笠輪遺跡I』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 折戸靖幸 1987『高松町中沼C遺跡』 石川県高松町教育委員会
- 春日真実 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 奈良崎遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 松影A遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1996「大化元年「越国奏上」についての検討」「越と古代の北陸」 古代王権の交流3 名著出版
- 金子正典 1999『内野手遺跡・経塚山遺跡 市内遺跡発掘調査報告書』 新潟県三条市教育委員会
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999『弥生後期』『新潟県の考古学』 高志書院
- 川上貞雄 1994『第1編 考古資料』『五泉市史』資料編1 原始・古代・中世 新潟市五泉市教育委員会
- 木本元治ほか 1991『福島県文化財調査報告書第191集 陸敷遺跡』 福島県教育委員会・福島県文化センター・日本道路公団
- 久々忠義・吉川知明・大野 実・小黒智久・越前慶祐 2003『富山県古墳副葬品集成』『大境』第23号 富山考古学会
- 日下部善己 1983『環状石斧』『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 小池義人・野水 仁・加藤 学・石田守之 2000『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 裏山遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 肥塚隆保 1997『日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究』
- 国立歴史博物館 1997『農耕開始期の石器組成』
- 小林貴郎 2006『第II章遺跡の位置と環境 2 地理的環境と自然立地』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第163集 西部遺跡III』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林隆幸 1992『原山遺跡』『長岡市史』資料編1 新潟県長岡市
- 小林正史 2003『黒竈からみた加賀の弥生土器の覆い型野焼き方法』『北陸古代土器研究』第10号
- 小林行雄・杉原莊介 1968『弥生土器集成 資料編』第1分冊
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962『斐太』 慶友社
- 駒形敏朗 1987『横山遺跡』 新潟県長岡市教育委員会
- 酒井亜紀 2002『5 石器・石製品 C分類と分析(5) 石籠』『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元屋敷遺跡II(上段)』 新潟県朝日村教育委員会
- 鶴沢正史ほか 2006『吹上遺跡発掘調査報告書』 新潟県上越市教育委員会
- 鶴沢正史・中村直人・小島幸雄ほか 2007『吹上遺跡範囲確認調査報告書』 新潟県上越市教育委員会
- 鶴沢正史・大平理恵・中村直人 2008『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』 新潟県上越市教育委員会
- 佐藤庄一 2000『山形県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文

化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館

- 佐藤 慎ほか 2002『斐太歴史の里確認調査概要報告書』 斐太歴史の里調査団・新潟県新井市教育委員会
- 佐藤 慎ほか 2003『斐太歴史の里確認調査概要報告書Ⅱ』 斐太歴史の里調査団・新潟県新井市教育委員会
- 佐藤 慎 2005『斐太歴史の里確認調査報告書』 新潟県新井市教育委員会・斐太歴史の里調査団
- 佐藤 慎 2006『斐太歴史の里確認調査報告書Ⅲ』 新潟県新井市教育委員会・斐太歴史の里調査団
- 佐藤信行 1989「天王山式土器の成立と展開－いわゆる交互刺突文の系譜を中心に－」「天王山式期をめぐって」の検討会資料』第1分冊
- 佐原 真 1999「日本・世界の戦争の起源」「戦いの進化と国家の生成」 東洋書林
- 佐原 真 2002「弥生時代の戦争」「古代を考える 稲・金属・戦争－弥生－」 吉川弘文館
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・(株)シン技術コンサル・国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所 2008  
『堂の前遺跡 現地説明会資料』
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・加藤建設株式会社・国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所 2008「村上市 下新保高田遺跡 現地説明会資料」
- 椎名仙卓1953「第一章第二節三 宮の上住居跡」「磐舟－磐舟樹跡推定地調査報告書－ 新潟県文化財調査報告第9」 新潟県教育委員会
- 品田高志ほか 1985「刈羽大平・小丸山」 柏崎市教育委員会
- 柴田昌児 2004「高地性集落と山住みの集落」「考古資料大綱」第10巻 小学館
- 柴田昌児 2006「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落」「古代文化」58巻第II号 財團法人古代学協会
- 管沼 亘 1993「VI章考察 2B高地性集落としての山谷弥生時代遺跡」「越後山谷古墳」 新潟県卷町教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 鈴木俊成・北村 亮・伊予部倫夫・鈴木勘助 1990「高田遺跡 神林村埋蔵文化財調査報告第2」 新潟県神林村教育委員会
- 鈴木正博 1976「十王台式理解のために（2）」「常総台地」第8号 常総台地研究会
- 鈴木正博 2002a「「伊勢林前式」研究の漂流と教済の考古学－「土器DNA関係基盤」から覗た「伊勢林前式」併行の所謂「天王山式系」土器群－」「茨城県考古学会誌」14 茨城県考古学会
- 鈴木正博 2002b「「十王台式」と「明戸式」－茨城県遺跡から見た「十王台式」に並行する所謂「天王山式系」土器型式の実態－」「黎良岐考古」24 黎良岐考古同人会
- 須藤 隆 1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」「文化」33-3
- 須藤 隆 1987「山草荷式」「弥生文化の研究」第4巻 雄山閣
- 閑 雅之 1971「新潟県における弥生文化－特にその様相の問題点－」「新潟史学」4 新潟史学会
- 閑 雅之 1972『淹ノ前遺跡 新潟県村上市淹ノ前遺跡緊急調査概報』 新潟県村上市教育委員会
- 閑 雅之・戸根与八郎 1974「大平城跡・双ツ塚調査報告」「北陸自動車道埋蔵文化財調査報告書 埋蔵文化財緊急調査報告書第3」 新潟県教育委員会
- 高島好一 1998「平塙諸荷遺跡」 福島県いわき市教育委員会
- 高橋 保 1979「第6章 総括2、土器について」、「新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 下谷地遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保・齊藤基生ほか 1979「新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 下谷地遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保・戸根与八郎ほか 1992「新潟県埋蔵文化財調査報告書第28集 木崎山遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保・田海義正・坂上有紀 2000「新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 平田遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 1992 「石器類」「関越自動車道関係報告書五丁歩・十二木遺跡」 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 1995「古墳出現前後の集落の動向」「研究紀要」 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 1999「第3章弥生時代・古墳時代 第3節集落」「新潟県の考古学」 新潟県考古学会編 高志書院
- 滝沢規朗 2000「新潟県における弥生後期の土器編年」「東日本弥生時代後期の土器編年」第1分冊 東日本埋蔵文

- 化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 滝沢規朗 2005 a 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2005 b 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005 c 「定型化した古墳出現以前（6期まで）の動向」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2007 「弥生時代後期における北陸系・東北系・八幡山式の野焼き方法（予察）」『新潟考古学談話会』第32号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2008 「旧紫雲寺湯縁辺の西川内南遺跡出土土器について—阿賀北における古墳時代前期の土器検討—」『三面川流域の考古学』第6号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗・春日真実・吉井雅勇ほか 1992 「西谷遺跡発掘調査報告書」 新潟県刈羽村教育委員会
- 滝沢規朗・高橋保雄ほか 2002 「石器・石製品」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV元原敷遺跡Ⅱ（上段）』新潟県朝日村教育委員会
- 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 （財）石川県埋蔵文化財センター
- 田中耕作 1991 「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼成粘土塊」『北越考古学』第4号 北越考古学研究会
- 田中 靖 1988 「耳取遺跡等範囲確認調査報告書」 新潟県見附市教育委員会
- 田中 靖 1988 「北陸における天王山式系土器」『新潟県考古学談話会』第2号 新潟考古学談話会
- 田中 靖 1989 「北陸地方の天王山式土器」「天王山式期をめぐって」の検討会資料 弥生時代研究会
- 田中 靖・丸山一昭 1999 「弥生時代中期後半」『新潟県の考古学』 高志書院
- 田辺早苗 1991 「長松遺跡発掘調査報告書 神林村埋蔵文化財報告第3」 新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗・土生朗治 2001 「衣田遺跡・道上遺跡 神林村埋蔵文化財報告第9」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・大賀 健・長谷川一郎 2001 「城田遺跡 神林村埋蔵文化財報告第10」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・福山俊彰・千葉孝之・大賀 健 2001 「城田遺跡・引地遺跡 神林村埋蔵文化財報告第12」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・大賀 健 2001 「六百地遺跡 神林村埋蔵文化財報告第13」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・松田政基 2002 「金曲遺跡 神林村埋蔵文化財報告第14」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗 2003 「千作り遺跡・平林城跡・千眼寺跡・持体遺跡 神林村埋蔵文化財報告第16」 新潟県神林村教育委員会
- 田辺早苗・松田政基・野平伸一 2003 「高田遺跡 神林村埋蔵文化財報告第17」 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 立木宏明 2001 a 「石器」『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新潟県新津市教育委員会
- 立木宏明 2001 b 「八幡山遺跡の石器について」『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新潟県新津市教育委員会
- 辻 秀人ほか 1984 「福島県立博物館調査報告第8集 明戸遺跡発掘調査概報」 福島県立博物館
- 坪井清足 1953 「福島県天王山遺跡の弥生土器—東日本弥生文化の性格—」『史林』36-1 史学研究会
- 鶴巻康志・磯部保衛 1990 「岩船郡神林村衣田遺跡の弥生土器と土師器」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 寺沢 薫 1999 「環濠の系譜」『古代学研究』第146号 古代学協会
- 寺沢 薫 2000 「王権誕生 日本書紀02」 講談社
- 寺村光晴 1991 「第5章京田・諒訪田遺跡 第5節諒訪田遺跡（地区） 第6項その他の遺物」『寺泊町史』資料編  
1 原始・古代・中世 寺泊町
- 富樫雅彦 2003 「弥生・古墳時代のガラス」『考古資料大観』第6巻 小学館

- 鳥居美栄ほか 1999『藤ヶ森遺跡』 新潟県長岡市教育委員会
- 新潟県考古学会 2005『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』
- 新潟県農地部農村総合整備課1989『土地分類基本調査 村上』
- 新潟市 1994「第3章弥生時代 六地山遺跡」『新潟市史』資料編1 原始古代中世
- 中村五郎 1960「福島県天ヶ遺跡について」『考古学雑誌』第46巻第3号
- 中村五郎 1976「東北地方南部の弥生式土器編年」「東北考古学の諸問題」
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 櫛宜田佳男 1998「石器から鉄器へ」「古代国家はこうして生まれた」 角川書店
- 櫛宜田佳男 2002『遺物組成からみた高地性集落の諸類型』『古代文化』第54巻第4号 (財)古代学協会
- 野田豊文 2001「岩崩遺跡」「三面川流域の考古学』第1号 奥三面を考える会
- 野田豊文 2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相 2 土器について A. 東北系について」「三面川流域の考古学』第2号 奥三面を考える会
- 野田豊文 2005「三面川流域における弥生時代の終わり－天王山式から見た新潟県内弥生時代後期の様相－」「三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 野田豊文 2006「新潟県における「天王山式土器」について」「新潟考古学談話会』第31号 新潟考古学談話会
- 野田豊文・野水見子 2006「阿賀北の様相」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」新潟県考古学会
- 長谷川二三夫・本間桂吉 1989「三条市二ツ山遺跡と表探遺物について」「新潟考古学談話会会報』第3号
- 秦 昭繁 2001「新潟県北部地域の石器石材環境(2)－関川村獅子舞岩の珪質頁岩分析と石材流通構造－」「北越考古学』第12号 北越考古学研究会
- 広井 道・小林隆幸 1992「横山遺跡」「長岡市史」資料編1 新潟県長岡市
- 藤田定一 1951 a『昭和25年における天王山遺跡の調査報告(第1報)』
- 藤田定一 1951 b『天王山遺跡の出土品について』
- 前川雅夫・沢田 敦ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集 道端遺跡V』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 松木武彦 1995「弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程」「考古学研究』第42巻3号
- 増山 仁 1989「小松式の再検討－小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して－」「北陸の考古学II」 石川考古学研究会
- 丸山一昭・田中 靖 1998「松ノ脇遺跡」 新潟県和島村教育委員会
- 水澤幸一ほか 1998『兵衛遺跡・四持遺跡』 新潟県中条町教育委員会
- 水野清一・小林行雄 1950「アメリカ式石鏡」「図解考古学辞典」東京創元社
- 村上市史編纂委員会 2000『村上市史』別編 絵図・地図・年表 新潟県村上市
- 森岡秀人 1996「弥生時代抗争の東方波及」「考古学研究』第43巻3号 考古学研究会
- 八重樫由美子 2004「新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書」 新潟県寺泊町教育委員会
- 八木勝枝 2002「4土製品 C焼成粘土塊」「元屋敷遺跡II(上段)」本文編 新潟県朝日村教育委員会
- 安田 稔・宮田安志・福田秀生 2005『福島県文化財調査報告書第430集 荒屋敷遺跡(4次)桜町遺跡(1次)』 福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局郡山国造事務所
- 渡邊忠雄 2001「三条市二ツ山山頂遺跡の土器について」「越佐繪遺跡」第6号
- 渡邊朋和 2001「第Ⅷ章まとめ 1 弥生土器」「八幡山遺跡発掘調査報告書」 新潟県新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明・山田貴子・阿部泰之 2001「八幡山遺跡発掘調査報告書」 新潟県新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明・高野裕子 2004「八幡山遺跡群発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－」 新潟県新津市教育委員会
- 渡邊朋和 2005「新潟市古津八幡山遺跡の調査について」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」第1分冊 新潟県考古学会

## 観察表

### 1. 道構観察表

【凡例】

1. T-番はトレンチ番号である。

地 点 No.	主 な 特 徴	法量(cm)			確認 面標 高(m)	底面 標高 (m)	出土遺物	備考
		長径 (長軸・ 幅)	短径 (短軸)	深さ				
A 1 4 SK1	(165)	85	20	39.52	39.32	284.363~ 424	土坑墓	
A 1 4 SK2	90	65	24	39.58	39.34		土坑墓	
A 1 4 SK3	147	114	24	39.42	39.18		土坑墓	
A 1 4 SK4	100	52	26	39.48	39.22			
A 1 4 SK5	148	80	20	39.40	39.20		土坑墓	
A 1 4 P1	29	18	47	39.42	38.93			
A 1 4 P2	48	40	39	39.45	39.05			
A 1 4 P3	36	28	84	39.40	38.96			
A 2 4 SK1	112	64	18	38.22	39.04		土坑墓	
A 2 4 P1	32	26	19	38.95	38.76			
A 2 4 P2	18	15	26	38.91	38.65			
A 2 4 P3	14	12	25	38.93	38.68			
A 2 4 P4	30	30	6	38.96	38.90			
A 3 5 SK1	(78)	55	26	38.80	38.54	1-2	土坑墓	
A 3 5 SK2	155	72	30	38.92	38.62		土坑墓	
A 3 5 異様	15	15	23	39.15	38.92	4		
A 3 5 P1	14	12	36	38.53	36.16			
A 3 5 P2	22	14	38	38.61	38.23			
A 3 5 P3	18	14	10	38.63	38.52			
A 3 5 P4	18	14	9	38.63	38.54			
A 3 5 P5	16	14	20	38.59	38.39			
A 3 5 P6	54	50	20	38.52	38.32	3		
A 52 5 P1	30	23	15	38.38	38.23			
A 52 5 P2	35	30	20	38.33	38.13			
A 9 4 P1	18	18	38.32	未復				
A 9 4 P2	14	12	39.08	未復				
A 9 4 P3	15	13	39.16	未復				
A 9 4 P4	12	—	39.13	未復				
A 17 5 P1	38	—	35	37.70	37.35			
A 17 5 SK2	56	40	18	37.03	36.85			
A 17 5 P2	20	19	14	37.02	36.88			
A 17 5 P3	18	15	15	37.01	36.86			
A 17 5 P4	22	17	23	37.01	36.78			
C 37 5 P1	18	14	12				確認面標高 は約33.4~ 33.6m	
C 37 5 P2	12	10	12					
C 37 5 P3	10	8	20					
C 38 5 P1	12	12	20					
B 18 6 P1	20	19	19	38.19	38.00	15		
B 18 6 P3	35	25	24	38.28	38.04			
B 18 6 P5	26	16	35	38.27	37.92			
B 18 6 P7	29	21	26	38.29	38.08			
B 18 6 P8	31	25	29	38.27	37.98			
B 18 6 P10	24	24	13	38.28	38.15			
B 18 6 P14	15	14	6	38.22	38.16			
B 18 6 P15	26	23	12	38.20	38.08			
B 18 6 P18	35	34	18	38.19	38.01			
B 18 6 P19	24	22	27	38.24	37.97			
B 18 6 P21	20	19	26	38.26	38.00			
B 18 6 P23	21	18	39	38.24	37.85			
B 18 6 P24	20	12	19	38.25	38.06			
B 18 6 P25	14	12	21	38.24	38.03			
B 18 6 P26	20	19	31	38.26	37.95			
B 18 6 P27	35	30	47	36.23	37.76			
B 18 6 P28	23	20	35	36.22	37.87			
B 18 6 P29	18	18	35	38.23	37.88			
B 18 6 P30	20	17	34	38.22	37.88			
B 18 6 P31	28	24	19	38.15	37.96			
B 18 6 P32	30	28	19	38.13	37.94			
B 18 6 P33	27	21	6	38.12	38.06			
B 18 6 P34	27	25	24	38.19	37.95			
B 18 6 P35	14	14	17	38.20	38.03			
B 18 6 P37	15	14	52	38.19	37.87			
B 18 6 P38	16	10	26	38.23	37.97			
B 18 6 P39	23	20	53	38.24	37.71			
B 18 6 P40	16	16	25	38.23	37.88			
B 18 6 P41	22	18	18	38.24	38.06			
B 18 6 P42	22	22	29	38.26	37.96			
B 18 6 P45	24	22	30	38.21	37.91			
B 18 6 P46	20	17	19	38.23	37.84			
B 18 6 P47	27	23	45	38.24	37.79			
B 18 6 P48	21	16	27	38.16	37.89			
B 18 6 P50	25	23	15	38.19	38.04			
B 18 6 P51	16	14	19	38.19	38.00			

2. 法量( )内は現状で確認した数値で、推定値ではない。

地 点 No.	主 な 特 徴	法量(cm)			確認 面標 高(m)	底面 標高 (m)	出土遺物	備考
		長径 (長軸・ 幅)	短径 (短軸)	深さ				
B 18 6 P52		19	15	14	38.20	38.06		
B 18 6 P54		16	17	28	38.19	37.91		
B 18 6 P56		12	10	14	38.19	38.05		
B 18 6 P58		26	24	22	38.18	37.96		
B 18 6 P59		34	25	27	38.16	37.89		
B 18 6 P60		26	36	27	38.15	37.88		
B 18 6 P61		48	26	15	38.12	37.97		
B 18 6 P62		20	15	25	38.15	37.90		
B 18 6 P63		15	14	16	38.18	38.02		
B 18 6 P64		18	14	12	38.17	38.05		
B 18 6 P66		24	18	37	38.17	37.80		
B 18 6 P67		26	—	—	38.14	未発		
B 18 6 P68		14	12	23	38.17	37.80		
B 18 6 P70		14	12	23	38.17	37.94		
B 18 6 P71		16	14	12	38.16	38.04		
B 18 6 P72		18	16	—	38.12	未発		
B 18 6 P73		12	10	17	38.15	37.98		
B 18 6 P74		25	20	24	38.13	37.89		
B 18 6 P75		17	15	10	38.13	38.03		
B 18 6 P76		23	22	22	38.13	37.91		
B 18 6 P77		16	16	36	38.13	37.77		
B 18 6 P80		29	22	29	38.08	37.79		
B 18 6 P81		29	—	23	38.06	37.83		
B 18 6 P82		26	17	15	38.08	37.92		
B 18 6 P83		25	29	16	38.08	37.92		
B 18 6 P84		14	14	8	38.10	38.02		
B 18 6 P85		17	16	35	38.11	37.72		
B 18 6 P86		12	12	11	38.11	38.00		
B 18 6 P87		19	18	34	38.12	37.78		
B 18 6 P88		20	19	11	38.17	38.06		
B 18 6 P89		38	22	22	38.19	37.97		
B 18 6 P91		16	14	21	38.17	37.96		
B 18 6 P93		24	17	12	38.19	38.06		
B 18 6 P94		16	14	23	38.19	37.86		
B 18 6 P96		16	15	21	38.12	37.91		
B 18 6 P97		21	19	36	38.09	37.73		
B 18 6 P98		50	—	41	38.07	37.66		
B 18 6 P99		35	31	29	38.12	37.83		
B 18 6 P100		22	13	—	38.16	未発		
B 18 6 P101		21	20	27	38.20	37.93		
B 18 6 P102		26	19	26	38.21	37.95		
B 18 6 P103		20	19	37	38.22	37.85		
B 18 6 P104		14	14	11	36.20	38.09		
B 18 6 P105		18	13	18	38.22	38.04		
B 18 6 P106		18	—	9	38.40	38.31		
B 18 6 P107		18	—	26	38.46	38.14		
B 18 6 P108		27	21	25	38.35	38.10		
B 18 6 P110		30	26	9	38.33	38.24		
B 18 6 P111		23	18	18	38.26	38.08		
B 18 6 P112		14	11	12	38.25	38.13		
B 18 6 P113		20	18	29	38.23	37.94		
B 18 6 P114		20	17	30	38.24	37.94		
B 18 6 P115		36	29	34	38.23	37.89		
B 18 6 SK10		71	—	—	38.17			
B 18 6 P119		29	22	10	38.14	38.00		
B 18 6 P120		41	34	19	38.06	37.93		
B 18 6 P121		16	14	—	38.03			
B 18 6 P122		22	18	22	38.06	37.84		
B 18 6 P123		26	20	18	38.02	37.84		
B 18 6 P124		16	13	29	37.99	37.70		
B 18 6 P126		22	—	29	37.95	37.66		
B 18 6 P127		25	—	46	37.96	37.59		
B 18 6 P128		42	—	23	37.93	37.70		
B 18 6 P131		16	12	21	38.18	37.97		
B 18 6 P132		16	14	—	—	未発		
B 18 6 P133		26	—	—	—	未発		
B 18 6 P134	</td							

基 点 名 称 点 No.	主 ト レ ン チ 子 点 No.	標 識 No.	法長(cm)			標高 測定 高(m)	出土遺物	備考	法長(cm)			標高 測定 高(m)	出土遺物	備考		
			長 径 (長軸・ 短軸 幅)	短 径 (短軸)	深さ				長 径 (長軸・ 短軸 幅)	短 径 (短軸)	深さ					
B 18 6	SK1	168	-	38.16	未掲	13-14			B 68 8	P10	16	16	38.76	未掲		
B 18 6	SK2	96	36	17	38.23	38.06	12-316-330		B 68 8	P11	28	24	38.77	未掲		
B 18 6	SK3	192	72	22	38.15	37.97			B 68 8	P12	24	20	38.80	未掲		
B 33 6	P1	16	16	-	38.08	未掲			B 68 8	P13	20	20	38.83	未掲		
B 33 6	P2	16	15	-	38.14	未掲			B 68 8	P14	12	12	38.85	未掲		
B 33 6	P3	18	-	38.29	未掲			B 68 8	P15	12	12	38.85	未掲			
B 33 6	P4	26	-	38.23	未掲			B 68 8	P16	-	22	38.83	未掲			
B 33 6	P5	17	15	-	38.26	未掲			B 68 8	P17	18	16	38.87	未掲		
B 33 6	P6	12	12	-	38.35	未掲			B 68 8	P18	-	24	38.87	未掲		
B 33 6	P7	24	20	25	38.53	38.28			B 68 8	P19	24	22	38.86	未掲		
B 33 6	P8	26	25	29	38.61	38.32			B 68 8	P20	42	22	38.83	未掲		
B 33 6	P9	11	10	-	38.46	未掲			B 68 8	P21	14	14	38.80	未掲		
B 33 6	P10	-	20	-	38.50	未掲			B 68 8	P22	12	12	38.76	未掲		
B 33 6	P11	14	14	-	38.68	未掲			B 68 8	P23	16	-	39.04	未掲		
B 33 6	P12	14	12	-	38.63	未掲			B 68 8	P24	19	10	38.98	未掲		
B 33 6	P13	46	-	-	37.80	未掲			B 68 8	P25	22	12	38.99	未掲		
B 33 6	P14	15	13	-	38.36	未掲			B 68 8	P26	-	24	38.98	未掲		
B 33 6	P15	-	-	-	38.38	未掲			B 68 8	P27	14	14	39.02	未掲		
B 19 7	SK1	99	60	12	39.41	39.29			B 68 8	P28	16	12	38.98	未掲		
B 19 7	P1	24	20	36	39.27	38.91			B 68 8	P29	18	16	38.98	未掲		
B 19 7	P2	16	16	22	39.29	39.07			B 68 8	P30	22	20	38.95	未掲		
B 19 7	P3	30	27	31	39.29	38.98			B 68 8	P31	16	16	38.91	未掲		
B 19 7	P4	32	28	30	39.32	39.02			B 68 8	P32	-	16	38.87	未掲		
B 19 7	P5	31	24	27	39.32	39.05			B 68 8	P33	14	12	38.85	未掲		
B 19 7	P6	30	24	32	39.31	38.99			B 68 8	P34	10	10	38.82	未掲		
B 19 7	P7	48	24	9	39.34	39.25			B 68 8	P35	20	18	38.81	未掲		
B 19 7	P8	25	26	36	39.34	38.98			B 68 8	P36	20	16	38.80	未掲		
B 19 7	P9	19	18	19	38.35	39.16			B 68 8	P37	14	12	38.74	未掲		
B 19 7	P10	22	18	17	39.32	39.15			B 68 8	P38	12	8	38.70	未掲		
B 19 7	P11	20	20	21	39.31	39.10			B 68 8	P39	14	12	38.68	未掲		
B 19 7	P12	16	16	24	39.33	39.09			B 68 8	P40	-	28	38.60	未掲		
B 19 7	P13	20	18	18	39.31	39.12			B 68 8	P41	20	18	38.43	未掲		
B 19 7	P14	22	22	15	39.38	39.23			B 68 8	P42	12	10	38.23	未掲		
B 19 7	P15	20	20	47	39.34	38.86			B 68 8	P43	-	16	38.24	未掲		
B 19 7	P16	20	16	18	39.41	39.23			B 68 8	P44	-	20	38.17	未掲		
B 19 7	P17	22	20	7	39.35	39.26			B 68 8	P45	38	28	38.18	未掲		
B 19 7	P18	19	17	8	38.38	39.30			B 68 8	P46	16	14	38.77	未掲		
B 19 7	P19	20	17	34	39.42	39.08			B 68 8	P47	16	16	38.73	未掲		
B 19 7	P20	19	18	41	39.45	39.04			B 68 8	P48	14	12	38.69	未掲		
B 19 7	P21	22	20	20	39.48	39.26			B 68 8	P49	18	-	38.71	未掲		
B 19 7	P22	18	17	24	39.53	39.29			B 68 8	P50	12	12	38.70	未掲		
B 19 7	P23	29	17	15	39.35	39.20			B 68 8	P51	24	18	38.73	未掲		
B 19 7	P24	16	16	11	39.32	39.21			B 68 8	P52	18	16	38.70	未掲		
B 19 7	P25	14	14	10	39.33	39.23			B 68 8	P53	24	20	38.67	未掲		
B 19 7	P26	14	12	5	39.39	39.28			B 68 8	P54	14	14	38.68	未掲		
B 19 7	P27	15	15	7	39.35	39.28			B 68 8	SK55	84	-	38.61	未掲		
B 19 7	P28	19	18	5	39.34	39.29			B 68 8	P56	16	16	38.58	未掲		
B 19 7	P29	16	13	17	39.40	39.23			B 68 8	P57	14	14	38.55	未掲		
B 19 7	P30	20	18	19	39.38	38.29			B 68 8	P58	16	16	38.58	未掲		
B 19 7	P31	12	8	5	39.35	39.30			B 68 8	P59	18	18	39.15	未掲		
B 20 7	P1	16	16	24	39.24	39.00	40-41		B 68 8	P60	32	34	8	39.06	38.98	
B 20 7	P2	16	16	18	39.46	39.28			B 68 8	P61	22	16	38.93	38.75		
B 20 7	P3	12	12	10	39.45	39.35			B 68 8	P62	18	18	38.88	38.68		
B 20 7	P4	20	20	22	39.42	39.30			B 68 8	P63	22	22	38.85	38.68		
B 20 7	P5	16	-	10	39.38	39.28			B 68 8	P64	24	18	38.14	39.04		
B 20 7	P6	32	22	20	39.36	39.16			B 68 8	P65	20	16	39.01	未掲		
B 20 7	P7	18	16	18	39.31	39.13			B 68 8	P66	20	18	39.01	未掲		
B 20 7	P8	24	22	24	39.25	39.02			B 68 8	P67	42	36	39.12	未掲		
B 20 7	P9	46	24	22	39.26	39.04			B 68 8	P68	24	18	39.12	未掲		
B 20 7	P10	15	13	14	39.25	39.11			B 68 8	SK69	88	-	39.10	未掲		
B 20 7	P11	16	16	20	39.24	39.04			B 68 8	P70	22	24	39.02	未掲		
B 20 7	P12	16	-	22	39.22	39.00			B 68 8	P71	28	20	38.95	未掲		
B 20 7	P13	18	18	18	39.20	39.00			B 68 8	P72	20	20	39.00	未掲		
B 20 7	P14	-	20	20	39.17	38.97			B 68 8	P73	12	12	39.04	未掲		
B 20 7	P15	-	28	12	39.10	38.98			B 68 8	P74	12	-	39.07	未掲		
B 20 7	P16	23	-	18	39.10	38.92			B 68 8	P75	28	-	39.06	未掲		
B 20 7	P17	-	28	14	39.08	38.91			B 68 8	P76	24	24	39.00	未掲		
B 20 7	P18	40	-	8	39.08	39.00			B 68 8	P77	22	18	38.94	未掲		
B 20 7	P19	-	25	18	39.04	38.88			B 68 8	P78	14	-	38.85	未掲		
B 20 7	P20	40	-	22	39.04	38.82			B 68 8	P79	52	52	39.18	未掲		
B 20 7	P21	-	34	20	39.02	38.82			B 68 8	SK80	120	-	39.22	未掲		
B 20 7	P22	16	-	58	38.72	38.14			B 68 8	P81	36	-	39.16	未掲		
B 20 7	複堆2	184	70	38.56	37.85	42~47-279~ 285-289~ 290-293~ 301-307-311	C 14資料4			B 68 8	P82	24	30	39.12	未掲	
B 68 8	P1	40	-	-	38.51	未掲			B 68 8	P83	16	14	39.07	未掲		
B 68 8	P2	38	-	-	38.53	未掲			B 68 8	P84	28	22	39.01	未掲		
B 68 8	P3	26	24	-	38.53	未掲			B 68 8	SK85	54	52	38.94	未掲		
B 68 8	P4	20	20	-	38.47	未掲			B 68 8	P86	20	20	39.08	未掲		
B 68 8	P5	16	-	-	38.43	未掲			B 68 8	P87	16	16	39.11	未掲		
B 68 8	P6	16	16	-	38.28	未掲			B 68 8	P88	20	15	39.13	未掲		
B 68 8	P7	20	20	-	38.15	未掲			B 68 8	P89	20	16	39.13	未掲		
B 68 8	P8	20	16	-	38.08	未掲			B 68 8	P90	20	20	39.03	38.73		
B 68 8	P9	-	20	-	38.79	未掲			B 68 8	P91	22	20	38.85	38.65		
B 68 8	P10	-	-	-	-	-			B 68 8	P92	38	-	46	38.87	38.41	
B 34 8	P1	32	-	-	-	-			B 34 8	P2	20	20	14	39.09	38.95	

地 点 名 点 No.	主 要 種別	法値(cm)			底面 標高(m)	出土遺物	備考
		長径 (長軸 幅)	短径 (短軸 幅)	深さ			
B 21 9 P1		20	20	40	39.40	39.00	
B 21 9 P2		16	16	38	39.50	39.12	
B 21 9 P3		18	18	28	39.60	39.32	
B 21 9 P4		24	20	30	39.50	39.20	
B 21 9 P5		34	24	30	39.50	39.20	
B 21 9 P6	復刻	170	24	39.50	39.26	67-68	
B 22 9 P1		20	16	16	39.60	39.44	
B 22 9 P2		23	18	35	39.57	39.22	
B 22 9 P3		26	25	8	39.54	39.42	
B 22 9 P5		23	22	18	39.57	39.39	
B 22 9 P6		22	18	38	39.50	39.12	
B 22 9 P7		30	24	12	39.45	39.33	
B 22 9 P8	(62)	9	9	39.42	39.33		
B 22 9 P9		24	21	27	39.61	39.34	
B 22 9 P10	(26)	-	27	39.46	39.19		
B 22 9 P11		24	18	19	39.50	39.31	
B 22 9 P12		26	24	10	39.61	39.51	74
B 22 9 P13		22	20	22	39.62	39.40	
B 22 9 P15		29	23	39	39.62	39.23	
B 22 9 P16		17	16	26	39.64	39.38	
B 22 9 P17		27	25	20	39.64	39.44	
B 22 9 P18		24	22	19	39.65	39.46	
B 22 9 P19		36	23	39	39.64	39.15	
B 22 9 P20		26	24	34	39.64	39.30	
B 22 9 P22		21	18	22	39.62	39.40	
B 22 9 P23		35	28	18	39.48	39.31	
B 22 9 P24		24	21	43	39.47	39.04	75
B 22 9 P25		32	30	42	39.47	39.05	
B 22 9 P26		34	28	30	39.62	39.32	SB1の柱穴
B 22 9 P27		31	26	46	39.62	39.46	
B 22 9 P28		28	22	18	39.62	39.44	
B 22 9 P29		22	20	32	39.63	39.31	
B 22 9 P30		34	28	3	39.37	39.34	
B 22 9 P31		20	14	30	39.63	39.33	
B 22 9 P32		18	18	23	39.64	39.41	
B 22 9 P33		40	34	23	39.50	39.27	
B 22 9 P34		36	26	20	39.50	39.30	
B 22 9 P35		30	26	53	39.50	38.97	
B 22 9 P36		47	32	56	38.52	38.96	
B 22 9 P37		28	24	22	39.37	39.15	
B 22 9 P38		91	62	29	38.59	39.30	
B 22 9 P39		38	28	29	39.58	39.29	SB1の柱穴
B 22 9 P40		22	20	22	38.63	39.41	
B 22 9 P41		76	58	17	39.43	39.46	
B 22 9 P42		96	158	33	39.60	39.27	
B 22 9 P43		44	34	30	38.59	39.29	346
B 22 9 P44		24	18	17	39.49	39.52	
B 22 9 P45		18	18	23	38.70	39.47	
B 22 9 P46		18	14	18	39.71	39.63	
B 22 9 P47		22	21	21	39.69	39.48	
B 22 9 P48		36	28	8	39.66	39.58	321
B 22 9 P49		38	30	35	39.64	39.29	
B 22 9 P50		26	21	23	39.71	39.48	
B 22 9 P51		26	24	46	38.74	39.28	SB1の柱穴
B 22 9 P52		46	36	31	38.75	39.64	
B 22 9 SK53	124	94	33	39.72	39.39		
B 22 9 P54		26	21	36	39.67	39.31	SB1の柱穴
B 22 9 P55		16	16	33	39.57	39.22	
B 22 9 P56		20	11	39.58	39.47		
B 22 9 P57		20	15	18	39.59	39.41	
B 22 9 P58		22	20	11	39.58	39.47	
B 22 9 P59		20	16	11	39.58	39.47	
B 22 9 P60		34	30	32	39.61	39.29	
B 22 9 P61		24	22	26	39.63	39.37	
B 22 9 P62		38	27	17	39.58	39.41	
B 22 9 P63		47	43	20	39.54	39.34	
B 22 9 P64		30	30	15	39.58	39.41	
B 22 9 P65		31	27	8	39.56	39.48	
B 22 9 P66		20	14	2	38.56	39.51	
B 22 9 P67		22	18	16	38.56	39.40	
B 22 9 P68		32	26	15	39.55	39.40	
B 22 9 P70		17	14	15	39.57	39.42	
B 22 9 P71		26	27	9	39.60	39.51	
B 22 9 P72		20	20	18	39.61	39.43	
B 22 9 P73		22	22	13	38.59	39.46	
B 22 9 P74	(62)	-	43	39.66	39.23	318	
B 22 9 P75		20	17	12	39.52	39.40	
B 22 9 P76		22	22	47	39.51	39.94	
B 22 9 P77		20	18	11	39.55	39.44	76
B 22 9 P78		20	16	8	39.52	39.44	
B 22 9 P79		22	22	33	39.60	39.27	
B 22 9 P80		18	16	28	39.55	39.27	
B 22 9 P81		29	24	29	39.61	39.32	
B 22 9 P82		28	25	15	39.59	39.44	
B 22 9 P83		29	26	28	39.58	39.30	
地 点 名 点 No.	主 要 種別	法値(cm)			底面 標高(m)	出土遺物	備考
		長径 (長軸 幅)	短径 (短軸 幅)	深さ			
B 22 9 P84		34	27	20	39.61	39.41	
B 22 9 P85		18	17	15	39.61	39.46	
B 22 9 P86		16	16	31	39.61	39.30	
B 22 9 P87		42	29	19	39.57	39.38	
B 22 9 P88		18	16	15	39.58	39.45	
B 22 9 P89		19	16	13	39.62	39.49	
B 22 9 P90		20	20	3	39.61	39.58	
B 22 9 P91		25	24	60	39.53	38.93	
B 22 9 P92		22	20	9	39.60	39.51	
B 22 9 SB1		360	326				P26-39-51-54
B 62 10 P1		40	-	30	38.65	38.26	317
B 62 10 P2		32	28	30	38.65	38.35	
B 62 10 P3		26	-	30	38.65	38.22	
B 62 10 P4		32	20	30	38.52	38.22	
B 62 10 P5		24	23	51	38.74	38.23	
B 62 10 P6		27	24	42	38.68	38.26	
B 62 10 P7		20	16	21	38.61	38.40	
B 62 10 P8		20	18	28	38.79	38.51	
B 62 10 P9		17	17	15	38.75	38.60	
B 62 10 P10		21	20	34	38.71	38.57	
B 62 10 P11		19	16	15	38.88	38.73	
B 62 10 P12		20	18	19	38.84	38.65	
B 62 10 P13		29	25	38	38.83	38.44	
B 62 10 P14		16	16	33	38.65	38.32	
B 62 10 P15		16	16	33	38.65	38.32	
B 62 10 P16		-	22	39	38.92	38.53	
B 62 10 P17		15	14	25	38.76	38.54	
B 62 10 P18		20	14	22	38.79	38.57	
B 62 10 P19		28	24	43	38.72	38.29	
B 62 10 P20		40	32	52	38.50	37.98	
B 62 10 P21		27	26	19	38.51	38.32	
B 62 10 P22		26	22	38	38.83	38.45	
B 62 10 P23		28	20	22	38.82	38.40	
B 62 10 P24		56	20	30	38.04	38.84	
B 62 10 P25		18	18	30	38.09	38.79	
B 62 10 P26		22	19	7	39.13	39.06	
B 62 10 P27		26	19	47	39.10	38.63	
B 62 10 P28		26	26	70	39.15	38.45	
B 62 10 P29		29	27	18	38.86	38.68	
B 62 10 P30		20	20	29	39.39	39.08	
B 62 10 P31		22	21	29	38.36	39.07	
B 62 10 P32		18	18	13	39.17	39.04	
B 62 10 P33		42	40	29	39.27	38.98	322
B 62 10 P34		20	18	30	39.17	38.87	
B 62 10 P35		22	19	30	39.16	38.86	
B 62 10 SK36		78	66	22	39.10	38.89	
B 62 10 P37		30	30	82	39.07	38.25	
B 62 10 P38		35	30	78	39.05	38.27	
B 62 10 P39		26	26	35	39.38	39.12	
B 62 10 P40		32	20	31	39.23	38.92	
B 62 10 P41		21	20	29	39.16	38.95	
B 62 10 P42		28	22	27	39.16	38.89	
B 62 10 P43		46	40	81	39.12	38.31	313
B 62 10 P44		30	24	34	39.14	38.93	
B 62 10 P45		43	40	98	39.19	38.31	
B 62 10 P46		34	29	78	39.13	38.43	
B 62 10 P47		52	34	16	39.23	39.07	
B 62 10 P48		79	50	24	39.19	38.95	
B 62 10 P49		24	22	63	39.22	38.59	
B 62 10 P50		28	28	31	39.21	38.90	
B 62 10 P51		18	18	50	39.06	38.56	
B 62 10 P52		23	20	14	39.02	38.88	
B 62 10 P53		33	32	58	38.94	38.36	
B 62 10 P54		18	18	32	38.78	38.46	
B 62 10 P55		-	24	63	38.90	38.07	
B 62 10 P56		-	14	76	38.84	38.07	
B 62 10 SK57		42	8	39.27	39.19	309	
B 62 10 P58		22	22	25	38.99	38.74	
B 64 10 SK1		56	26	37.73	37.53	288-306	
B 64 10 P2		34	24	15	37.83	37.68	
B 64 10 P3		36	36	12	37.36	37.24	

越 レ ン チ 点 名	主 な 部 位	種類	法量(cm)			確認 部位 高(m)	底面 高(m)	出土遺物	備考	越 レ ン チ 点 名	主 な 部 位	種類	法量(cm)			確認 部位 高(m)	底面 高(m)	出土遺物	備考
			長径 (長軸 幅)	短径 (対角 幅)	深さ								長径 (長軸 幅)	短径 (対角 幅)	深さ				
B-66 10 P7			25	23	29	38.40	38.11			B-32 16 P10			28	16	—	未報			
B-66 10 P8			34	32	29	38.44	38.15			B-32 16 P11			16	14	—	未報			
B-66 10 P9			9	8	10	38.20	38.10			B-32 16 P12			106	94	46	34.62	34.16		
B-66 10 P10			12	11	10	38.20	38.10			B-47 17 P1			—	12	37.75	37.63			
B-66 10 P12			16	—	—	37.70	未測			B-47 17 P2			24	20	14	37.56	37.42		
B-66 10 P13			20	11	—	37.70	未測			B-47 17 P3			20	20	14	37.53	37.39		
B-66 10 P14			29	11	—	37.70	未測			B-29 17 P1			16	14	10	38.08	37.97		
B-35 11 深1			146	64	37.51	36.70			B-29 17 P2			14	12	10	37.58	37.48			
B-36 12 深1			186	66	34.72	34.08	92~101	C14資料1		B-29 17 P3			21	18	14	37.45	37.31		
B-26 13 深1			264	114	35.90	34.76			B-29 17 P4			19	17	7	37.45	37.39			
B-25 14 深2			160	92	36.28	35.36	102~104+		B-29 17 P5			14	12	—	37.13	—			
B-61 15 深2			160	110	33.58	32.48	132~135		B-29 17 P6			16	12	—	36.88				
B-61 15 深3			?	26	35.02	34.76			B-29 17 P7			18	16	10	36.98	36.88			
B-61 15 縦幅2			272	92	36.34	35.42	119~131		B-29 17 P8			28	24	24	36.47	36.23			
B-31 16 深3			166	52	35.58	35.06	173~174~308		B-29 17 P9			27	24	16	36.54	36.35			
B-32 16 P1			24	20	28	37.19	36.91			B-29 17 滝4			184	96	35.54	34.58	230~233		
B-32 16 P2			16	14	15	37.17	37.03			B-30 18 滝4			160	96	36.70	35.74	231~235	C14資料7	
B-32 16 P3			18	16	27	37.09	36.82			B-30 19 滝5			156	74	34.44	33.70	238~241	C14資料14-312-314-315	
B-32 16 P4			16	16	36	37.10	36.72			B-27 20 P1			—	9	37.93	37.84	15		
B-32 16 P5			16	14	20	36.78	36.58			B-27 20 P3			25	20	11	36.99	36.88		
B-32 16 P6			14	14	9	36.70	36.51			B-27 20 P3			28	19	25	36.59	36.34		
B-32 16 P7			16	16	7	36.82	36.75			B-27 20 滝5			128	60	34.55	33.95			
B-32 16 P8			20	18	11	36.48	36.37			B-69 下			20 縦幅2	134	60	30.60	30.00		
B-32 16 P9			16	16	12	36.08	35.95												

## 2. 遺物観察表

### A. 土 器

【凡例】

1 法量 ( ) は推定値である。

2 調整等 部位名前は、「口」が口縫部、「側」が側部、「底」が底面、「内」が内面を表す。また、各部位の位置は上・中・下とした。

3 口残・底残 口縫部残存率・底縫部残存率を×32で表した。

4 色 上 鉛土の分類はp.20~21の分類による。

報告 No	器種	大別	時期	出土位置			法量	文様		胎 土	色調	焼 成 度		変化物	調整	口 残	底 残	備考	
				地 点	トレンチ等	連接		地文	文様帶			外 面	内 面						
1 漢	3群		A 3T	SKI	1			R L	I:茶褐色	△	○								
2 漢	3群		A 3T	SKI	1			?	I:茶褐色?	×									
3 漢	3群		A 3T	P6	1	底:6.8 網:9.0 底:5.0		II:迷図文	I:明黄褐色	△		下				9			
4 漢	3群		A 3T		II層			R L	II:流水文	I	○	○	上~下			32	開放型断続 き?		
5 漢	3群		A 9T					R L	II:鉤曲文	I	明黄褐色	△	○						
6 漢	3群		A 13T		II層			R L	I:暗褐色	○	○					1			
7 漢	4群		A 13T		II層				I:暗褐色	○	○	○	○						
8 漢	3群		A 50T1		II層			R L	I:暗褐色	○	○					3	外:ナデ、内 部:ハケ		
9 漢	1群	1期	B 52T6		II層				II:鉤曲文	I:深褐色	○	○							
10 漢	4群		B 53T2		II層		口:14.0		I:斜文	I:黃白色	○					2			
11 漢	3群		B 53T3		II層		口:26.0	R L	I:暗褐色	○	○	○				3			
12 漢	1群	1期	B 18T	SK2		口:17.8 剥:17.4		II:重菱形	I:黄褐色	○	○					15	外側:緑ハケ、 内:黒ハケ		
13 漢	5群		B 18T20	SK20					V:新褐色	○									
14 高杯 唇台	4群		B 18T20	SK20					V:明黄褐色	×						2			
15 漢	?		B 18T	P1					II:明黄褐色	○									
16 漢	1群	1期	B 18T		II層				II:豊	○						4			
17 漢	1群	1期	B 18T		II層				II:豊	○						2	口内:ハケ		
18 漢	1群	1期	B 18T12~13		II層			R L	I:暗褐色	○	○					2			
19 漢	1群	1期	B 18T		II層				I:暗褐色	○	○					2			
20 漢	1群	1期	B 18T11		II層				V:赤褐色	△						1本引き			
21 漢	3群		B 18T		II層			R L	I:弧線	M:暗褐色	○	○				1			
22 漢	3群		B 18T		II層				B:暗褐色	○	○					1			
23 漢	3群		B 18T		II層			L R	I:平行沈線	I:暗褐色	○	○				1			
24 漢	3群		B 18T2		II層			R L	I:平行沈線	I:暗褐色	○	○	○			2			
25 漢	3群		B 18T		II層			R L	I:迷図文	I:明黄褐色	○	○				2			
26 漢	3群		B 18T2		II層			R L	I:平行沈線	I:明黄褐色	○	○				5			
27 漢	3群		B 18T		II層				I:暗褐色	△	○					7			
28 漢	5群		B 18T2		II層				I:暗褐色	○	○					2			
29 漢	3群		B 18T		II層		口:20.4	R L	I:明黄褐色	△	○					8			
30 漢	2群?	1期	B 18T8		II層		底:6.6		V:明黄褐色	○						32	底面に木質痕		
31 漢	4群		B 18T		II層				II:黄白色	○						3			
32 表?			B 18T2		II層		底:5.0		I:暗褐色	○						24			
33 漢	4群		B 18T8		II層				表??:横丸	V:明黄褐色	△							縦外側は網文 底面は赤彩	
34 漢	3群		B 18T23		II層			R L	II:泡張	V:暗褐色	△								
35 漢	3群		B 33T9		II層			R L	II:泡張文	I:暗褐色	○					1			
36 漢	3群		B 33T1		II層				V:暗褐色	△									

報告 数	器種	大別	時期	出土位置			法延	文様		培土	色調	炭化物		調査	口 延	底 残	備考				
				地 点	トレンチ号	遺構		幾文	文様留			未成 残存	外面	内面							
37	甕	1群	1期	B	19T10~12	II層		II:縦衝文	I 暗褐色	○			外側:縦ハケ								
38	甕	3群		B	19T10~12	II層		RL	I 黄褐色	○					2						
39	甕	3群		B	19T10~12	II層		RL	I:須彌文	○	口下	○			2						
40	甕	3群		B	20T	P1		RL	I 暗褐色	○					3						
41	甕	3群		B	20T	P1		RL	I 暗褐色	○											
42	甕	3群	3期	B	20T	縦幅2	1層	口:30.0	RL	I:連弧文 II:重菱形文 区画:交互刺突	I 暗褐色	△ ○	内:横ナギ	7							
43	甕	3群		B	20T	縦幅2	1層	RL	II 暗褐色	○					2						
44	甕	3群		B	20T	縦幅2	1層	RL	V 暗褐色	○	○ ○	○									
45	甕	3群		B	20T	縦幅2	サブトレ	口:16.0	RL	V 桜色	△				2						
46	甕	3群		B	20T	縦幅2	サブトレ	底:7.0	RL	I 暗褐色	○ ○	脚下 ナギ			16	底部内面の一部コゲ					
47	甕	3群	3期	B	20T	縦幅2	1層	口:27.0	RL	I:連弧文 II:重菱形文	Ⅴ 暗褐色	○ ○	脚中 内:横ナギ	4							
48	甕	3群	4期	B	20T		II層		RL	I 暗褐色	○ ○				1						
49	甕	3群		B	20T		II層		RL	I 暗褐色	○				2						
50	甕	3群		B	20T		II層		RL	I:連弧文	○ ○ ○ ○				1						
51	甕	3群		B	20T1		II層		RL	I 黄褐色	○ ○ ○				2						
52	甕	3群		B	20T		II層		RL	円形刺突	○ ○ ○ ○				1						
53	甕	3群	4期	B	20T6		II層		RL	円形刺突	○ ○ ○ ○				1						
54	甕	3群		B	20T		II層		RL	I 暗褐色	○ 口縁				1						
55	甕	3群		B	20T1		II層		RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○				1						
56	甕	3群		B	20T3-5-6		II層		RL	用 淡褐色	△					内外面赤影					
57	甕	3群		B	20T5-6		II層		RL	用 黄褐色	○										
58	甕	3群		B	20T5-6		II層			波状文	Ⅴ 暗褐色	○									
59	甕	3群		B	20T6		II層			交互刺突	I 桜色	△ 脚上									
60	甕	3群		B	20T5-6		II層			I 暗褐色	○										
61	甕	3群		B	20T10		II層			Ⅴ 黄褐色	○										
62	甕	3群		B	20T		II層	底:8.0	RL	Ⅴ 暗褐色	○ ○	脚下			4	底部外圍に少 スス有り					
63	甕	4群		B	20T		II層			I 黄褐色	△				1						
64	甕	3群		B	66T		II層		RL	Ⅴ:丸目文	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○									
65	甕	3群		B	66T		II層		RL	Ⅴ:丸目文	△ 暗褐色	○ ○ ○									
66	甕	3群		B	66T		II層		RL	Ⅴ:丸目文	△ 暗褐色	○ ○ ○									
67	甕	3群		B	21T	縦幅1	II層		RL	幾文	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○									
68	甕	3群		B	21T	縦幅1	II層		RL	幾文	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○									
69	甕	3群		B	21T		II層			柳田形文	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○ ○									
70	甕	3群		B	68T19		II層		RL	I:弧線	I 暗褐色	○ ○ ○			1						
71	甕	5群		B	68T13		II層			I:暗褐色	○ ○ ○ ○			口内外:横ハケ	2						
72	甕	3群		B	68T5		II層		RL	I:弧線	I 暗褐色	○ ○ ○									
73	甕	3群		B	68T5		II層	口:27.4	RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○				6						
74	甕	3群		B	22T	P12			RL	Ⅴ 桜色	○ ○ ○										
75	甕	3群		B	22T	P24				重菱形文	Ⅴ 暗褐色	△									
76	甕	5群		B	22T	P77				Ⅴ 桜色	○ ○ ○			口内外:横ハケ	2						
77	甕	3群		B	22T24		II層		RL	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○ ○			1							
78	甕	5群		B	22T		II層			I 暗褐色	○ ○ ○			外:縦ハケ、 内:横ハケ	4						
79	甕	3群		B	22T		II層		RL	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○	脚上									
80	甕	1群	1期	B	62T20		II層			Ⅴ:漫巻文	Ⅴ 暗褐色	○		口引き。 外側:ハケ							
81	甕	3群		B	62T		II層			Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○			1							
82	甕	3群		B	62T1		II層		RL	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○				1						
83	甕	3群		B	62T19		II層			I:連弧?	I 暗褐色	○ ○ ○ ○									
84	甕	3群		B	62T20		II層	底:5.4	RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○				4						
85	甕	3群		B	63T2-3		II層			平行沈線	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○ ○									
86	甕	2群	1期	B	64T1		II層			I:刺突	Ⅴ 暗褐色	○		外側:縦ハケ、 口外:縦ハケ、 口内:横ハケ	2						
87	甕	3群	1期	B	64T1		II層			II:刺突	I 暗褐色	△									
88	甕	3群		B	64T1		II層		RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○										
89	甕	3群		B	22T		II層		RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○	脚上									
90	甕	2群	1期	B	36T		II層			丸目文	I 桜色	○ ○ ○ ○									
91	甕	3群		B	36T		II層			Ⅴ:漫巻文 区画:交互刺突	I 桜色	△ ○ ○ ○									
92	甕	3群		B	36T	漆1				Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○ ○			口内外:ヨコナ ダ	3						
93	甕	3群		B	36T	漆1			RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○				2						
94	甕	3群		B	36T	漆1	1層			Ⅴ 白褐色	△				2						
95	甕	3群		B	36T	漆1	1層			Ⅴ 明黄褐色	○ ○ ○ ○			ヨコナテ							
96	甕	3群		B	36T	漆1	2層		RL	I:連弧文	I 暗褐色	○ ○ ○ ○									
97	甕	3群		B	36T	漆1	2層		RL	Ⅴ:U字状文	I 白褐色	○ ○ ○ ○									
98	甕	3群		B	36T	漆1	2層		RL	Ⅴ:連弧文	I 暗褐色	○ ○ ○ ○	脚中								
99	甕	3群		B	36T	漆1	2層		RL	Ⅴ:連弧文	Ⅴ 暗褐色	△ ○ ○ ○	?			2					
100	甕	3群		B	36T	漆1	2層	口:20.0	RL	Ⅴ:連弧文	Ⅴ 暗褐色	○ ○ ○ ○			1						
101	甕	3群	3期	B	36T	漆1	2層	高:35.5 底:10.0 幅:25.8		I 暗褐色	○ ○ ○ ○				18	18	春信:11.10 野焼き方法 (開放型か)				
102	甕	3群		B	25T	漆2		脚:8.4	LR?	I 暗褐色	△ ? ?										
103	甕	3群		B	25T	漆2				I 暗褐色	○ ○ ○ ○			外:ヘラナテ							
104	甕	2群	1期	B	25T	漆2		底:9.6		V 桜色	△			外:縦ハケ	6						
105	甕	1群		B	25T4		II層			略文	I 暗褐色	○ ○ ○ ○		口内:縦ハケ							
106	甕	3群		B	25T		II層		RL	I:横沈線	I 暗褐色	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	2							
107	甕	3群		B	25T		II層		RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○			3							
108	甕	3群	4期	B	25T6		II層		RL	I 暗褐色	○ ○ ○ ○	口中	2								

報告 番	器種	大別	時期	出土位置			法社	文様		地主	色調	炭化物		調整	口 底 底残	備考
				地 点	トレンチ等	遺構		施文	文様等			外 面	内 面			
109	甕	3群	B 25T5		II層		L R			V	褐色	○		口内外：焼ハケ	1	
110	甕	3群	B 25T8		II層		R L			V	暗褐色	○	○	○	2	
111	甕	5群	B 25T8		II層					IV	褐色	○		口内外：焼ハケ		
112	甕	3群	B 25T8		II層		R L	I:施文		V	暗褐色	○				
113	甕	3群	B 25T8		II層					T	暗褐色	○			2	
114	甕	3群	B 25T7		II層		R L	I:施文		T	暗褐色	○	○		3	
115	甕	3群	B 25T8		II層					T	暗褐色	○			2	
116	甕	3群	B 25T8		II層		L R			T	暗褐色	○				
117	甕	6群	B 25T1		II層		R L	部位沈継		V	暗褐色	○	○	網上		
118	甕	3群	B 25T		II層					I	暗褐色	○	○			
119	甕	3群	B 6IT2	縦幅2	上層	口：22.0	R L			V	暗褐色	○	○	網中	6	
120	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L	I:施文、施文		T	暗褐色	○	○		1	
121	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L	区画I:剥壳		V	暗褐色	○	○	○	1	
122	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L	区画I:剥壳		T	暗褐色	○			2	
123	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L			V	暗褐色	○	○	○	2	
124	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L	I:施文沈継		V	暗褐色	○	○		1	
125	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L			I	暗褐色	○	○		1	
126	甕	3群	B 6IT3	縦幅2	上層		L R			I	暗褐色	○	○	○	2	
127	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層	口：16.0 原：18.6	R L	口：16.0 原：18.6	表し？	I	暗褐色	○	○	網中	1	
128	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層	脚：19.0	R L	V: 追部文		V	暗褐色	○				
129	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L	II:流文？ III:通底文		I	暗褐色	○	○			
130	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	上層		R L	III:被文？剥壳		V	暗褐色	○	○			
131	甕	3群	B 6IT1	縦幅2	5層		R L			V	棕色	×	?	?		
132	甕？	3群	B 6IT3	底2						V	暗褐色	○		外：縫土横ハケ 内：横ハケ		
133	甕	3群	B 6IT3	底2			R L			I	暗褐色	○	○			
134	甕	3群	B 6IT3	底2			R L			V	暗褐色	○	○		1	
135	甕	3群	B 6IT3	底2		底：6.0				V	棕色	○		外側：焼ハケ	24	
136	甕	1群	B 6IT3	II層		口：10.6	R L	I:施文		II	暗褐色	○			3	
137	甕	3群	B 6IT10	II層			R L			V	暗褐色	○	○		2	
138	甕	3群	B 6IT9	II層			R L	I:施文沈継		I	暗褐色	○			2	
139	甕	3群	B 6IT2	II層			R L	I:施文沈継 区画I:交互剥壳文		I	暗褐色	○	○		4	
140	甕	3群	B 6IT10	II層			R L	区画I:剥壳		V	暗褐色	○	○		2	
141	甕	3群	B 6IT9	II層			R L	区画I:交互剥壳文		V	暗褐色	○			4	
142	甕	3群	B 6IT1	II層			R L	I:施文		V	暗褐色	○	○	○	3	
143	甕	3群	B 6IT2	II層			R L	I:施文沈継		T	暗褐色	○	○		2	
144	甕	3群	B 6IT2	II層			R L	I:施文-剥壳		V	暗褐色	○			2	
145	甕	3群	B 6IT2	II層			R L	I:施文沈継		V	暗褐色	○	○	口内：焼ハケ	4	
146	甕	3群	B 6IT1	II層			R L			V	暗褐色	○			2	
147	甕	3群	B 6IT2	II層			R L	I:施文		V	暗褐色	○		口内外：焼ハケ	2	
148	甕	3群	B 6IT3	II層			R L	I:施文沈継		V	暗褐色	○	○		2	
149	甕	3群	B 6IT9	II層			R L			V	暗褐色	○	○		1	
150	甕	3群	B 6IT3	II層			R L			I	暗褐色	△	○		3	
151	甕	3群	B 6IT9	II層			R L			I	暗褐色	○	○	○	2	
152	甕	3群	B 6IT10	II層			R L			I	暗褐色	○	○		4	
153	甕	3群	B 6IT6	II層			R L			V	暗褐色	○	○		1	
154	甕	3群	B 6IT2	II層			R L			I	暗褐色	○	○		2	
155	甕	3群	B 6IT2	II層		脚：16.0	R L	田:施文		I	暗褐色	○	○			
156	甕	3群	B 6IT9	II層			R L			V	暗褐色	△	○	網上		
157	甕？	3群	B 6IT2	II層			R L			V	暗褐色	○				
158	甕	3群	B 6IT3	II層			R L	区画I:交互剥壳文		V	暗褐色	○				
159	甕	3群	B 6IT2	II層			R L	III:通底文		V	暗褐色	○	網中		外側油彩	
160	甕	3群	B 6IT3	II層		脚：38.0 度：10.0	R L			I	暗褐色	○	網中	脚下		
161	甕	1群	B 6IT5	II層		口：17.0	R L	II:施文		V	暗褐色	○	○	口縁	剥内：焼ハケ	2
162	甕	1群	B 6IT5	II層				II:通底文？		V	暗褐色	○	○	口縁		7
163	甕	2群	B 6IT3	II層				II:施文		V	暗褐色	○	○	網上		
164	甕	3群	B 6IT11	II層						E	褐色	○				3
165	甕	1群	B 6IT11	II層			R L	II:通底文？		E	暗褐色	○	○		網外：焼ハケ	
166	甕	3群	B 6IT3	II層				I:剥壳		E	暗褐色	○	○	○	2	
167	甕	3群	B 6IT9	II層		口：15.0 脚：15.0	R L	I:施文 区画I:台形剥壳		I	暗褐色	○	○	網部		2
168	甕	3群	B 6IT3	II層		口：26.4 脚：24.0	R L			V	褐色	○	○	口縁	内外面：焼子テ	5
169	甕	3群	B 6IT10	II層			R L			V	褐色	○				
170	甕	3群	B 6IT6	II層			R L			I	暗褐色	○	○	網上		
171	甕	4群	B 6IT9	II層		口：11.0	R L			I	暗褐色	○			3	
172	甕	3群	B 6IT3-5	重層		口：10.6	L R			I	暗褐色	○	口縁	口縁	口縁部最前面の内外	11
173	高杯	3群	B 3IT	烟嘴				部位沈継		II	暗褐色	○				
174	甕	3群	B 3IT	烟嘴	底：7.0		R L			I	暗褐色	○	網上			26
175	甕	3群	B 3IT	II層			R L			V	褐色	○				2
176	甕	3群	B 3IT	II層			R L	I:施文 区画I:交互剥壳文		I	暗褐色	○	○	口縁		3
177	甕	3群	B 3IT	II層			R L			V	暗褐色	○	○	口縁		2
178	甕	3群	B 3IT	II層			R L	I:施文		I	暗褐色	○	○	口縁		3
179	甕	3群	B 3IT	II層			R L			V	暗褐色	△	?	○		1
180	甕	3群	B 3IT2	II層			R L			I	暗褐色	○	○	口縁		5
181	甕	3群	B 3IT	II層			R L			I	暗褐色	○	○	口縁		2

報告 No	器種	大別	時期	出土状況			法量	支綫		胎 土	色調	燒 成 残存	器化物		調整	口 残	底 残	相 考	
				地點	トレンチ等	道橋		地文	文様帶				外觀	内面					
182	甕	3群		B 31T5		II層		R L		I	暗褐色	○	○	○		1			
183	甕	3群		B 31T2		II層		R L		I	灰褐色	○		刷毛					
184	甕	3群		B 31T2		II層		R L		II	暗褐色	○	○	口端		3			
185	甕	3群		B 31T4		II層				II	褐色	○						外側赤彩	
186	甕	2群	1期	B 32T		II層				I	暗褐色	○	○	○		2			
187	甕	1群	1期	B 32T1		II層				I	暗褐色	○				1			
188	甕	1群	1期	B 32T		II層				II	深褐色	○							
189	甕	1群	1期	B 32T		II層				I	暗褐色	○	○			2			
190	甕	3群	4期	B 32T1		II層		R L	区段;斜突	VI	暗褐色	○	○	○		1			
191	甕	5群		B 32T		II層				VI	暗褐色	○	○	○	内・口外:暗ハケ。脚外:淡ハケ。	1			
192	甕	3群		B 32T		II層		R L		I	暗褐色	○							
193	甕	2群	1期	B 32T		II層				II	灰褐色	○			外:暗ハケ。内:淡ハケ。				
194	甕	4群		B 32T		II層	底: 5.0	L R		VI	暗褐色	○							
195	甕	3群		B 32T3		II層		L R		VI	暗褐色	○	○			1			
196	甕	4群		B 32T3		II層				VI	暗黄褐色	○				2			
197	甕	1群	1期	B 47T2		II層				II	重菱形文	II	暗褐色	○	○	口部: 口外: 暗ハケ。内: 淡ハケ。	3		
198	甕	1群	1期	B 47T4		II層		L R	I: 平行沈線	V	褐色	○				3			
199	甕	1群	1期	B 47T2		II層				II	灰褐色	○				3			
200	甕	2群	1期	B 47T4		II層				III: 斜交文	IV	暗褐色	○	○	○		1		
201	甕	1群	1期	B 47T3		II層		L R		II	灰褐色	○							
202	甕	1群	1期	B 47T4		II層				IV: 漢毫文	V	褐色	○		2本引き				
203	甕	1群	1期	B 47T4		II層				I: 平行沈線	II	暗褐色	○	○	口部: 口外: 暗ハケ。内: 淡ハケ。	3			
204	甕	3群		B 47T6		II層		L R ?	I	暗褐色	X				1				
205	甕	3群		B 47T		II層		R L	I	暗褐色	○	○			3				
206	甕	3群		B 47T4		II層				II	灰褐色	○				1			
207	甕	3群		B 47T5		II層				III: 連續文	I	灰褐色	○		口内部: 淡ハケ	1			
208	甕	3群		B 47T4		II層				I	暗褐色	△	○	○?		3			
209	甕	3群		B 47T4		II層		R L	III: 波文?	I	暗褐色	○	○	○					
210	甕	3群		B 47T4		II層				III: 連續文	I	暗褐色	○						
211	甕	3群		B 47T3		II層	底: 4.0			V	暗褐色	○				32			
212	甕	3群		B 47T5		II層	底: 3.4			II	暗褐色	○							
213	甕	1群	1期	B 47T		II層				II	橙色	○				2	32		
214	甕	1群	1期	B 47T		II層				VI	暗褐色	○							
215	甕	1群	1期	B 47T5		II層				II	灰褐色	○							
216	甕	1群	1期	B 47T		II層				IV	灰褐色	○				1			
217	甕	3群		B 47T		II層		R L	I	暗褐色	○	○	○		2				
218	甕	3群		B 47T		II層		R L	I	暗褐色	○				1				
219	甕	3群		B 47T		II層				I	灰褐色	○				1			
220	甕	2群	1期	B 29T	深4		底: 16.0			I	黄褐色	○			外: 暗ハケ	8			
221	甕	3群		B 29T	深4					VI	暗褐色	○				1			
222	甕	5群		B 29T	深4					I	暗褐色	○			口内外: 淡ハケ。脚外: 暗ハケ	2			
223	甕	3群		B 29T	深4			R L	II: 入組文 III: 連弧文	VI	暗褐色	○	○						
224	甕	1群		B 29T6		II層				II	黄褐色	○				2			
225	甕	3群		B 29T6		II層		R L ?	I: 段位沈線	VI	暗褐色	○				1			
226	甕	3群		B 29T6		II層		R L	I	暗褐色	○	○	○		2				
227	甕	3群		B 29T		II層		R L ?	I	黄褐色	X				2				
228	甕	3群		B 29T1		II層	ET: 19.0 底: 17.4			I	暗褐色	○	○	刷毛中 ~下		6	容量: 87 F. 野焼き方法 (脚取取か)		
229	甕	4群		B 29T2		II層	口: 14.0	R L	I	黄褐色	○	口端			2				
230	甕	4群		B 29T3		II層				I	暗褐色	○	○		脚外: 淡ハケ。 脚中: 淡ハケ	3			
231	甕	5群		B 30T	深4					VI	灰褐色	○	○		口内外: 淡ハケ	2			
232	甕	3群		B 30T	深4			R L	I	褐色	○	○							
233	甕	3群		B 30T	深4			R L	VI	暗褐色	○	○				2			
234	甕	3群		B 30T	深4			R L	I	暗褐色	○	○	口端		2				
235	甕	3群		B 30T	深4					VI	灰褐色	△	上?	刷毛上					
236	甕	6群	4期	B 30T	深5	5・6層				I	刺突 II: 隅陸起線文 III: 連續文・網目	VI	褐色	△	○?	口刷上	7	長石多。C 14 - 資料15	
237	甕	3群	4期	B 30T	深5	5・6層	口: 30.0 底: 24.8	R L		暗褐色	○					15	容量: 9.62 F. 野焼き方法 (脚取取か)		
238	甕	3群	4期	B 30T	深5	5・6層	ET: 22.0 底: 19.2	R L	IV	暗褐色	○	○	刷毛中 ~下		7	容量: 5.24 f			
239	甕	5群		B 30T	深5					VI	灰褐色	○		口端	口外上・口中: 淡ハケ	2			
240	甕	3群		B 30T	深5			R L	I: 繩線文 II: 波紋文	VI	暗褐色	○	○	○		1			
241	甕	3群		B 30T	深5				II	灰褐色	○	○	○	外: 淡ハケ					
242	甕	3群		B 30T		II層		R L	II: 波紋文	VI	暗褐色	○	○	口端		2			
243	甕	3群	4期	B 30T		II層		R L	II: 條形文	VI	暗褐色	○	○	口端		3			
244	甕	1群	1期	B 27T		II層			I	橫位沈線	V	褐色	△			2			
245	甕	3群		B 27T2		II層		R L	II	褐色	△	○				1			
246	甕	3群		B 27T		II層		R L	I	暗褐色	△	○	○?			3			
247	甕	3群		B 27T		II層		R L	I	黄褐色	○					2			
248	甕	3群		B 27T		II層		L R	II	灰褐色	○								
249	甕	3群		B 27T		II層	底: 14.0	R L	V	灰褐色	△					3			
250	甕	3群		B 27T		II層		R L	III: U字狀文	I	暗褐色	○	○						
251	甕	3群		B 27T3		II層		L R	IV	黄褐色	△								

報告 No	器種	大別	場所	出土位置			法基	文様		胎 土	色調	施 工 残 在	炭化物		調整	口 成 残	底 面	備考
				地点	トレンチ等	番号		地文	文様帶				外 面	内 面				
252	甕	3群	B	69T3		I層		R.L.	I: 横縞沈線	I	暗褐色	○	○			2		
253	甕	3群 4期	B	69T1		I層		L.R.	II: 直縞; 刺突	I	灰褐色	○						
254	甕	3群	B	69T1		I層		L.R.	I: 暗褐色	○	○							
255	甕	1群 1期	B	69T1	II-Ⅲ層	口: 18.0		I: 通彌文	V: 橙色	△						6		
256	甕	1群 1期	B	69T2	II-Ⅲ層			II: 横縞沈線	V: 暗褐色	○								
257	甕	1群 1期	B	69T3	II-Ⅲ層			III: 深文	V: 灰褐色	○				2本引き				
258	甕	3群	B	69T3	II-Ⅲ層			R.L.	I: 横縞沈線	I	暗褐色	○	○			2		
259	甕	3群	B	69T2	II-Ⅲ層				I	灰褐色	○	○				3		
260	甕	3群	B	69T1	II-Ⅲ層				II	灰褐色	○					6		
261	甕	3群	B	69T1	II-Ⅲ層			L.R.	I	灰褐色	○			胴下 内面ハケ				外側: 赤彩
262	高杯	4群	B	69T1	II-Ⅲ層				IV	黄褐色	○							
263	甕	1群 1期	B	46T2	II層				II: 深文	I	灰褐色	○						
264	甕	3群 2期	B	46T3	II層	口: 8.4		R.L.	IV: 朱墨文+波浪	IV	暗褐色	○	○	口縫		5		
265	甕	3群	B	46T2	II層			R.L.	IV: 朱墨文+刺突	I	暗褐色	○	○	○		1		
266	甕	3群	B	46T2	II層			R.L.	I: 横縞沈線	I	暗褐色	○	○	○		4		
267	甕	3群	B	46T2	II層				I	黄褐色	○	口縫	口縫			2		
268	甕	3群	B	46T3	II層				I	暗褐色	△	○?						
269	甕	3群	B	46T13	II層			R.L.	I	暗褐色	○	○	胴中					
270	甕	4群	B	46T3	II層	底: 6.0			II	暗褐色	○			充填法		30		
271	甕	1群 1期	B	43T1	II層	口: 15.6 底: 5.2		L.R.	II: 深文	II	灰褐色	○	○	口縫-胴中	胴低位は筋ハケ	4	27	底面外圍に平行裏波
272	甕	1群 1期	C	41T	II層	口: 14.4				I	橙色	△	○			3		
273	甕	3群	C	42T	II層	底: 8.0			IV	橙色	△					32		
274	甕	1群 1期	A	74T	II層				I	橙色	△							

### B. 土製品

報告 No	出土地位	着構・層位名	名 称			計測値(cm)			重量 (g)	埋蔵時の有無	特 故	備 考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ				
274	25T3	山層	焼成粘土塊	2.7	4.3	2.2			30.0	有		
275	25T	塚2	焼成粘土塊	3.1	3.4	2.2			14.5	なし		
276	25T	塚2	焼成粘土塊	2.2	2.8	1.6			7.5	なし		
277	22T24	II層	焼成粘土塊	2.6	2.2	1.9			8.5	なし		
278	35T	塚1 5層	焼成粘土塊	2.6	3.9	1.8			12.0	有	表面滑らか	
279	20T5	縦層2 1層	焼成粘土塊	2.5	3.3	2.2			12.5	なし	表面に鐵錆?痕	

### C. 石器・石製品

報告 No	出土地位	通構・層位名	器 确	分類	計測値(cm)			重量 (g)	石材	遺存状態	備 考
					長さ	幅	厚さ				
280	61T1	II層	石鏟	A	2.48	1.49	0.45	1.27	真岩A	先端欠・中茎?	
281	62T13	II層	石鏟	A	3.40	1.50	0.43	1.65	真岩A	元形	黒色付着物
282	47T1	II層	石鏟	A	2.58	2.00	0.62	2.58	真岩B	完形	
283	20T5	II層	石鏟	B1	3.25	1.63	0.34	1.14	真岩A	完形	
284	1T	SK1	石鏟	B2	3.60	1.18	0.35	0.94	真岩A	略尖形	中茎欠
285	20T5	祇塚2 1層	石鏟	B2	3.00	1.84	0.57	1.75	真岩A	完形	
286	20T5	II層	石鏟	B2	2.78	1.36	0.38	1.57	真岩A	破損品	先端・中茎欠
287	20T5	祇塚2 サブトレ	石鏟	B2	2.71	1.37	0.34	1.01	真岩A	破損品	先端・中茎欠
288	64T2	SK1 上層	石鏟	B2	2.98	2.13	0.50	1.64	真岩A	完形	
289	32T1		石鏟	B3	1.83	1.42	0.59	1.19	泥岩(中生代)	破損品	先端欠
290	20T5	祇塚3 一括	石鏟	B4	3.64	1.59	0.39	1.89	流紋岩	完形	
291	61T2	II層	石鏟	B4	3.41	1.55	0.38	1.75	真岩C	完形	
292	62T13	II層	石鏟	B4	3.48	1.12	0.42	1.16	真岩B	完形	
293	20T5	祇塚2 サブトレ	石鏟	その他の	2.65	1.48	0.47	1.42	真岩A	末梢が欠	
294	20T6	湯4 領 II層	石鏟	その他の	2.04	2.03	0.39	1.30	真岩A	先端のみ	C2 の可能性あり
295	68T13	II層	石鏟	その他の	2.19	1.08	0.47	0.61	真岩A	先端のみ	
296	20T7	II層	石鏟	A	6.41	0.95	0.58	4.21	真岩A	完形	
297	20T6	II層	石鏟	A	3.97	1.03	0.61	2.79	真岩A	未端が欠	
298	61T9	III層	石鏟	A	2.77	0.86	0.60	0.27	泥岩(中生代)	完形	
299	25T3	II層	石鏟	B	3.68	2.50	0.56	3.40	真岩A	先端が欠	
300	21T1	II層	両極石器		2.49	2.50	0.30	4.87	真岩B		
301	20T6	祇塚2 1層	不定形石器	A	1.89	1.73	0.40	1.89	真岩A		
302	29T	塚4	不定形石器	B	1.47	1.94	0.57	1.65	真岩B		
303	46T8	II層	不定形石器	A	4.30	5.40	1.37	24.52	真岩A		
304	36T	塚1	不定形石器	B	3.76	2.67	1.01	7.62	真岩A		
305	61T1	祇塚2 サブトレ	不定形石器	B	3.97	4.14	1.63	2.13	流紋岩		
306	64T2	SK1	不定形石器	B	3.73	2.54	1.01	9.09	流紋岩		
307	20T5-6	祇塚2 1層	不定形石器	C	2.17	1.94	0.43	1.48	真岩A		
308	31T	塚3	不定形石器	E	3.45	6.31	1.15	24.57	真岩A		
309	61T2	SD57	不定形石器	E	2.80	3.10	0.86	6.30	真岩A		
310	18T	P103	不定形石器	F	4.18	3.48	1.36	12.02	泥岩		
311	20T3	祇塚2 1層	不定形石器	F	3.29	3.06	0.44	3.49	真岩A		
312	30T	塚5 (1)	不定形石器	F	4.71	1.95	0.75	3.58	真岩A		
313	63T	P43	不定形石器	F	1.93	0.66	0.50	0.62	真岩B		
314	30T	塚5 (24)	不定形石器	F	3.47	1.83	0.54	2.20	真岩A		
315	36T	塚1	不定形石器	F	5.44	5.02	1.39	17.42	泥岩		

番号	出土地点	遺構・層位名	器種	分類	計測値(cm)			重量(g)	石材	遺存状態	備考
					長さ	幅	厚さ				
316	1ST	SK2(9)	不定形石器	G	4.93	4.03	0.84	11.89	頁岩A		
317	6ST	P1	不定形石器	F	3.56	1.87	0.74	4.43	頁岩C		
318	2ST	P74	不定形石器	G	3.59	4.50	0.89	11.50	頁岩B		
319	2ST1-2	I層	不定形石器	I	5.70	3.40	0.96	17.85	頁岩A		
320	31T2	深3上Ⅱ層	不定形石器	K	2.43	2.11	0.39	2.14	頁岩A		
321	2ST	P48	不定形石器	K	3.81	1.62	1.09	6.46	頁岩B		
322	6ST	P33	不定形石器	K	3.86	1.84	1.18	9.16	頁岩B		
323	6ST	I層	不定形石器	K	2.03	2.03	0.44	1.60	頁岩石		
324	33T5	II層	その他		3.46	3.39	1.54	25.21	頁岩B		石器未完成か?
325	64T2	II層	石核		7.1	7.4	5.6	245.66	頁岩A		
326	68T4	II層	磨石類	B2	14.3	8.2	5.3	1,089.0	ハンドレイ岩		
327	33T9	II層	磨石類	E	11.2	10	5.4	576.2	フォルンフェルス		
328	18T12-16	II層	磨石類	C1c	9.1	8.2	2.4	294.7	砂岩		
329	18T21	II層	磨石類	E	9.9	8.2	3.8	403.2	花崗岩		
330	1ST	SK2	磨石類	E	14.3	5.9	5.8	584.7	砂岩		
331	31T	-	磨石類	E	12.2	7.4	5.3	489.5	砂岩		
332	2ST	II層	磨石類	Fa	16.2	4	2.5	252.4	砂岩		
333	24T	II・Ⅲ層	磨石類	Ga	20.1	8.4	3.8	1,047.7	ハンドレイ岩		
334	68T16	II層	磨石類	Ga	11.2	5.2	2.3	211.9	砂岩		
335	62T1	II層	磨石類	Ga	14.2	5	4.5	441.6	正砂岩		
336	18T17-18	II層	磨石類	Gc	12.6	6.1	3.0	286.3	砂岩(中生代)		
337	18T21	II層	磨石類	Gc	12.3	7.2	2.6	253.2	砂岩		
338	18T14-18	II層	砥石	A	23.4	9.3	7.0	1,964.9	砂岩		
339	18T16	II層	砥石	A	7.7	5.7	5.5	430.7	花崗岩		
340	54T2	II層	砥石	B	17	13.4	5.0	1,149.0	砂岩		
341	26T12	II層	砥石	A	12.7	9.1	5.4	754.9	砂岩		
342	40T	II層	石錐		10.5	7.5	2.4	265.1	ピン岩	完形	
343	5T	II層	端狀石斧		11.6	11.4	3.4	516.6	ピン岩	完形	孔径2.6
344	32T3-5	II層	小型特殊品	A	9.4	3.2	1.5	52.5	安山岩		
345	32T3	III層	小型特殊品	B1	8.2	2.1	0.8	21.3	花崗岩		
346	2ST	P43	小型特殊品	B1	5.8	2.8	0.5	13.6	花崗岩		
347	36T4	B層	小型特殊品	B2	6.1	7.7	0.3	51.1	粘板岩		
348	48T	II層	小型特殊品	C	5.1	3.9	1.4	26.1	砂岩		
349	22T6	II層	使用痕跡なし		11.4	7.4	4.9	168.5	砂岩		
350	31T	-	使用痕跡なし		6.5	2.6	0.8	14.0	粘板岩	長軸形	
351	20T	II層	管玉		2.2	0.9	1.8	1.6	綠色凝灰岩	球半分	孔最大径0.2
352	31T2	II層	管玉		1.5	0.8	0.7	1.4	綠色凝灰岩	球方向欠損	孔最大径0.4
353	24T	II層	小形特殊品	D類	8.0	3.7	1.1	27.4	粘板岩		

#### D. ガラス小玉

No	出土地点	計測値(cm)			重さ(g)	残存
		直径	厚さ	孔径		
353	ITSK1	5.0	4.0	2.0	0.11	完形
354	ITSK1	6.0	3.0	1.5	0.14	完形
355	ITSK1	6.0	3.0	1.0	0.15	完形
356	ITSK1	5.5	3.5	1.5	0.13	完形
357	ITSK1	5.5	2.0	2.0	0.07	完形
358	ITSK1	5.5	2.5	2.0	0.11	完形
359	ITSK1	5.0	4.0	2.0	0.11	完形
360	ITSK1	5.0	3.5	1.0	0.12	完形
361	ITSK1	5.0	3.0	2.0	0.12	完形
362	ITSK1	5.0	3.0	2.0	0.09	完形
363	ITSK1	5.0	3.0	2.0	0.11	完形
364	ITSK1	5.0	3.0	2.0	0.09	完形
365	ITSK1	5.0	3.0	1.5	0.09	完形
366	ITSK1	5.0	3.0	1.0	0.10	完形
367	ITSK1	5.0	3.0	1.0	0.08	完形
368	ITSK1	5.0	2.5	1.0	0.08	完形
369	ITSK1	5.0	2.0	2.0	0.08	完形
370	ITSK1	5.0	2.0	2.0	0.08	完形
371	ITSK1	5.0	2.0	1.0	0.07	完形
372	ITSK1	4.5	3.5	2.0	0.08	完形
373	ITSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	完形
374	ITSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	完形
375	ITSK1	4.5	3.0	2.0	0.07	完形
376	ITSK1	4.5	3.0	1.5	0.08	完形

No	出土地点	計測値(cm)			重さ(g)	残存
		直径	厚さ	孔径		
377	ITSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	完形
378	ITSK1	4.5	3.0	1.0	0.08	完形
379	ITSK1	4.5	2.0	2.0	0.08	完形
380	ITSK1	4.5	2.0	2.0	0.06	完形
381	ITSK1	4.5	2.0	1.5	0.07	完形
382	ITSK1	4.5	2.0	1.5	0.08	完形
383	ITSK1	4.5	2.0	1.5	0.08	完形
384	ITSK1	4.5	2.0	1.0	0.06	完形
385	ITSK1	4.5	2.0	1.0	0.07	完形
386	ITSK1	4.5	2.0	1.0	0.09	完形
387	ITSK1	4.0	4.0	2.0	0.10	完形
388	ITSK1	4.0	4.0	1.5	0.11	完形
389	ITSK1	4.0	4.0	1.5	0.08	完形
390	ITSK1	4.0	3.5	1.0	0.07	完形
391	ITSK1	4.0	3.5	1.0	0.07	完形
392	ITSK1	4.0	3.5	2.0	0.09	完形
393	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
394	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
395	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
396	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
397	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
398	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
399	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.10	完形
400	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.10	完形

No	出土地点	計測値(cm)			重さ(g)	残存
		直径	厚さ	孔径		
401	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
402	ITSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
403	ITSK1	4.0	3.0	1.5	0.06	完形
404	ITSK1	4.0	3.0	1.5	0.08	完形
405	ITSK1	4.0	3.0	1.5	0.08	完形
406	ITSK1	4.0	3.0	1.5	0.10	完形
407	ITSK1	4.0	3.0	1.5	0.09	完形
408	ITSK1	4.0	3.0	1.0	0.07	完形
409	ITSK1	4.0	3.0	1.0	0.06	完形
410	ITSK1	4.0	3.0	1.0	0.10	完形
411	ITSK1	4.0	2.5	2.0	0.06	完形
412	ITSK1	4.0	2.5	1.5	0.07	完形
413	ITSK1	4.0	2.5	1.5	0.06	完形
414	ITSK1	4.0	2.0	1.0	0.08	完形
415	ITSK1	4.0	2.0	1.0	0.07	完形
416	ITSK1	4.0	2.0	1.0	0.08	完形
417	ITSK1	4.0	2.0	1.0	0.09	完形
418	ITSK1	4.0	1.5	2.0	0.04	完形
419	ITSK1	3.5	3.0	2.0	0.06	完形
420	ITSK1	3.5	2.5	1.0	0.06	完形
421	ITSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	半分
422	ITSK1	2.0	4.0	1.5	0.05	半分
423	ITSK1	2.0	4.0	1.5	0.03	半分
424	ITSK1	5.0	3.0	2.0	0.08	半分

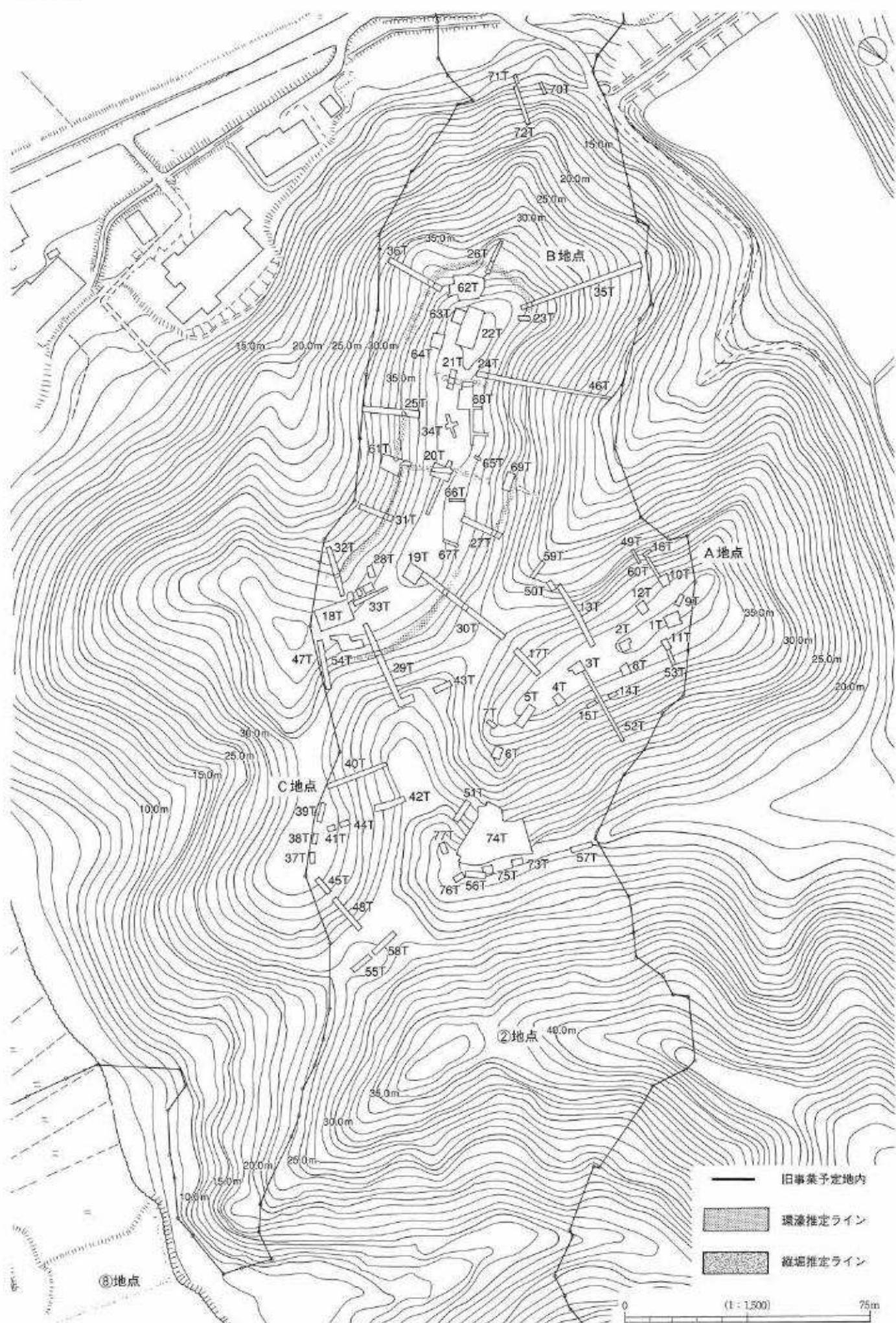
# 図 版

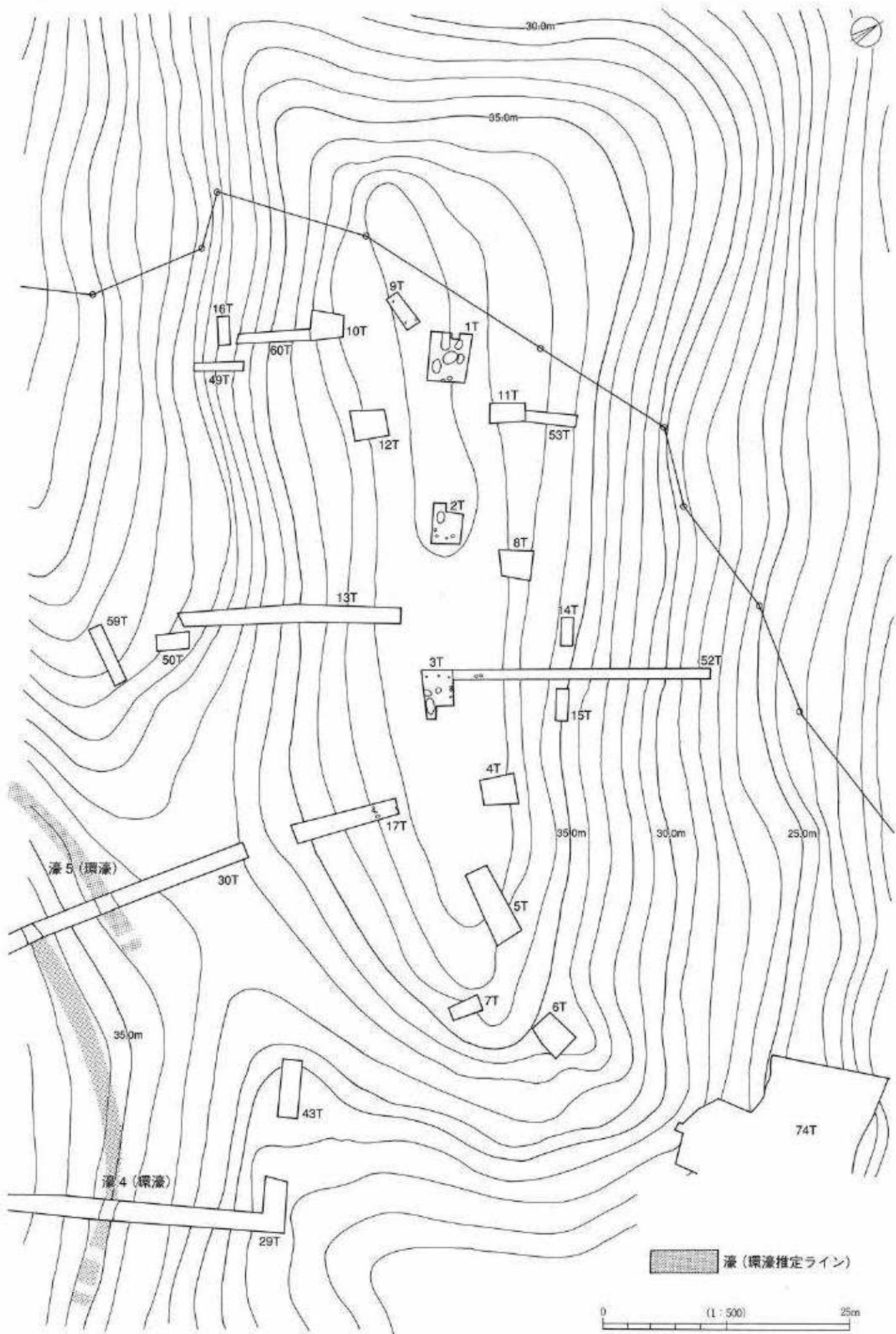
## 凡例

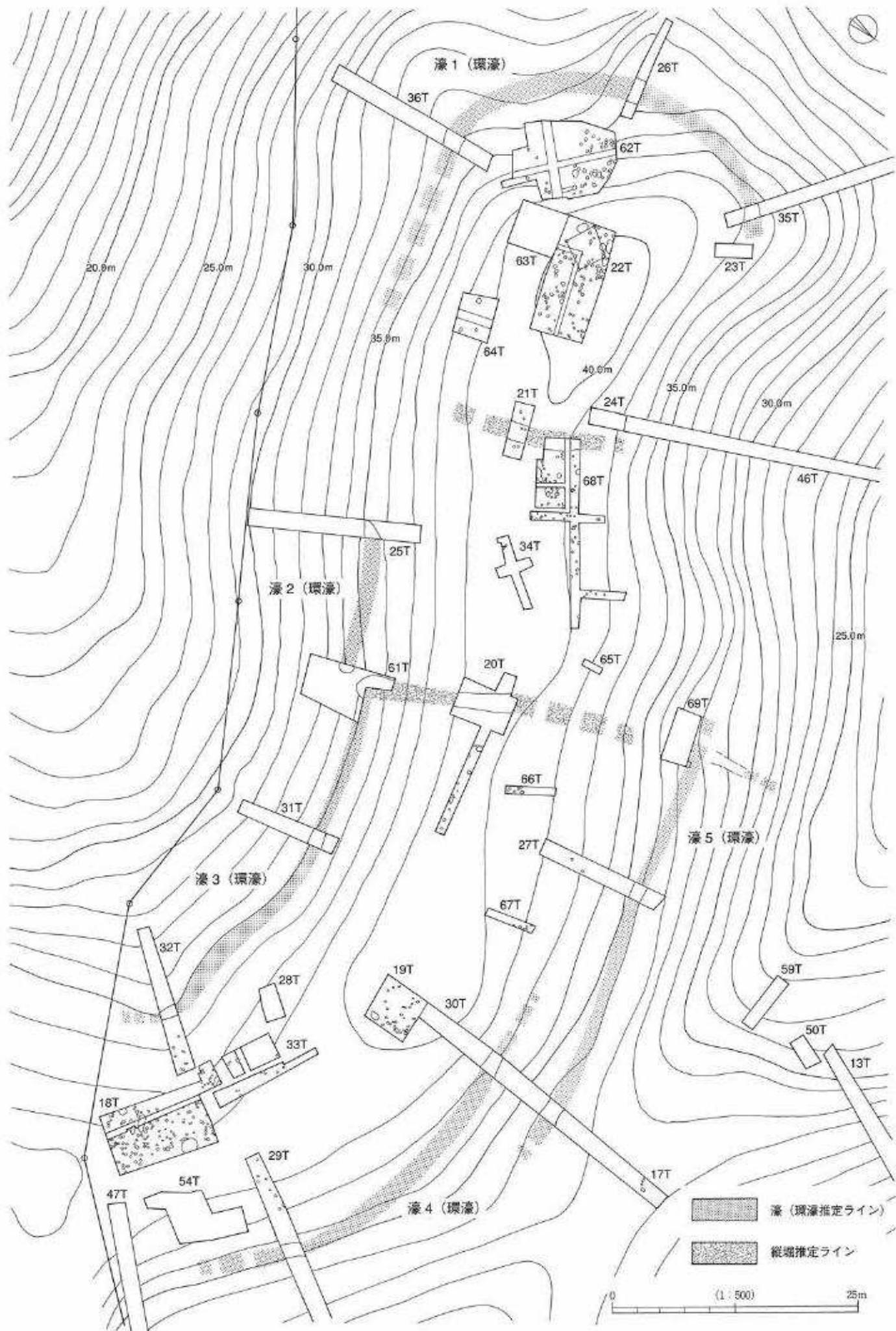
- 1 各図版には縮尺率及びスケールを付した。
- 2 遺物番号脇の（ ）は、土器がトレンチ内の小グリッド、土製品や石器・石製品は出土地点（トレンチ・遺構名・小グリッド・層位）である。

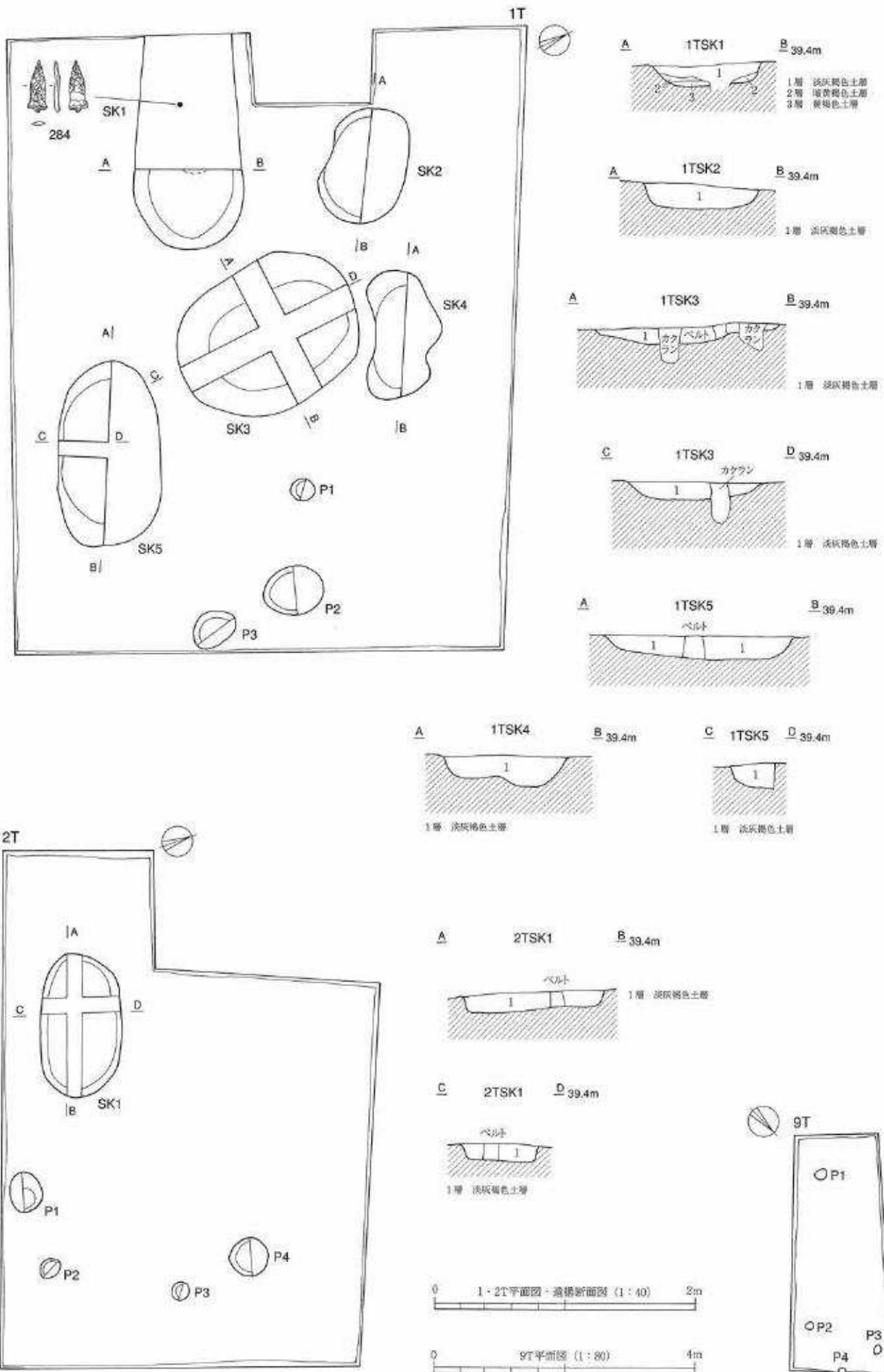
遺跡全体図

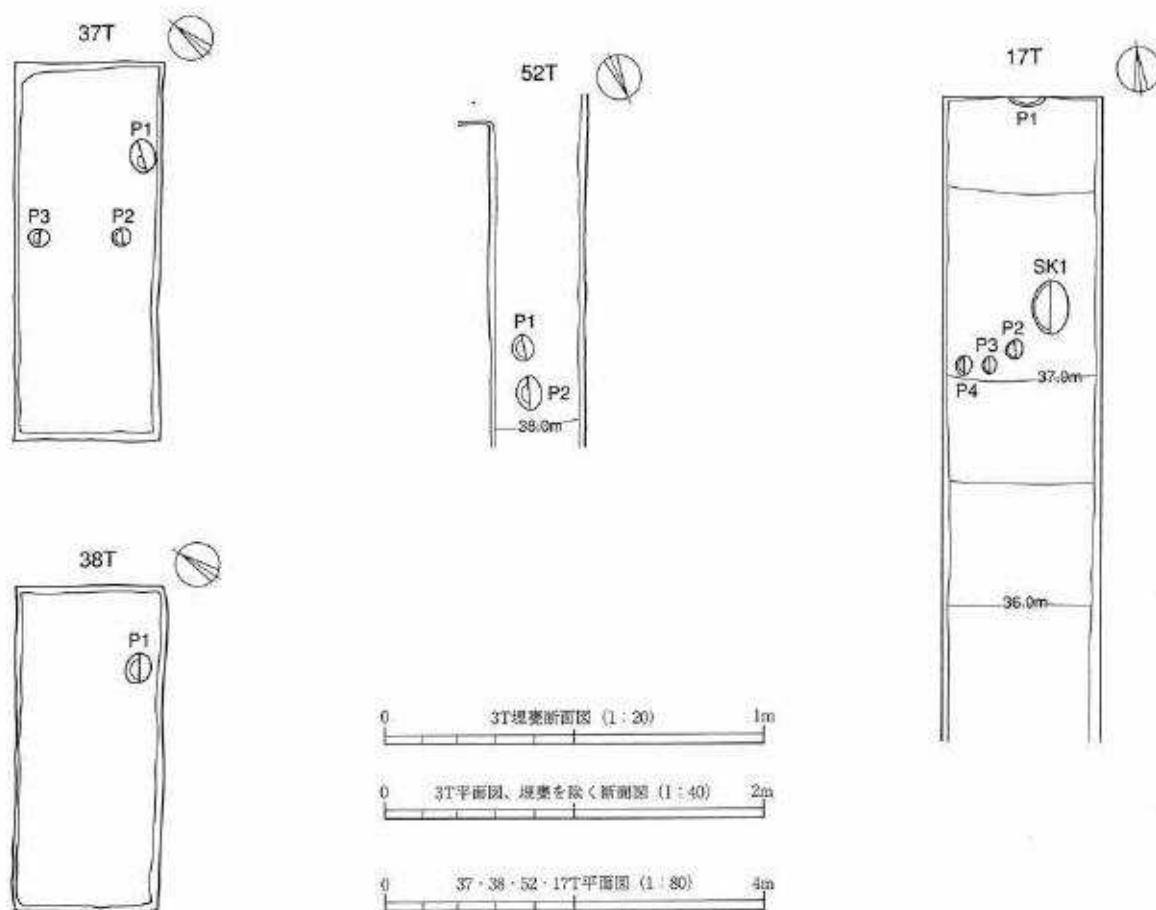
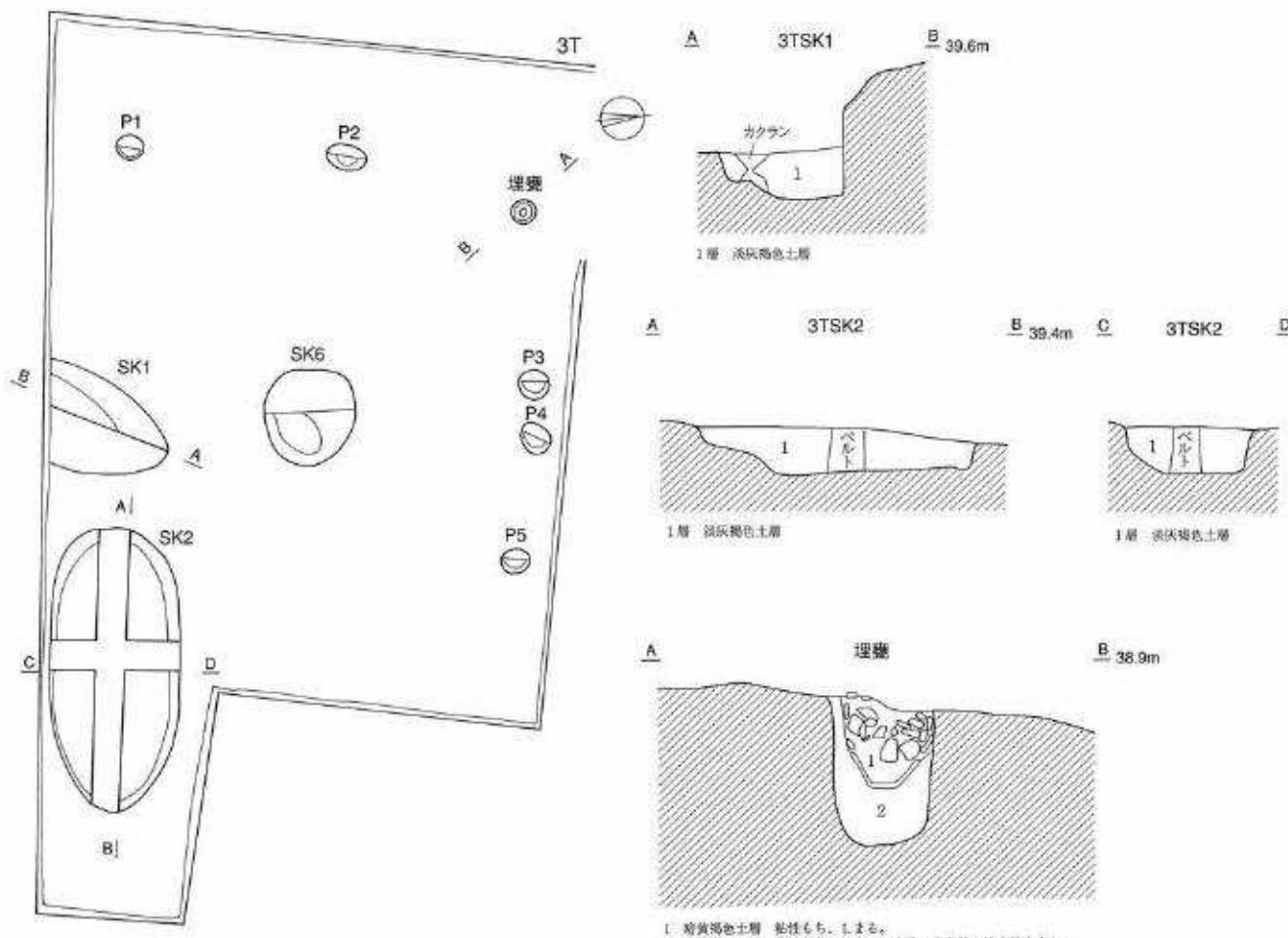
圖版 1

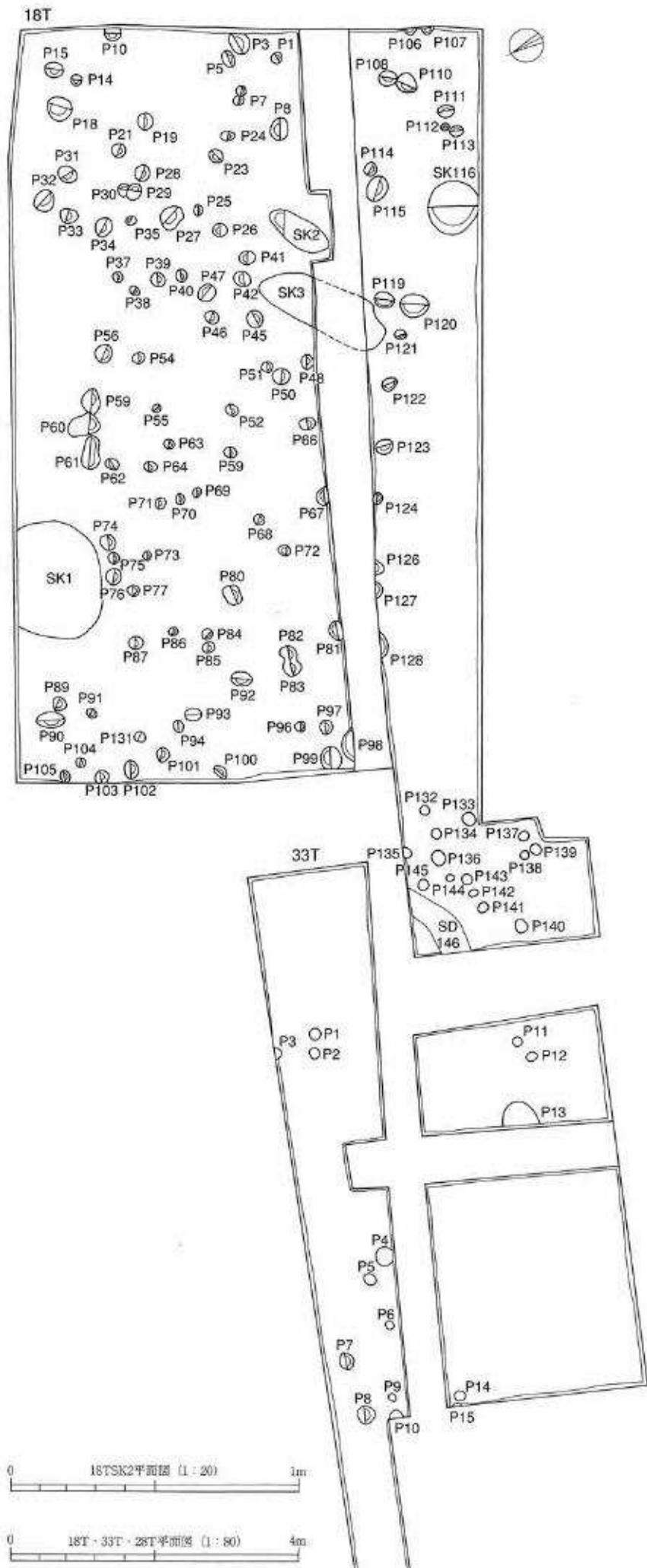


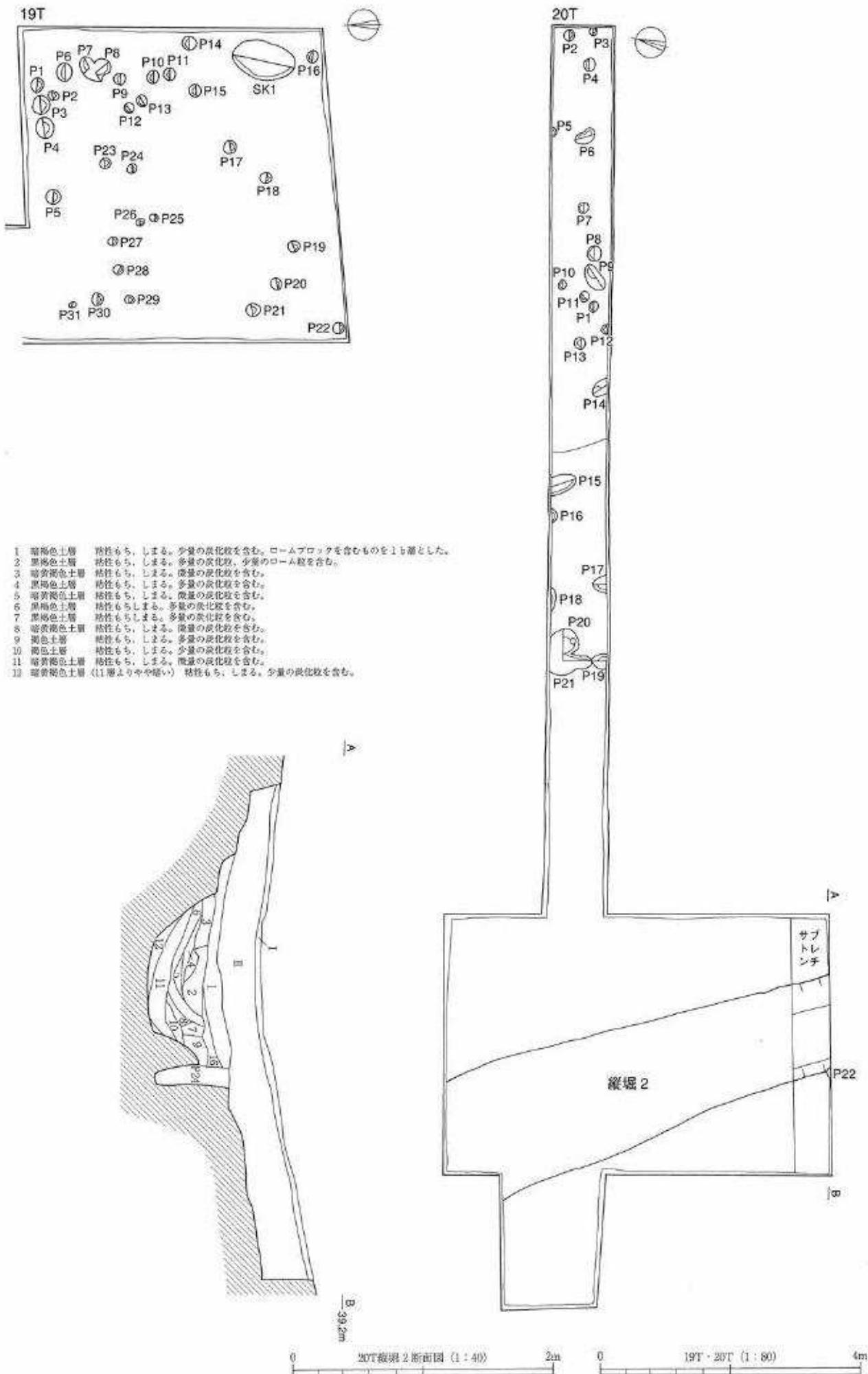


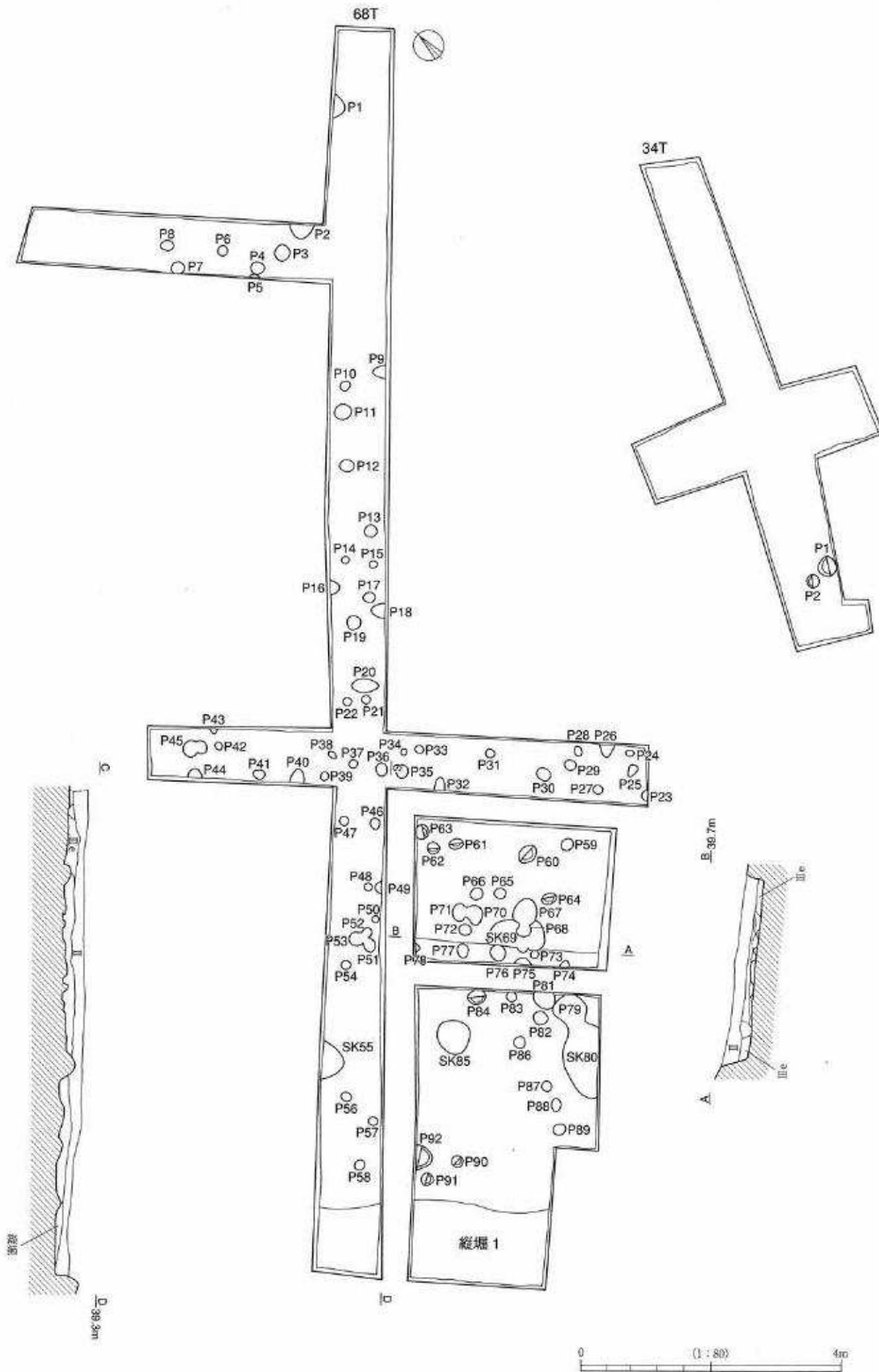


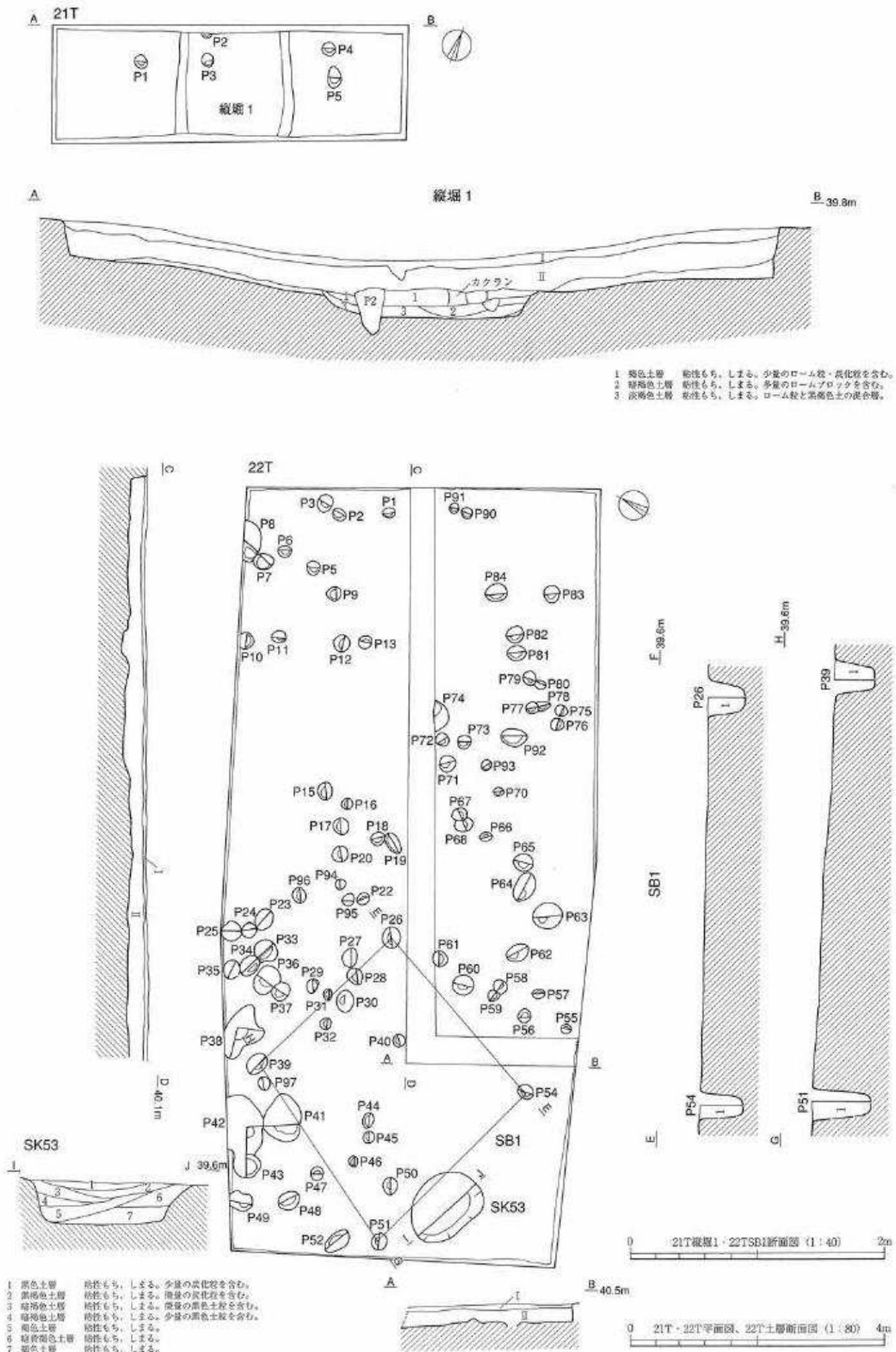


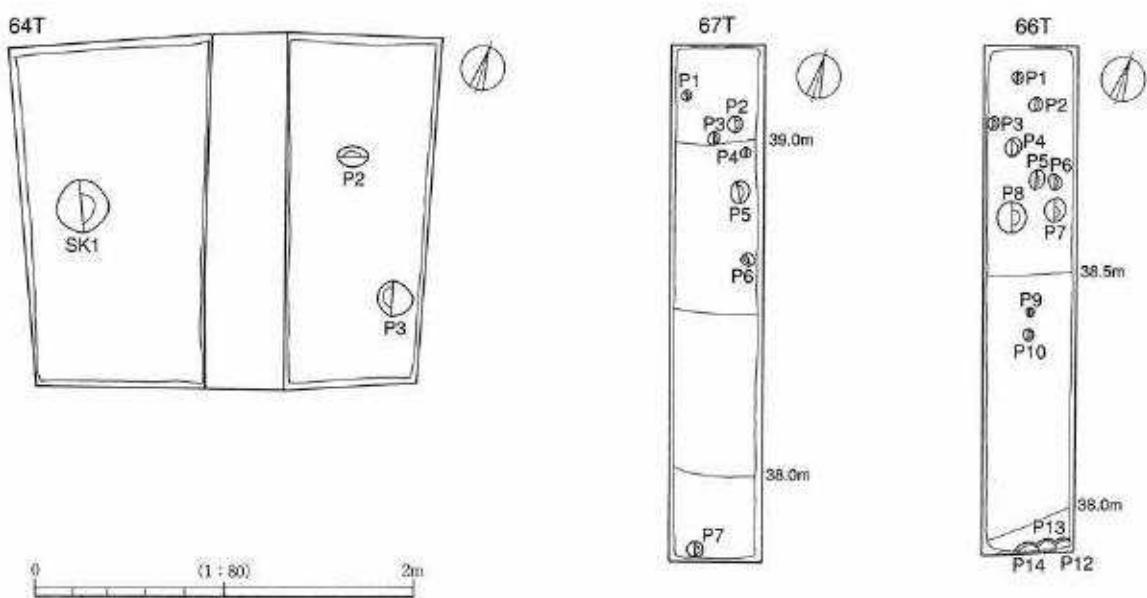
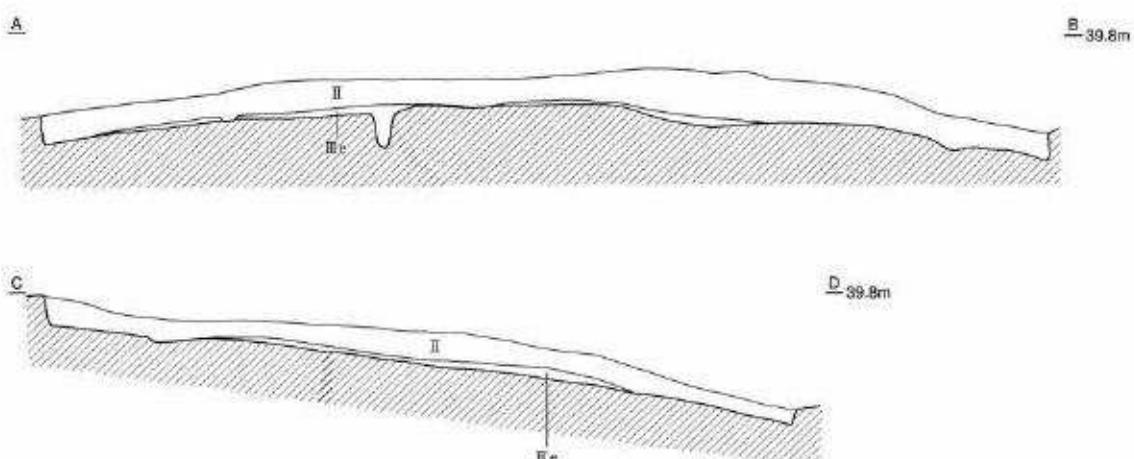
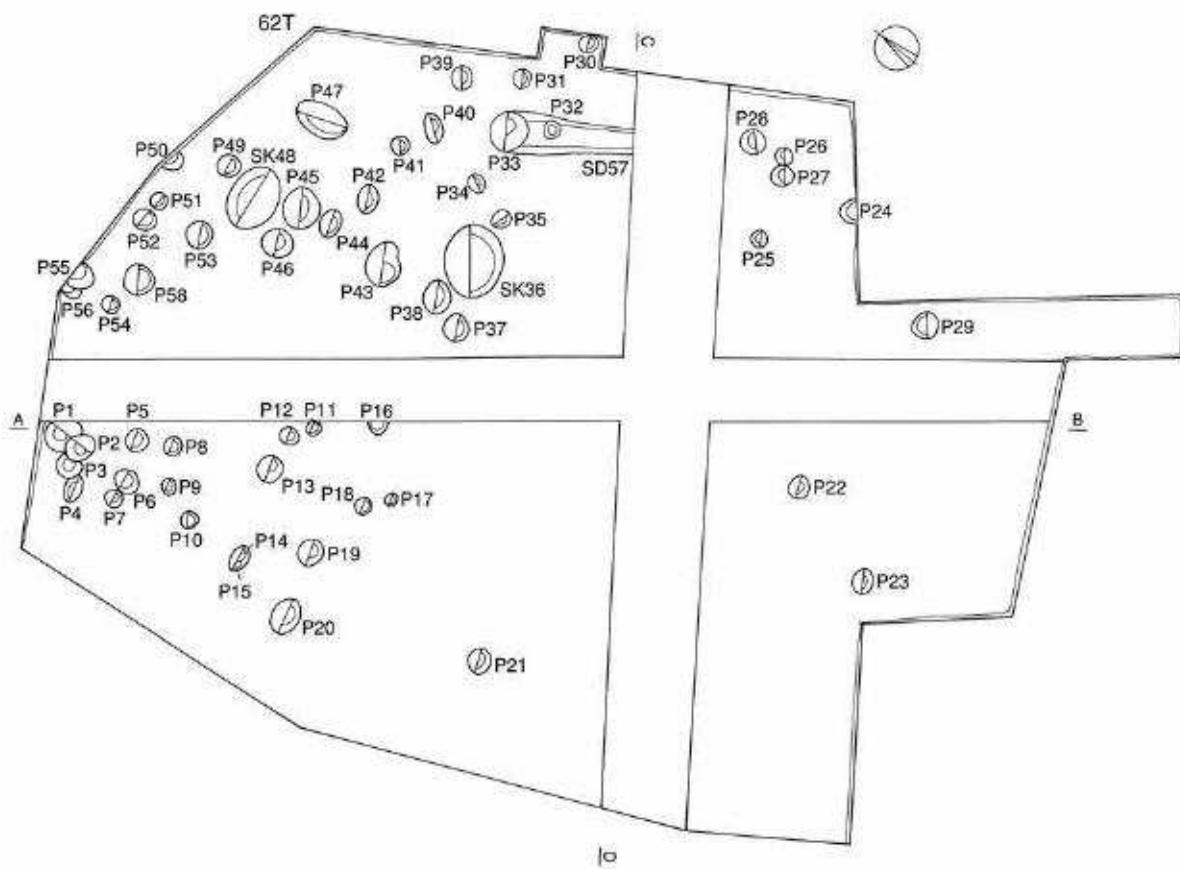


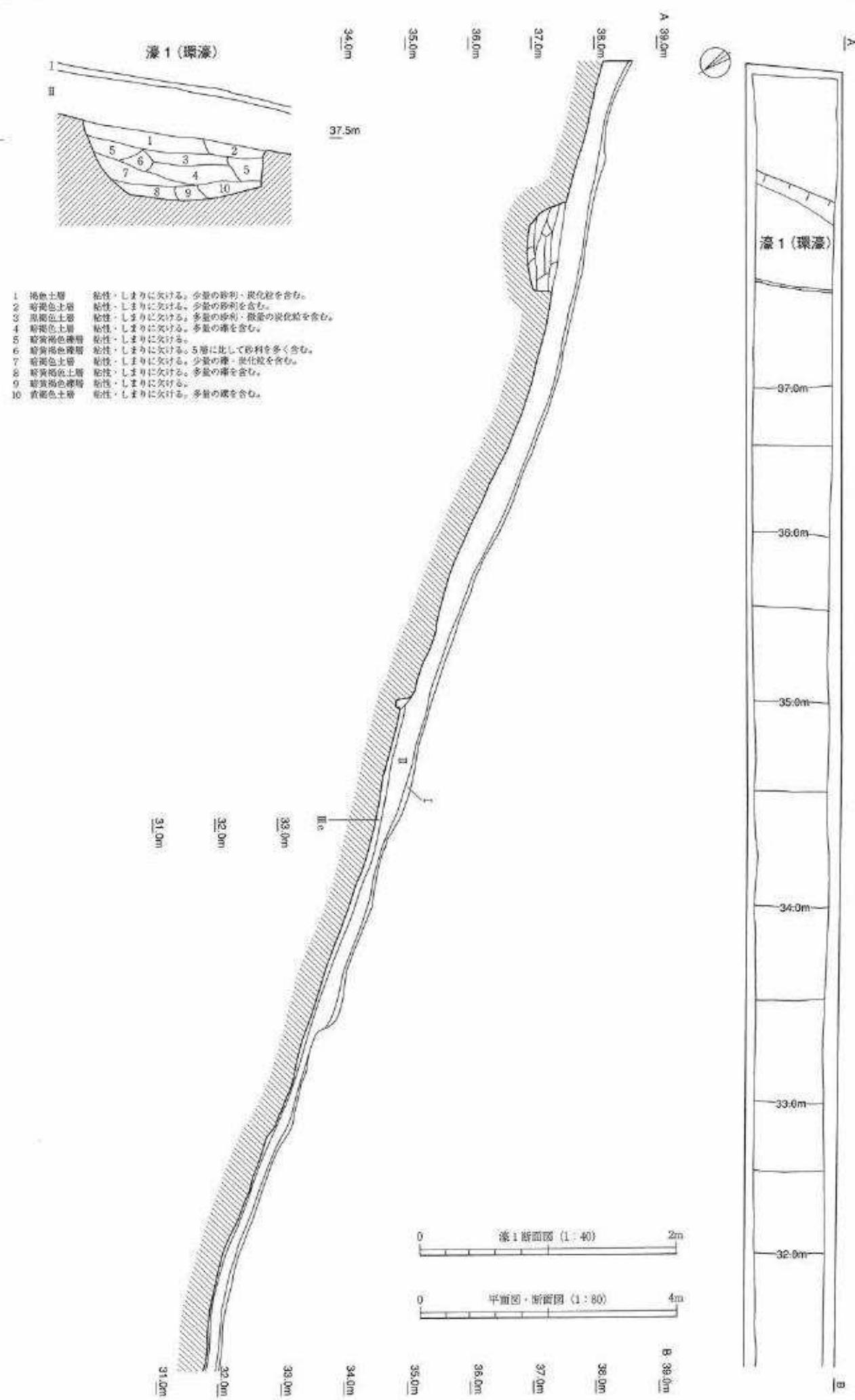


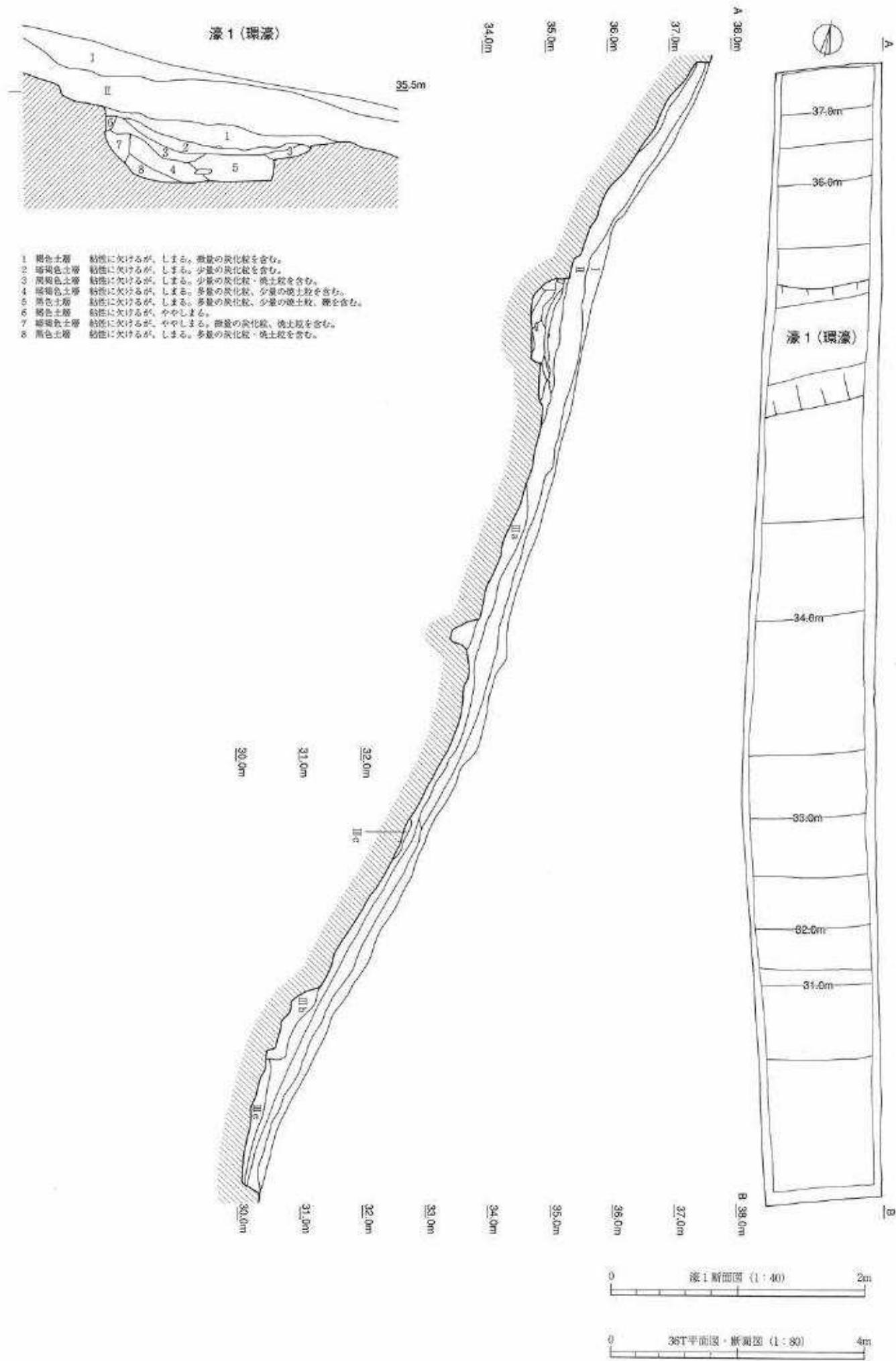


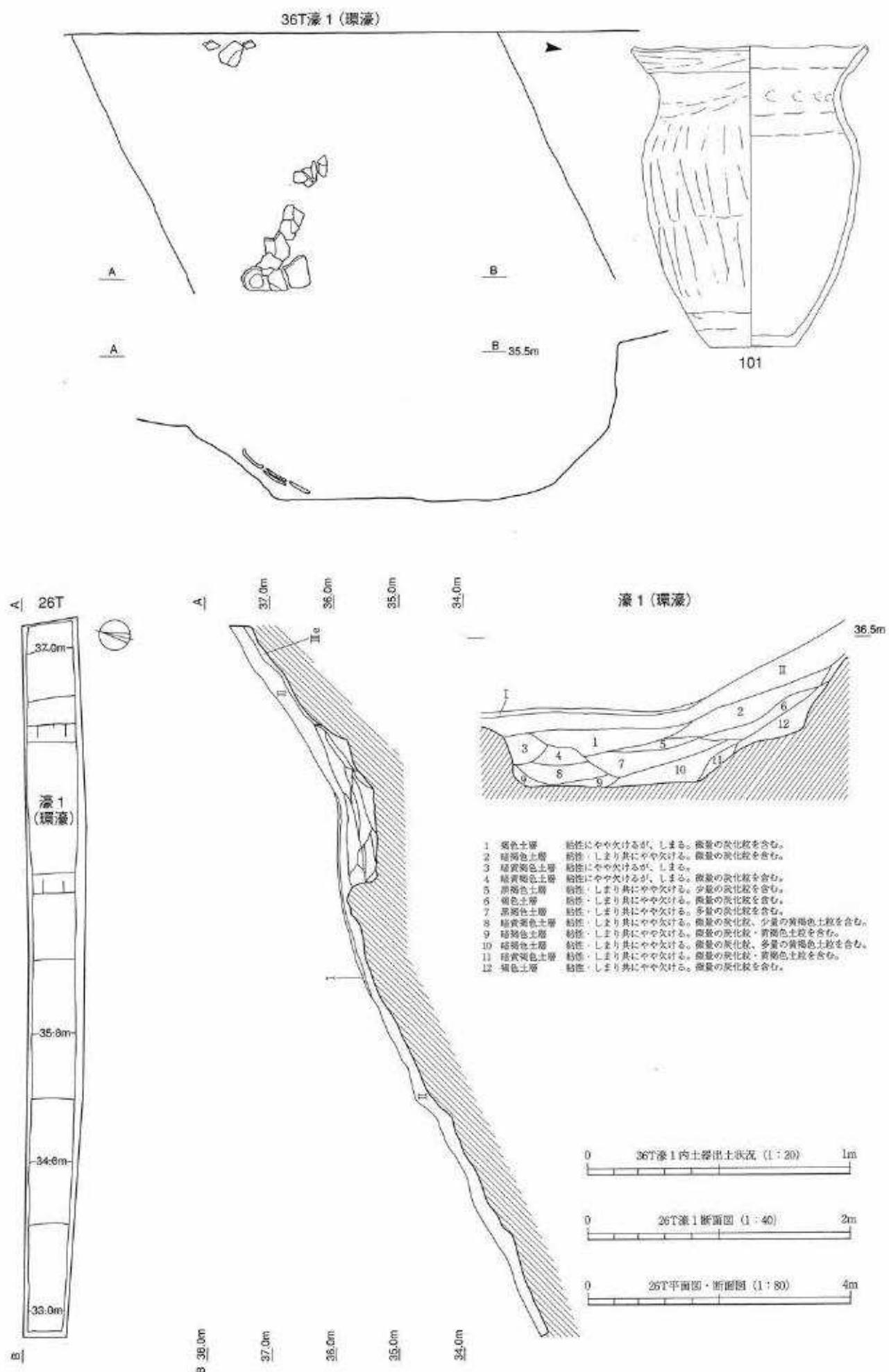


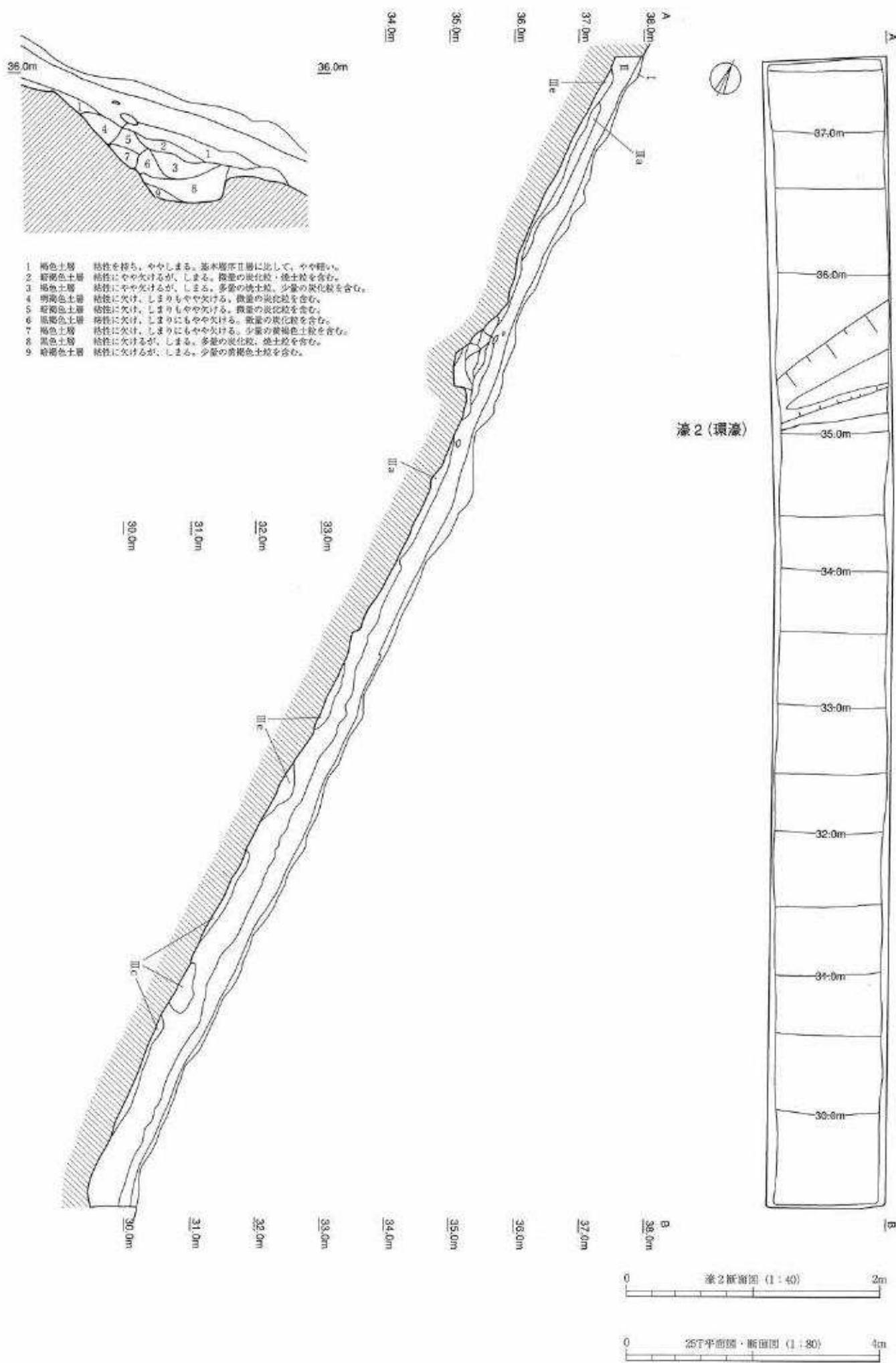


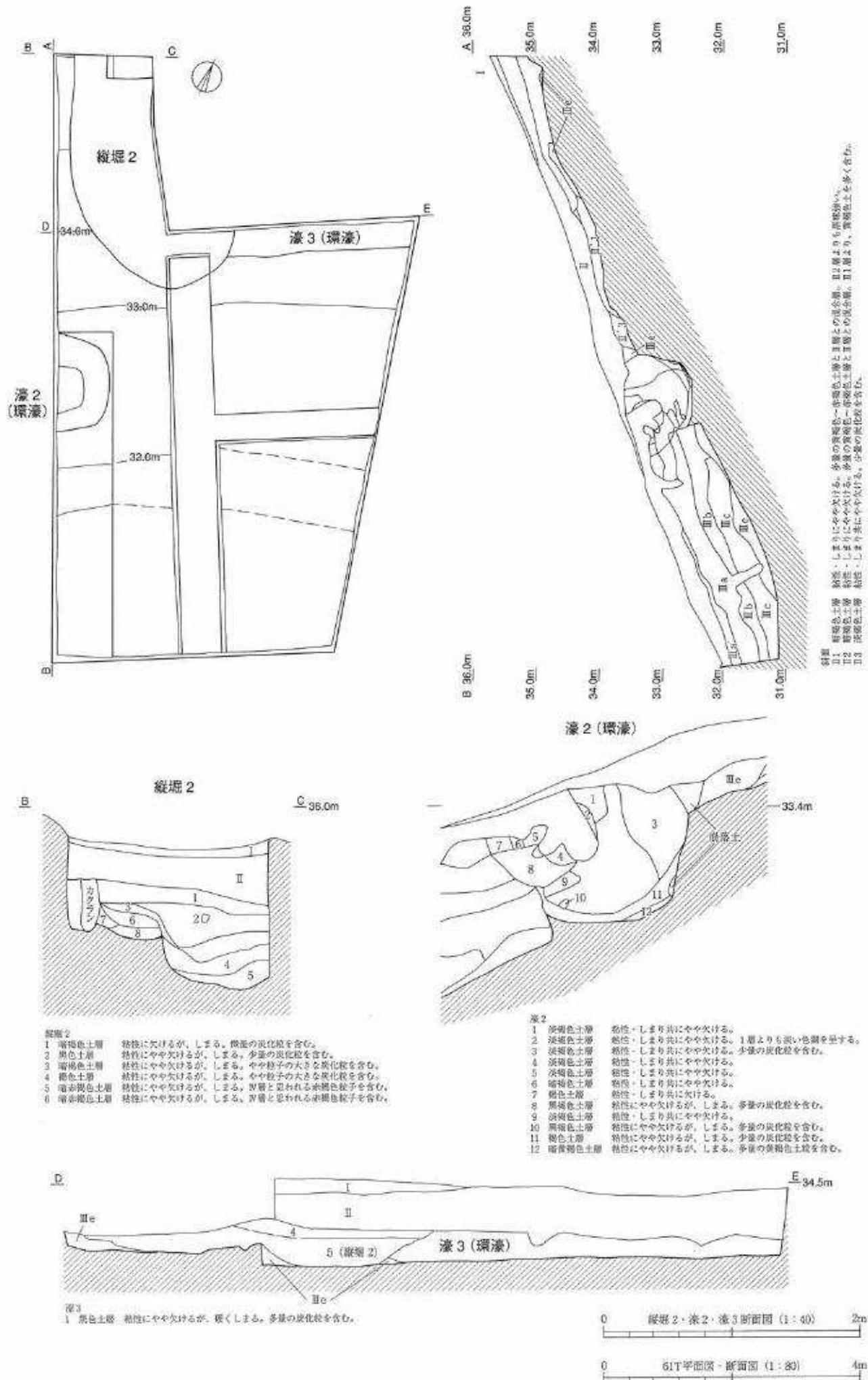






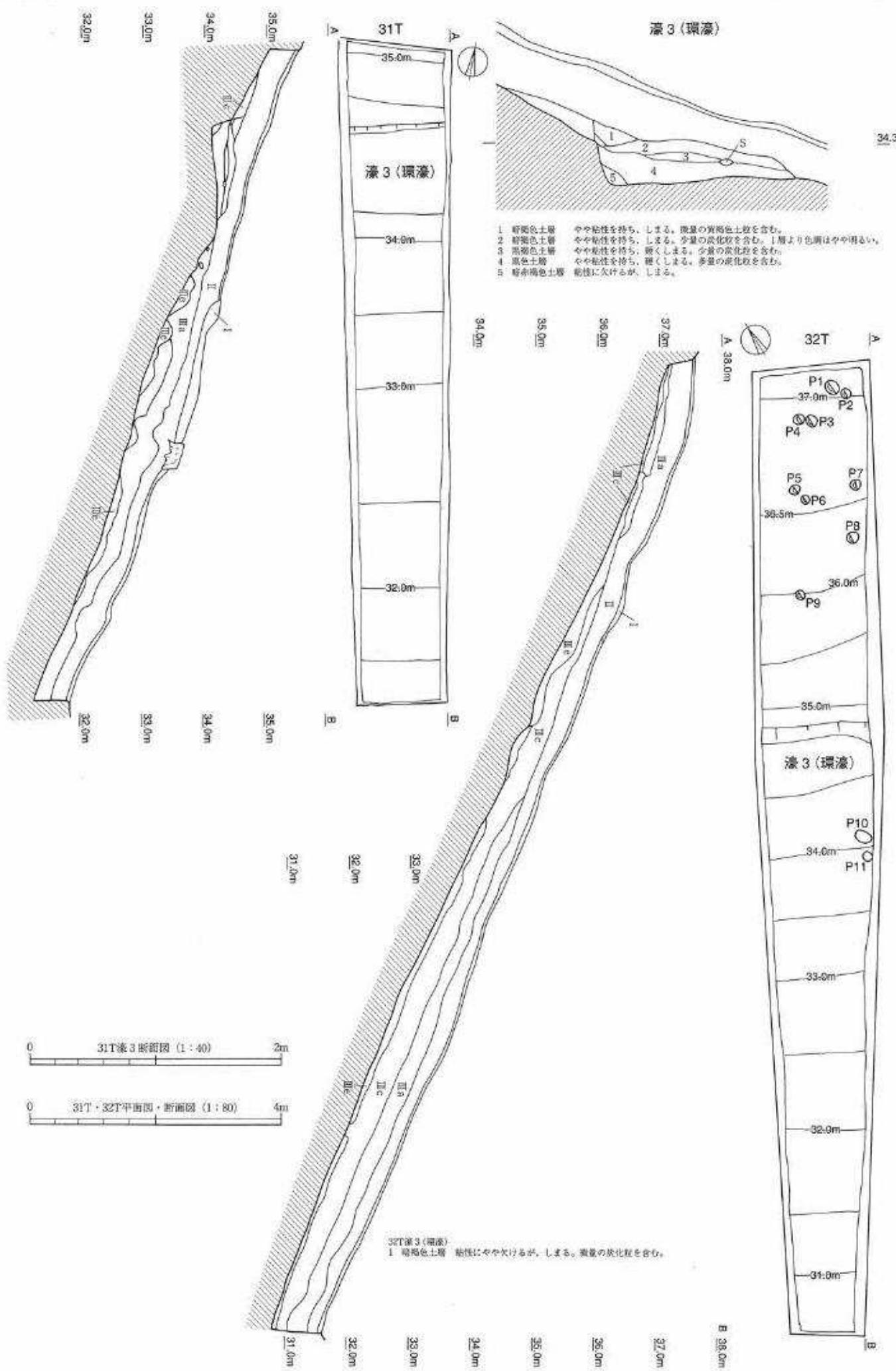




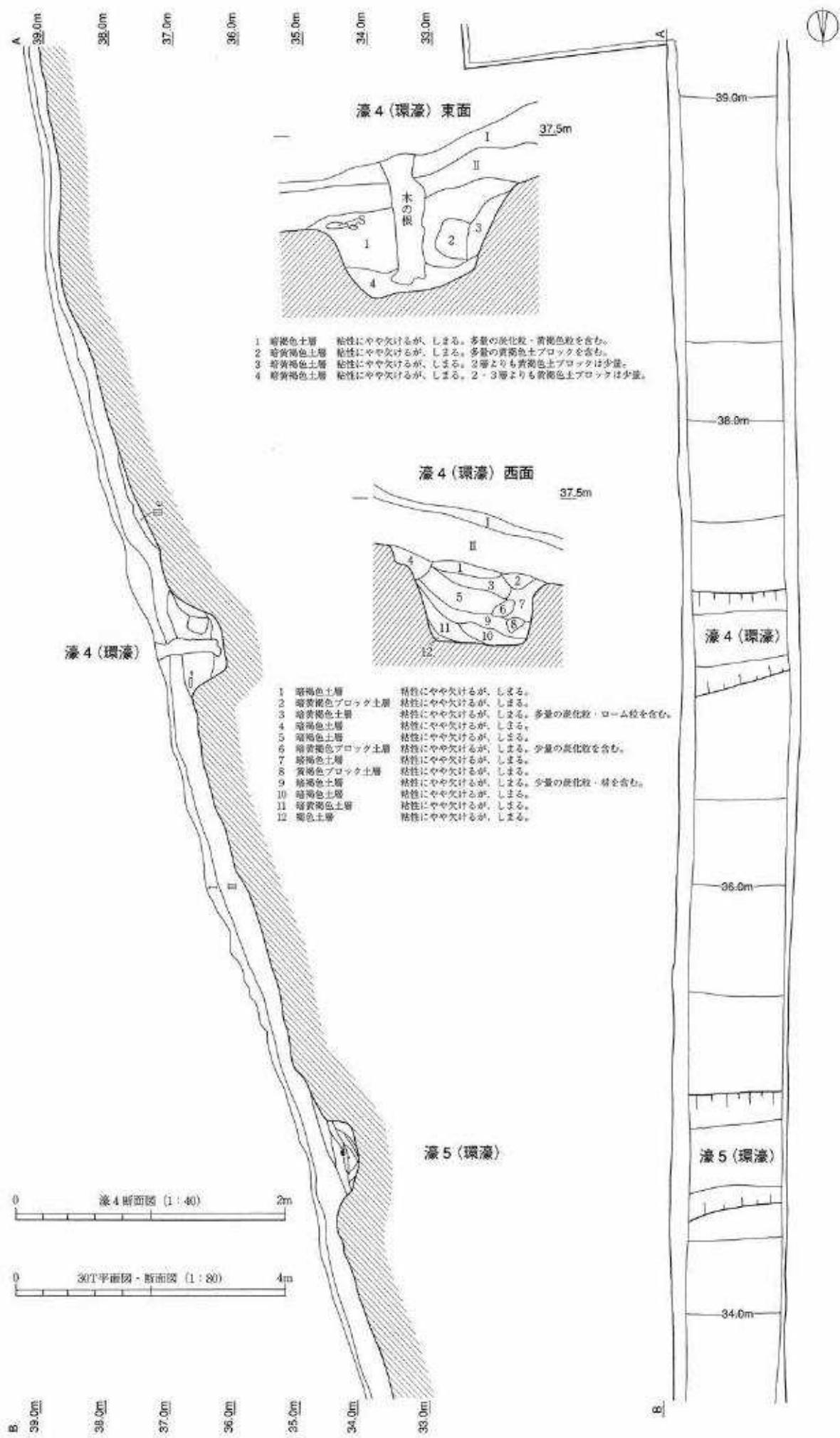


圖版 16

B 地点 31T · 32T



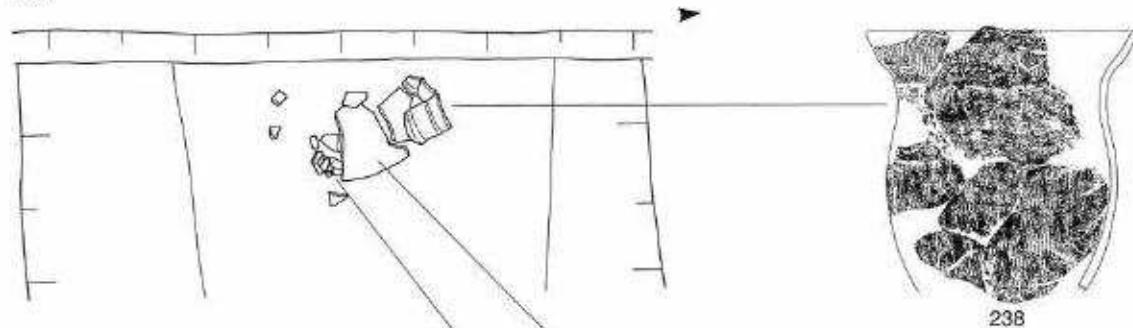




濠5(環濠) 東面



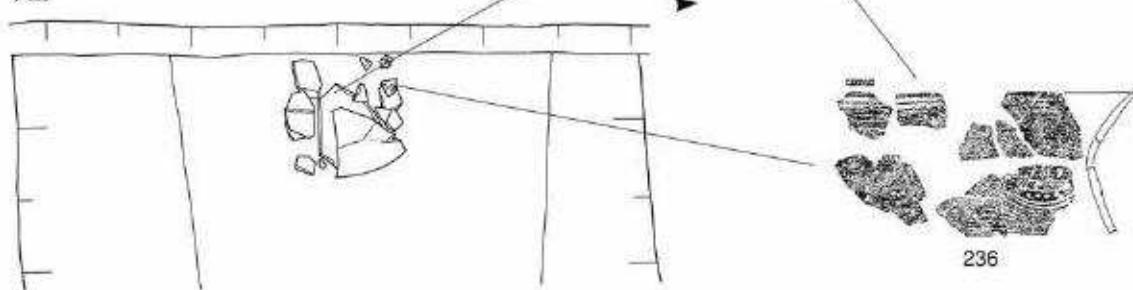
上面



35.0m

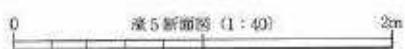
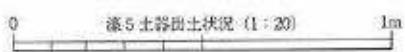


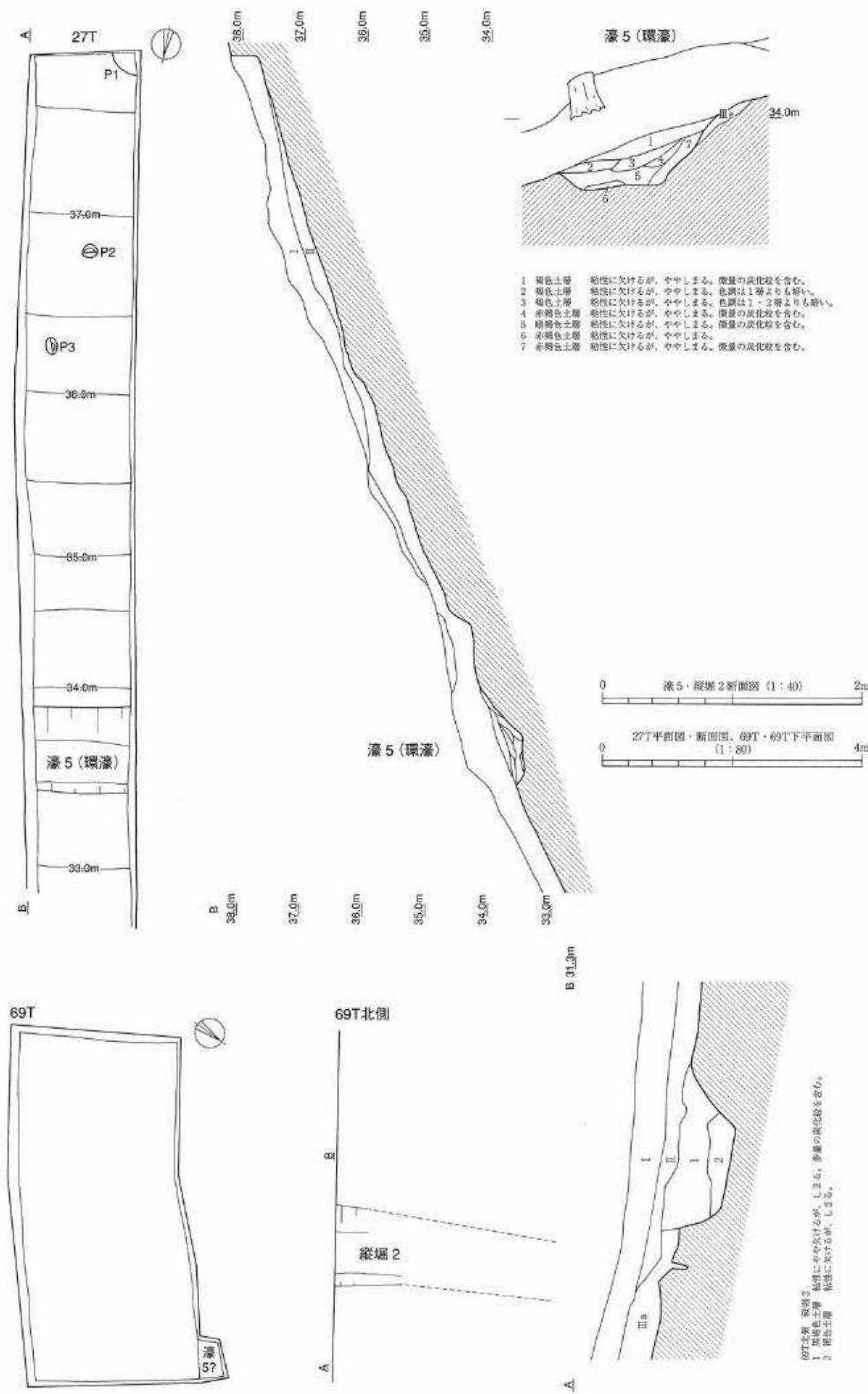
下面

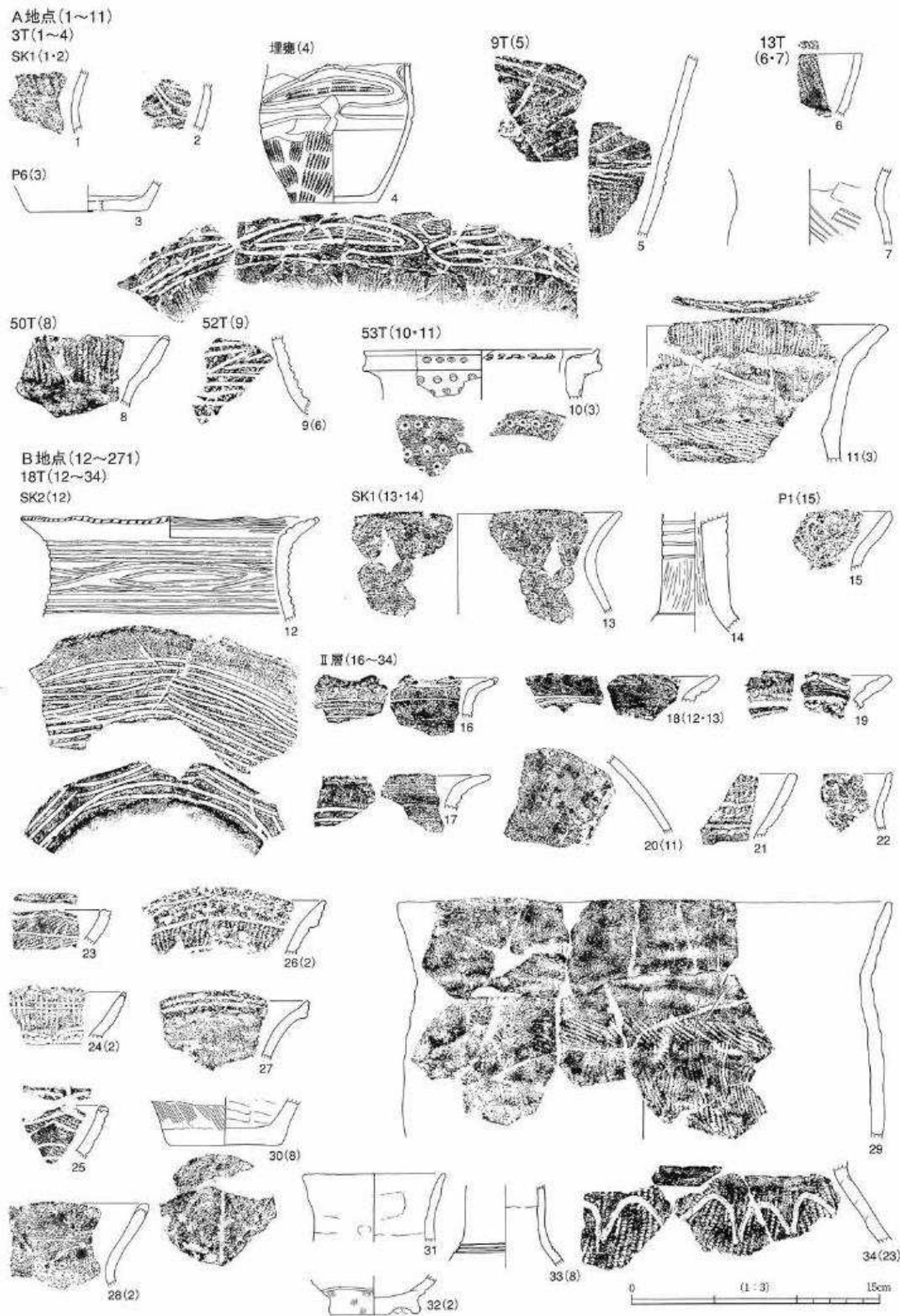


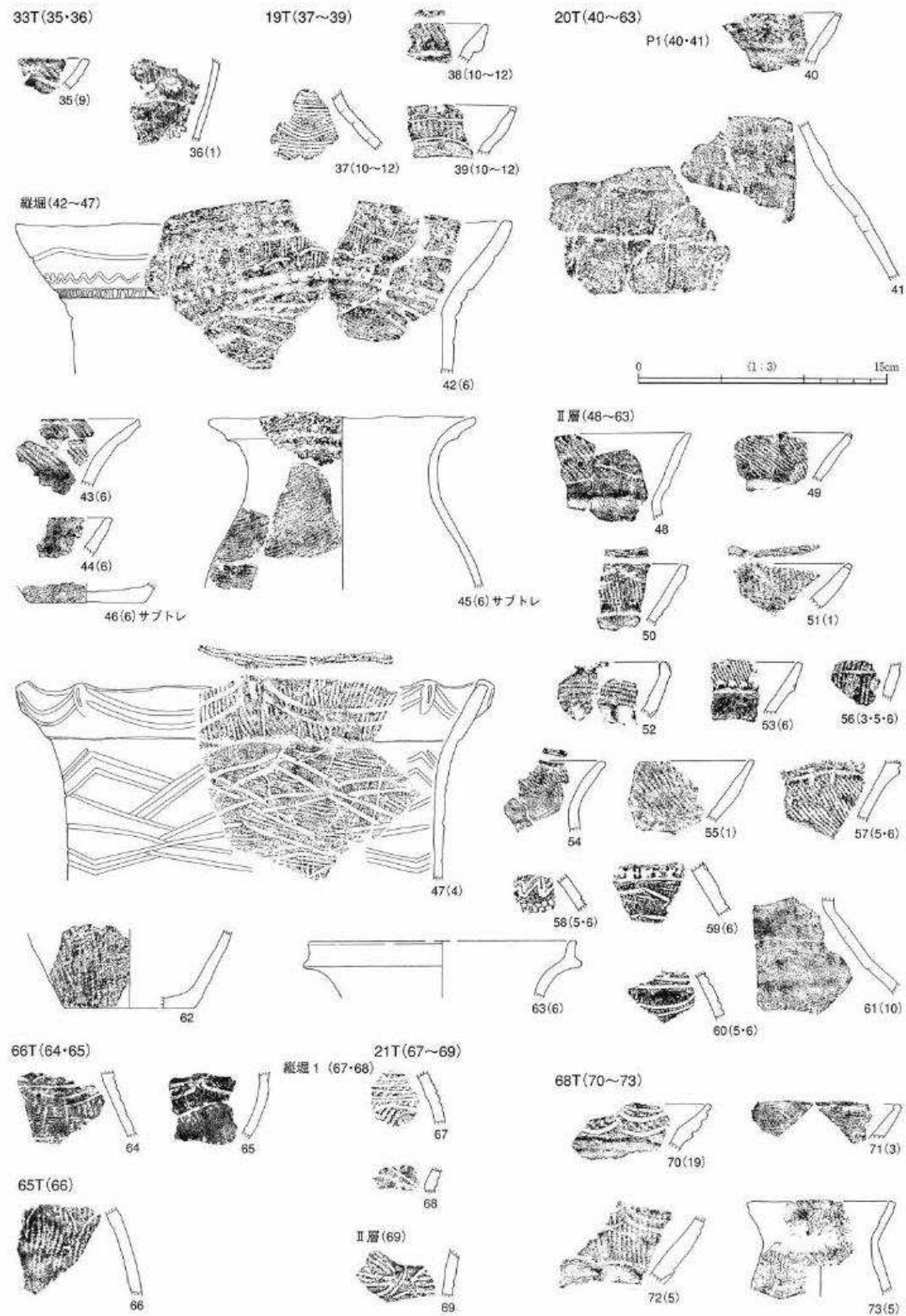
236

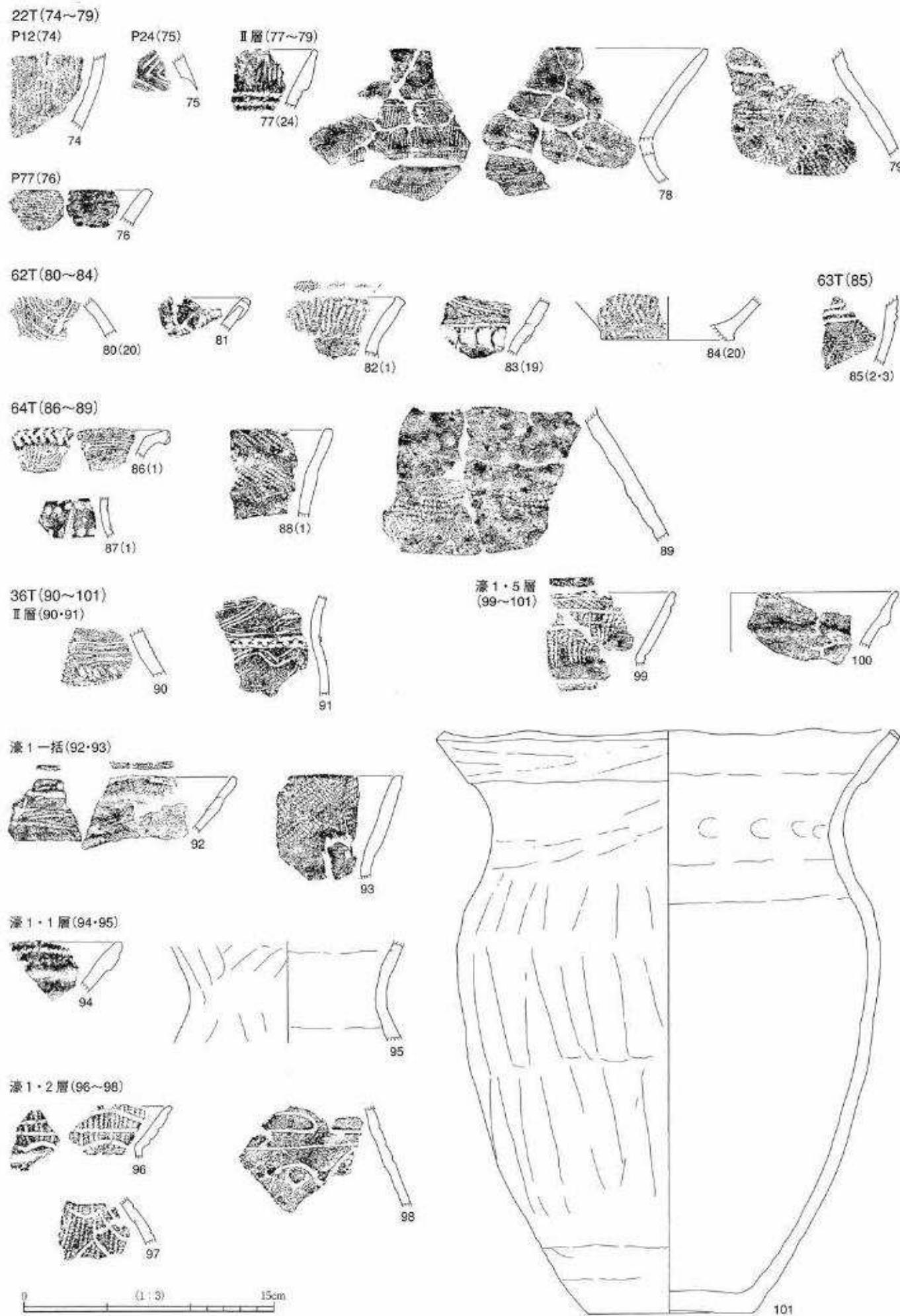
35.0m

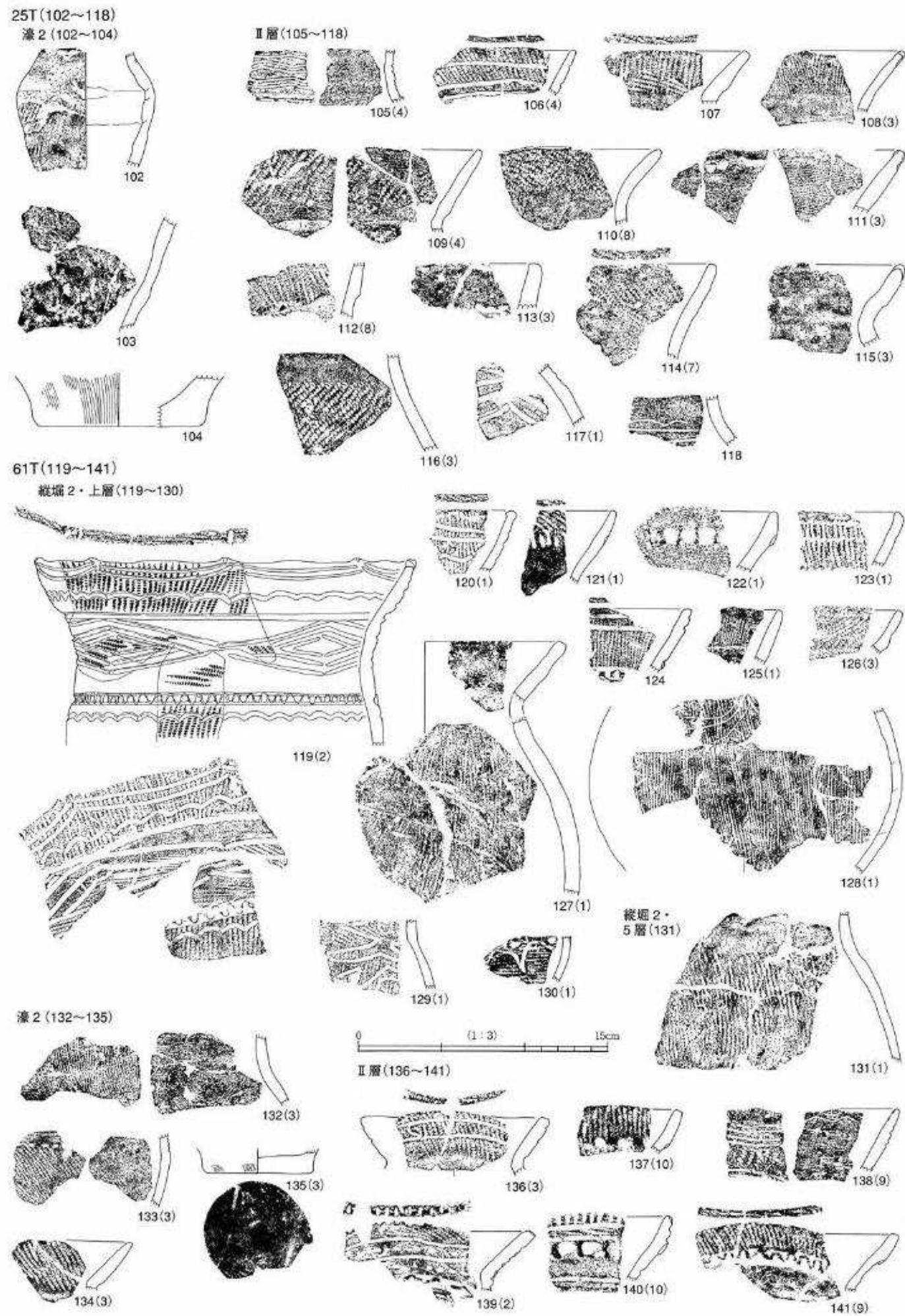






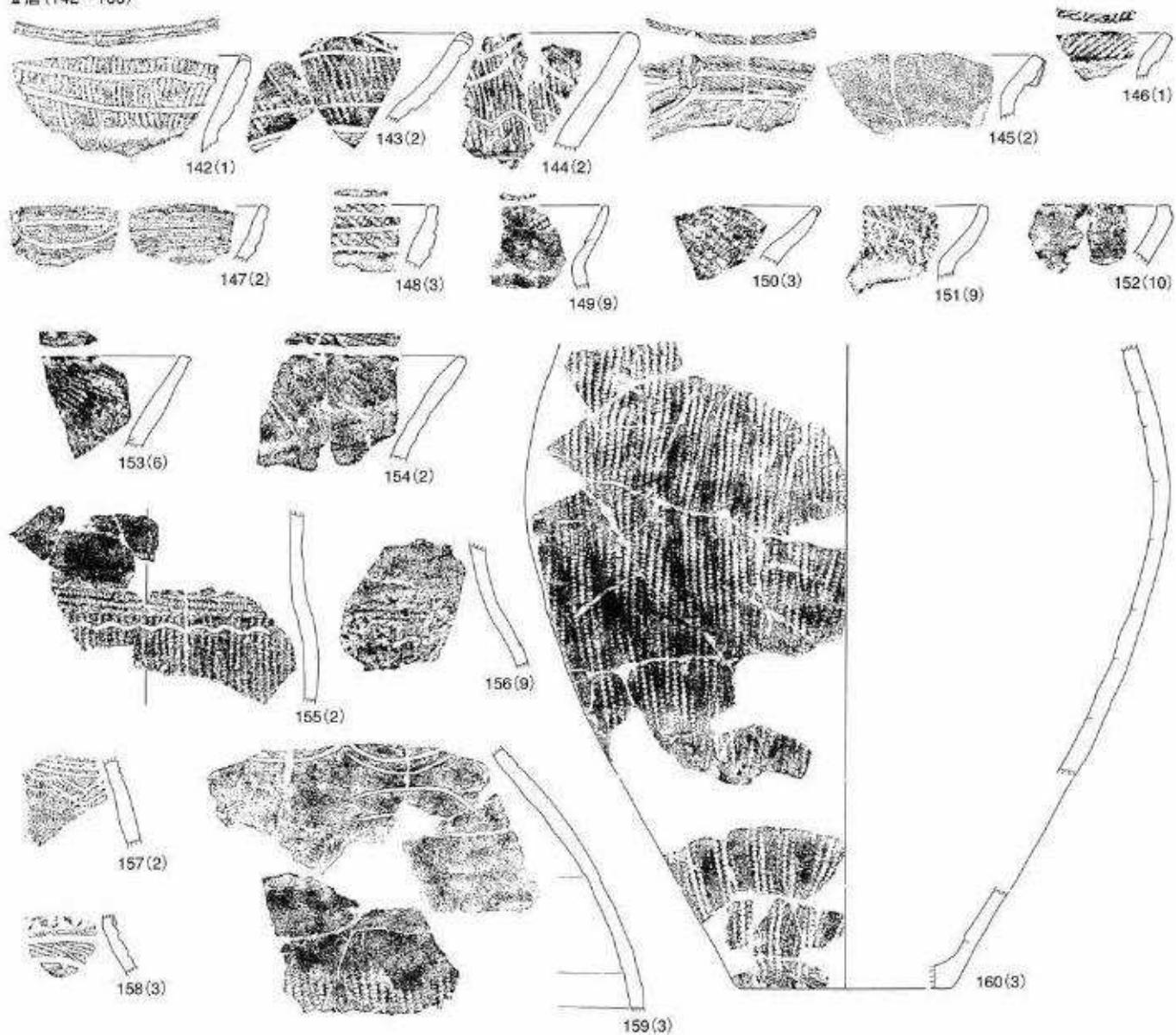




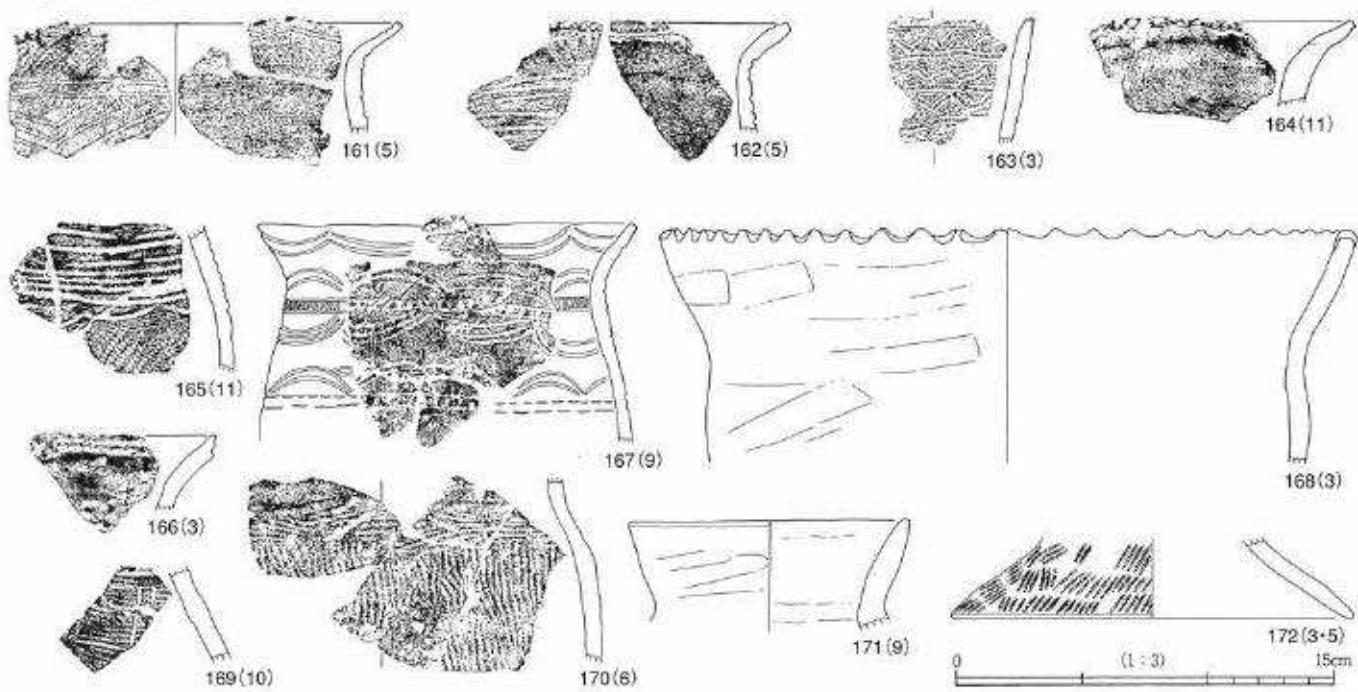


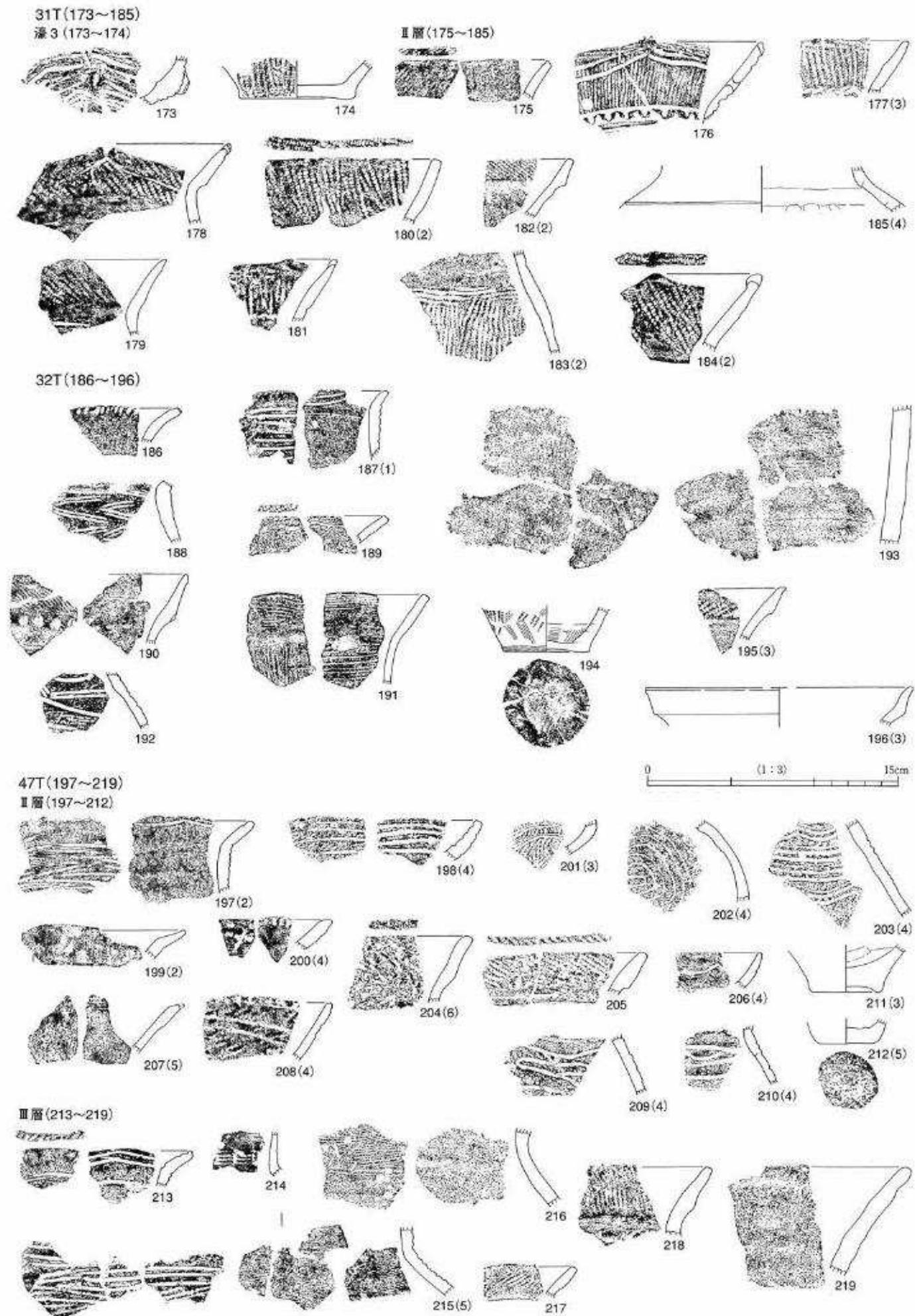
61T(142~172)

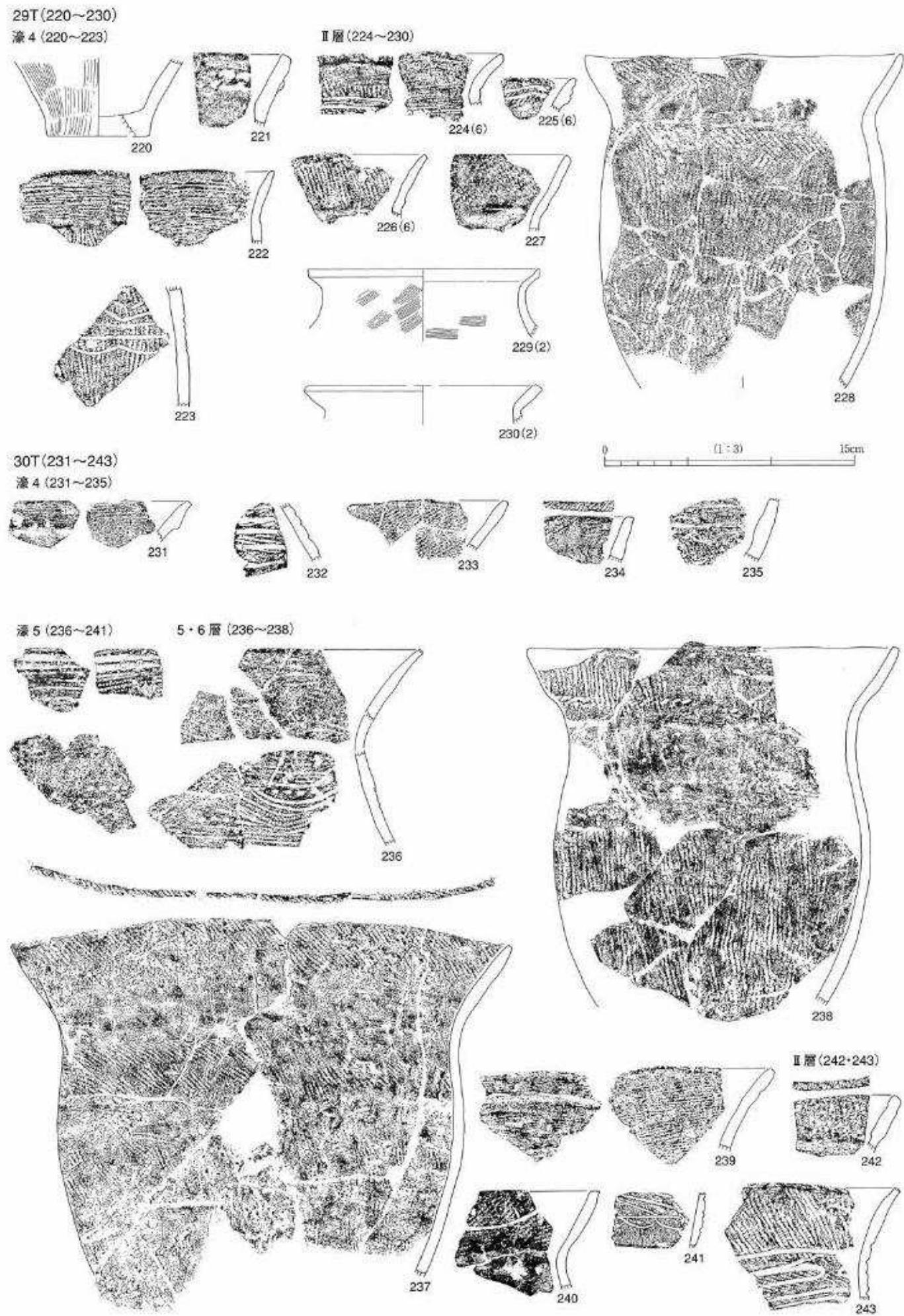
Ⅱ層(142~160)

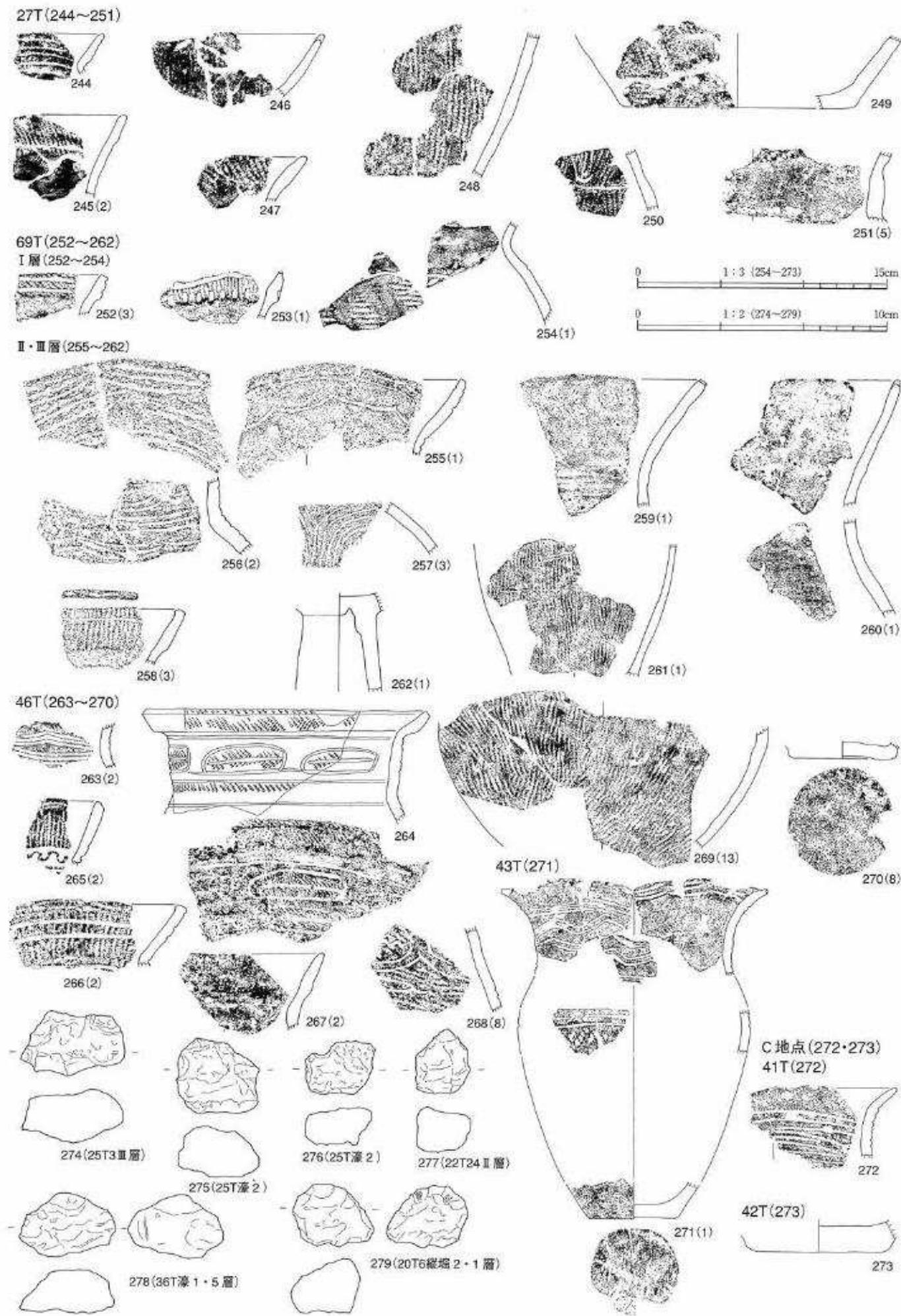


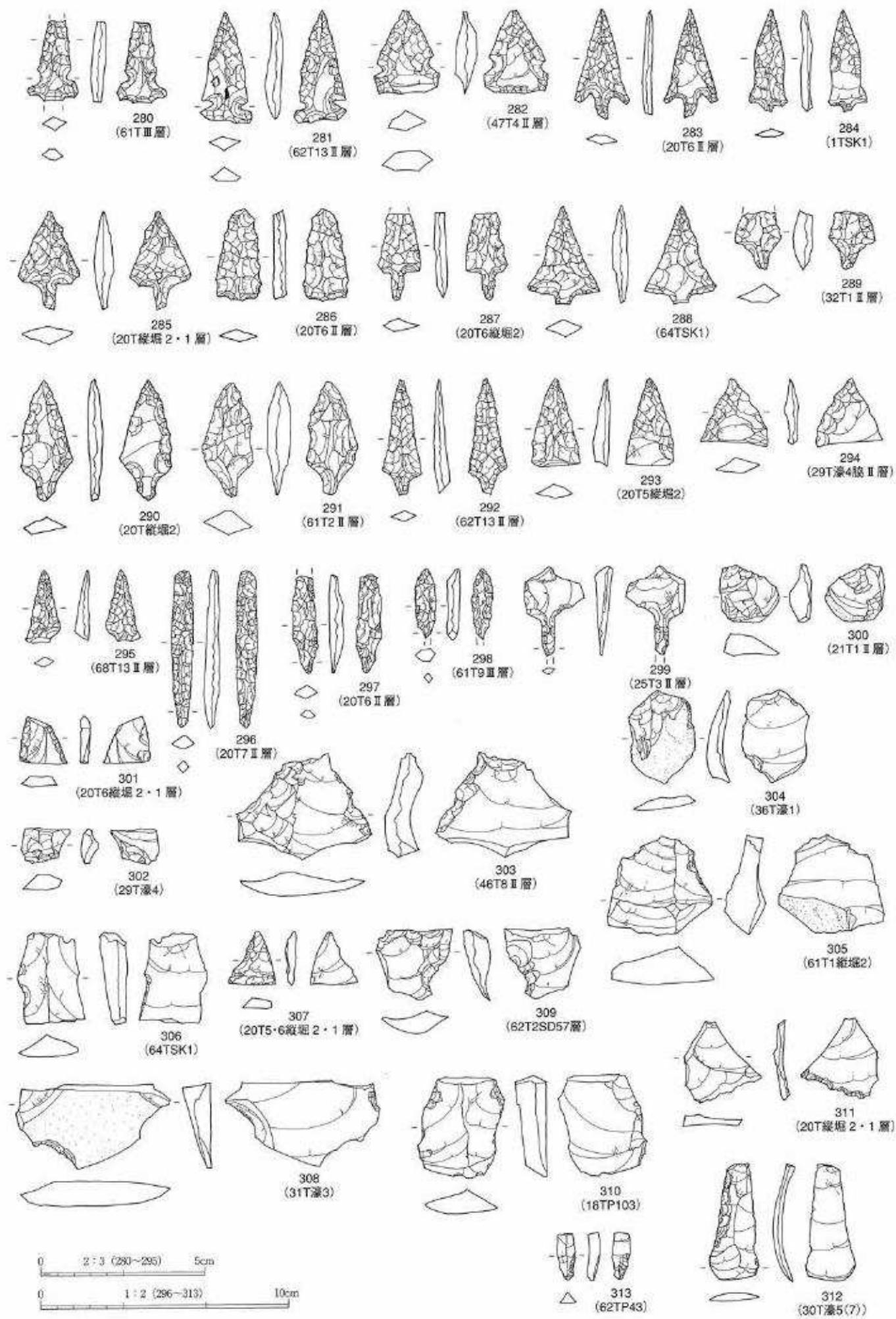
Ⅲ層(161~172)

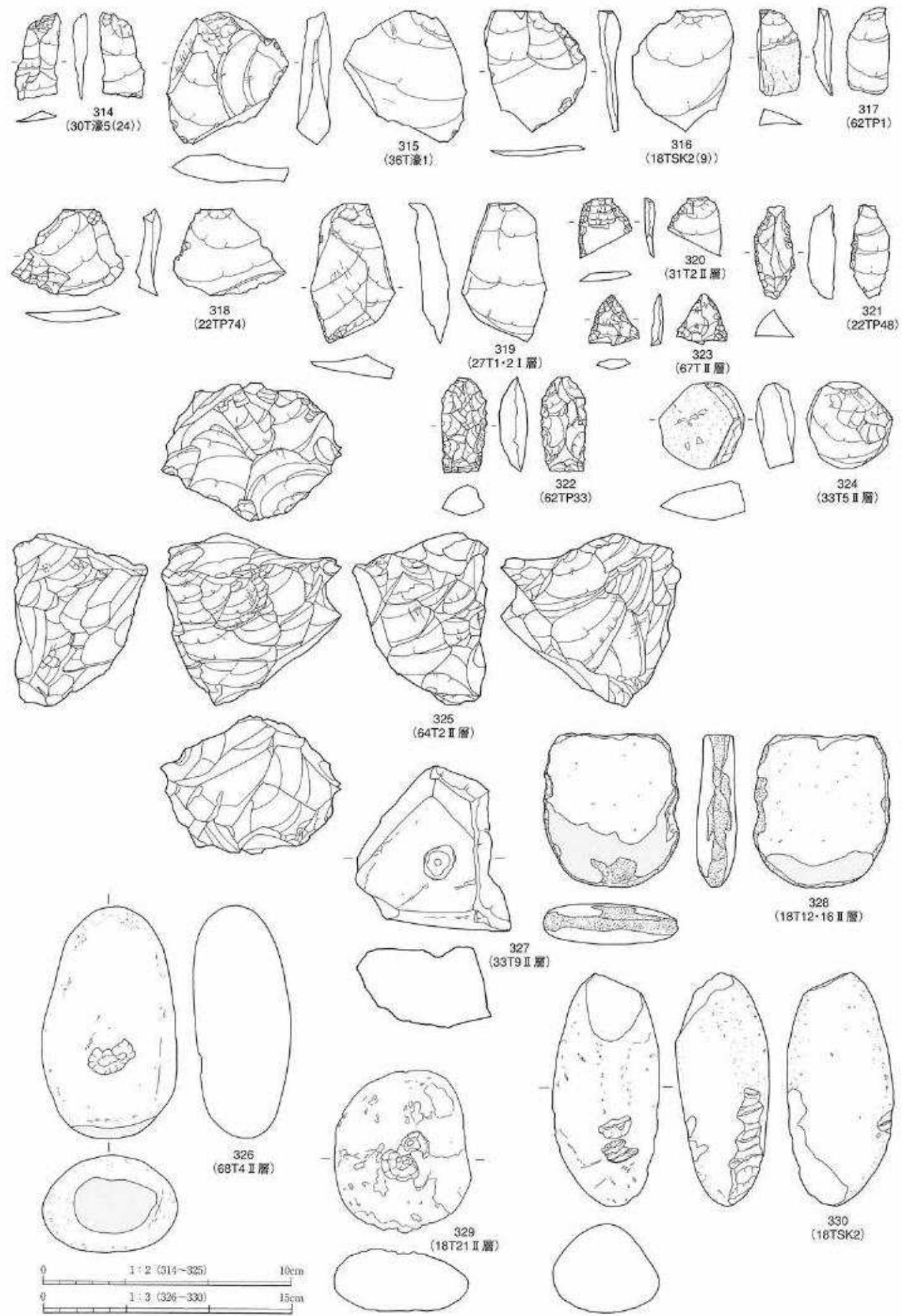


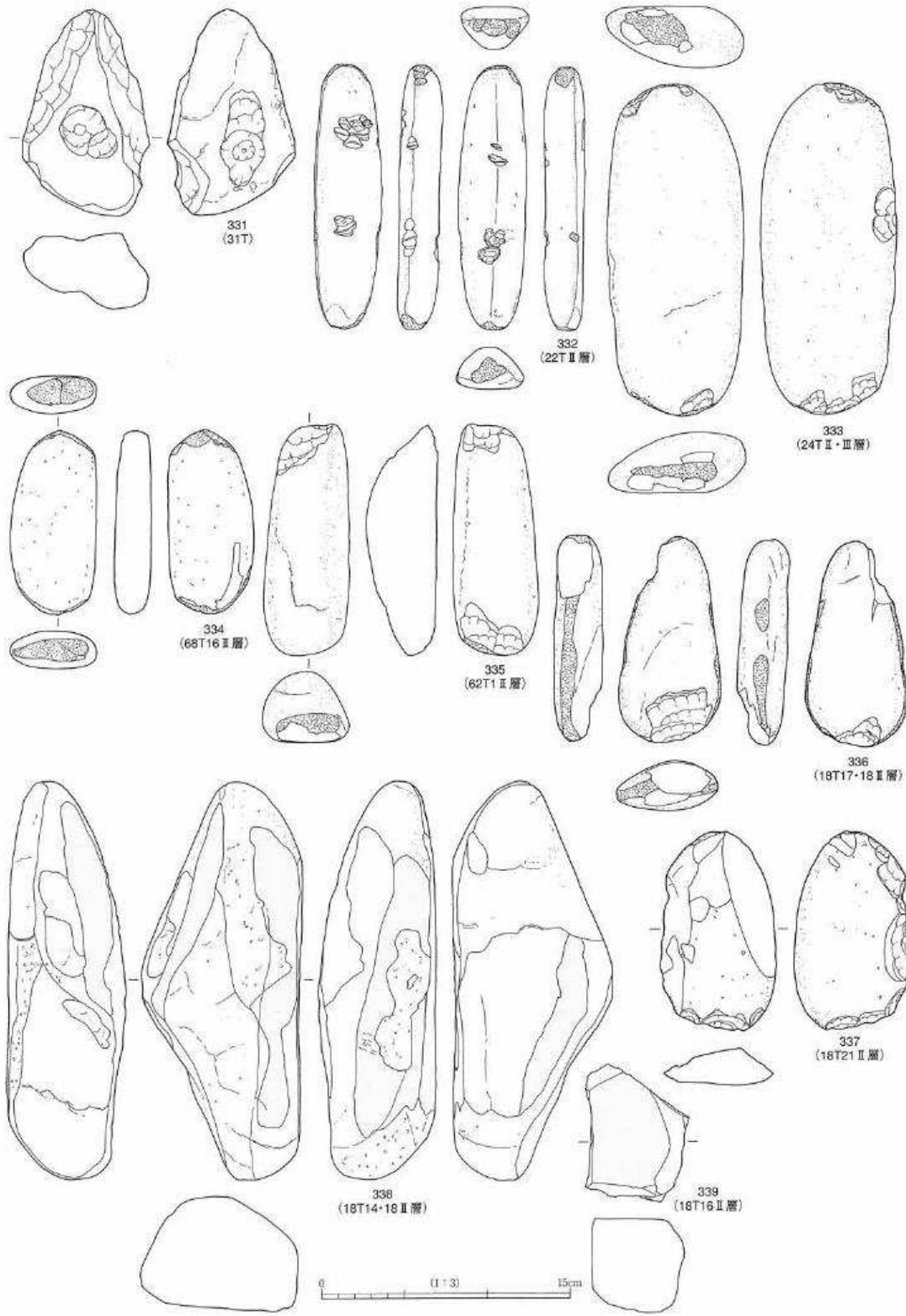


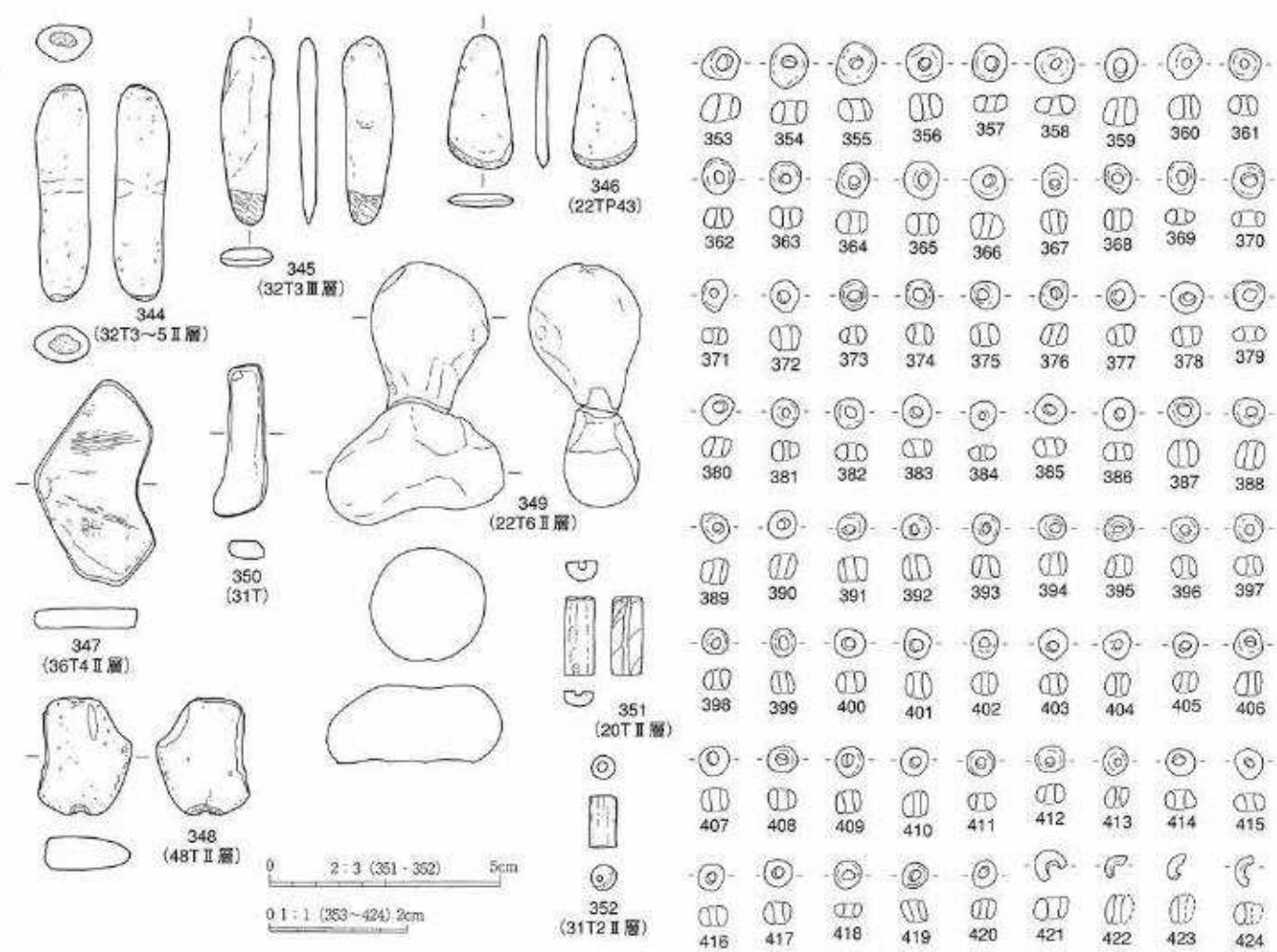
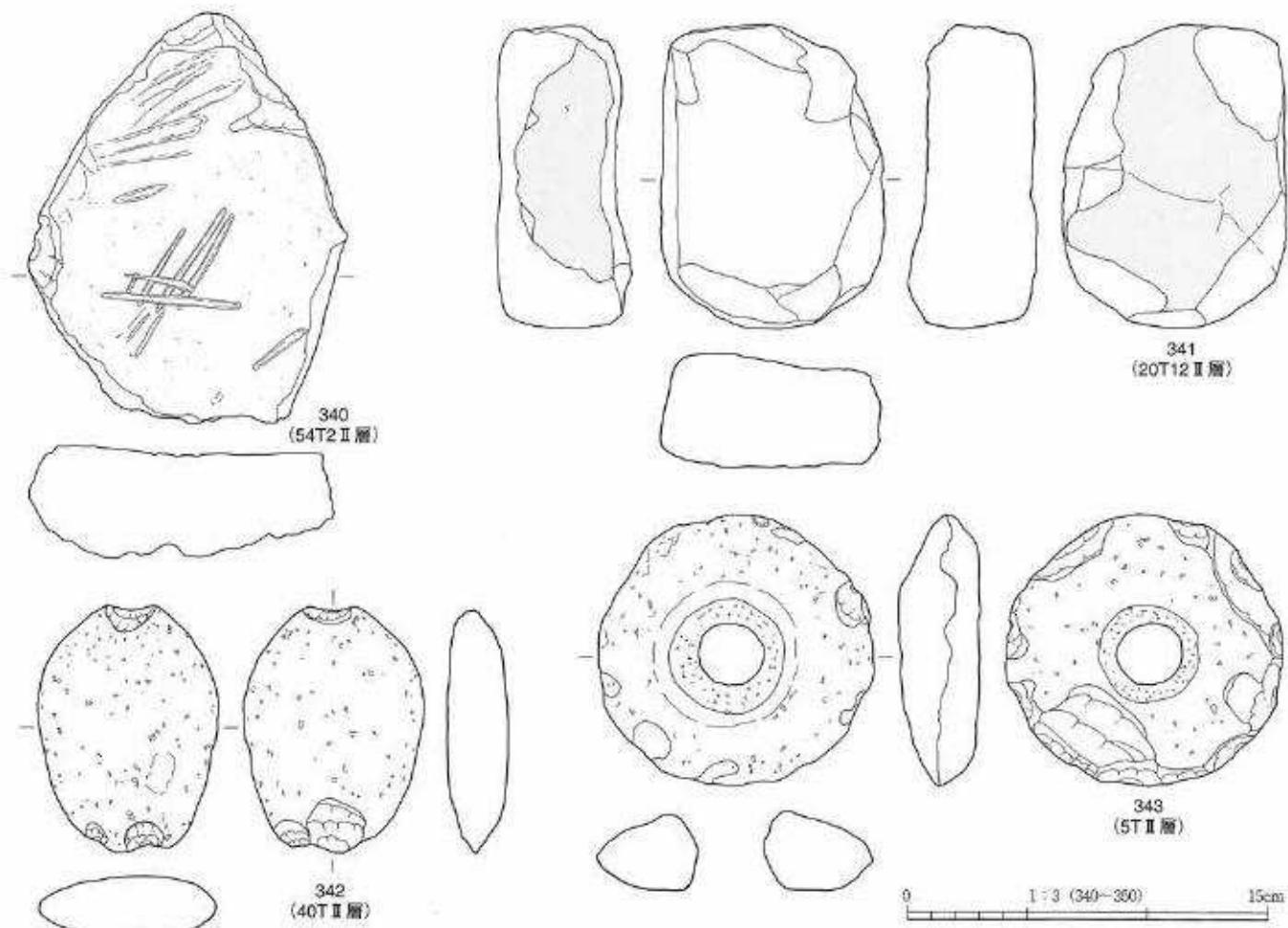


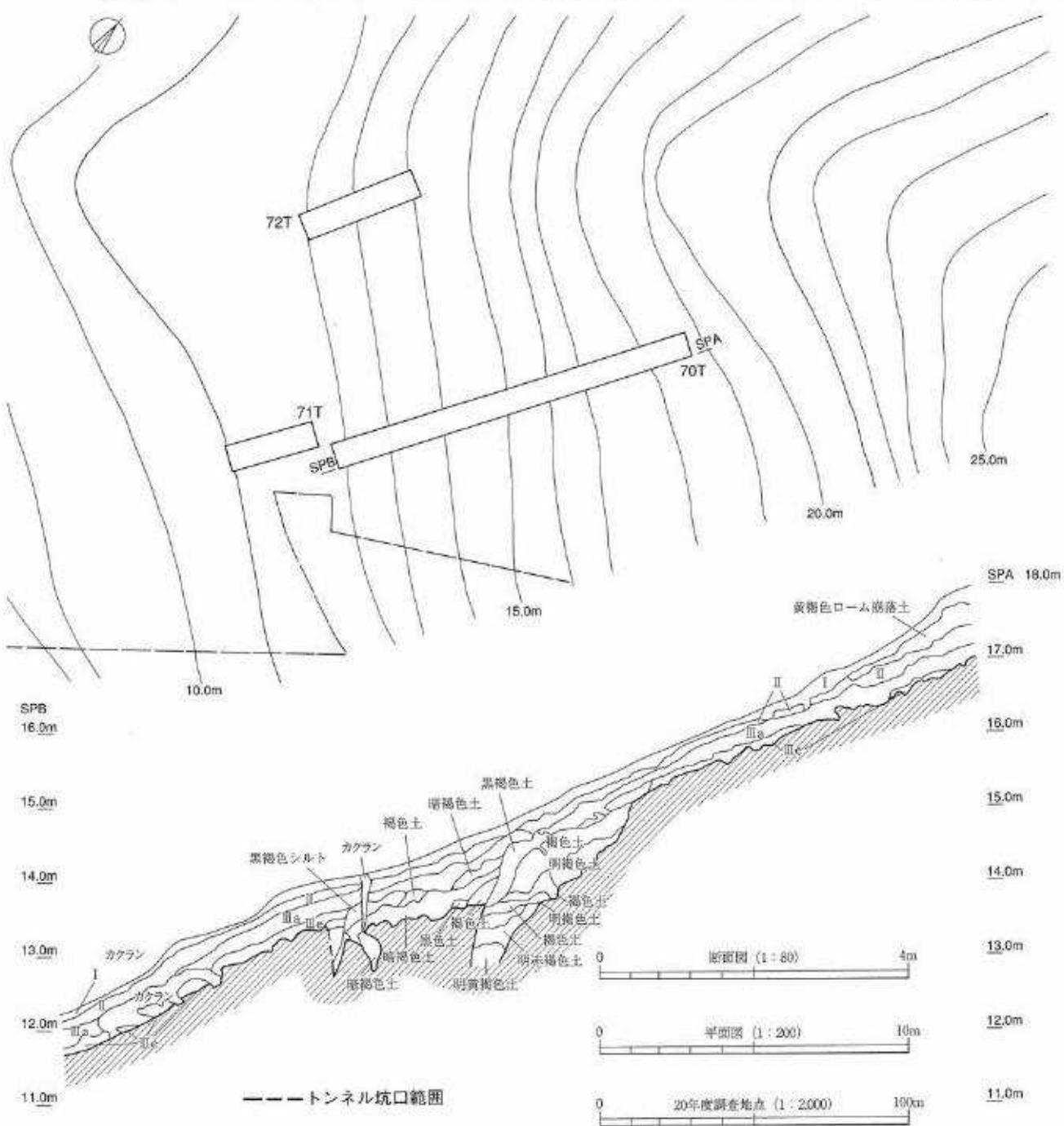
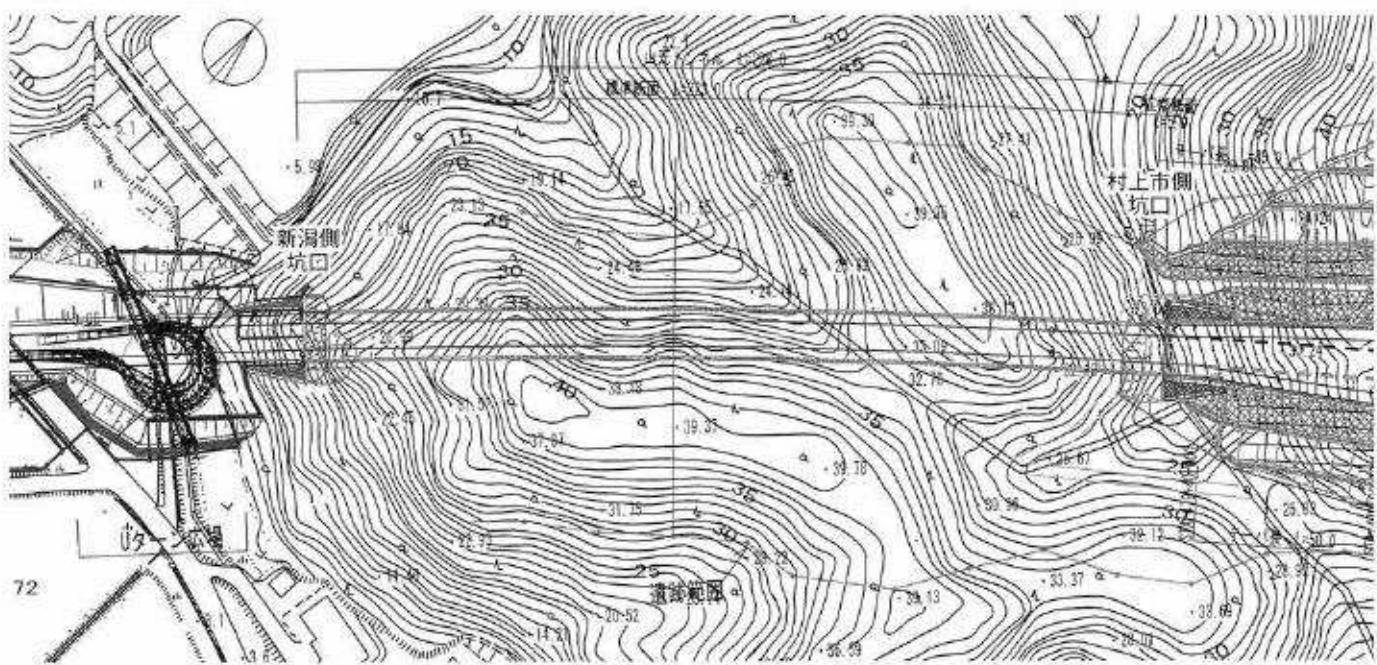


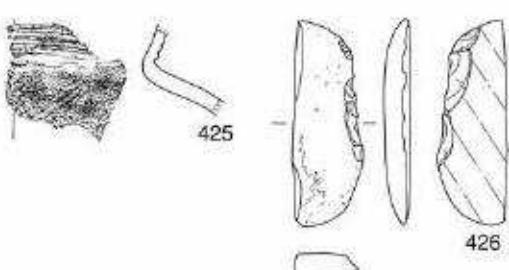
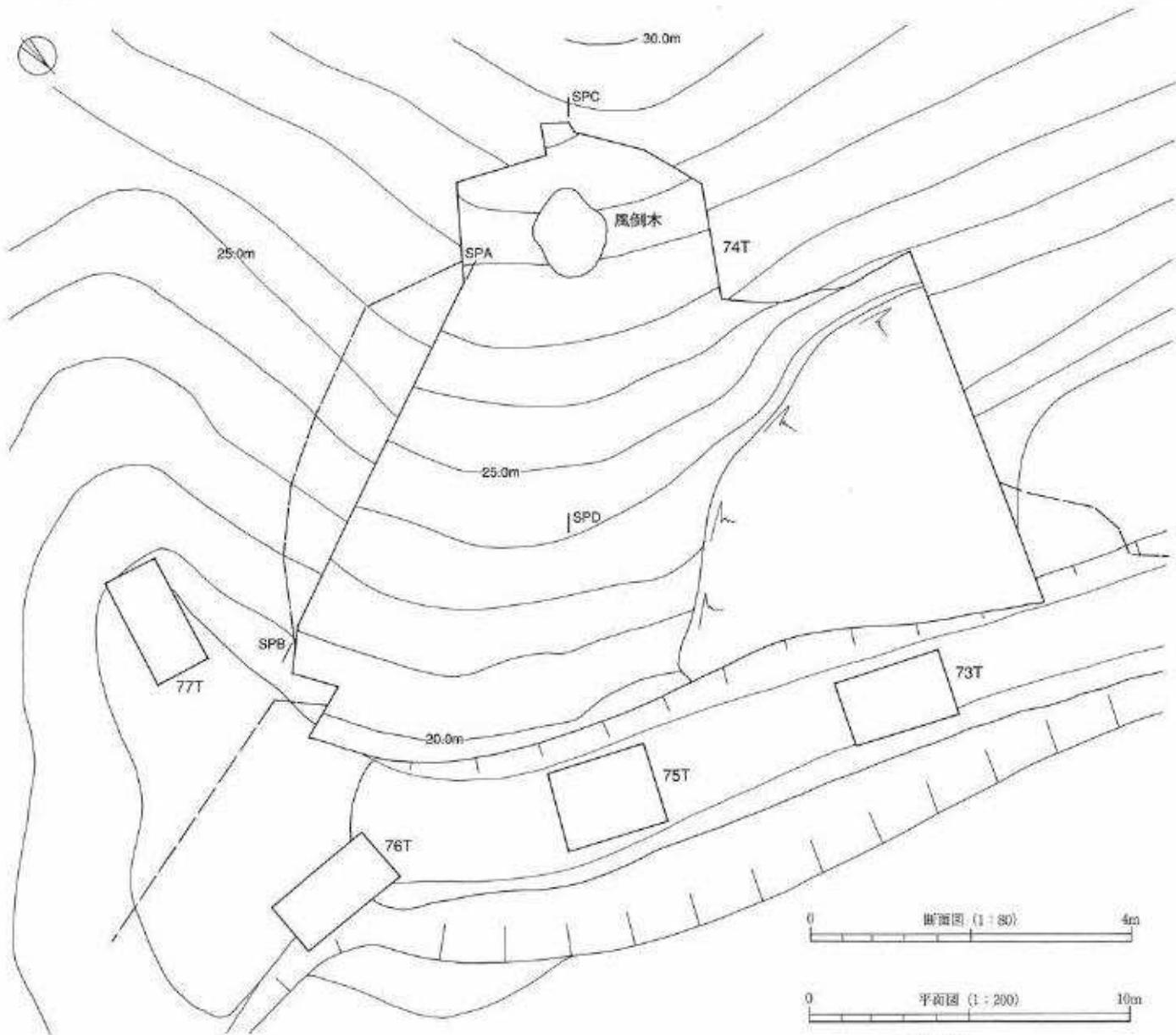




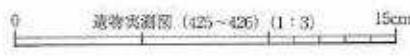








——トンネル坑口範囲





遺跡遠景（南西から）



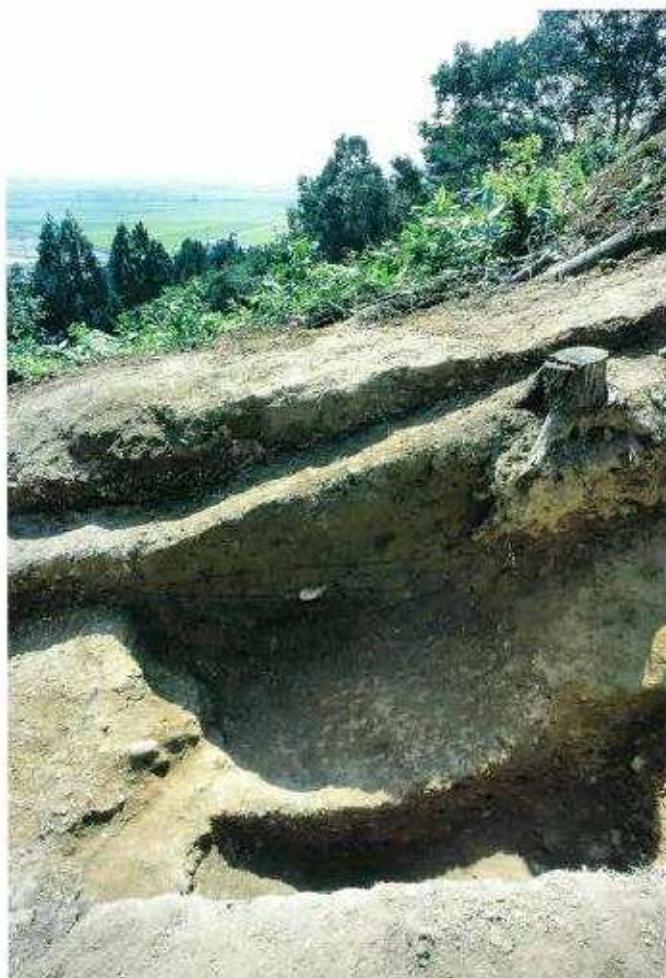
B地点西側全景（北東から）



B地点北西斜面（北から）



B地点20T繩張2（北から）



B地点36T濠1 西側断面（東から）



B地点最西端から越後平野を望む（北東から）



遺跡遠景（南から）



B地点61T発堀2 ほか（南東から）



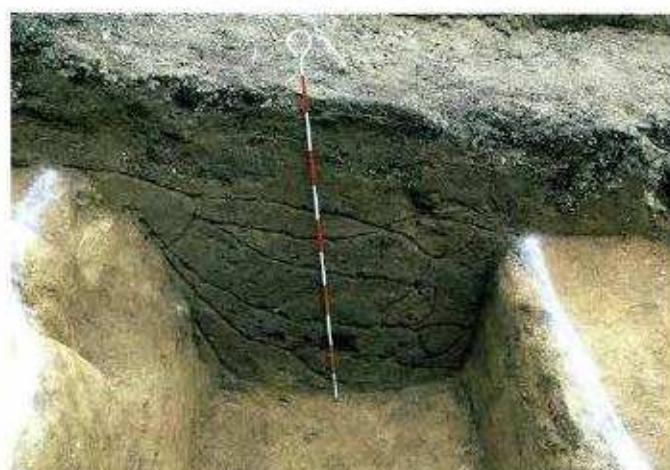
B地点21T縦堀 1 東西断面（南東から）



B地点61T縦堀 2・濠 2（南東から）



B地点61T縦堀 2・濠 3（東から）



B地点30T濠 4 西側断面（東から）



B地点30T濠 5 西側断面（東から）



B地点30T濠 5 遺物（236～238）出土状況（東から）



B地点36T濠 1 西側断面（西から）



B地点36T濠 1 遺物（101など）出土状況（南から）



A地点全景（東から）



A地点 1 T土坑墓全景（東から）



A地点遠景（南から）



A地点西側（奥1T・手前2T）遠景（東から）



A地点1TSK1南北断面（東から）



A地点1TSK1覆土上層石鎚出土状況（東から）



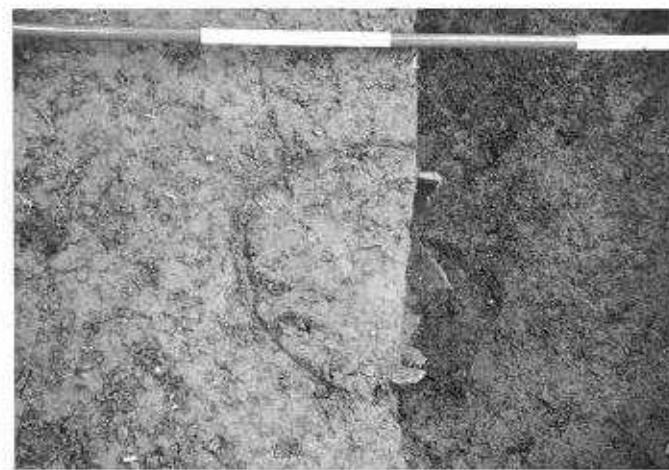
A地点1T土坑墓（奥左：SK1、奥右：SK2、手前：SK3）（東から）



A地点2T（東から）



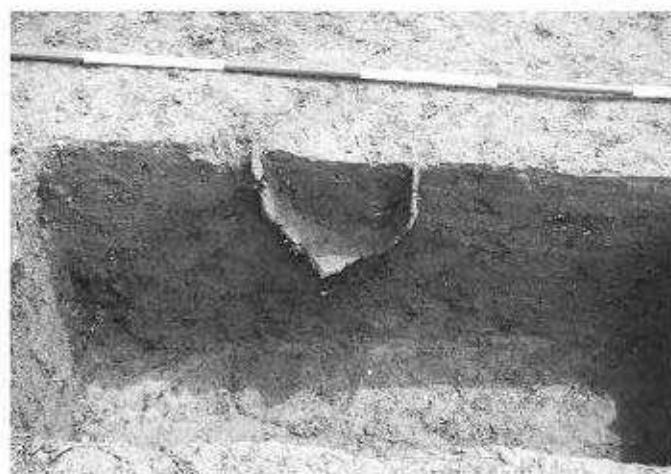
A地点3T（東から）



A地点3T埋甕（南東から）



A地点3T 埋甃断面(南から)



A地点3T 埋甃断面2(南から)



A地点5T(西から)



A地点9T(北東から)



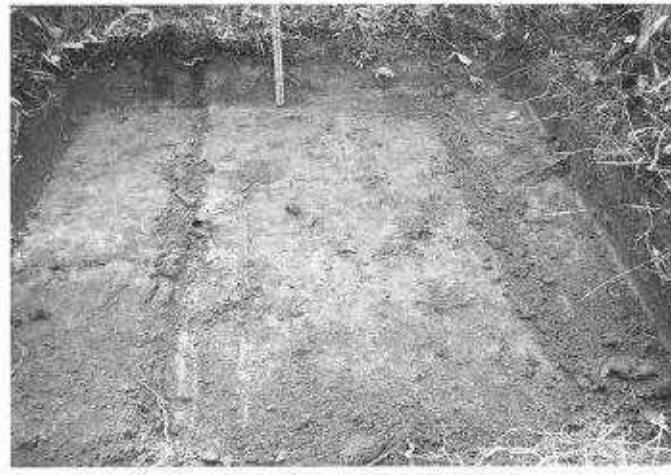
A地点10T(北から)



A地点10T土層断面(北西から)



A地点11T(南西から)



A地点12T(北から)



A地点13T (北から)



A地点13T土層断面 (北西から)



A地点14T (南東から)



A地点15T (南東から)



A地点16T (南東から)



A地点49T (北東から)



A地点17T (南から)



A地点17T土層断面 (北西から)



A地点51T(東から)



A地点52T(南西から)



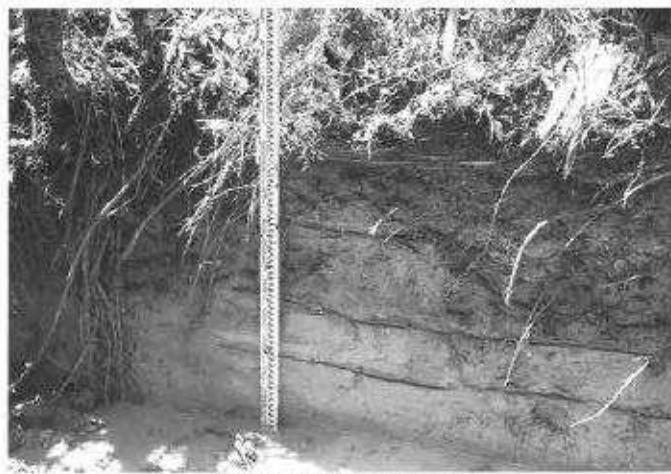
A地点53T土層断面(西から)



A地点56T(南東から)



A地点56T土層断面(北東から)



A地点57T土層断面(北東から)



B地点43T(南東から)



B地点59T(東から)



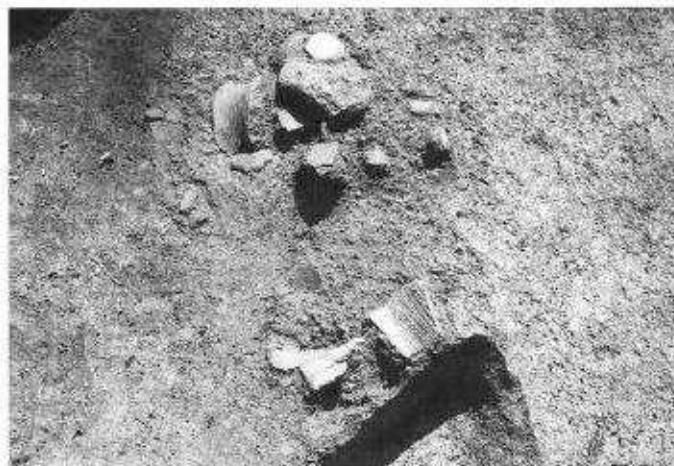
B地点18T (南西から)



B地点18T北側 (南西から)



B地点18TSK 2 遺物出土状況 1 (北から)



B地点18TSK 2 遺物出土状況 2 (北西から)



B地点33T (西から)



B地点19T (西から)



B地点20T 縦堀 2 検出状況 (北から)



B地点20T 縦堀 2 土層断面 (北西から)



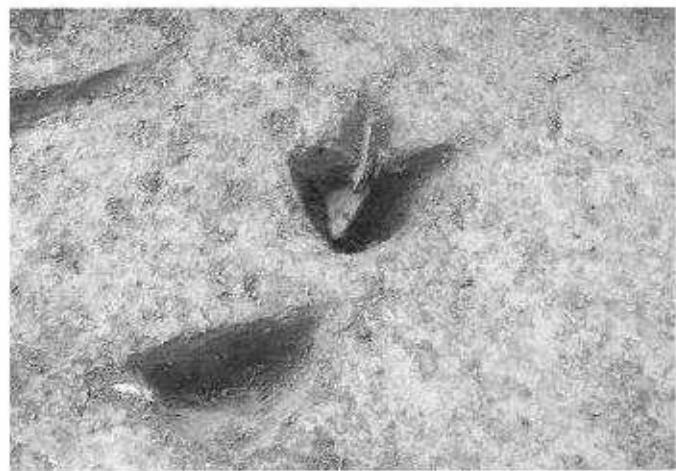
B地点20T縦堀2遺物出土状況（北西から）



B地点20T縦堀2上層遺物出土状況（北から）



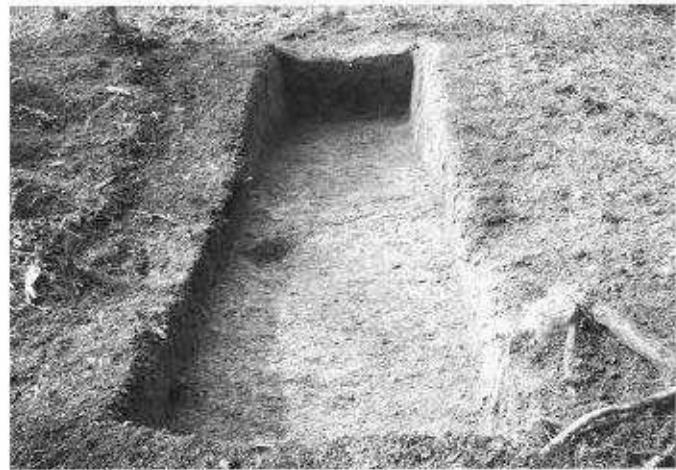
B地点20T東側（西から）



B地点20T東側P1遺物出土状況（北から）



B地点66T（南東から）



B地点65T（南東から）



B地点21T縦堀1土層断面（南東から）



B地点縦堀1（左：21T、右：68T）（東から）



B地点68T西側（南西から）



B地点68T西側土層断面（東から）



B地点68T中央（南から）



B地点34T（南西から）



B地点22T（東から）



B地点22T土層断面（南から）



B地点22TSB 1（北東から）



B地点22TSB 1（南西から）



B地点62T（北東から）



B地点62T（南から）



B地点62T土層断面（南西から）



B地点62T土層断面（南西から）



B地点63T（西から）



B地点23T（南東から）



B地点35T南側（東から）



B地点35T北側（北西から）



B地点26T (東から)



B地点26T濠1付近 (東から)



B地点26T濠1土層断面 (南から)



B地点26T (南西から)



B地点36T全景 (北から)



B地点36T濠1 東側土層断面 (西から)



B地点36T濠1 遺物出土状況 1 (西から)



B地点36T濠1 西側土層断面 (東から)



B地点25T全景（北西から）



B地点25T濠2 東側土層断面（南西から）



B地点25T濠2 内遺物出土状況（南西から）



B地点25T斜面（南から）



B地点61T縦堀2 土層断面（南東から）



B地点61T縦堀2 土層断面と遺物（131）出土状況（南東から）



B地点61T縦堀2 上層の遺物（119）出土状況（南東から）



B地点61T縦堀2 の上層（Ⅱ層）遺物（159等）出土状況（南東から）



B地点61T中央の土層断面 (西から)



B地点61T南側の土層断面 (北西から)



B地点61T濠2 土層断面 (北東から)



B地点61T・20T間の表土現況 (南東から)



B地点南側斜面 (南東から)



B地点31T斜面 (南東から)



B地点31T土層断面 (西から)



B地点31T濠3 土層断面 (南西から)



B地点32T（北西から）



B地点32T濠3 西側土層断面（西から）



B地点47T（南西から）



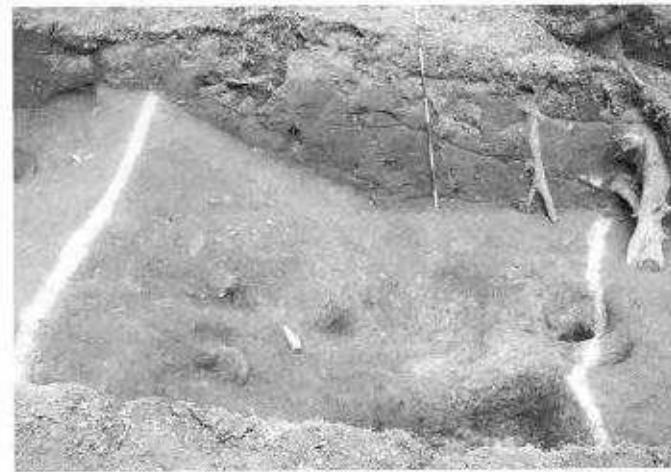
B地点47T土層断面（西から）



B地点29T（南西から）



B地点29T東側土層断面（西から）



B地点29T濠4 西側土層断面（南東から）



B地点29T濠4 西側土層断面（南東から）



B 地点北側斜面（左：30T、右27T）遠景（北西から）



B 地点北側斜面（左：27、右：69T）遠景 2（北東から）



B 地点30T（1）（北から）



B 地点30T（2）（南から）



B 地点30T（3）（北西から）



B 地点30T（4）（北東から）



B 地点30T濠 4 土層断面（東から）



B 地点30T濠 4 遺物出土状況（南から）



B30T濠 5 東側土層断面（西から）



B 地点30T濠 5 西側土層断面（東から）



B 地点30T濠 5 遺物（236～239）出土状況 1（東から）



B 地点30T濠 5 遺物出土状況 2（東から）



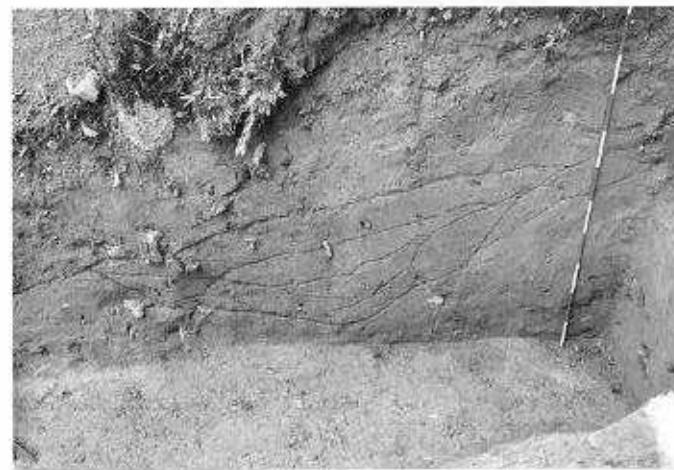
B 地点30T濠 5 遺物出土状況 3（東から）



B 地点30T濠 5 遺物出土状況 4（南東から）



B 地点27T（北西から）



B 地点27T濠 5 東側土層断面（西から）



B 地点 67T (南東から)



B 地点 69T (北東から)



B 地点 69T 南側土層断面 (北西から)



B 地点 69T 北側縦堀 2 土層断面 (北西から)



B 地点 69T 北側縦堀 2 土層断面 2 (北西から)



B 地点 北側斜面縦堀 2 遠景 1 (北西から)



B 地点 北側斜面縦堀 2 遠景 2 (北西から)



B 地点 北側斜面縦堀 2 遠景 3 (北西から)



C地点37T全景（南西から）



C地点38T全景（南西から）



H20 70T完掘（南西から）



H20 70T北東壁土層断面（西から）



H20 74T完掘（北東から）



H20 74Tテラス1・2土層断面（北西から）



H20 74T遺物出土状況（北東から）



H20 73T西壁（東から）



1TSK1 ガラス小玉



4



236



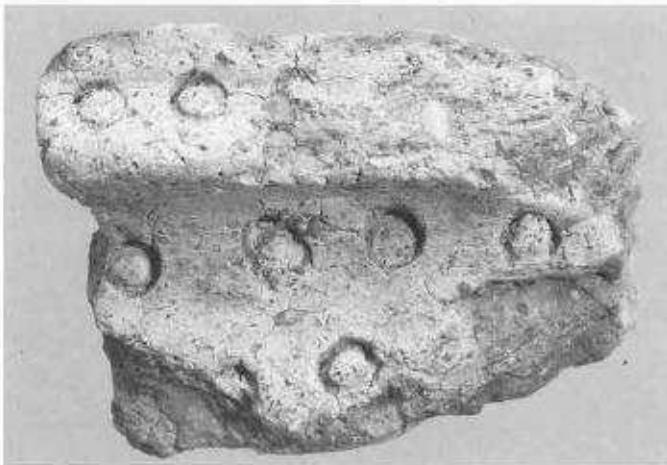
47



300



282



10

12



42

117



91

109



119

119



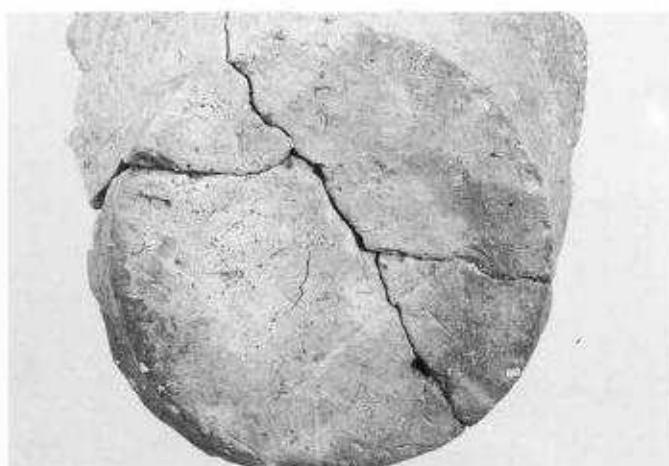
141



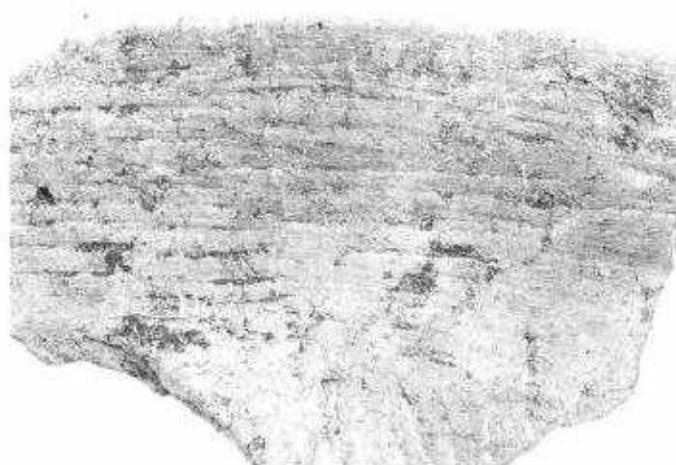
167



176



194



222



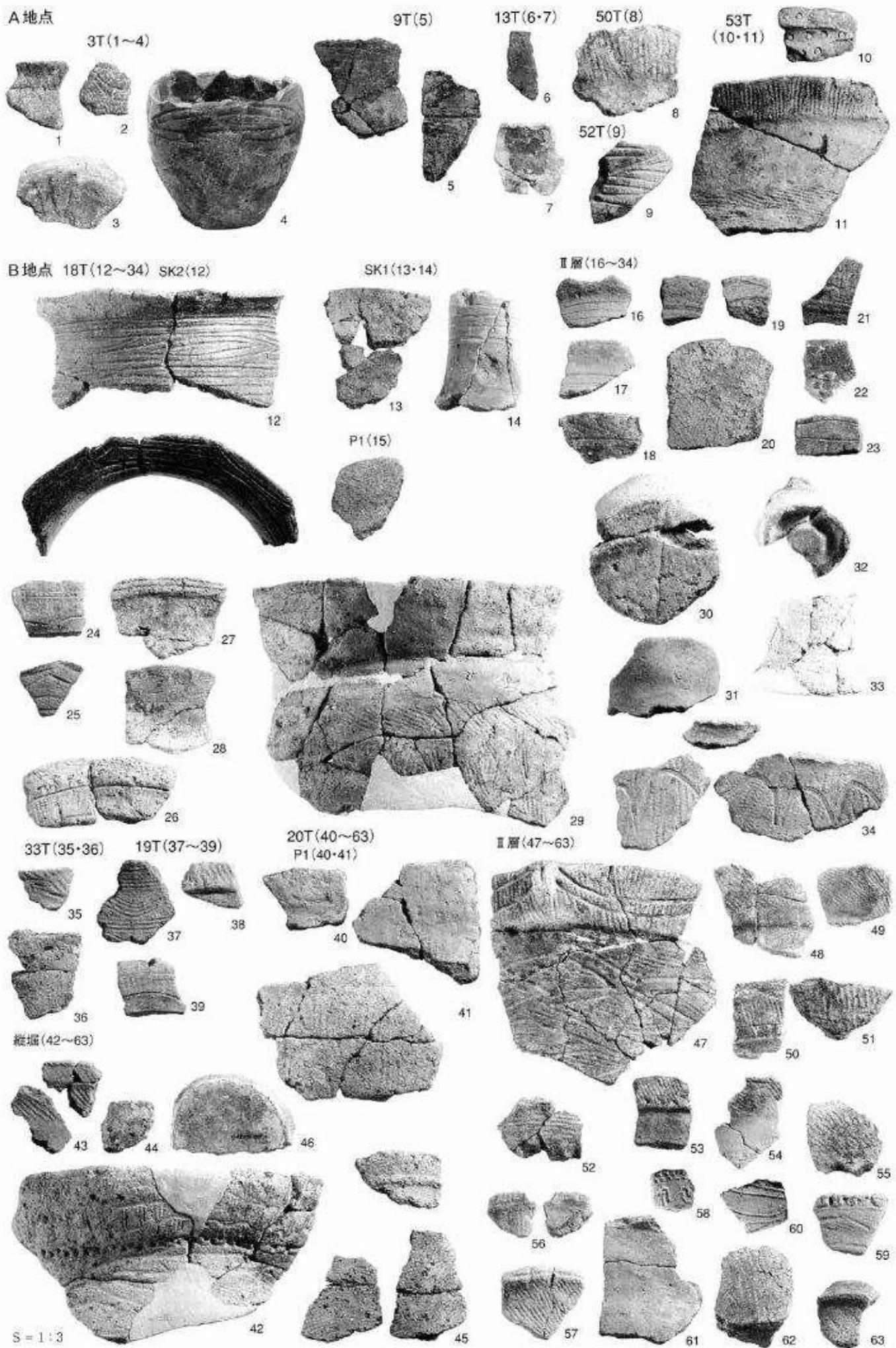
231

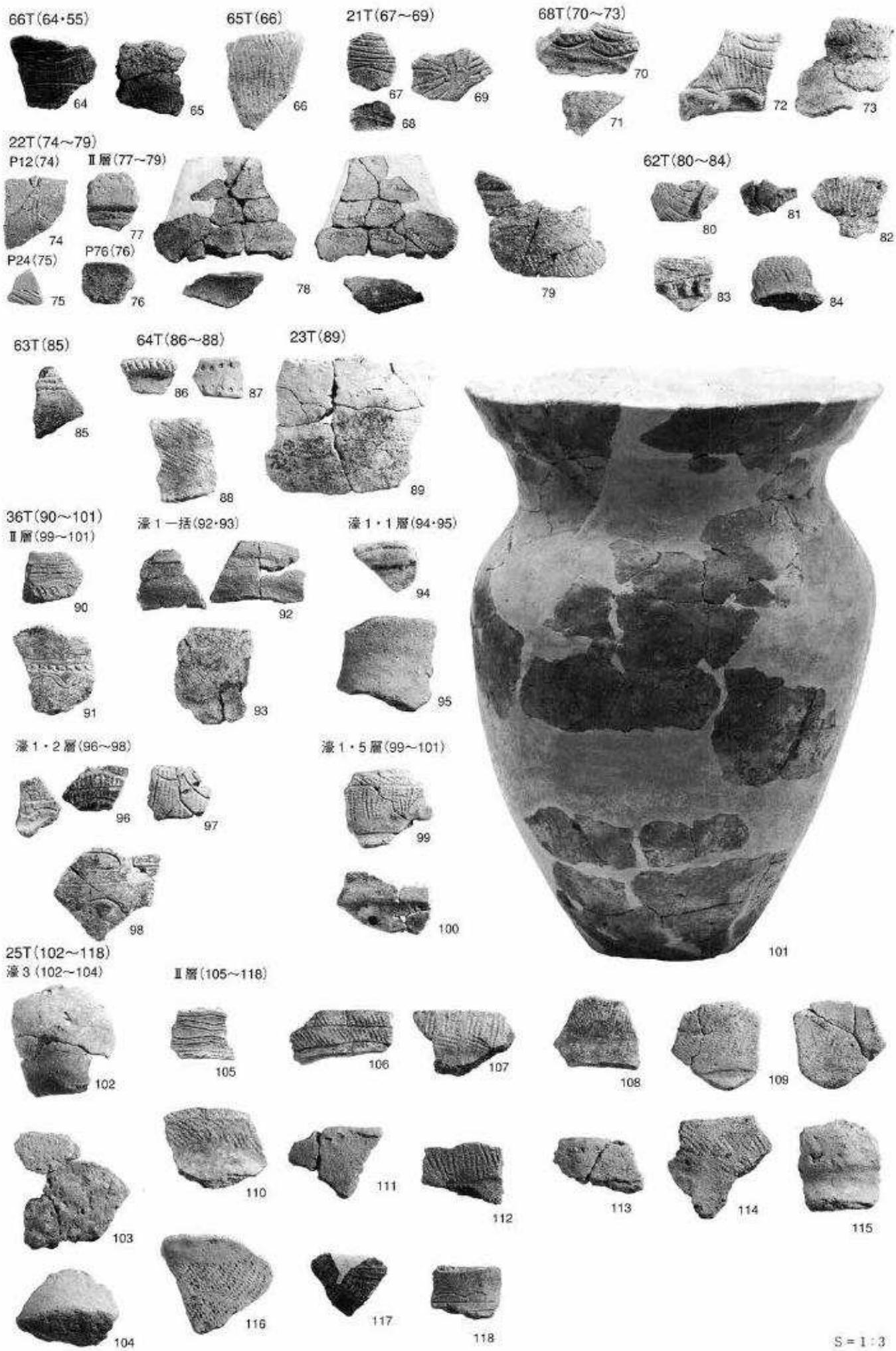


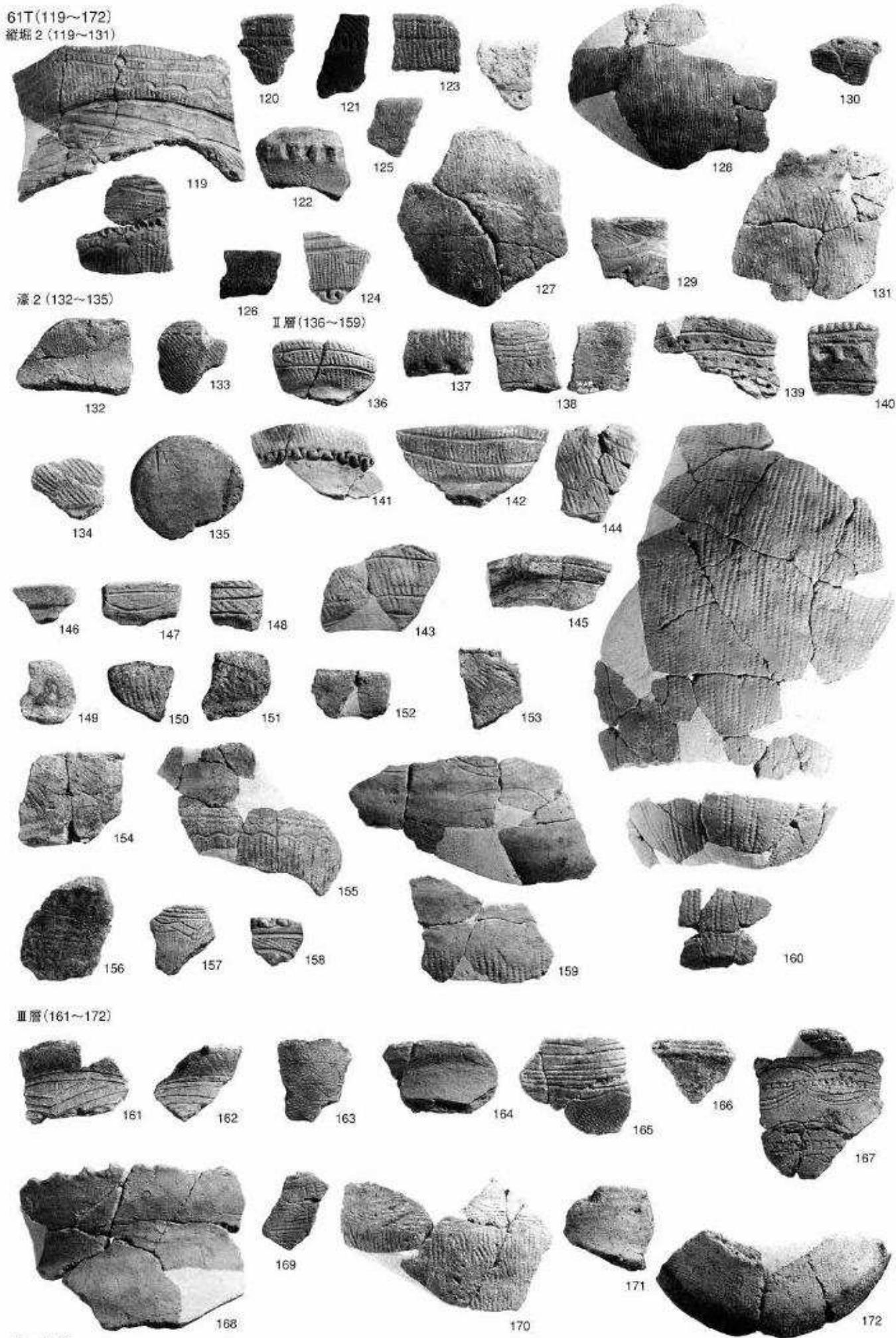
238



264







S = 1 : 3

31T(173~185)  
漆 3 (173~174)

173



175



176



177



178



179



174



180



181



182



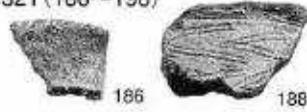
183



184

185

32T(186~196)



186



188



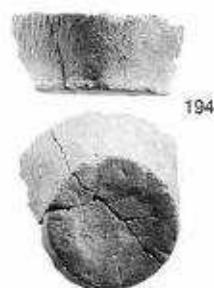
190



191



193



194

187



189



192



195

47T(197~219)  
II層(197~212)

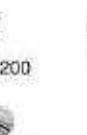
197



198



199



200



213



216



202



203



204



205



206



214



215



207



208



209



212



211



217



219

29T(220~230)  
漆 4 (220~223)

220



221



222



228



231

232



233



234

235

II層(224~230)



224



226



227



229



230

II層(242~243)



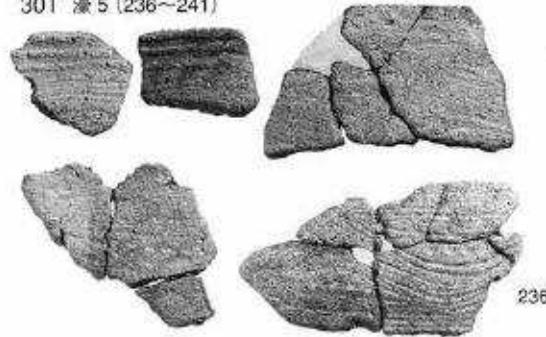
242



243

S = 1:3

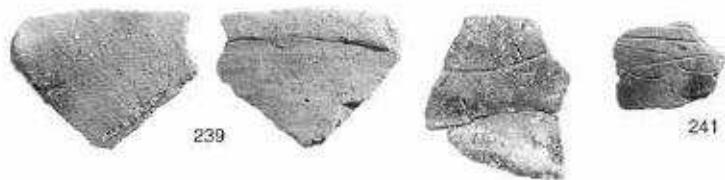
30T 濠 5 (236~241)



236



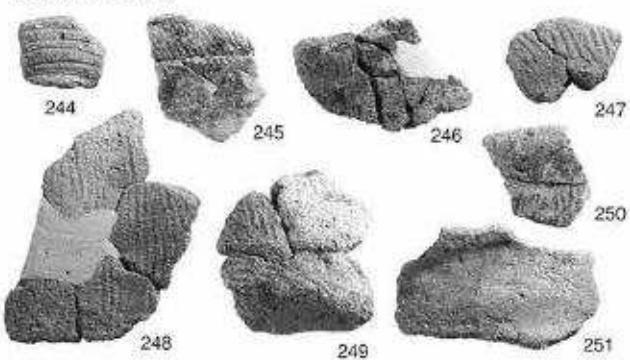
238

69T (252~262)  
I層 (252~254)

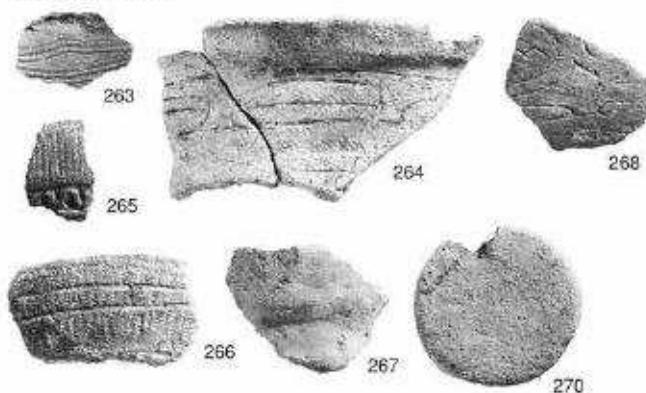
II・III層 (255~262)



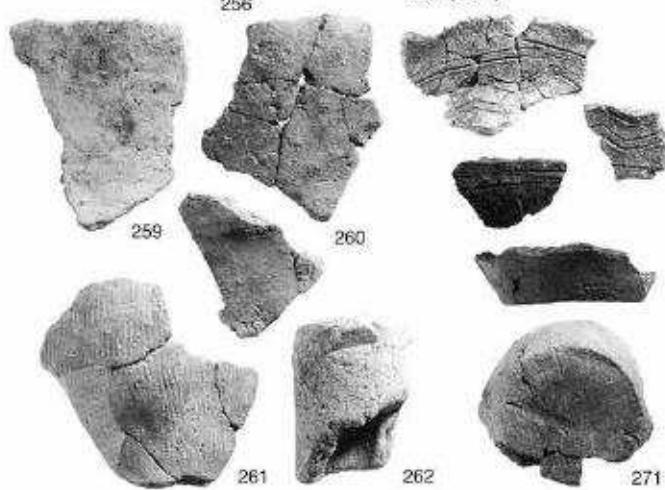
27T(244~251)



46T(263~270)



43T(271)

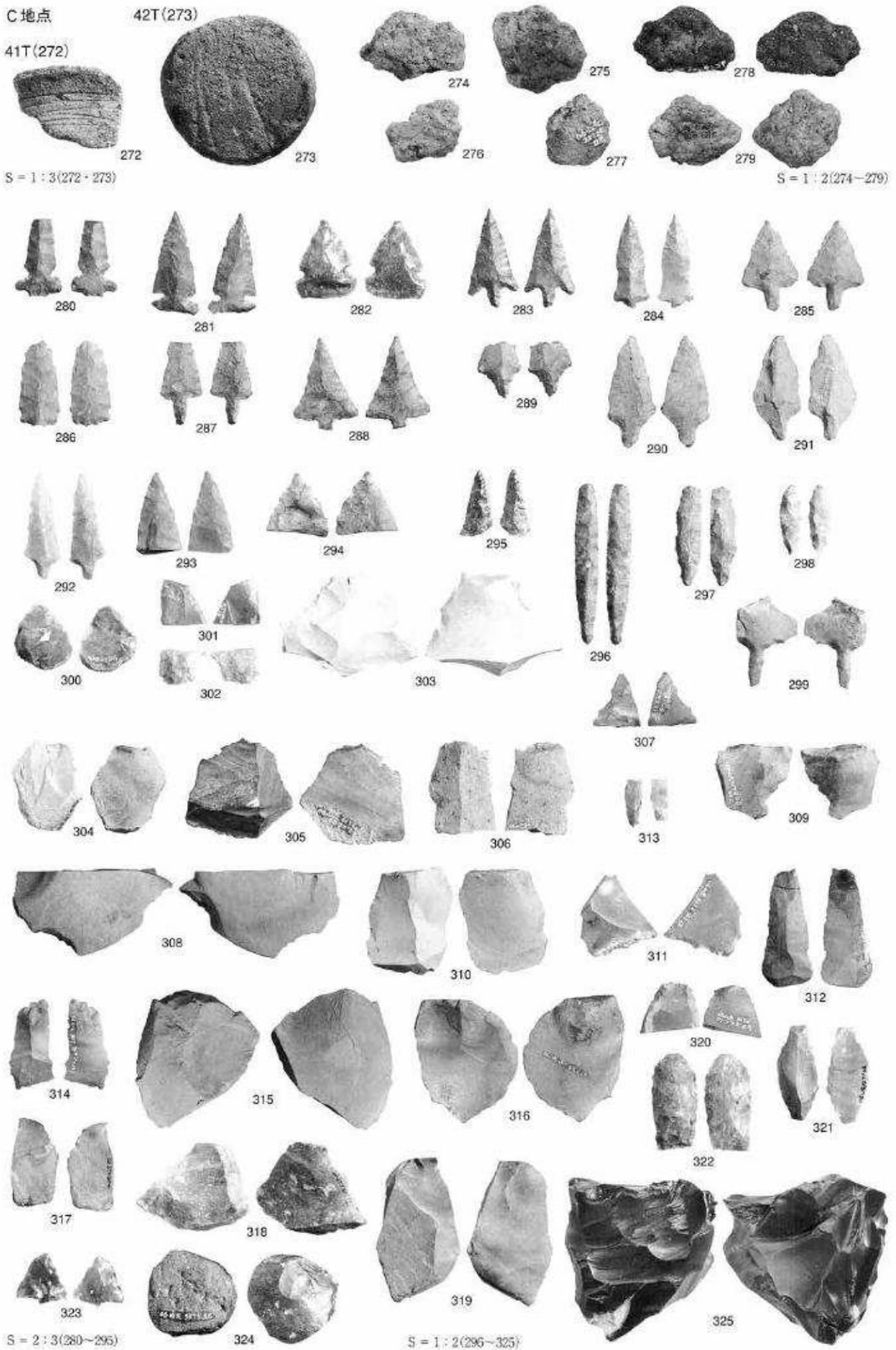


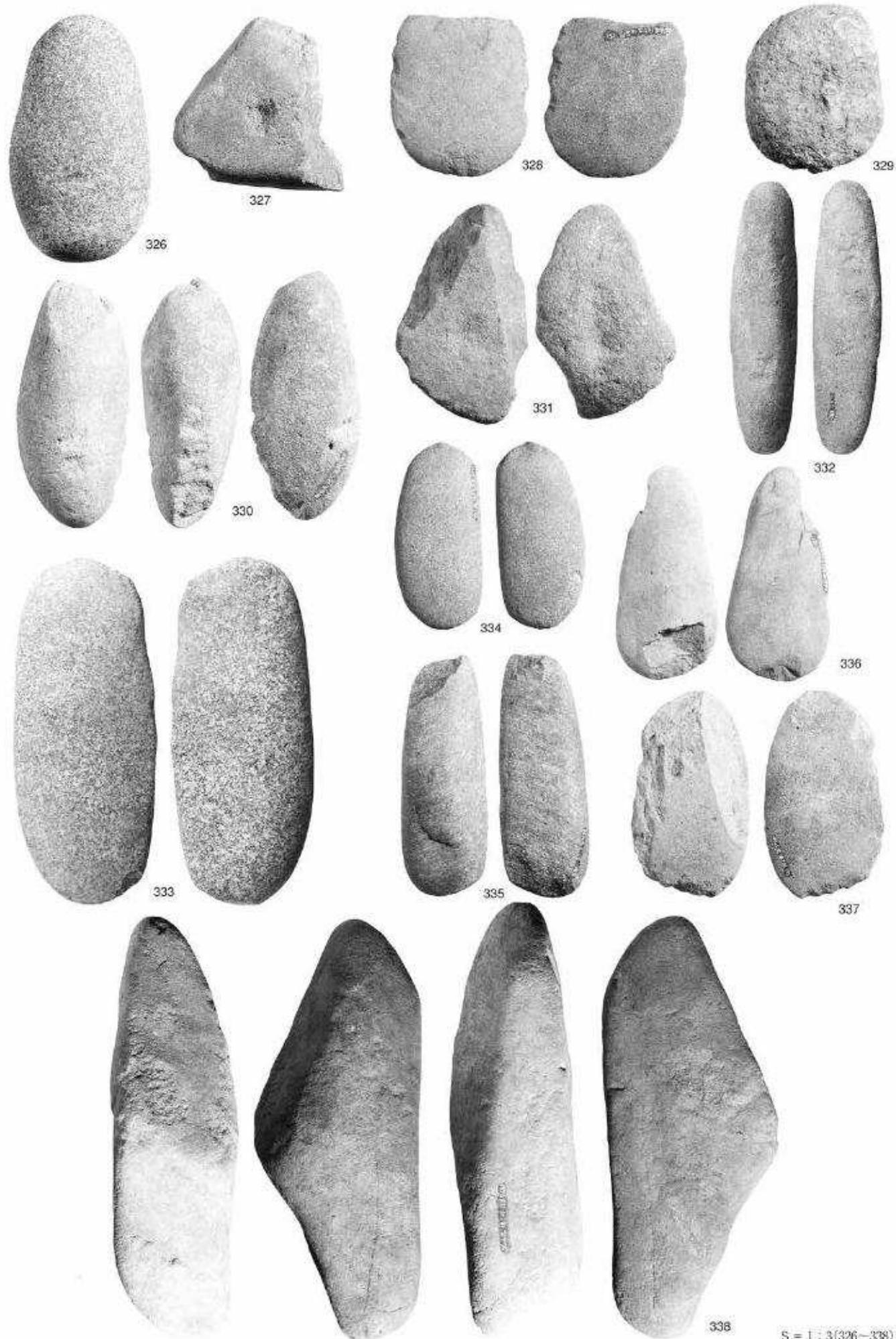
S = 1:3



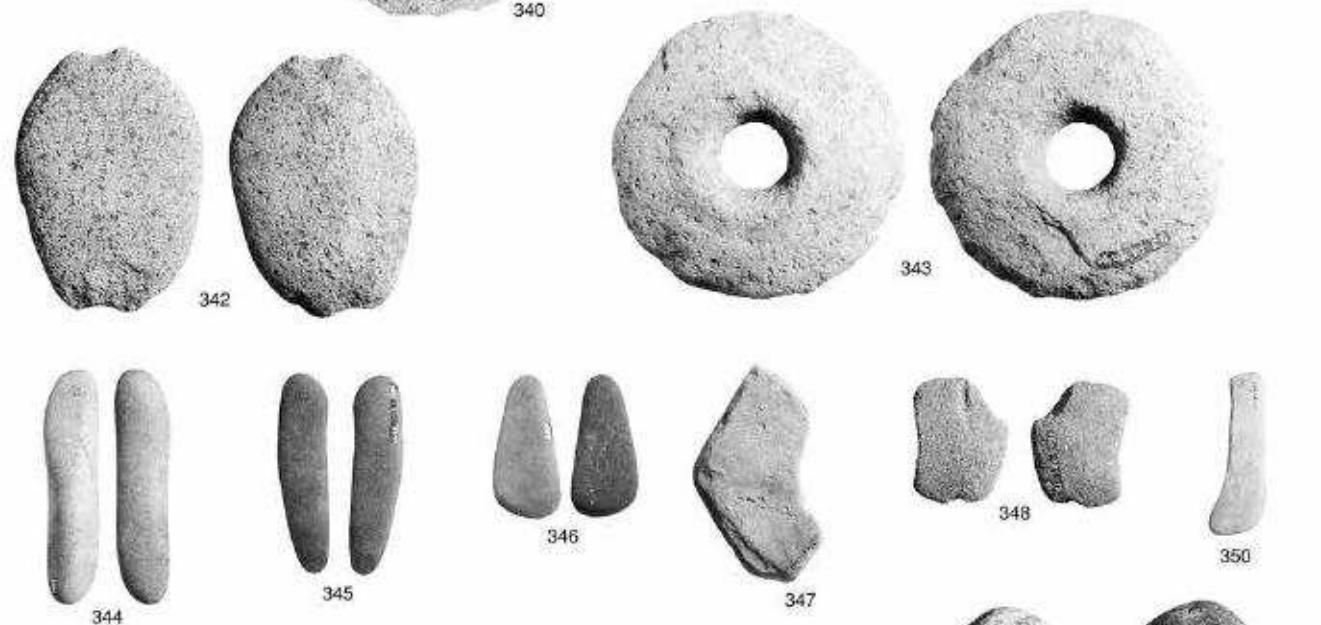
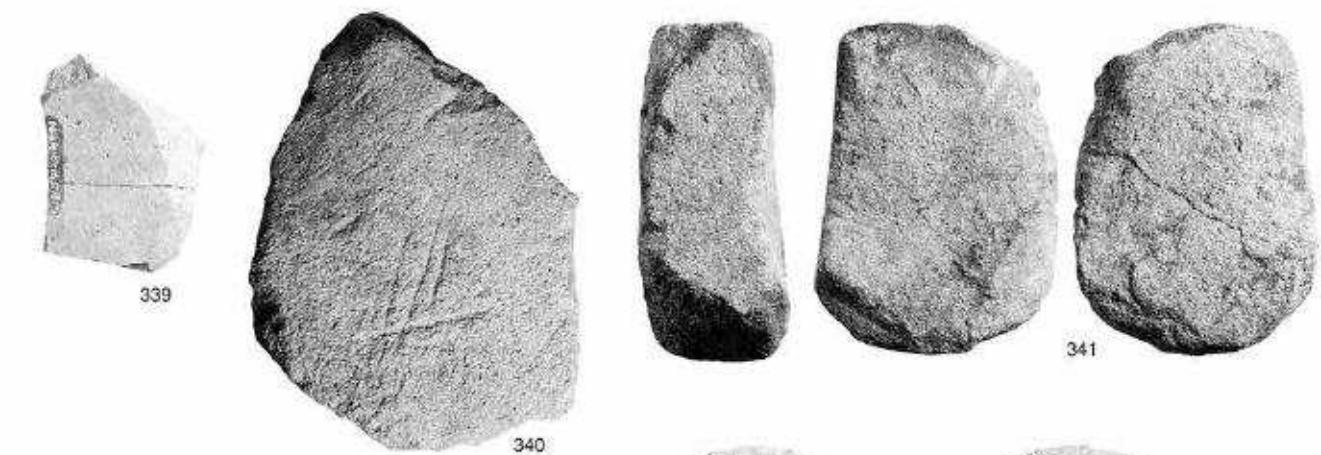
269

271

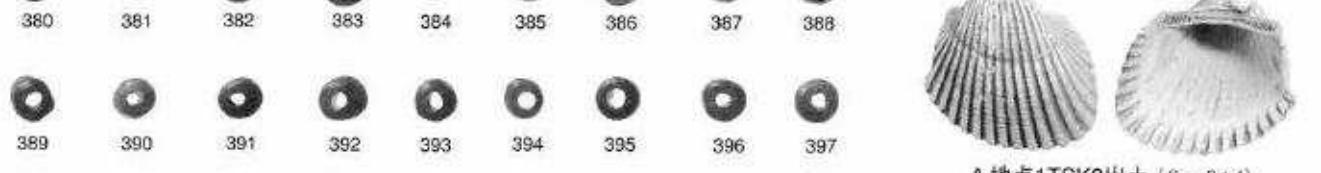
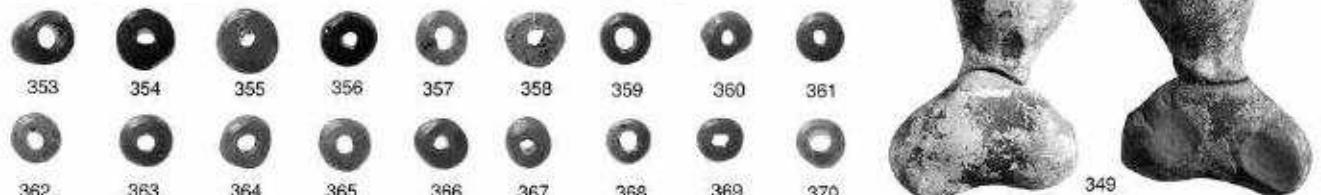




S = 1 : 3 (326-338)

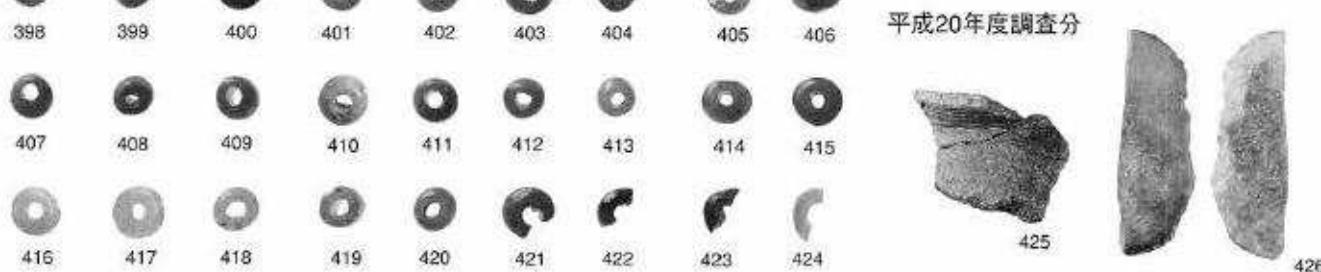


$S = 1 : 3$ (339~350, 425・426)     $S = 2 : 3$ (351・352)     $S = 3 : 2$ (353~424)



A地点1TSK3出土 ( $S = 3 : 4$ )

平成20年度調査分



## 報告書抄録

ふりがな	やまもといせき							
書名	山元遺跡							
副書名	県内遺跡発掘調査報告書							
卷次	I							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第199集							
編著者名	滝沢規朗、澤田 敦、斎藤 準、肥塚隆保・田村朋美（奈良文化財研究所）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-8845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	西暦2009(平成21)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまもといせき 山元遺跡	新潟県村上市 大字下助瀬字 山元	市町村	遺跡番号	北緯 * * *	東経 * * *			
		15-2129	428	38度 12分 29秒	137度 27分 22秒	20051109 ～1212、 20060411 ～0615、 20080417 ～0508・ 0630～ 0714	1,705m <sup>2</sup>	遺跡内容・範囲確認 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山元遺跡	高地性 環濠集落	弥生時代 中期後葉 ～後期後葉	環濠、縄壠2条、 柱立柱建物1棟、 土坑墓7基、土坑 15基、溝2条、ピッ ト495基		弥生土器（東北系、北陸北東 部系、続縄文）、粘土塊、石 器・石製品（石器、石錐、環 状石斧、磨石類、砥石等）、 ガラス小玉72（完形品68、半 損品4）		日本海側最北の高地 性環濠集落。主体と なる土器は東北系で、 東北系土器分布圏で は初めての環濠集落 を確認した。試掘確 認調査を実施した段 階で、遺跡の重要性 から現状保存が確定 しており、本発掘調 査は実施していない。	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第199集	
県内遺跡発掘調査報告書	
山 元 遺 跡	
平成21年3月30日印刷	編集・発行 新潟県教育委員会
平成21年3月31日発行	〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
	電話 025 (285) 5511
	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
	〒956-8845 新潟市秋葉区金津93番地1
	電話 0250 (25) 3981
	FAX 0250 (25) 3986
印刷・製本 諸ハイングラフ	
	〒950-2022 新潟市西区小針1-11-8
	電話 025 (233) 0321
	FAX 025 (233) 0322

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第199集『山元遺跡』 正誤表追加

2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	編著者名	…斎藤 準、肥塚隆保…	…齊藤 準(埋文事業団)、肥塚隆保…
抄録	市町村コード	15-2129	15212
抄録	北緯	38度12分29秒	38度12分16秒
抄録	東経	137度27分22秒	139度28分12秒

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡正誤表

\* 図版1はB地点27T-30T間で環濠推定ラインのトーンが抜けているため、差し替え願います

ページ	範囲・行	誤	正
挿図目次	下段	第17図 …P47	第17図…P45
図版目次	中段	図版10 ……68T	図版10……66T
12 第4図左端			(ハ一標高) 39.7m
19	2 土器(圓面圓版…-273-426、	2 土器(圓面圓版…-273-425、	
26 18行目	31T(173~184)	31T(173~185)	
33 34行目	(4) 不定形石器(301~322)	(4) 不定形石器(301~323)	
36 25行目	(8) 磨石類(326~336)	(8) 磨石類(326~337)	
37 2行目	5点出土している(333~336)	5点出土している(333~337)	
38 35行目	(12) 小型特殊品(338~341)	(12) 小型特殊品(344~348-426)	
78	89「トレンチ等」 23T	89「トレンチ等」 64T	
78	104「器種」壺	104「器種」壺	
79	116「器種」壺 118「器種」壺	116「器種」壺 118「器種」壺	
79	173「遺構」「層位」 174「遺構」「層位」	173「遺構」濠3 174「遺構」濠3	
図版17	見出し	B地点29T	B地点29T-47T
図版37	右上	「B地点最西端」 角田山 弥彦山	「B地点最西端」 弥彦山 角田山
図版38	左列2段目	B地点61T縦掘2・環濠3(東から)	B地点61T縦掘2・濠3(東から)
図版59	左隅	縦掘(42~63)	縦掘(42~47)
図版59	右下	II層(47~63)	II層(48~63)
図版60	左上	P76(76)	P77(76)
図版60	左中	II層(99~101)	II層(90~91)
図版61	左上	II層(136~159)	II層(136~160)
図版62	左中	II層(197~212)	II層(197~212)